

鑄師屋遺跡群

根 岸 遺 跡

—長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書—

1989

御代田町教育委員会



鑄師屋遺跡群

1 鑄師屋遺跡群 (南上空より、背景は浅間山)



御牧ヶ原台地

鑄師屋遺跡群

2 鑄師屋遺跡群 (東上空より、背景は北アルプス)



新築住宅

新築住宅

新築住宅

新築住宅

新築住宅

新築住宅

新築住宅

新築住宅





前田 H-41



前田 H-25



十二 H-23



十二 H-49



横塚 H-1



十二 H-26



十二 H-14



十二 H-34



横塚 H-13



横塚 H-3



横塚 H-13



前田 H-48



横塚 H-5



横塚 H-18



前田 H-108



横塚 H-11



十二 H-10



野火付 T-1

6 銚師屋遺跡群の鉄器



十二 H-28



野火付 H-13



根岸 H-18



根岸 H-13



根岸 H-9

7 銚師屋遺跡群の古銭・飾金具 (古銭左より、不明・神功開寶・隆平永寶・徳益神寶)



8 前田遺跡の初期須恵器



9 前田遺跡 古墳時代中期の土器セット (H-61号住居址)



10 十二遺跡 奈良時代の土器セット (H-25号住居址)





12 根岸遺跡 平安時代の土器セット (H-11号住居址)

13 前田遺跡 平安時代円面硯 (H-20号住居址)



序

このたび、鑄師屋遺跡群根岸遺跡の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

根岸遺跡を含む鑄師屋遺跡群は、御代田町の背景に聳え立つ雄大な浅間山の懷に抱かれた古代集落址ですが、残念なことに生産性の向上を目指す圃場整備事業により破壊がやむを得なくなりました。

発掘調査は、昭和59年度の野火付遺跡を皮切りに、昭和60年度に前田遺跡、昭和61年度には十二遺跡と継続されました。翌昭和62年度に発掘調査がなされたのが本根岸遺跡であります。

鑄師屋遺跡群における5年間にもわたる発掘調査は、本根岸遺跡の報告をもって一応の終結をみることになりましたが、その成果が信濃における古代集落解明への一助となることを願ってやみません。

なお、この5年有余の調査にあたっては、由井団長を始めとする調査団の多くの方々のご努力、また、本調査の趣旨をご理解された気鋭の研究者の方々のご協力、そして、遺跡の重要性を認識された農政部局の深いご配慮がありました。そうした多くの方々に深い感謝の意をあらわし、ご挨拶とさせていただきます。

平成元年 三月

御代田町教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野県北佐久郡御代田町所在の鎗師屋遺跡群根岸遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、北佐久地方事務所の委託を受け、御代田町教育委員会が実施した。
- 3 本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。
- 4 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。
 - ◎ 遺物復原 伴野有希子、小山内玲子、角張憲子、鳥居 亮、大井さゆり。
 - ◎ 遺物実測 鳥居 亮、堤 隆、古越敏彦、角張憲子。
 - ◎ 遺物拓本 小山内玲子、伴野有希子。
 - ◎ 遺物トレース 小山内玲子（土器）、鳥居 亮、堤 隆（鉄器・石器）。
 - ◎ 遺構トレース 鳥居 亮。
 - ◎ 遺構写真 堤 隆、鳥居 亮。 航空写真・働協同測量社
 - ◎ 遺物写真 鳥居 亮。 X写真・勸山梨文化財研究所 鈴木 稔。
 - ◎ 遺物観察表作成 堤 隆。
 - ◎ 版 組 み 伴野有希子、鳥居 亮、堤 隆、小山内玲子。
- 5 本書の本文編は、堤 隆、が執筆した。
- 6 本書の付編については以下の各位より玉稿を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。
 - ◎ 付編1 京都産業大学 山田 治 先生
 - ◎ 付編3 立教大学 鈴木正男 先生なお、分析実施にあたっては、野田市郷土博物館金山喜昭氏のご指導を得た。
 - ◎ 付編4 働 パリノサーヴェイ
 - ◎ 付編5 前橋第二高等学校 宮崎重雄 先生
- 7 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤 隆、がおこなった。
- 8 本調査・本報告書作成に際しては、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である（順不同・敬称略）。
鈴木稔、田中正二郎、笹沢浩、戸沢充則、河野喜映、西山克己、桐原健、松村恵司、山口英男、宮下健司、川島雅人、林原利明、諏訪問順、諏訪問伸、櫻田誠、金山喜昭、新田浩三、林幸彦、羽毛田卓也、高村博文、小山岳夫、三石宗一、郷道哲章、福島邦男、村沢正弘、丸山敦一郎、大上周三、山下誠一、花岡弘、石上周蔵、小平和夫、近藤尚義、岩崎直也、中田英、白田武正、寺島俊郎、木内捷、原明芳、織笠昭、伊丹徹、齋藤孝正、宮崎憲二、児玉卓文、百瀬長秀、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、勸山梨文化財研究所、萩原三雄、河西学、平野修。

凡 例

1 遺構の名称

H → 竪穴住居址 F → 掘立柱建物址 D → 土塹 M → 溝状遺構

2 遺構のナンバーは、時代別・時期別になっておらず、ランダムである。

3 挿図の縮尺

竪穴住居址 = 1 : 80 カマド = 1 : 40 掘立柱建物址 = 1 : 80 土器 = 1 : 4

以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。

4 図版の縮尺

遺構写真の縮尺については統一されていない。

遺物写真の縮尺については、土器が1 : 3、これ以外の遺物については挿図の縮尺と同一にしてある。

顕微鏡写真については、その縮尺を明示してある。

5 遺構面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。

6 出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、一は不明、()は推定値、< >は大幅な推定値を示す。単位はcmである。

7 出土遺物一覧表〈鉄器・石器〉の法量は、一は不明、()が現存値、()がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。

8 遺構の層序説明は本文中に記した。

9 土層の色調、遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

10 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。

(1) 遺構

遺構断面 = 斜線 ただし、切り合いによる破壊部分は斜線を逆方向にした。

カマド = 網点 (太) 火床 = 網点 (細)

掘立柱建物址の柱の推定部分 = 網点 (太)

(2) 遺物

土器断面 須恵器断面 = 網点 (太) 灰釉陶器断面 = 網点 (細)

土器内外面 黒色処理 = 網点 (太) 赤色塗彩 = 網点 (細) 灰釉範囲 = 斑点

石器外面 砥石研砥面範囲・石器使用痕範囲 = 網点 (太)

本文目次

序文	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査の概要	3
II 遺跡の環境	11
1 御代田町の自然環境と地質	13
2 根岸遺跡の歴史的環境	19
III 層序	25
1 層序	27
IV 遺構と遺物	29
1 竪穴住居址	31
(1) H-1号住居址	31
(2) H-2号住居址	39
(3) H-3号住居址	47
(4) H-4号住居址	54
(5) H-5号住居址	59
(6) H-6号住居址	63
(7) H-7号住居址	69
(8) H-8号住居址	72
(9) H-9号住居址	78
(10) H-10号住居址	84
(11) H-11号住居址	92
(12) H-12号住居址	100
(13) H-13号住居址	101
(14) H-14号住居址	107
(15) H-15号住居址	110
(16) H-16号住居址	113
(17) H-17号住居址	117
(18) H-18号住居址	119
(19) H-19号住居址	124
(20) H-20号住居址	125
(21) H-21号住居址	131
(22) H-22号住居址	134
(23) H-23号住居址	137
(24) H-24号住居址	141
(25) H-25号住居址	143
(26) H-26号住居址	147
(27) H-27号住居址	150
(28) H-28号住居址	154
(29) H-29号住居址	158
(30) H-30号住居址	159
(31) H-31号住居址	160
(32) H-32号住居址	163

2	掘立柱建物址	167		
(1)	F-1号掘立柱建物址	167	(21)	F-21号掘立柱建物址
(2)	F-2号掘立柱建物址	168	(22)	F-22号掘立柱建物址
(3)	F-3号掘立柱建物址	169	(23)	F-23号掘立柱建物址
(4)	F-4号掘立柱建物址	170	(24)	F-24号掘立柱建物址
(5)	F-5号掘立柱建物址	172	(25)	F-25号掘立柱建物址
(6)	F-6号掘立柱建物址	173	(26)	F-26号掘立柱建物址
(7)	F-7号掘立柱建物址	174	(27)	F-27号掘立柱建物址
(8)	F-8号掘立柱建物址	175	(28)	F-28号掘立柱建物址
(9)	F-9号掘立柱建物址	176	(29)	F-29号掘立柱建物址
(10)	F-10号掘立柱建物址	177	(30)	F-30号掘立柱建物址
(11)	F-11号掘立柱建物址	177	(31)	F-31号掘立柱建物址
(12)	F-12号掘立柱建物址	179	(32)	F-32号掘立柱建物址
(13)	F-13号掘立柱建物址	179	(33)	F-33号掘立柱建物址
(14)	F-14号掘立柱建物址	180	(34)	F-34号掘立柱建物址
(15)	F-15号掘立柱建物址	182	(35)	F-35号掘立柱建物址
(16)	F-16号掘立柱建物址	183	(36)	F-36号掘立柱建物址
(17)	F-17号掘立柱建物址	184	(37)	F-37号掘立柱建物址
(18)	F-18号掘立柱建物址	185	(38)	F-38号掘立柱建物址
(19)	F-19号掘立柱建物址	186	(39)	F-39号掘立柱建物址
(20)	F-20号掘立柱建物址	187	(40)	F-40号掘立柱建物址
3	土 壙	210		
(1)	D-1号土壙	210	(4)	D-4号土壙
(2)	D-2号土壙	210	(5)	D-5号土壙
(3)	D-3号土壙	210		
4	溝状遺構	213		
(1)	M-1号溝状遺構	213		
(2)	M-2~5号溝状遺構	215		
5	表面採集遺物	217		
V	総 括	219		
1	根岸遺跡における土器様相	221		
(1)	はじめに	221		

(2) 根岸遺跡 第Ⅰ段階	221
(3) 根岸遺跡 第Ⅱ段階	222
(4) 根岸遺跡 第Ⅲ段階	223
(5) 根岸遺跡 第Ⅳ段階	225
(6) 根岸遺跡 第Ⅴ段階	227
(7) 土器様相の時間的把握	228
(8) 鋳師屋遺跡群各遺跡の時期の併行関係	230
2 根岸遺跡における遺構および集落の様相	231
(1) 竪穴住居址の形態	231
(2) 竪穴住居の構築	233
(3) 竪穴住居址の形態変遷	235
(4) 掘立柱建物址の形態	235
(5) 掘立柱建物址の時期	238
(6) 根岸遺跡における集落様相とその変遷	238
3 鋳師屋遺跡群における集落様相	244
(1) 鋳師屋遺跡群の竪穴住居址	244
(2) 鋳師屋遺跡群の掘立柱建物址	246
(3) 鋳師屋遺跡群における集落の変遷	252
(4) 集落人口等の推定	258
(5) 住居廃絶時におけるカマド破壊をめぐって	262
(6) 集落における耕地の問題	266
(7) 鋳師屋遺跡群における古代集落の性格	268
引用・参考文献	275
VI 付 編	279
自然科学分析にあたって	281
付 編 1 液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定	283
付 編 2 ¹⁴ C年代と考古年代との照合	284
付 編 3 鋳師屋遺跡群の黒曜石の分析	285
付 編 4 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定	291
付 編 5 鋳師屋遺跡群出土の馬歯・馬骨と獣骨類について	297
図 版	
後 記	

挿 図 目 次

第1図 鈴屋遺跡群調査終了遺跡と調査対象区……………3	第38図 H-2号住居址出土遺物……………44
第2図 バックホーによる表土削平……………6	第39図 H-2号住居址出土遺物……………46
第3図 発掘調査現場……………6	第40図 H-3号住居址掘り方実測図……………47
第4図 住居址調査風景……………6	第41図 H-3号住居址実測図……………48
第5図 カマドの実測……………6	第42図 H-3号住居址カマド実測図……………49
第6図 調査風景……………7	第43図 H-3号住居址出土遺物……………50
第7図 住居址の実測……………7	第44図 H-3号住居址出土遺物……………51
第8図 掘立柱建物址の調査……………7	第45図 H-3号住居址出土遺物……………53
第9図 発掘調査協力者……………7	第46図 H-4号住居址実測図……………54
第10図 土器の石膏復原……………8	第47図 H-4号住居址掘り方実測図……………55
第11図 土器の拓本……………8	第48図 H-4号住居址カマド実測図……………56
第12図 遺構トレース……………8	第49図 H-4号住居址出土遺物……………57
第13図 原稿作成……………8	第50図 H-4号住居址出土遺物……………58
第14図 根岸遺跡発掘調査区設定図……………9	第51図 H-5号住居址実測図……………60
第15図 根岸遺跡遺構全体図……………10	第52図 H-5号住居址掘り方実測図……………61
第16図 浅間山を中心とした鳥瞰図……………13	第53図 H-5号住居址カマド実測図……………62
第17図 浅間火山の編年……………15	第54図 H-5号住居址出土遺物……………62
第18図 浅間火山噴出物の分布概念図……………16	第55図 H-5号住居址出土遺物……………63
第19図 根岸遺跡と周辺の遺跡分布……………20	第56図 H-6号住居址実測図……………64
第20図 前田遺跡第I期集落と初期須恵器の分布……………22	第57図 H-6号住居址掘り方実測図……………65
第21図 前田遺跡の初期カマド……………22	第58図 H-6号住居址カマド実測図……………66
第22図 野火付遺跡神功開宝……………23	第59図 H-6号住居址出土遺物……………67
第23図 前田遺跡円形礎……………23	第60図 H-6号住居址出土遺物……………68
第24図 野火付遺跡の境界馬……………23	第61図 H-7号住居址実測図……………69
第25図 野火付遺跡の境界馬……………24	第62図 H-7号住居址掘り方実測図……………70
第26図 根岸遺跡の土層断面図……………28	第63図 H-7号住居址カマド実測図……………71
第27図 H-1号住居址実測図……………31	第64図 H-7号住居址出土遺物……………71
第28図 H-1・H-7号住居址掘り方実測図……………32	第65図 H-8号住居址実測図……………73
第29図 H-1号住居址カマド実測図……………33	第66図 H-8号住居址掘り方実測図……………74
第30図 H-1号住居址出土遺物……………34	第67図 H-8号住居址カマド実測図……………75
第31図 H-1号住居址出土遺物……………35	第68図 H-8号住居址出土遺物……………75
第32図 H-1号住居址出土遺物……………36	第69図 H-8号住居址出土遺物……………76
第33図 H-1号住居址出土遺物……………38	第70図 H-8号住居址出土遺物……………78
第34図 H-2号住居址実測図……………40	第71図 H-9号住居址実測図……………79
第35図 H-2号住居址掘り方実測図……………41	第72図 H-9号住居址掘り方実測図……………80
第36図 H-2号住居址カマド実測図……………42	第73図 H-9号住居址カマド実測図……………81
第37図 H-2号住居址出土遺物……………43	第74図 H-9号住居址出土遺物……………82

第75図	H-9号住居址出土遺物	83	第116図	H-20号住居址出土遺物	128
第76図	H-10号住居址実測図	85	第117図	H-20号住居址出土遺物	129
第77図	H-10号住居址掘り方実測図	86	第118図	H-21号住居址カマド実測図	131
第78図	H-10号住居址カマド実測図	87	第119図	H-21号住居址実測図	132
第79図	H-10号住居址出土遺物	88	第120図	H-21号住居址出土遺物	133
第80図	H-10号住居址出土遺物	89	第121図	H-22号住居址実測図	134
第81図	H-10号住居址出土遺物	91	第122図	H-22号住居址カマド実測図	135
第82図	H-11号住居址実測図	92	第123図	H-22号住居址出土遺物	136
第83図	H-11号住居址掘り方実測図	93	第124図	H-23号住居址実測図	138
第84図	H-11号住居址カマド実測図	94	第125図	H-23号住居址カマド実測図	139
第85図	H-11号住居址出土遺物	96	第126図	H-23号住居址出土遺物	140
第86図	H-11号住居址出土遺物	97	第127図	H-24号住居址実測図	142
第87図	H-11号住居址出土遺物	98	第128図	H-24号住居址カマド実測図	142
第88図	H-12号住居址実測図	100	第129図	H-24号住居址出土遺物	142
第89図	H-13号住居址カマド実測図	101	第130図	H-25号住居址実測図	144
第90図	H-13号住居址実測図	102	第131図	H-25号住居址カマド実測図	146
第91図	H-13号住居址出土遺物	103	第132図	H-25号住居址出土遺物	146
第92図	H-13号住居址出土遺物	104	第133図	H-25号住居址出土遺物	146
第93図	H-13号住居址出土遺物	106	第134図	H-26号住居址カマド実測図	147
第94図	H-14号住居址実測図	108	第135図	H-26号住居址実測図	148
第95図	H-14号住居址カマド実測図	108	第136図	H-26号住居址出土遺物	149
第96図	H-14号住居址出土遺物実測図	109	第137図	H-27号住居址実測図	151
第97図	H-15号住居址実測図	110	第138図	H-27号住居址カマド実測図	152
第98図	H-15号住居址カマド実測図	111	第139図	H-27号住居址出土遺物	153
第99図	H-15号住居址出土遺物	111	第140図	H-28号住居址実測図	155
第100図	H-15号住居址出土遺物	112	第141図	H-28号住居址カマド実測図	155
第101図	H-16号住居址実測図	114	第142図	H-28号住居址出土遺物	156
第102図	H-16号住居址カマド実測図	114	第143図	H-28号住居址出土遺物	157
第103図	H-16号住居址出土遺物	115	第144図	H-29号住居址実測図	158
第104図	H-17号住居址実測図	117	第145図	H-29号住居址カマド実測図	158
第105図	H-17号住居址カマド実測図	118	第146図	H-29号住居址出土遺物	159
第106図	H-17号住居址出土遺物	118	第147図	H-30号住居址カマド実測図	159
第107図	H-18号住居址実測図	120	第148図	H-30号住居址実測図	160
第108図	H-18号住居址カマド実測図	121	第149図	H-31号住居址実測図	161
第109図	H-18号住居址カマド実測図	121	第150図	H-31号住居址カマド実測図	161
第110図	H-18号住居址出土遺物	122	第151図	H-31号住居址出土遺物	162
第111図	H-18号住居址出土遺物	124	第152図	H-32号住居址実測図	163
第112図	H-19号住居址実測図	125	第153図	H-32号住居址カマド実測図	164
第113図	H-20号住居址実測図	126	第154図	H-32号住居址出土遺物	164
第114図	H-20号住居址カマド実測図	127	第155図	H-32号住居址出土遺物	165
第115図	H-20号住居址出土遺物	127	第156図	F-1号掘立柱建物址実測図	167

第157図	F-2号竪立柱建物址実測図	168	第198図	F-40号竪立柱建物址実測図	206
第158図	F-3号竪立柱建物址実測図	169	第199図	D-1号土壌実測図	210
第159図	F-3号竪立柱建物址出土遺物	170	第200図	D-2号土壌実測図	210
第160図	F-4号竪立柱建物址出土遺物	170	第201図	D-3号土壌実測図	211
第161図	F-4号竪立柱建物址実測図	171	第202図	D-4号土壌実測図	211
第162図	F-5号竪立柱建物址実測図	172	第203図	D-5号土壌実測図	212
第163図	F-6号竪立柱建物址実測図	173	第204図	M-1号溝状遺構実測図	213
第164図	F-7号竪立柱建物址実測図	174	第205図	M-1号溝状遺構出土遺物	214
第165図	F-8号竪立柱建物址実測図	175	第206図	M-2・3・4・5号溝状遺構実測図	215
第166図	F-9号竪立柱建物址実測図	176	第207図	溝状遺構出土遺物実測図	216
第167図	F-10号竪立柱建物址実測図	177	第208図	表面採集遺物	217
第168図	F-11号竪立柱建物址実測図	178	第209図	根岸遺跡第I段階の土器	221
第169図	F-12号竪立柱建物址実測図	179	第210図	根岸遺跡第II段階の土器	222
第170図	F-13号竪立柱建物址実測図	180	第211図	根岸遺跡第III段階の土器	224
第171図	F-14号竪立柱建物址実測図	181	第212図	根岸遺跡第IV段階の土器	226
第172図	F-14号竪立柱建物址出土遺物	181	第213図	根岸遺跡第V段階の土器	227
第173図	F-15号竪立柱建物址実測図	182	第214図	竪穴住居址の主柱穴のあり方	232
第174図	F-16号竪立柱建物址実測図	183	第215図	竪穴住居の長幅比	232
第175図	F-17号竪立柱建物址実測図	184	第216図	竪立柱建物址形態別面積分布	233
第176図	F-18号竪立柱建物址実測図	185	第217図	竪穴住居の構築	234
第177図	F-19号竪立柱建物址実測図	187	第218図	根岸遺跡竪立柱建物址形態一覧	236
第178図	F-20号竪立柱建物址実測図	188	第219図	竪立柱建物址形態別面積分布	237
第179図	F-21号竪立柱建物址実測図	189	第220図	根岸遺跡遺構全体図	239
第180図	F-22号竪立柱建物址実測図	190	第221図	竪穴住居と竪立柱建物の変遷	240
第181図	F-23号竪立柱建物址実測図	191	第222図	根岸遺跡第I期の集落	240
第182図	F-24号竪立柱建物址実測図	192	第223図	根岸遺跡第II期の集落	241
第183図	F-25号竪立柱建物址実測図	192	第224図	根岸遺跡第III期の集落	242
第184図	F-26号竪立柱建物址実測図	193	第225図	根岸遺跡第IV期の集落	242
第185図	F-27号竪立柱建物址実測図	194	第226図	根岸遺跡第V期の集落	243
第186図	F-28号竪立柱建物址実測図	194	第227図	鈍師屋遺跡群における竪立柱建物址の形態	244
第187図	F-29号竪立柱建物址実測図	195	第228図	形態Eの主柱	245
第188図	F-30号竪立柱建物址実測図	196	第229図	竪穴住居址の形態別面積分布	246
第189図	F-31号竪立柱建物址実測図	197	第230図	時期別住居形態構成比	246
第190図	F-32号竪立柱建物址実測図	198	第231図	鈍師屋遺跡群における竪穴住居址の形態	247
第191図	F-33号竪立柱建物址実測図	199	第232図	竪立柱建物址の基本形態	248
第192図	F-34号竪立柱建物址実測図	200	第233図	前田遺跡(佐久市分第一次)遺構分布図	249
第193図	F-35号竪立柱建物址実測図	201	第234図	前田遺跡(御代町分)遺構分布図	250
第194図	F-36号竪立柱建物址実測図	202	第235図	十二遺跡遺構分布図	250
第195図	F-37号竪立柱建物址実測図	203	第236図	小国市鈍師屋遺跡	250
第196図	F-38号竪立柱建物址実測図	204	第237図	鈍師屋遺跡群における竪穴住居址の分布	253
第197図	F-39号竪立柱建物址実測図	205	第238図	鈍師屋遺跡群における竪穴住居址の分布	254

第25図	鑄師屋遺跡群における竪穴住居長の分布	25
第26図	鑄師屋遺跡群における竪穴住居址の分布	26
第27図	カマドの基本構造	29
第28図	破壊を被っていないと思われるカマド	29
第29図	破壊を被ったと思われるカマド	29
第30図	伊濃国佐久郡北部の歴史地図	29

第36図	鑄師屋遺跡群(御代田町分)の文字資料	21
第37図	鑄師屋遺跡群における特殊遺物の分布	22
付 編		
第 1 図	根岸遺跡H-11号住居址出土炭化材の分布	28
第 1 図	馬の骨格とその名称	26

付 表 目 次

第 1 表	鑄師屋遺跡群(御代田町分)各遺跡の調査遺構数と調査面積	5
第 2 表	根岸遺跡と周辺の遺跡地名表	21
第 3 表	H-1号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	37
第 4 表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	38
第 5 表	H-1号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	38
第 6 表	H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	45
第 7 表	H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	46
第 8 表	H-2号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	46
第 9 表	H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	52
第10表	H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	53
第11表	H-3号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉	53
第12表	H-4号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	58
第13表	H-4号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	58
第14表	H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	63
第15表	H-5号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉	63
第16表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	68
第17表	H-6号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	68
第18表	H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	72
第19表	H-8号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	77
第20表	H-8号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	78
第21表	H-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	83
第22表	H-9号住居址出土遺物一覧表〈石器・銅製品〉	83
第23表	H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	90
第24表	H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	91
第25表	H-10号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉	91
第26表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	98
第27表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	99
第28表	H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	100

第29表	H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	105
第30表	H-13号住居址出土遺物一覧表	106
第31表	H-13号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器・鏡〉	106
第32表	H-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	109
第33表	H-15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	113
第34表	H-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	116
第35表	H-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	119
第36表	H-18号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	123
第37表	H-18号住居址出土遺物一覧表〈鏡・鉄器〉	124
第38表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	130
第39表	H-20号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	130
第40表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	133
第41表	H-21号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	133
第42表	H-22号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	136
第43表	H-22号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	137
第44表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉	140
第45表	H-23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	141
第46表	H-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	143
第47表	H-25号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	146
第48表	H-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	150
第49表	H-27号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	151
第50表	H-27号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	154
第51表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈石器・鉄器〉	155
第52表	H-28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	157
第53表	H-29号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	159
第54表	H-31号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	162
第55表	H-32号住居址出土遺物一覧表〈石器〉	166
第56表	H-32号住居址出土遺物一覧表〈土器〉	166
第57表	F-3号獨立柱建物址出土遺物一覧表〈石器〉	170
第58表	F-4号獨立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉	170

第59表	F-14号獨立柱建物址出土遺物一覧表〈石器〉Ⅷ	20
第60表	F-14号獨立柱建物址出土遺物一覧表〈土器〉Ⅷ	20
第61表	獨立柱建物址ピット一覧表〈その1〉	207
第62表	獨立柱建物址ピット一覧表〈その2〉	208
第63表	獨立柱建物址ピット一覧表〈その3〉	209
第64表	M-1号溝状遺構出土遺物一覧表〈土器〉	214
第65表	M-3号溝状遺構出土遺物一覧表〈土器〉	216
第66表	溝状遺構出土遺物一覧表〈石器〉	216
第67表	表採遺物一覧表〈土器〉	217
第68表	根岸遺跡 竪穴住居址の所屬期	228
第69表	銚師屋遺跡群各遺跡の時期の併行関係	230
第70表	竪穴住居址の時期別形態	235
第71表	根岸遺跡 獨立柱建物址の所屬時期	238
第72表	竪穴住居址の時期別形態	245
第73表	竪穴住居の面積と推定利用人数	259

第74表	銚師屋遺跡群の推定人口	269
第75表	大塚馬の戸の概要	269
第76表	古代家室に関する学説	282
付 編		
第1表	¹⁴ C年代測定炭化材試料一覧表	292
第1表	黒曜石の分析結果	297
第1表	銚師屋遺跡群の馬の年齢	300
第2表	銚師屋遺跡群の馬歯・馬骨	300
第3表	馬の上顎臼歯計測値・比較表	309
第4表	馬の下顎臼歯計測値・比較表〈その1〉	309
第4表	馬の下顎臼歯計測値・比較表〈その2〉	310
第5表	上顎切歯計測値	310
第6表	下顎切歯計測値	310
第7表	家牛上顎第二臼歯計測値・比較表	310

図 版 目 次

巻頭図版目次

1	銚師屋遺跡群
2	銚師屋遺跡群
3	銚師屋遺跡群全景
4	根岸遺跡
5	銚師屋遺跡群の鉄器
6	銚師屋遺跡群の鉄器
7	銚師屋遺跡群の古銭
8	前田遺跡の初期須恵器
9	前田遺跡 古墳時代中期の土器セット
10	十二遺跡 奈良時代の土器セット
11	灰輪陶器
12	根岸遺跡 平安時代の土器セット
13	前田遺跡 平安時代円面鏡
図版 一	根岸遺跡付近の航空写真
図版 二	根岸遺跡航空写真
図版 三	H-1号住居址
図版 四	H-1号住居址・H-2号住居址
図版 五	H-2号住居址・H-3号住居址
図版 六	H-3号住居址・H-4号住居址

図版 七	H-4号住居址
図版 八	H-5号住居址
図版 九	H-6号住居址
図版 十	H-7号住居址
図版 十一	H-8号住居址
図版 十二	H-9号住居址
図版 十三	H-9号住居址・H-10号住居址
図版 十四	H-10号住居址
図版 十五	H-11号住居址
図版 十六	H-11号住居址・H-12号住居址
図版 十七	H-13号住居址・H-14号住居址
図版 十八	H-14号住居址・H-15号住居址
図版 十九	H-16号住居址・H-17号住居址
図版 二十	H-17号住居址・H-18号住居址
図版 二十一	H-19号住居址・H-20号住居址
図版 二十二	H-20号住居址・H-21号住居址
図版 二十三	H-22号住居址・H-23号住居址
図版 二十四	H-23号住居址・H-24号住居址
図版 二十五	H-25号住居址・H-26号住居址
図版 二十六	H-27号住居址・H-28号住居址
図版 二十七	H-28号住居址・H-29号住居址

- 图版 二十八 H-29·30·31号住居址
- 图版 二十九 H-31号住居址·H-32号住居址
- 图版 三十 F-1号独立柱建物址·F-2号独立柱建物址
- 图版 三十一 F-2号独立柱建物址·F-3号独立柱建物址
- 图版 三十二 F-4号独立柱建物址·F-5号独立柱建物址
- 图版 三十三 F-5号独立柱建物址·F-6号独立柱建物址
- 图版 三十四 F-6号独立柱建物址·F-7号独立柱建物址
- 图版 三十五 F-8号独立柱建物址·F-9号独立柱建物址
- 图版 三十六 F-9号独立柱建物址·F-10号独立柱建物址
- 图版 三十七 F-11号独立柱建物址·F-12号独立柱建物址
- 图版 三十八 F-12·13·14号独立柱建物址
- 图版 三十九 F-14号独立柱建物址·F-15号独立柱建物址
- 图版 四十 F-16号独立柱建物址·F-17号独立柱建物址
- 图版 四十一 F-17号独立柱建物址·F-18号独立柱建物址
- 图版 四十二 F-19号独立柱建物址·F-20号独立柱建物址
- 图版 四十三 F-20号独立柱建物址·F-21号独立柱建物址
- 图版 四十四 F-22号独立柱建物址·F-23号独立柱建物址
- 图版 四十五 F-24号独立柱建物址·F-25号独立柱建物址
- 图版 四十六 F-25号独立柱建物址·F-26号独立柱建物址
- 图版 四十七 F-27号独立柱建物址·F-28号独立柱建物址
- 图版 四十八 F-29号独立柱建物址·F-30号独立柱建物址
- 图版 四十九 F-31号独立柱建物址·F-32号独立柱建物址
- 图版 五十 F-33号独立柱建物址·F-34号独立柱建物址
- 图版 五十一 F-35号独立柱建物址·F-36号独立柱建物址
- 图版 五十二 F-37·38·39号独立柱建物址
- 图版 五十三 F-40号独立柱建物址·D-1·2号土坑
- 图版 五十四 D-3号土坑·M-1号溝状遺構
- 图版 五十五 M-2·3·4号溝状遺構
- 图版 五十六 H-1号住居址出土遺物
- 图版 五十七 H-1号住居址出土遺物
- 图版 五十八 H-1·2号住居址出土遺物
- 图版 五十九 H-2·3号住居址出土遺物
- 图版 六十 H-3号住居址出土遺物
- 图版 六十一 H-4号住居址出土遺物
- 图版 六十二 H-5·6号住居址出土遺物
- 图版 六十三 H-6·7·8号住居址出土遺物
- 图版 六十四 H-8·9·10号住居址出土遺物
- 图版 六十五 H-10·11号住居址出土遺物
- 图版 六十六 H-11号住居址出土遺物
- 图版 六十七 H-11号住居址出土遺物
- 图版 六十八 H-11·13号住居址出土遺物
- 图版 六十九 H-13号住居址出土遺物
- 图版 七十 H-14·15号住居址出土遺物
- 图版 七十一 H-16·17号住居址出土遺物
- 图版 七十二 H-18号住居址出土遺物
- 图版 七十三 H-20号住居址出土遺物
- 图版 七十四 H-21·22·23号住居址出土遺物
- 图版 七十五 H-24·25·26·27号住居址出土遺物
- 图版 七十六 H-27·28号住居址出土遺物
- 图版 七十七 H-29·31·32号住居址出土遺物
- 图版 七十八 H-32号住居址·F-4号独立柱建物址·M-1·3号溝状遺構出土遺物图版 七十九 爪形文土器·古銭·飾り金具·石器
- 图版 八十 石器 (1/4)
- 图版 八十一 石器 (1/4)·铁器 (1/3)
- 图版 八十二 铁器 (1/3)·土器細部写真
- 图版 八十三 土器細部写真
- 图版 八十四 土器細部写真
- 图版 八十五 土器細部写真

I 発掘調査の概要



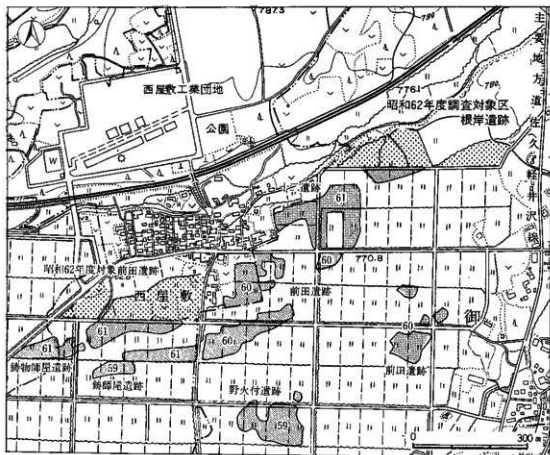
第I区の調査風景（南方より）。手前にみえるのがH-8号住居址である。

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字御代田・佐久市大字小田井・小諸市大字御影新田にかかる一帯小田井・御影地区において、水田経営の合理化を目的とした、長野県営圃場整備事業が昭和54年より実施された。

一方、この地区においては、鎗師屋遺跡群として埋蔵文化財の包蔵が確認・周知されており、その保護問題が表面化してきた。このため、その原因者である東信土地改良事務所と、保護部局である長野県教育委員会、御代田町・佐久市・小諸市の各教育委員会の三者において話し合いがもたれ、該当する遺跡について緊急発掘調査を実施し記録保存を行うことで折合いがついた。



第1図 鎗師屋遺跡群調査終了遺跡(細網)と調査対象区(太網)(1:10,000)

※数字は調査年

I 発掘調査の概要

これを受けて、昭和57年の小諸市教育委員会による曾根城遺跡の発掘調査を皮切りに、昭和59年には野火付遺跡（御代田町）・鋳師屋遺跡の一部（佐久市）、昭和60年には前田遺跡の一部（御代田町・佐久市）、昭和61年には十二遺跡（御代田町）、鋳師屋遺跡（小諸市）、鋳師屋遺跡・前田遺跡の一部（佐久市）の発掘調査が実施された。

翌昭和62年は、小田井・御影地区園場整備事業の完了年度であり、鋳師屋遺跡群の最後の調査年度となった。この年に調査されたのが、前田遺跡（佐久市）と本根岸遺跡（御代田町）である。

(2) 発掘調査の概要

- 1 遺 跡 名 鋳師屋遺跡群 根岸遺跡
- 2 所 在 地 長野県北佐久郡御代田町大字御代田字上十二・根岸
- 3 発掘期間 昭和62年4月3日 ～ 昭和62年6月18日 （昭和62年度）
- 4 整理期間 昭和62年8月2日 ～ 昭和63年3月31日 （昭和62年度）
昭和63年4月7日 ～ 平成元年3月31日 （昭和63年度）
- 5 発掘理由 昭和62年度小田井・御影地区長野県営園場整備事業に伴い、根岸遺跡の破壊が予想されるため、緊急発掘調査を実施し記録保存を行う。
- 6 発掘方針 広大な調査対象区について、居住域・生産域・墓域等全体の検出に努める。
- 7 費用負担 調査費用総額のうち、72.5%は原因者である農政部局（北佐久地方事務所）が負担し、残りの27.5%については文化財補助事業として文化財保護部局が負担した（国庫補助金50%、県補助金15%、町費35%）。
- 8 事 務 局 ◎ 教育次長 桜井定巳、山本岩正 ◎ 社会・同和教育係長 萩原茂
◎ 社会・同和教育係 内堀篤志、堀 隆
- 9 調 査 団
顧 問 古越頼助（御代田町長） 故小林正人（前教育長）
参 与 桜井為吉、田村泉、内山俊雄、柳沢恒三郎、小林五郎、尾台卓一、大井源寿、
内堀達人（御代田町文化財審議委員）
団 長 由井茂也（佐久考古学会会長）
副 団 長 山本直夫（御代田町文化財審議委員長）
担 当 者 堀 隆（御代田町教育委員会）
調 査 員 鳥居 亮（主任）、白倉盛男、井上行雄、大井今朝太、羽毛田伸博
補 助 員 伴野有希子、太田和子
協 力 者 小山内玲子、角張憲子、茂木勝等、高山玲子、高地正雄、田村祐子、古越敏彦、

1 発掘調査の概要

熊田すみ子、並木ことみ、樹形カズヨ、古川まち子、山本まさる、大井吉次郎、
 塚田文枝、飯田すえの、松本春江、甘利隆志、今井吉郎、鈴木五郎、畑山悦子、
 磯井勝子、桜井和人、松本友子、尾沼けさと、森川宗治、尾沼大作、柳沢純子、
 大井けさみ、岡谷みち子、尾沼真夕美、宮下文子、大井さゆり、佐々木史子、
 岡田せい、鈴木多津子

(3) 発掘区の設定と遺構の検出

本調査の対象区については第1図に示したとおりで、図の網点部の約24,000㎡が該当する。

この広大な調査の対象区を、鎗師屋遺跡群全体のなかで把握できるように、国家座標第Ⅲ系を用い、25m四方のグリッドを設定した。したがってグリッドのX軸は真北を指すようになっている。グリッド名は、野火付遺跡・前田遺跡・十二遺跡に継続する名称となる(第2図)。

調査は、広大な調査対象区についてまずは自然地形と遺跡の範囲をみきわめるため、重機により東西・南北に試掘トレンチを入れてみた。その結果おおよその自然地形と遺跡の範囲をとらえることができたので、つぎに遺跡全部分の表土を重機によって除去した。

調査地区については、便宜的に第Ⅰ区・第Ⅱ区・第Ⅲ区に区分けをした。遺構は第Ⅰ・Ⅲ区において検出され、第Ⅱ区では検出されなかった。その概要は以下のとおりである。

第Ⅰ区	面積 10,800㎡	竪穴住居址 30軒	掘立柱建物址 40棟	土壇 5基	溝 5基
第Ⅲ区	面積 1,300㎡	竪穴住居址 2軒	掘立柱建物址 0棟	土壇 0基	溝 0基
計	面積 12,100㎡	竪穴住居址 32軒	掘立柱建物址 40棟	土壇 5基	溝 5基

なお、鎗師屋遺跡群(御代田町分)の各遺跡の調査遺構数と調査面積を第1表に示しておく。

第1表 鎗師屋遺跡群(御代田町分)各遺跡の調査遺構数と調査面積

遺跡名	竪穴住居址	掘立柱建物址	井戸	土壇	竪穴状遺構	溝状遺構	調査面積
野火付遺跡	18軒	8棟	3基	199基	64基	32基	10800㎡
前田遺跡	117軒	87棟	0基	52基	0基	1基	24000㎡
十二遺跡	71軒	75棟	1基	6基	0基	1基	17800㎡
根岸遺跡	32軒	40棟	0基	5基	0基	5基	12100㎡
計	238軒	210棟	4基	262基	64基	39基	64700㎡

※ 調査面積は実質の遺跡の調査面積を示し、試掘範囲も含めた調査対象面積を示さない。

(4) 発掘調査の経緯

昭和62年度

4月16日

発掘調査開始。バックホーの搬入。バックホーにより、遺跡の範囲確認のための試掘トレンチをあける。

4月17日

バックホーによる第Ⅰ区拡張。住居址2軒を確認。テント設置。

4月23日

作業員を徐々に入れ、遺構調査開始。プラン確認。H-4号住居址・H-5号住居址の調査。

4月27日

バックホーによる、Ⅱ区試掘トレンチ設定開始。

4月28日

これまでの確認遺構は、住居址10軒。溝の調査を実施 (M-1号溝状遺構)。

4月29日

ブルドーザによる第Ⅰ区押し土。

5月9日

測量が遅れ気味のため、H-1・H-3・H-8号住居址の実測のみを行なう。

5月12日

御代田南小学校五年生見学。

5月14日

豪雨のため作業中止。テント内で図面整理等を行なう。

5月16日

H-6号住居址写真撮影のための精査。
H-6号住居址写真撮影。

5月19日

第Ⅰ区、住居址H-1・H-3・H-5・H-6・H-9・H-10・H-11の調査継続。

5月22日

第Ⅰ区、住居址H-2・H-7・H-9、掘立柱建物址F-1・F-8・F-9の調査。

5月25日

第Ⅰ区プラン確認作業の継続。

5月26日



第2図 バックホーによる表土削平



第3図 発掘調査現場



第4図 住居址調査風景



第5図 カマドの実測

御代田南小学校六年生発掘調査体験学習。
溝状遺構M-4の調査。強風・砂埃のため調査に支障をきたす。

6月1日

第I区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。
4時近く、径1cmもある大型のヒョウが降る。
県下では降ヒョウによる農作物への被害深刻。

6月4日

第I区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。
H-9号住居址の床面直上より銅地金張りの製品出土。かなり暑い日となる。

6月8日

第I区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。
連日猛暑。

6月11日

第I区、住居址・掘立柱建物址の調査継続。
アドバルーンによる住居址の航空写真測量。

6月16日

第I区、住居址・掘立柱建物址の調査終了。
航空写真撮影のための精査(草取り等)。セスキによる航空写真撮影。

6月18日

器材撤収。
発掘調査終了。重機による埋め戻し。

6月19日～8月1日

広畑遺跡発掘調査のため遺物整理等休止。

8月～12月

十二遺跡遺物整理のため、根岸遺跡の遺物整理等すべての作業休止。

昭和62年 1月～昭和63年 3月

土器の註記・復原・実測をおこなう。

昭和63年 3月31日

昭和62年度の作業終了。

昭和63年度

4月7日

根岸遺跡の整理再開。

4月8日～5月31日

広畑遺跡遺物整理のため根岸遺跡遺物整理中断。

6月1日

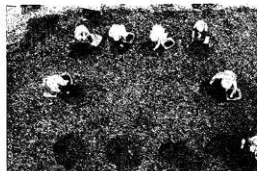
遺物整理再開。土器復原、土器拓本、土器実測をおこなう。



第6図 調査風景



第7図 住居址の実測



第8図 掘立柱建物址の調査



第9図 発掘調査協力者

- 8月23日
遺物属性表作成開始。
- 9月5日
実測用土器復原終了。
土器拓本作成開始。
- 9月6日
基本的な土器の実測終了。
- 9月7日
遺物属性表作成終了。
- 9月12日
掘立柱建物址原稿執筆開始。
- 9月19日
掘立柱建物址原稿執筆終了。
基本的な石器の実測終了。
- 9月20日
掘立柱建物址トレース開始。
- 9月21日
遺物トレース開始。
- 9月22日
拓本終了。
- 9月30日
住居址トレース開始。
- 10月12日
宮崎重雄氏に馬骨鑑定依頼。
- 10月13日
住居址原稿執筆開始。浅間山初冠雪。
- 10月17日
黒曜石分析のため金山喜昭氏来訪。
- 11月16日
住居址原稿執筆完了。
- 11月18日
石器トレース完了。
- 12月14日
遺物写真撮影開始。
- 平成元年 2月18日
遺物写真撮影完了。
- 2月28日
原稿執筆完了。
- 昭和63年 12月 ~ 平成元年 3月
版組み、レイアウト、校正等を行なう。
- 3月31日
発掘調査報告書刊行。



第10図 土器の石膏復原



第11図 土器の拓本

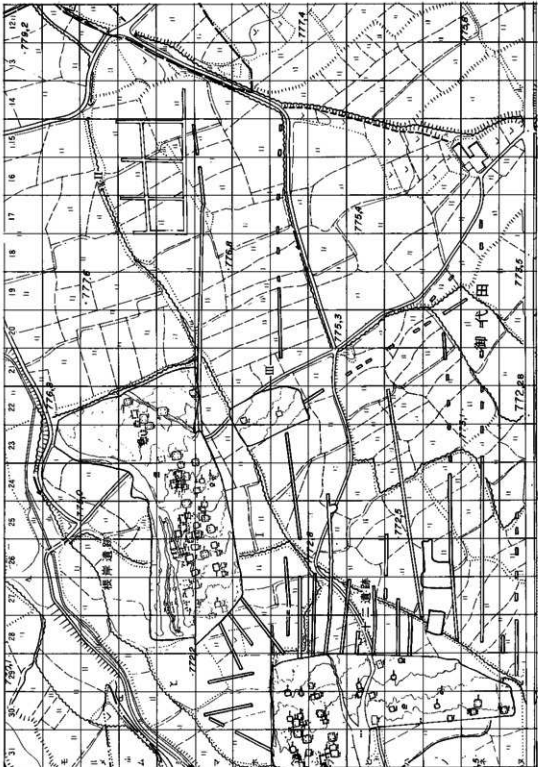


第12図 遺構トレース



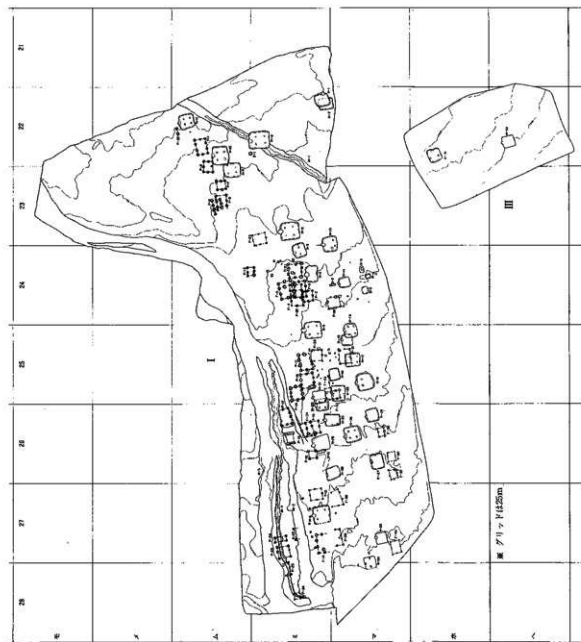
第13図 原稿作成

I 角洲調査の概要



第14図 櫻井遺跡発掘調査区設定図 (1:2,500)

1 発掘調査の概要



第15図 板岸遺跡遺構全体図 (1:1,200)

II 遺跡の環境



鉦師屋遺跡群根岸遺跡は、今も活動を続ける浅間山の山すその南端部に位置し、標高773mを測る。

1 御代田町の自然環境と地質

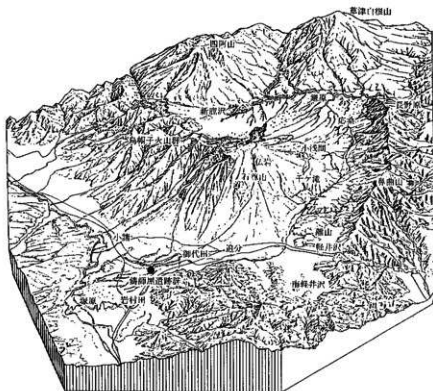
(1) 自然環境

日本の代表的活火山浅間山は、標高2,560mを測り、今も白い噴煙をあげ続けている。

この雄大な浅間山の南のふところに抱かれるのが、東西9.5km・南北13.8km・約52km²の面積を有する御代田町で、年平均気温8℃・年間降水量1,200mm前後の冷涼乾燥帯気候地域に属する。当御代田町の、東には軽井沢町が、西には小諸市が、南には佐久市が隣接している。

この御代田町の背景をなす、浅間連峰は、西から烏帽子岳・湯ノ丸山・三方ヶ峰・東麓ノ登山・高峰山が連なる烏帽子火山群と、続いて黒斑山・前掛山・前後に石尊山・小浅間山・やや離れて雁山へと続く浅間火山群からなっている(巻頭図版1、第16図)。前掛山の火口のさらに内側には、比高170mを測る釜山が直径350mの火口を開けており、噴煙を立ち上らせている。

浅間連峰は、その陸水を太平洋側と日本海側へと分ける分水嶺となっているが、長野県分の南側の陸水は日本海側へと流れるものである。御代田町にあっては、湯川・濁川・鎌矢川等の河川



第16図 浅間山を中心とした鳥瞰図(荒牧 1968 より)

がみられる。

一方、湯川を挟んで、八嵐山塊が群馬県境まで連なるが、その西端には通称平尾富士(1,155 m)が聳え、森泉山へと続いている。

御代田町の面積の約半分は山林原野で覆われており、現在山林にはカラマツやアカマツが植林され人工的な植生を呈しているが、人の手の加わらない原景観とは、ナラ林等の中にクリ・ハシバミなどが混じる落葉広葉樹林が主体で、そこに若干の針葉樹・照葉樹が混じるものであったといえよう。

根岸遺跡は、その浅間山の南麓最末端部に位置し、浅間山の下腹より脈状に延びた“田切り”によって画された緩傾斜面上の、さらに幾条か延びる帯状微高地にある。“田切り”は脆弱な火山灰地に侵食が繰り返された結果河床面が下がり、切り立った崖錐状をなす当地方特有の地形である。

根岸遺跡は、東経138度29分40秒、北緯36度18分27秒の位置にあり、標高773mを測る。

(2) 地 質

御代田町の基盤層の大部分は、浅間火山の噴出物から構成されている。

すなわち、浅間火山の噴火史をたどることがその基盤層の年代をたどることであり、またその由来を知ることである。ここでは、荒巻重雄東大地震研究所教授の先駆的研究(荒巻 1968, 1987)と、小諸高校樋口和雄教諭の論考(樋口 1988)に基づいて、浅間火山の活動史をみてみることにしよう。

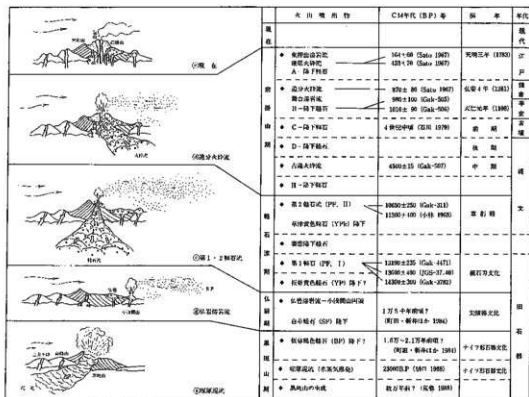
浅間火山は、フォッサ・マグナ(Fossa Magna)と呼ばれる中部日本を横断する大地溝帯の東端に位置している。日本列島は、今から千数百年前日本海側から押し出されて屈曲したが、その折れ口がフォッサ・マグナであり、火山活動の活発な地帯でもある。また、浅間火山は、東日本の中央部に帯状に並ぶ火山フロントと、太平洋側から帯状に続く火山フロントの折点にも位置している。

さて、第17図には浅間火山の活動史を示した。

浅間火山中最も古い山体といわれているのは黒斑山で、おそらくは数万年前に成長を始めたといわれている。黒斑山は、かつては富士山によく似た形を呈した成層火山で、標高2,900m程度を測ったらしい。

この黒斑山が、水蒸気爆発を起こし、その東腹の山体が崩壊流下した。これは「塚原泥流」と呼ばれるもので、佐久市中佐都塚原付近までおよんでいる。その名残がいわゆる「流れ山」(泥流丘)として同塚原地区に何十箇所にも認められ、地名の由来ともなっている。この水蒸気爆発の

1 御代田町の自然環境と地質



第17図 浅間火山の編年 (荒牧 1968)・(樋口 1988) に準拠して作成

の年代は、C14年代測定法でおおよそ23000年前の測定値が出されている (樋口 前掲)。これと同様な噴火については、近年では1980年の北米セント・ヘレンズの噴火を思い起こすことができる。ちなみに御代田町では、それ以後の分厚い軽石流の下層に位置する「塚原泥流」の厚さは20mを下らないものと考えられる。なお、群馬県下で「AT」(標準値22000~21000 Y BP)の上層に認められる「板鼻褐色軽石層 (BP)」は、これ以降の数回の噴火によってもたらされたものといわれ、間層を挟んで数枚が確認されている。

この黒斑山の水蒸気爆発の少し後、年代にしておおよそ二万年前頃、軽井沢町にある難山の噴火が始まったらしい。その当初には、現在の位置に火口が開き、大量の軽石と火山灰が噴出したと考えられるが、やがて噴火も取まるとその火口から粘性の強いマグマがゆっくりと押し出されてきて、現在見られるような「溶岩円頂丘」と呼ばれる山体を形成した。

つづいて、浅間火山の中心部 (黒斑山火口1km東) で噴火が始まり、仏岩溶岩流となって流出した。また、これとはほぼ同じ頃、難山と同様な「溶岩円頂丘」の小浅間山が現れている。「白糸軽石 (SP)」の降下がみられるのは、この仏岩期の当初である。この「SP」の降下年代については、15000年前頃の年代も考慮されている (町田・新井ほか 1984)。

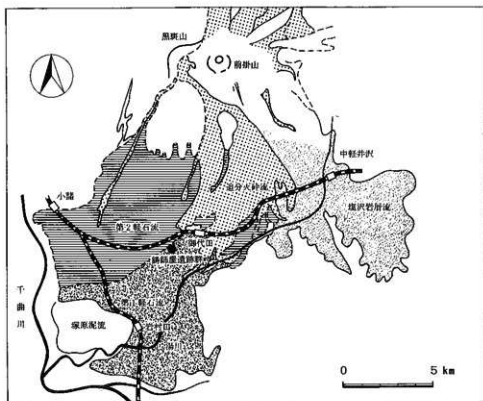
この後数千年間は、浅間火山は休止期をむかえ、その休止期を経た後再び大噴火が始まる。

この大噴火は、仏岩滝岩流とはほぼ同じ火口から起きたもので、軽石と火山灰が大量に吹き上げられたプリニー式の噴火であった。その軽石は、山麓に流下し火砕流となったが、ことにその組成が軽石と火山灰から成っているため「軽石流」と称されている。一方、上空高く舞上がった火山灰や軽石は成層圏まで達し、偏西風に流されて北関東方面に降下している。

荒巻教授によれば、この噴火は百年～数百年の間隔において数回行なわれたというのが、その代表的な軽石流が「第1軽石流」と「第2軽石流」である(第18図)。この脆弱な軽石流を刻んで“田切り”地形が展開しているのである。

「第1軽石流」は、浅間山南麓を駆け降りると千曲川にまで達した。これによって千曲川は一時堰き止められ、佐久盆地は堰止湖となった。これがいわゆる「佐久湖」である。一方、軽井沢では湯川が堰き止められ、南軽井沢にいわゆる「南軽井沢湖」が形成された。「第1軽石流」のC14年代はおおよそ13600年前頃となろうか。

なお、群馬県下において認められる「板鼻黄色軽石層(YP)」は、この「第1軽石流」期にほぼ対応するものとみなせる。ただし「YP」は、浅間軽石流期のもではあるが、「第1軽石流」



第18図 浅間火山噴出物の分布概念図(荒牧 1968)・(樋口 1988)に準拠して作成

期にやや先行するという可能性も指摘されている(町田・新井ほか 1984)。南関東において観察される火山ガラスの密集層「UG」も、この「YP」に対応するものといわれている。

鈔師屋遺跡群の基盤層上部は、この「第1軽石流」である。

「第2軽石流」は、約11000年前後のC14年代が与えられている(小林 1964)もので、「第1軽石流」にくらべるとやや小規模なものであったらしい。この「第2軽石流」は、十二遺跡の北西小諸市御影地区、繰矢川をはさんで柏木・八幡・乗瀬、御代田町塩野地区を覆っている。

この「第2軽石流」期の噴火によってもたらされたとされるものが、「草津黄色軽石層(YPk)」である。

この軽石流噴出の後、浅間山は数千年の長い休止期をむかえ、再び活動を始めるのは前掛山の成長がはじまった時とされる。しかしこの活動開始期については、はっきりとはとらえられていない。しかし、「D軽石」に先行する「小滝火砕流」期(4500Y BP)には、少なくとも活動が再開されたことがわかる。縄文中期頃である。

この前掛山の降下軽石層については、軽井沢地区において約10枚が観察されるというが、その内の年代の明らかなものには、下から「C軽石」・「B軽石」・「A軽石」がある。また、「D軽石」は、縄文中期の加曾利E式土器を上下に挟んで認められる(松井田町千駄木遺跡、能登 1975)。

「C軽石」は、4世紀中頃の降下軽石であることが、前後に出土する考古遺物の特徴からとらえられる。

また、「B軽石」を降下させた噴火は、前掛山最大の噴火で、追分火砕流および舞台溶岩流を噴出している。追分火砕流はその名が示すとおり軽井沢町追分を中心に御代田町一里塚・西軽井沢付近に流れ下っており、その一部は面替露切峽おもかきろききり付近の湯川まで到達している。また、その一部は蛇壺川ヘビウシガハの細い谷を下った。

この「B軽石」は、群馬県内において12~13世紀の遺跡を覆っている。また、この噴火についての文献資料が残されており、文献から推定できる噴火年は、1108年もしくは1281年である。

まず、1108年の記載については、藤原宗忠の「中右記」がある。

● 1108年(天仁元年)7月21日〔「中右記」〕

「上野国司進る解状にいわく、國中高山有り、麻間峯と称す。治暦年間(1065~1069)峯中より細い煙出で来たり、その後微々なり。今年(1108)七月二十一日猛火山嶺を焼き、その煙天に属し、砂礫国に満つ。猥徳庭に積り、国内の田高これに依り已と滅亡す。一國の災い未だ此事あらず、依って稀なり。怪なる所記し置くなり。」

次に、1281年の記載については、平田篤胤の「古史伝」がある。

● 1281年(弘安4年)6月9日〔「古史伝」〕

「その夜亥の刻より焼出して、追分・小諸より南四里余りの間、砂灰ふり、大石今にあり、北は山の麓まで押出して、今に此所を石とまりと云ふ。それより二十二度の大焼けありき。」

この「B軽石」の覆う、群馬県内の遺跡・遺物についての年代観等からは、その降下年代については1108年とする説がこれまで支配的であった。一方、近年樋口氏は、追分火砕流中に含まれる異なる木炭のC14年代測定結果が、1108年近いものと、1281年に近いもののそれぞれがあるところから、これまで一時期の所産であろうと考えられていた追分火砕流が、じつは二度の噴火によって形成されたものであろうことを予測した(樋口 前掲)。それでは、群馬県下を覆う「B軽石」は1108年か、あるいは1281年か、いずれの時期のものなのであろうか。あるいは、その前者に属するものと後者に属するもの双方があるのか。今後の究明を待ちたい点である。

いずれにしてもこの12～13世紀の噴火は、『中右記』の記載にもみるように、浅間山の近隣に居住するものの生活を根柢から脅かすものであったに違いない。追分火砕流が御代田町の約四分の一を覆った時は、一時無人の荒野と化したのであろう。幸いなことに、この根岸遺跡の所在する地籍は追分火砕流を免れている。しかし、こうした火山活動の影響もあろうか、その12～13世紀頃の遺構はこの地域では認められていない。

なお、平安時代に御代田町から軽井沢町へと通過していた官道東山道も、その直撃を受けていたであろうことは容易に想像できる。あるいは一時的にそのルートの変回がなされたか、またその復旧はどのようであったか等、興味深い点である。

さて、江戸時代、天明三年(1783)の噴火は、前掛山最後の大噴火としてあまりに著名である。無論、この時の噴火は多くの古文書等にも記載がみられる。

天明三年(1783)の噴火は、5月9日に始まり8月5日まで続いた。この噴火は軽井沢および群馬県下に「A軽石」を降下させたほか、鬼押し溶岩流、吾妻火砕流、鎌原火砕流となって浅間山北麓を覆った。名勝鬼押しにみる溶岩はこの時のもので、鎌原観音堂の石段で火砕流に巻き込まれたのはこの時の被害者であった。なお、この御代田町のある浅間山南麓側には、平安時代に追分火砕流が流下したのとは異なり、この時の溶岩流・火砕流等の流下はなかったようである。また、「A軽石」も、御代田町においては確認されていない。

天明三年の噴火も、12～13世紀の噴火と同様、農民生活に著しい打撃を及ぼしたものとと思われる。天明の大飢饉(1782～1787)も、東北地方の冷害とあいまって、まさにこのころ勃発しているのである。ちなみに軽井沢宿では、この噴火によって全戸数162のうち52戸が火災で焼失、83戸が軽石の降下等によって崩壊している。なお、釜山はこの噴火によって出現したものである。

この天明三年の噴火以後、大規模な噴火はみられていないが、小規模な活動期と休止期が交互に繰り返し今日に至っている。最近では昭和48年の噴火が記憶に新しい。

2 根岸遺跡の歴史的環境

根岸遺跡の所在する浅間山南麓一帯の歴史をひもといてみることにしよう。

この根岸遺跡の存在する浅間山南麓は、前項でも記されているように浅間火山の噴出物で覆われている。塚原泥流(B.P23000y)・第1軽石流(B.P13600y)・第2軽石流(B.P11000y)・追分火砕流(A.D1108y・A.D1281y)がそれである。したがって、一万年以上前の旧石器時代の遺跡を探すとするとこれらの噴出物が除かれた場所でないといけない。本地域においては、このような条件の悪さにも災いされて、旧石器時代遺跡の存否がまだ確認されていない。

さて、御代田町で数多く発見されている縄文時代の土器のなかで、もっとも古く位置付けられるのは、本根岸遺跡で出土した一片の土器片が草創期の爪形文土器であるならば、それということになるか。また、続く早期の楕円押型文土器の破片は、本根岸遺跡や塩野地籍の滝沢遺跡で採集されている。縄文時代前期の土器片も本根岸遺跡で採集されている。いずれにしても御代田町における縄文時代草創期～前期にかけての遺跡把握は、土器片の採集による確認のみにとどまるということになる。

縄文時代中期になると、浅間山南麓の標高900m内外にみられる湧水地帯に沿って、集落が形成されるようになる。昭和60年に発掘調査が実施された大沼遺跡(御代田町教育委員会 1985)、昭和62年に発掘調査が実施され中期後半の土器等が検出された広畑遺跡を筆頭に、^{ヒノカミ}東荒神遺跡・^{ウツノ}西荒神遺跡・^{ヒノカミ}西城西遺跡・^{ヒノカミ}西城東遺跡等が散見される。

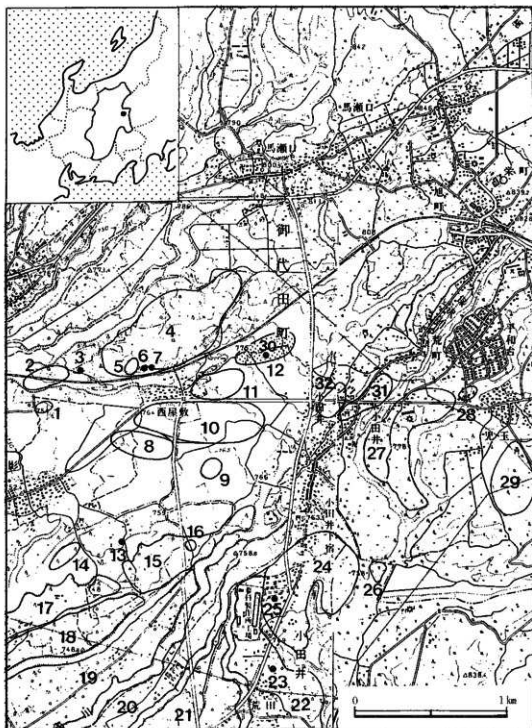
一方、浅間山南麓と相対する八風山北麓の湯川沿いにも、縄文時代中期から後期にかけての遺跡が点々と残されている。軽井沢町の茂沢南石堂遺跡もそのうちのひとつである。茂沢地区より湯川をやや下ると、御代田町豊昇地区にいたる。この豊昇地区には、宮平遺跡が存在している。

宮平遺跡は、古くから出土遺物の豊富さで人々の関心をひいていた。昭和5年には、日本における旧石器文化存在の可能性をいち早く説いていたことでも知られるN・G・マンローも、この遺跡を訪れている。昭和56年には、農道舗装事業に際し宮平遺跡の発掘調査が実施され、中期後半から後期にかけての竪穴住居址27軒が検出されている。

さて、縄文時代に続く弥生時代の遺跡は、現在のところ御代田町においては確認されていない。冷涼な気候の御代田においては、当時の生産基盤であった稲作も対応できず、したがってその集落もみられないということになるか。

続く古墳時代になると、当地においても集落が形成されるようになる。

古墳時代中期に位置付けられる5世紀末の住居址5軒が、本遺跡に隣接する銚師屋遺跡群前田



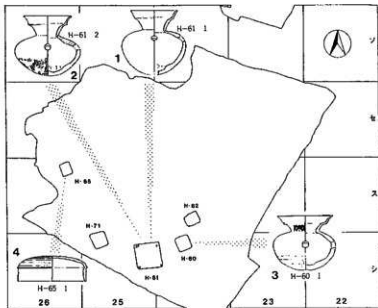
第19図 根岸遺跡と周辺の遺跡分布 (1 : 25,000)

第2表 根岸遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	宮ノ反遺跡	小諸市大字御影字宮ノ反				○	○		昭和59年度発掘調査
2	長野原遺跡	〃 平原字大豆田					○		
3	長野原塚古墳	〃 長野原				○			
4	下前田根遺跡群	佐久市大字小田井字前田原				○	○		
5	後原遺跡	〃 字後原		○					昭和57年度発掘調査
6	後原1号墳	〃				○			昭和47年度発掘調査
7	後原2号墳	〃				○			
8	鉤師屋遺跡	〃 字鉤師屋					○		昭和59年度発掘調査
9	野火付遺跡	御代田町大字御代田字野火付 〃 字前田原					○	○	昭和59年度発掘調査
10	前田遺跡	佐久市大字小田井字前田原				○	○	○	昭和60年度発掘調査
11	十二遺跡	御代田町大字御代田字下十二					○		昭和61年度発掘調査
12	根岸遺跡	〃 字根岸					○		昭和62年度発掘調査
13	野火付古墳	小諸市大字御影字野火付				○			昭和56年度発掘調査
14	野火付遺跡	〃					○		
15	曾根城遺跡群	〃 字曾根城					○		
16	曾根城遺跡	〃					○		昭和57年度発掘調査
17	近津遺跡群	佐久市大字長土呂字北近津			○	○	○		
18	周防畑遺跡群	〃 字周防畑		○	○	○	○		
19	芝宮遺跡群	〃 字北上中原			○	○	○		
20	長土呂遺跡群	〃 字長土呂			○	○	○	○	
21	栗毛坂遺跡群	〃 大字小田井字袴群			○	○	○		
22	跡坂遺跡群	〃 字跡坂			○	○	○		
23	島原古墳	〃 字下金井				○			
24	中金井遺跡群	〃 字中金井			○	○	○		
25	岐月古墳	〃 字岐月		○	○	○			昭和45年度発掘調査
26	唄坂遺跡	〃 字唄坂		○	○	○	○		
27	小田井城跡	御代田町大字御代田字城の内						○	
28	児玉遺跡	〃 字児玉		○			○		
29	池尻遺跡	〃 字池尻		○					昭和53年度発掘調査
30	根岸古墳	〃 字根岸				○			新発見
31	長倉遺跡	〃 字長倉					○	○	新発見
32	中屋敷遺跡	〃 字中屋敷					○	○	新発見

遺跡（第19図10）において検出されている。このうちのいくつかの住居址からは、5世紀後半の所産と考えられるいわゆる初期須恵器4点が出土している（第20図）。

奈良教育大学三辻教授による胎土分析によれば、このうち、1・2が猿投産、3・4が陶邑産であるという結果がでている。



第20図 前田遺跡第1期集落と初期須恵器の分布

同じ前田遺跡におい

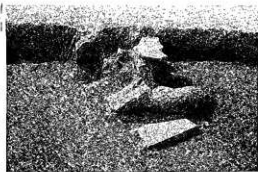
て、5世紀末の集落に継続する、6世紀初頭の住居址5軒からなる集落が検出されている。こちらは、5世紀末の集落の住居址5軒がいずれも炉をもつものであったのに対し、カマドをもつものであり、佐久地方におけるカマドの初源をとらえるうえで重要なものである（第21図）。

続く古墳時代後期の住居址は、同じ前田遺跡において数多く認められている。水稻耕作の技術等が向上し、佐久の平野部より冷涼な本地域へと耕地が拡大してきたのは、まさにこの頃だったのではないだろうか。

さて、いわゆる終末期古墳が本遺跡の周辺に散在している。

その北隣には、根岸古墳（30）・後原1・2号墳（6・7）（佐久市教育委員会 1972）と、やや離れて下原古墳群（御代田町教育委員会 1975）が南隣には野火付古墳（13）（小諸市教育委員会 1983）と、やや離れて皎月古墳（25）が存在している。

さて、奈良・平安時代にあつてこの地域は、信濃国佐久郡に属することがわかるが、「和名抄」によればこの佐久郡には、美理・大村・大井・餘戸・菅沼・荊部・茂理・小沼の八郷がみえる。このうち本地域は小沼もしくは大井郷に属する地域で



第21図 前田遺跡の初期カマド（H-63号住居址）

はなかったかと考えられる。

この時代になると、本地域には飛躍的に集落が拡大する。本遺跡を含めた鑄師屋遺跡群は、この奈良・平安時代を中心とする集落址で、野火付(9)・鑄師屋(8)・前田(10)・十二(11)・根岸(12)の5遺跡から構成されるものである。

この5遺跡は、果園圃場整備事業によって破壊を余儀なくされたため、本昭和62年度までに発掘調査が実施され、多大なる成果がおさめられた。本報告書もその成果の一部である。

昭和59年度に発掘調査のなされた野火付遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居址15軒が検出された。その竪穴住居址1軒からは神功開寶1点も検出されている(第22図)。また、その翌年に発掘調査された前田遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居址・掘立柱礎物址がそれぞれ100棟をゆうに越えて検出されている。その中からは円面硯1点も検出されている(第23図)。

この他、野火付遺跡では、特筆すべき発見がなされた。平安時代初頭と考えられる埋葬馬5頭が検出されたのである(第24・25図)

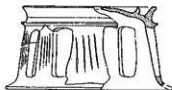
ところで、この時代には、本遺跡の北方には「延喜式」記載の御牧・塩野牧、東方には御牧・長倉牧が存在していたものと考えられる。浅間山南麓の標高1,000m付近の国有林、通称「塩野山」には、一辺50mを測る方形に囲われた土堤状の遺構が残っており、塩野牧の「駒飼の土堤」と称されている。また、こうした土堤状の遺構は軽井沢町発地においても認められており、軽井沢町の追分・借宿・中軽井沢でも「駒飼の土堤」といわれるものがみられる(土屋 1970)。いずれも、長倉牧の存在していたといわれる地籍である。

一方、官道として整備された東山道が本地域のいずれかを通過していたものとみられ、その駅のひとつである長倉駅が本地域に設置されたという説もだされている(一志 1957)。ちなみに長倉駅では駅馬15頭がおかれたという。

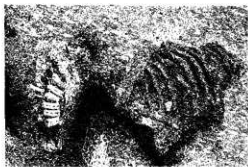
その歴史的環境を鑑みると、野火付遺跡において発見された埋葬馬5頭は、その御牧や駅に関連する馬ではなかったかとも考えさせられるので



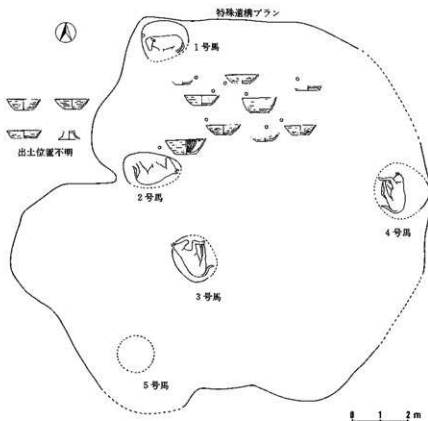
第22図 野火付遺跡神功開寶(1:1)



第23図 前田遺跡円面硯(1:4)



第24図 野火付遺跡の埋葬馬(2号馬)



第25図 野火付遺跡の埋葬馬

ある。そして、その馬を埋葬したと考えられる本集落の住人もまた、それら御牧や駅の運営に携わっていたであろう可能性も想定された(堀 1987)。

いずれにしても、このような歴史的環境は、本遺跡群の成立に深く関与することが十分に考えられ、今後とも注意がなされなければならない。

さて、13～15世紀にかけての遺構と遺物が、野火付遺跡と前田遺跡から検出されている。

遺構は60基以上にもおよぶ竪穴状遺構、遺物では貿易陶磁である青磁・白磁、渡来銭、石製硯等である。

中世においては、本遺跡の南には八条院領大井庄の直営田である佃が存在したといわれている。これらの遺構・遺物は間接的なりとも佃に関連して残された可能性もある。

以上、幾つかの考古学的な事象を取り上げ、根岸遺跡をとりまく歴史的環境についてふれてみた。

本遺跡と、その背景の歴史的環境との関わりあいについては、総括においてもう一度詳しくふれることとしよう。

III 層 序



H-6号住居址の実測風景

1 層 序

根岸遺跡における基本層序は、第26図に示してある。

1は、第I区F-29掘立柱建物址付近の土層断面図。2は、第I区H-2号住居址付近の土層断面図。3は、第I区H-9号住居址付近の土層断面図、4は第I区H-11号住居址付近の土層断面図である。

まず、基本土層について説明する。I層は現在の水田耕作土、II層は水田床土、III層は黒色土層、IV層はいわゆる漸移層、V層は黄褐色ローム層である。また、V層の下層は第1軽石流(BP13600y)で、本遺跡の基盤層をなしている。なお、本地域においては、年代決定のための有効な鍵層となる浅間の火山灰、A (A.D1783)・B (A.D1108 or A.D1281)・C (4世紀中頃)は検出されていない。

1 第I区F-29掘立柱建物址付近土層断面図

I層は、黒色(10YR 2/1)の水田耕作土で、粘性が強く締まりがあり、厚さ15cm前後を測る。

II層は、黒褐色(10YR 3/1)の水田床土で、粘性が強く締まりがある。また、径7~15mm前後の小礫をよく含む層である。厚さ20cm前後を測る。

III層は、黒色土層(10YR 2/1)で、粘性があまりなく、バミス・スコリアを全く含まない。厚さ45cm前後を測る。IV層はいわゆる漸移層で、暗褐色(10YR 3/3)を呈し、バミス・スコリアをよく含む。その上面が遺構の確認面となっている。

2 第I区H-2号住居址付近土層断面図

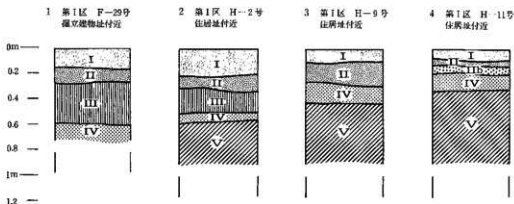
I層は、灰黄褐色(10YR 4/2)の水田耕作土で、粘性が強く締まりがある。また、II層から浮上した径7~15mm前後の小礫をよく含む層である。厚さ20cm前後を測る。

II層は、暗褐色(10YR 3/4)の水田床土で、径7~15mm前後の小礫を多量に含む層である。鉄分も多く浸透している。粘性はあまりない。厚さ10~20cm前後を測る。

III層は、黒色土層(10YR 2/1)で、粘性があまりなく、径4~6mm前後のバミス・5mm前後のスコリアを含む、厚さ20~35cm前後を測る。IV層はいわゆる漸移層で、黒褐色(10YR 3/2)を呈し、ローム粒子を含み始め、バミス・スコリアもよく含む。その上面が遺構の確認面である。

V層は、褐色ローム層(10YR 4/4)である。

III 層 序



第26図 根岸遺跡の土層断面図

3 第I区H-9号住居址付近土層断面図

I層は、灰黄褐色（10YR 4/2）の水田耕作土で、粘性が強く締まりがある。また、鉄分の浸透も多く認められる。厚さ10～15cm前後を測る。

II層は、黒褐色（10YR 2/3）の水田床土で、鉄分も多く浸透している。厚さは、5～20cm前後を測る。また、III層の黒色土層は、この地点では認められなかった。IV層はいわゆる漸移層で、黒褐色（10YR 3/2）を呈し、ローム粒子を含み始め、パミス・スコリアもよく含む。その上面が遺構の確認面である。V層は褐色ローム層（10YR 4/4）である。

4 第I区H-11号住居址付近土層断面図

I層は、褐色（10YR 4/6）の水田耕作土で、粘性が強く締まりがある。また、鉄分の浸透も多く認められる。厚さ10～15cm前後を測る。

II層は、暗赤褐色（5 YR 3/6）の水田床土で、鉄分も多く浸透している。厚さは、5～10cm前後を測る。II_b層は暗赤褐色土層（5 YR 3/6）で、5mm前後のスコリアを含み、鉄分がよく浸透する。厚さは、5～10cm前後を測る。

III層の黒色土層はこの地点では確認されなかった。

IV層はいわゆる漸移層で、暗褐色（10YR 3/2）を呈し、ローム粒子を含み始め、パミス・スコリアもよく含む。その上面が遺構の確認面である。厚さ10～15cm前後を測る。

V層は褐色ローム層（10YR 4/4）である。

IV 遺構と遺物



復原された平安時代の壺

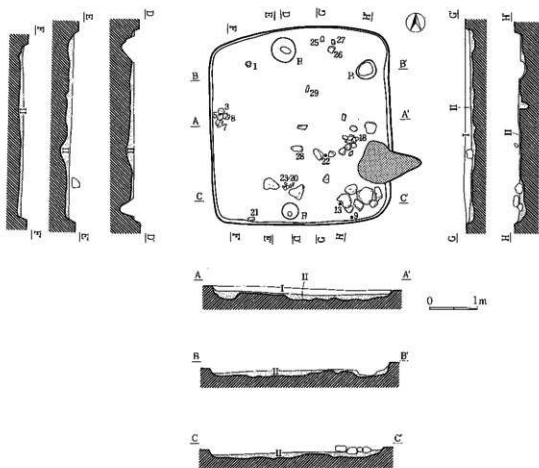
1 竪穴住居址

(1) H-1号住居址

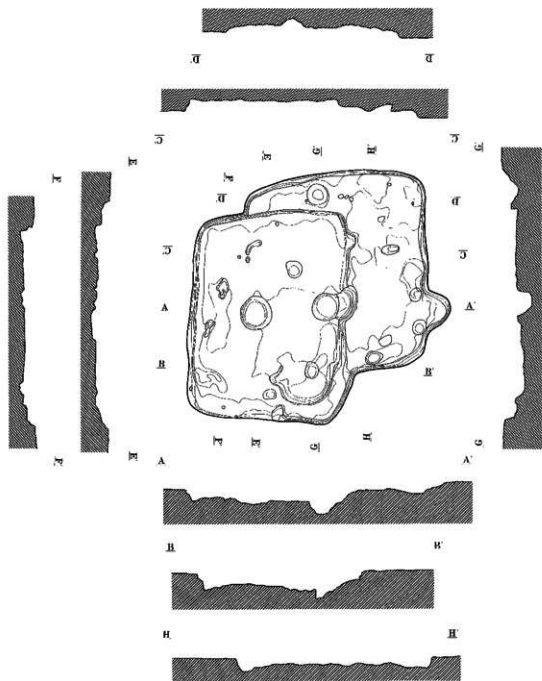
住居址 第27・28図

H-1号住居址は、第I区ミー22グリッドにおいて検出され、H-7号住居址を切って存在していた。

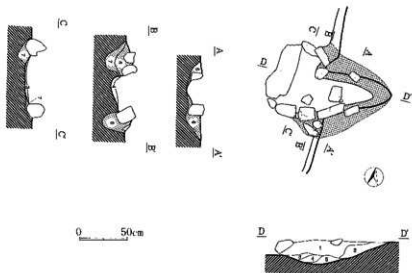
本址は、南北4.15m東西3.8m隅丸長方形を呈し、床面積14.1㎡を測り、南北軸方向はN-9°-Wを指す。壁高は、10~15cmを測る。壁溝は認められない。床面は貼り床である。



第27図 H-1号住居址実測図 (1:80)



第28図 H-1・H-7号住居址掘り方実測図(1:80)



第29図 H-1号住居址カマド実測図(1:40)

ピットは、住居址の南北壁際中央より P_1 P_2 が対で認められた。また、北東コーナーより P_3 が検出された。 P_1 は 50×50 cm で深さ 25 cm、 P_2 は 35×30 cm で深さ 30 cm、 P_3 は 40×35 cm で深さ 15 cm を測る。

遺物は、3・5・7・8の坏類が西壁際中央の床面直上より正常位で検出された。また、北壁際床面直上からは、27の砥石・26の台石・25の敲石の加工具がセットで出土した。また、貼り床中からは29の鎌が出土している。

カマドの南脇には、カマドの構材である安山岩礫が畳んで置かれていた。またカマド前方にもカマドの構材である礫が散乱していた。

覆土は、1層のみである。I層は径3mm前後のバミスをよく含み、径5mm前後のスコリアを若干含む黒褐色土層(10YR 2/3)であった。

掘り方は、平坦ではなく、中央がやや高く周辺部で低い、細かい凹凸の激しい所謂蜂の巣状をみせていた。その掘り方中からは、 15×15 cm で深さ 15 cm を測る P_4 が検出された。

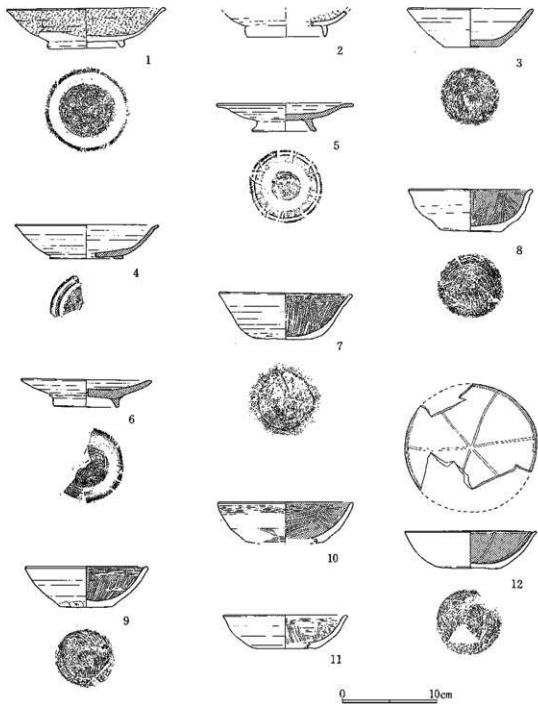
カマド 第29図

カマドは、住居址の東壁の東南コーナーよりに存在している。

本カマドは、その南脇には構材である安山岩礫が畳んで置かれていた。しかし、その両袖と天井石の一部はとどめていた。袖には、面取りされた安山岩・溶結凝灰岩・軽石が芯材として用いられ、暗褐色土層(6層 7.5 YR3/3)・ロームの混じる黒褐色土層(7層 10YR 3/2)によって構築されていた。天井石は方柱状に面取りされた溶結凝灰岩である。

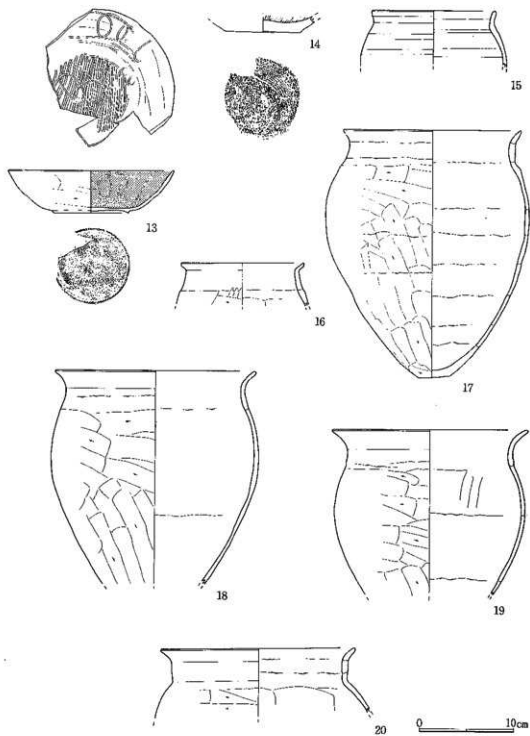
本カマドの覆土は、5層に分層された。1層は焼土・カーボンをまったく含まない暗褐色土層

IV 遺構と遺物



第30図 H-1号住居址出土遺物 (1:4)

1 野穴住居址

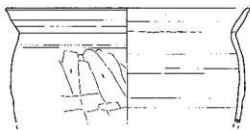


第31图 H-1号住居址出土遗物(1:4)

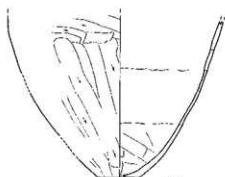
IV 遺構と遺物



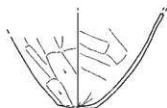
21



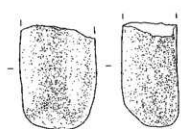
22



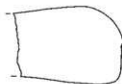
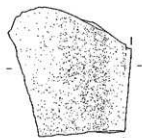
23



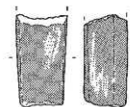
24



25



26



27

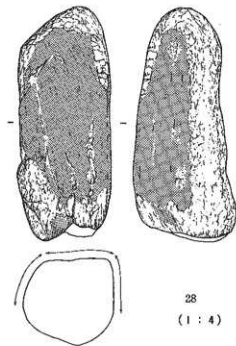
第32図 H-1号住居址出土遺物(1:4)

第3表 H-1号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

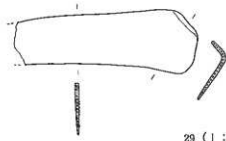
持出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	魂 (灰)	(16.7) 4.2 8.2	底部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部には高台が貼りつけられる。(東瀬大遺2号墓期比定)	外面 体部ロクロヨコナデ。(輪は漬け掛け) 底部回転ヘラズリ。切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は比較的精選された灰白色 (7.5Y6/1)
2 (編)	魂 (灰)	— — < 8.3>	体部は丸みをおびて外反し、底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。(輪は漬け掛け) 底部回転ヘラズリ。切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は精選され、灰白色 (7.5Y7/1)
3 (完)	環 (灰)	(13.3) 4.1 5.9	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転) 内外面に大きな黒染あり。	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (10Y6/1)
4 (編)	高台環 (灰)	(15.5) 3.6 < 7.7>	体部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部には低い高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラズリ。切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は精選され、灰白色 (10Y6/1)
5 (完)	高台皿 (灰)	(14.5) 3.0 6.8	底部には「八」の字状に高い高台が貼り付けられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (5Y7/3)
6 (編)	高台皿 (灰)	(13.7) 2.9 (6.8)	底部には5に比してすのこ幅がない高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (5Y7/3)
7 (完)	杯 (土)	14.1 4.8 6.0	体部は外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。他に比して器高がやや高い。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラズリ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR6/4)
8 (完)	杯 (土)	13.1 4.4 6.8	体部はやや丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。肉厚。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は精選されず金雲母を含みに よい黄褐色 (10YR6/4)
9 (編)	杯 (土)	(13.0) 4.3 5.4	体部はやや丸みをおびて外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、圓筒手持ヘラズリ。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄褐色 (10YR4/2)
10 (編)	杯 (土)	(14.1) — < 8.1>	体部はやや丸みをおびて外反する。底部は平底となるものとあられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。若干のヘラミキ。 底部切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR6/3)
11 (完)	杯 (土)	(13.1) 3.5 < 6.3>	体部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/4)
12 (完)	杯 (土)	13.9 3.9 6.8	体部はやや丸みをおびて外反する。底部平底。比較的肉薄。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。放射状暗文。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR6/3)
13 (編)	高台杯 (土)	(17.5) 4.4 8.0	体部は丸みをおびて外反し、底部には僅かな高台が貼りつけられる。きわめて肉薄。	外面 体部ロクロヨコナデの後ヘラズリ。 底部ナデ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨フレン暗文。(クロ右回転)	胎土は金雲母を含み 褐色 (7.5YR4/4)
14 (完)	上	— — 8.1	底部平底。	外面 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(クロ右回転)	胎土は砂粒を多く含 みによい黄褐色 (10YR7/2)
15 (編)	甕 (土)	(13.5) — —	口縁部は短く斜に外反する。	外面 口縁部ロクロヨコナデ。 内面 口縁・胴部ロクロヨコナデ。(クロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
16 (編)	甕 (土)	(12.9) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
17 (完)	甕 (土)	(18.8) 25.9 3.3	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもち、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
18 (編)	甕 (土)	(21.3) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/2)
19 (編)	甕 (土)	(20.7) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)

第4表 H-11号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

神田番号	器種	法量	器形の特徴	面	装	備考
20 (完)	白付袋 (土)	11.7 — —	口縁部はコの字状に外反する。 胴部上平に最大径を持つ。 胴内面を失う。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい黄色 (5YR6/4)
21 (破)	甕 (土)	(15.8) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい赤褐色 (5YR5/4)
22 (破)	甕 (土)	(20.4) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラズリ。 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい黄色 (5YR6/4)
23 (破)	甕 (須)	(29.0) — —	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部 が巻状をなす。 大形の器形。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部叩き。 口縁部ヨコナデ、胴部凸具あり。	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y5/1)
24 (完)	四耳壺 (須)	— — 13.5	肩部に断面三角の凸帯が巡らされ、 穿孔のある断面U字形の耳が四か所 に貼りつけられる。口縁部を失う。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。(全体に自然釉付着) 胴部叩き。 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y5/1)



第33図 H-1号住居址出土遺物

第5表 H-1号住居址出土遺物一覽表
〈石器・鉄器〉

神田番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
25	磨石	安山岩	(11.0)	(8.2)	(5.8)	(870)	
26	台石	安山岩	(13.6)	(12.9)	(8.2)	(1970)	
27	砥石	砂岩	(9.8)	(5.0)	(4.5)	(385)	
28	砥石	安山岩	24.6	9.8	10.8	1960	欠形
29	鏃	鉄	(14.5)	5.0	(0.3)	(61)	右鏃

※ 単位はcm, g

(10YR 3/4)、2層も焼土・カーボンをまったく含まない褐色土層(10YR 4/6)で、ともにコマド使用に直接関係しない堆積と考えられる。3層は焼土・カーボンを若干含む黒褐色土層(10YR 2/3)、4層は焼土をよく含むカーボンを含まない黒褐色土層(10YR 2/3)、5層は褐色焼土層(7.5YR 4/6)である。当初の火床は3・4・5層の下面、最終の火床は3・4・5層の上面であ

る。

遺物 第30・31・32・33図

遺物は、灰釉陶器壺、須恵器では坏・高台付皿、土師器では坏・甕、石器では砥石・台石・敲石が検出されている。

1は、釉が濱け掛けによる灰釉陶器壺で、名古屋大学斎藤孝正氏のご教示によれば東濃大原2号窯期に比定されるという。

4は、灰釉陶器壺と同様なプロポーシオンをみせる須恵器高台付坏で、比較的珍しい器形である。また、5・6は須恵器の高台付皿である。

7～12は、内面黒色研磨のなされた土師器坏で、12には放射状暗文が認められる。

13は、灰釉陶器壺と同様なプロポーシオンをみせる土師器高台付坏で、比較的珍しい器形である。肉薄で、内面にはラセン暗文が認められる。

16～21は、コの字状口縁の土師器甕である。15・22はロクロ整形による土師器甕である。

27・28は砂岩の砥石、25は敲石、26は台石である。29は鉄鏝で、先端部を欠損する。基部の屈曲を表面に置くと刃部が左側へと向く、いわゆる「右鏝」である。

時期

本住居址は、10世紀第I四半期、根岸遺跡第V期に位置付けられよう。

(2) H-2号住居址

住居址 第34・35図

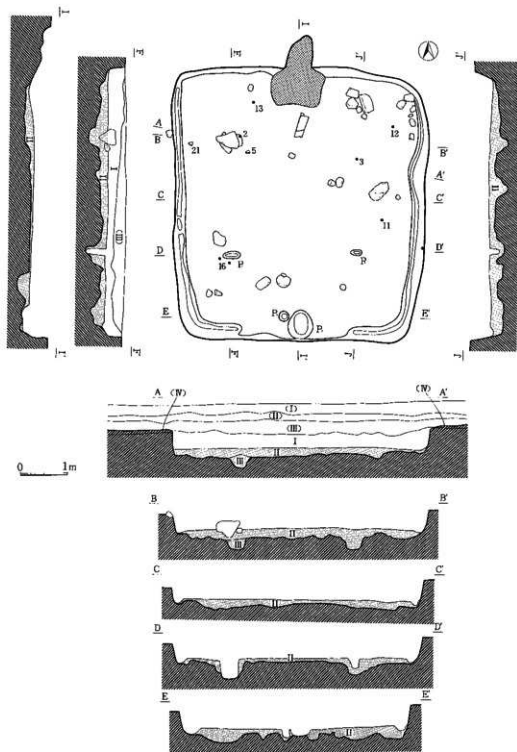
H-2号住居址は、第I区ミ-23グリッドにおいて検出された。南北5.75m東西5.3mの隅丸方形を呈し、床面積26.8㎡を測り、南北軸方向はN-6°-Wを指す。壁高は、40～50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床である。壁溝は幅10～20cm深さ10cm前後を測るものが、東西両壁際において認められた。

なお、住居址の周囲には、セクションにおいて黒井峰遺跡等で確認された周堤等は確認されなかった。

カマドの東脇には、カマドの構材である軽石・安山岩礫が疊んで置かれていた。またカマド前方にもカマドの構材である礫が散乱していた。

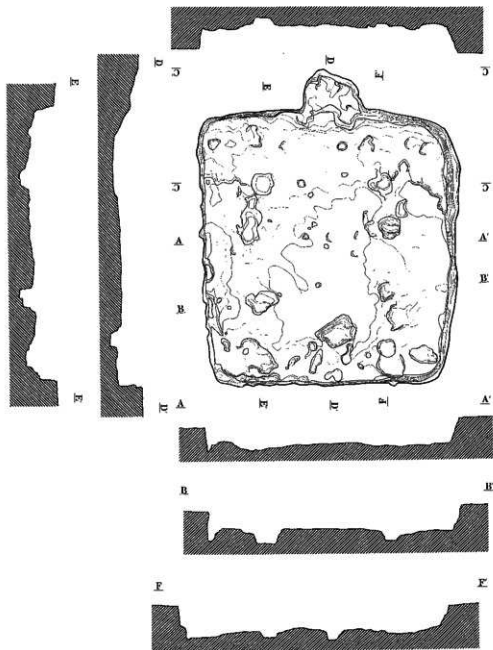
ピットは、住居址の南半分Ⅲ・Ⅳ区の中央よりP₁・P₂が検出された。P₁は40×15cm深さ45cmを測り、P₂は25×12cm深さ30cmを測る。ともに細長い平面プランのピットで、板状の主柱が埋め込まれていたものであろうか。P₁に対応するⅡ区中央には、3個の礫の上に平坦面を上にして安山岩礫が据え置かれていた。おそらくは主柱の礎石と考えられよう。これに対しP₂に対応するⅠ

IV 遺構と遺物



第34図 H-2号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址



第35図 H-2号住居址掘り方実測図(1:80)

区中央には柱穴・礎石等は認められなかった。なお、南壁際中央にはP₃・P₄が並んで検出された。P₃は60×50cm深さ15cmを測り、P₄は20×20cm深さ20cmを測る。

掘り方は、平坦ではなく、細かい凹凸の激しい所謂蜂の巣状をみせていた。その掘り方におい

て、各ピット・壁溝に
 相応する部分は深く掘り
 込まれていた。すでに掘り
 方の段階において、ピット
 の設置等が十分に考慮さ
 れていたことが窺え大変
 興味深い。その埋土は、
 ロームが多量に混じる締
 まりのある黒褐色土層
 (10YR 3/2) II層と、
 ロームが大量に混じる締
 まりのない褐色土層
 (10YR 4/4) III層であ
 った。

遺物の分布については、
 図中にドットで示したが、
 原位置を避離していない
 と考えられるものは認め
 られなかった。

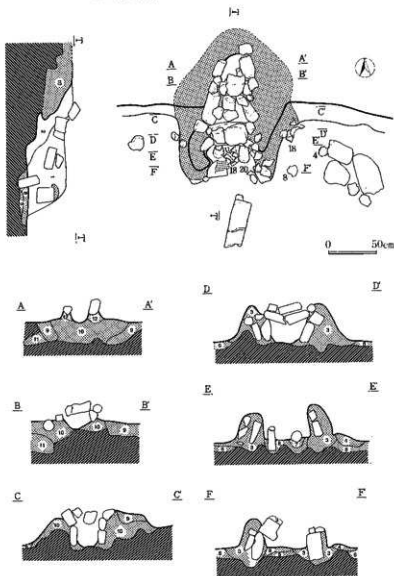
住居址中の覆土は1層
 のみで、I層は4mm程の
 小粒バミスを若干

含む5mm~10mm程度
 のスコリアを多く含む粘
 性のない黒褐色土層
 (10YR 3/2)であった。な
 お、(I)~(III)層は遺跡
 全体を覆う基本土層であ
 る。(I)層は灰黄褐色土
 層(10YR 4/2)で水田耕
 作土、(II)層は暗褐色土
 層(10YR 3/4)で水田床
 土、(III)層は黒色土層
 (10YR 2/1)でいわゆる
 クロボク土、(IV)層は
 黒褐色の漸移層(10YR
 2/3)であった。本住居
 址はこの(IV)層上面よ
 り掘り込まれたもので
 ある。

カマド 第36図

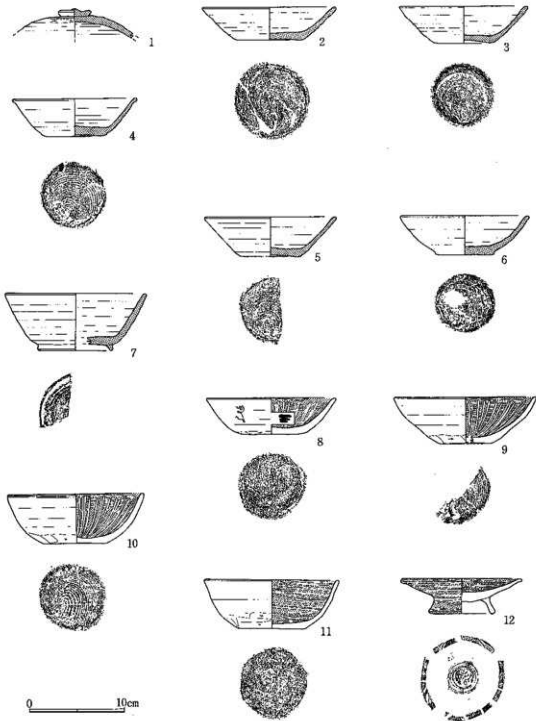
カマドは、住居址の北
 壁中央に存在している。

本カマドは、東脇にカ
 マドの構材である軽石・
 安山岩礫一部が畳んで
 置かれていたが、左右



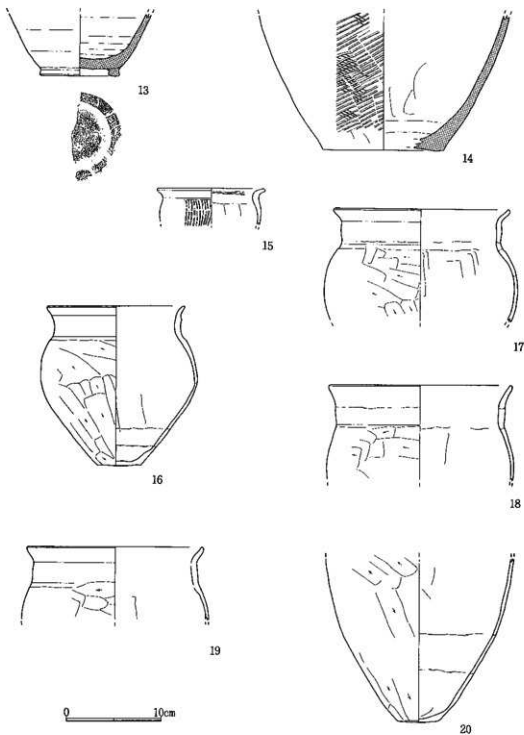
第36図 H-2号住居址カマド実測図(1:40)

1 整穴住居址



第37图 H-2号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物



第38図 H-2号住居址出土遺物 (1:4)

第6表 H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

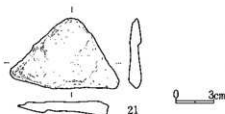
神道 番号	器種	法量	形 状 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	壺 (灰)	3.5 — —	ツマミ部は、扁平な実形を呈する。	外面 ロクロココナデ。 天井部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
2 (圓)	杯 (灰)	(14.1) 3.5 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
3 (圓)	杯 (灰)	(13.6) 3.8 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み淡黄色 (5Y7/3)
4 (圓)	杯 (灰)	(13.2) 3.9 6.9	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (5Y7/2)
5 (圓)	杯 (灰)	(13.9) 4.1 (6.4)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰褐色 (7.5YR6/2)
6 (圓)	杯 (灰)	(13.5) 4.1 6.2	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (5Y7/2)
7 (圓)	高台杯 (灰)	(15.0) 5.9 8.0	底面には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロココナデ。自然物付着。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y5/1)
8 (圓)	杯 (土)	(13.7) 3.8 6.0	体部は外反し、底部平底。 底部から体部への変換点はシャープでない。「E」と「F」の墨書あり。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切りの後、両手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR6/3)
9 (圓)	杯 (土)	(15.1) 4.8 (5.7)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切りの後、両手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
10 (完)	杯 (土)	(14.4) 5.2 6.6	体部は丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部回転未切りの後、両手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄色 (2.5Y7/2)
11 (圓)	杯 (土)	(14.2) 5.1 6.8	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロココナデ。 底部手持ちヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR7/6)
12 (完)	高台壺 (土)	(12.8) 3.7 7.0	底面には高台が貼りつけられる。	外面 黒色研磨。 切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄色 (10YR6/2)
13 (圓)	壺 (灰)	— (8.4)	底面には高台が貼りつけられる。	外面 胴部ロクロココナデ。 底部回転未切りの後、ロクロココナデ。 内面 ロクロココナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 灰褐色 (10YR4/1)
14 (圓)	壺 (灰)	— (12.7)	底部平底。	外面 胴部叩き。 底部ナデ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含む 灰褐色 (10YR4/1)
15 (完)	甕 (土)	(11.4) — —	口縁部は、短く強く湾曲し、口幹部は平坦にふちとられる。小形な器形。	外面 胴部研毛目次調整。 口縁部ココナデ。 内面 胴部研毛目次調整。口縁部ココナデ。	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (10YR7/2)
16 (完)	甕 (土)	(14.5) 16.7 4.5	口縁部はコの字状に外反し、胴上半に最大径をもち、底部平底。	外面 口縁部ココナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ココナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/3)
17 (圓)	甕 (土)	(18.6) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半に最大径をもつ。	外面 口縁部ココナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ココナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
18 (圓)	甕 (土)	(19.3) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ココナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ココナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR7/3)
19 (圓)	甕 (土)	(18.6) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ココナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ココナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/3)

第7表 H-2号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

種類番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
20 (副)	甕 (土)	— — —	底部平底。	外面 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい棕色 (5YR7/4)

第8表 H-2号住居址出土遺物一覧表

〈石器〉



種別番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
21	不明	片麻岩	(5.6)	(8.7)	(1.0)	(45.6)	祭祀遺物?

重 単位12cm, g

第39図 H-2号住居址出土遺物 (1:3)

袖の一部・天井部・煙道部を比較的よくとどめていた。また、カマドの前には、カマド天井部の構材と考えられる面取り軽石1個が放置されていた。

袖は、面取り軽石を主に安山岩礫も芯にして、暗褐色粘土層(3層 10YR 3/4)を主体に4・6・11~14層を貼って構築されていた。ちなみに4層は灰をよく含む褐色土層(10YR 4/6)、6層は黒褐色土層(10YR 2/3)、11層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 3/2)、12層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/4)、13層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 3/3)、14層は黒褐色土層(10YR 3/2)である。

火床には8層黒褐色土層(10YR 2/2)・9層黒褐色土層(10YR 2/3)が貼られ、Eの断面にみる面取り軽石製の支脚2個(a・b)が残置されていた。火床の最下層には暗赤褐色焼土層(5YR 3/6)が残っていた。

また、D・Gの断面にみるように、天井部の構材の面取り軽石もよく残っていた。

本カマドの覆土は、2層に分層された。1層は僅かに灰・カーボンを含む黒褐色土層(10YR 2/2)、2層は多量の焼土と若干のローム粒子を含む褐色土層(7.5YR 4/6)である。

遺物 第37・38・39図

遺物は、須恵器では蓋・環・高台付環・甕、土師器では環・高台付皿・甕が検出されている。

1は、宝珠形のツマミをもつ須恵器蓋である。

2~6は回転糸切りの底部をみせる須恵器環、7は須恵器高台付環である。

8~10は回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリの底部をみせる土師器環、11は全面手持ちヘラケズリの底部をみせる土師器環である。このうち8の体部には、「王」?と判読不明なもう一文字の墨書が認められた。

15～20は土師器甕である。このうち16～19はコの字状口縁の土師器甕である。また、15の甕は顕著な刷毛目状調整が認められるもので、在地の土器ではないものと考えられる。

石器では、21の片麻岩片が検出されている。祭祀遺物であろうか。

時期

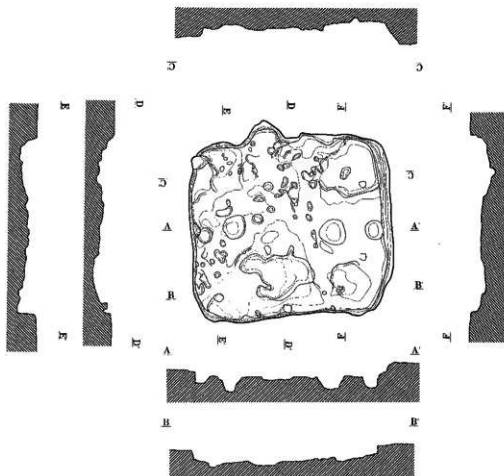
本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(3) H-3号住居址

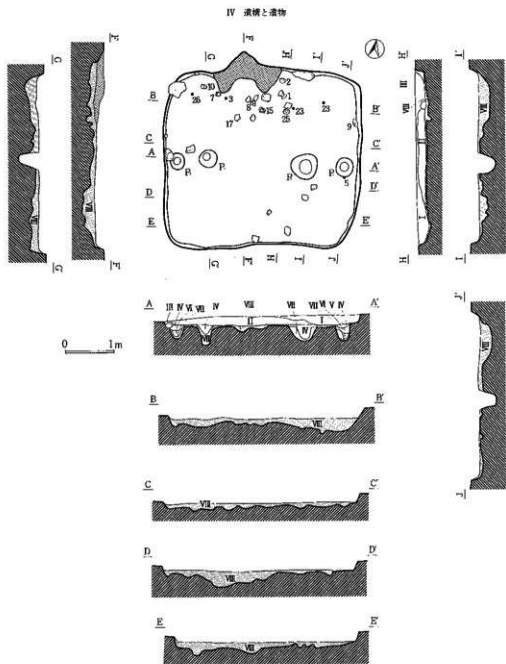
住居址 第40・41図

H-3号住居址は、第Ⅰ区ミー24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.7m東西4.1mの隅丸方形を呈し、床面積13.8㎡を測り、南北軸方向はN-17°



第40図 H-3号住居址掘り方実測図(1:80)



第41図 H-3号住居址実測図(1:80)

—Wを指す。壁高は、20～25cmを測る。壁溝は認められない。床面は、ローム粒子の若干混じる黒褐色土層(10YR 2/3)を用いた貼り床で、全体にきわめて硬質なものである。

ピットは、住居址の中央壁際よりP₁～P₄が対で検出された。P₁は40×35cm深さ35cmを測り、P₂は55×55cm深さ35cm、P₃は40×40cm深さ40cm、P₄は35×30cm深さ30cmを測る。

覆土は、3層に分層され、プライマリー・ライマリーな堆積状況を示していた。I層は5～7mmのスコリア・2mmのバミスをよく含むローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/3)、II層は5mmのスコリア・2～3mmのバミスをよく含むローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/2)、III層はローム粒子をよく含むふい賞褐色土層(10YR 4/3)である。また、ピット内の覆土は4層に分層され、IV層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/2)、V層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR 3/4)、VI層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/3)、VIIはローム粒子をよく含む褐色土層(10YR 4/4)である。これらピット内の覆土は、おそらくは柱の抜き取られた後の堆積状況を示しているのかもしれない。

遺物は、カマドの前部の床面上に1・2・8・14・15の環類が散布している状況が窺えた。また、26の刀子は北西コーナーの張り床中からの出土である。

掘り方は、平坦ではなく、細かい凹凸の激しい所謂蜂の巣状をみせていた。その埋土は、ロームが若干混じるかなり締まりのある黒褐色土層(10YR 2/3) VII層であった。

カマド 第42図

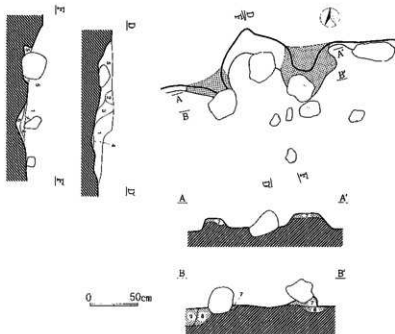
カマドは、住居址の北壁の北西コーナーよりに存在している。

本カマドの大部分は破壊されており、わずかに左右両袖を留めているのみであった。その前方には構材である安山岩礫等が散乱していた。袖には、未加工の安山岩礫が芯材として用いられ、ロームの混じる黒褐色

土層(7層 10YR 2/3)・ロームの多く混じる褐色土層(8層 10YR 4/4)・ロームの混じらない黒色土層(9層 10YR 2/1)によって構築されていた。

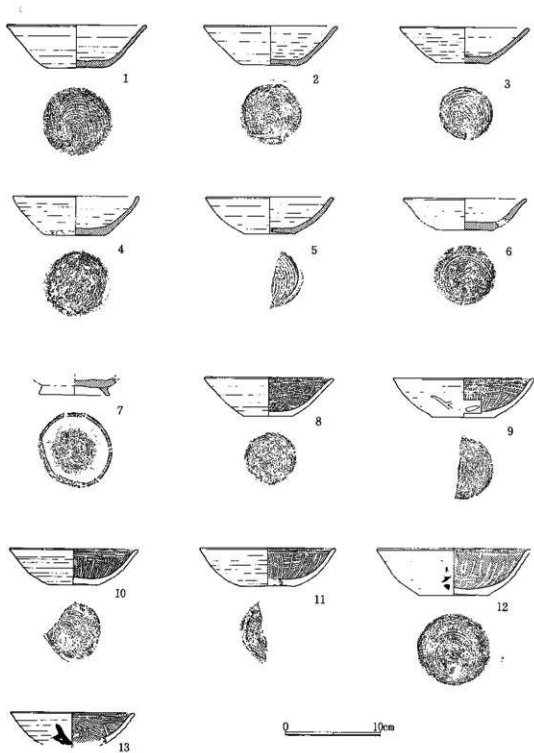
本カマドの覆土は、6層に分層された。1層は焼土・カーボンを若干含む暗褐色土層(10YR 3/3)、2層は焼土ブロックである褐色土層(7.5YR 4/4)

で、3層は焼土を若干



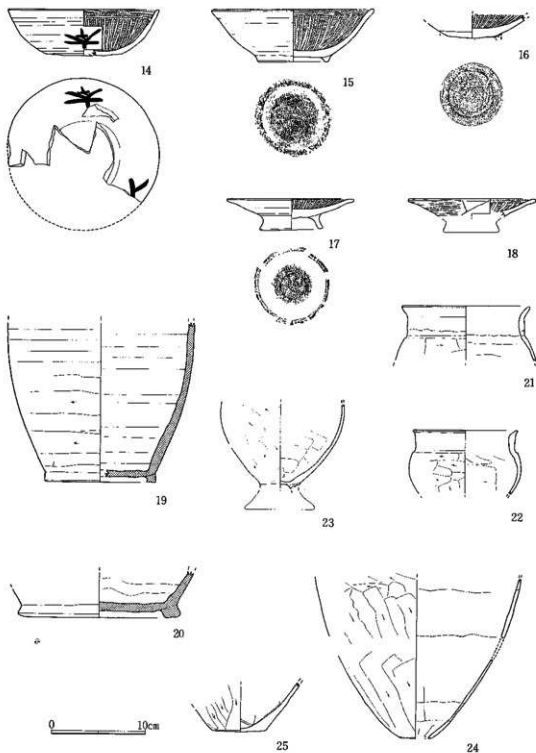
第42図 H-3号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第43图 H-3号住居址出土遺物 (1:4)

1 聚穴住居址



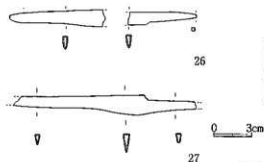
第44图 H-3号住居址出土遗物(1:4)

第9表 H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	数量	形 状 の 特 徴	調 査	備 考
1 (完)	杯 (灰)	(14.6) 4.5 6.4	体部は外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y7/2)
2 (完)	杯 (灰)	(14.2) 4.1 6.0	体部は外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y7/1)
3 (完)	杯 (灰)	(12.7) 3.8 5.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
4 (損)	杯 (灰)	(13.3) 4.1 6.4	体部は外反したのち、口唇部でやや外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
5 (損)	杯 (灰)	(13.5) 3.9 5.4	体部は外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ左回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
6 (損)	杯 (灰)	(13.0) 3.3 6.2	体部は外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。外面底部の大部分に漆状の繊維残る。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
7 (完)	高台杯 (灰)	(14.2) 4.1 6.0	底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y6/1)
8 (完)	杯 (土)	(13.7) 4.1 5.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR6/4)
9 (損)	杯 (土)	(14.9) 4.1 6.7	体部はやや丸みを帯びて外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄褐色(10YR4/2)
10 (損)	杯 (土)	(13.6) 3.8 5.6	体部はやや丸みを帯びて外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
11 (損)	杯 (土)	(14.4) 4.0 <5.9>	体部はやや丸みを帯びて外反する。底部平底。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
12 (損)	杯 (土)	(16.2) 4.9 7.6	体部はやや丸みを帯びて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。残破できないが外面体部に黒書あり。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)
13 (損)	杯 (土)	(13.1) — —	体部は丸みを帯びて外反し、底部は平底となるものとおもわれる。残破できないが外面体部に黒書あり。	外面 体部ロクロコナナテ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
14 (損)	杯 (土)	(16.0) 4.9 8.1	体部は丸みを帯びて外反する。底部平底。外面体部に「幸」の黒書あり。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部手持ちへラケズリ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み褐色(7.5YR7/6)
15 (損)	高台杯 (土)	(17.1) 5.5 7.5	体部は外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転へラケズリ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
16 (損)	高台杯 (土)	— — —	体部は外反し、底部には高台が貼りつけられるものとおもわれる。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部回転へラケズリ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
17 (完)	高台皿 (土)	(12.4) 3.3 6.7	底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナナテ。 底部ロクロコナナテ。切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
18 (損)	皿 (土)	(13.5) — —	底部には高台が貼りつけられたものと考えられる。 『人』の黒書あり。	外面 へらミギキ。 内面 黒色研磨がなされたものと考えられる。 (ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を含みにぶい黄褐色(10YR7/2)
19 (損)	皿 (土)	— (11.7)	底部には高台が貼りつけられる。	外面 胴下部ロクロコナナテ。 底部回転へラケズリ。切り離し方法不明。 内面 ロクロコナナテ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され、灰白色(7.5Y7/1)

第10表 H-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
20 (回)	— (陶)	— (17.1)	底部には高台が貼りつけられる。	外面 胴下部クロコヨコナデ。 底部ナデ、切り離し方法不明。 内面 ヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み、 灰青色 (2.5YR4/3)
21 (回)	甕 (土)	(13.5)	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/4)
22 (回)	甕 (土)	(11.0)	口縁部はコの字状に外反する。 ことに口唇部は屈曲が強く強い。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
23 (甕)	台付甕 (土)	—	胴上部・口縁部を失う。	外面 胴部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
24 (甕)	甕 (土)	— (3.5)	胴部上半・口縁部を失う。	外面 胴部ヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
25 (甕)	甕 (土)	— (5.5)	胴部上半・口縁部を失う。	外面 胴部ヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)



第11表 H-3号住居址出土遺物一覧表

<鉄器>

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
26	刀子	鉄	—	1.4	—	—	刃部中央欠損
27	刀子	鉄	(14.5)	(1.5)	(0.5)	(14.5)	先端・基部欠損

※ 単位はcm, g

第45図 H-3号住居址出土遺物(1:3)

含む暗褐色土層(10YR 3/4)、4層は焼土層である褐色土層(7.5YR 4/6)、5層は焼土・カーボンを含まない暗褐色土層(10YR 3/3)である。最終の火床は4層の上面である。

遺物 第43・44・45図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・甕、土師器では坏・高台付坏・高台付皿・甕・台付甕が検出されている。

1～6は回転糸切りの底部をみせる須恵器坏、7は須恵器高台付坏の底部である。

8～12は回転糸切りの底部をみせる土師器坏、13・14も土師器坏で、いずれも内面黒色研磨のなされたものである。このうち9・12・13・14の体部には、墨書が認められた。14の体部には「奉」と「人」の墨書が認められる。9(人?)・12・13の墨書は、判読不明である。

15・16は土師器高台付坏、17・18は土師器高台付皿で、いずれも内面黒色研磨のなされたものである。このうち18の体部には「人」の刻書が焼成後になされている。「人」の刻書土器は、H-

11号住居址において多量に検出されているものである。

19・20は、高台付の須恵器甕もしくは壺の下部である。

21～25は土師器甕である。このうち21・22はコの字状口縁の土師器小形甕である。また、23は土師器台付甕の胴下部である。24・25は土師器甕の胴下半部と底部である。

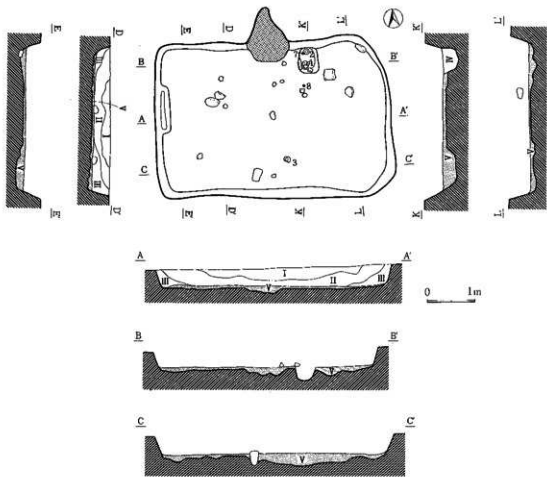
鉄器は、26・27の刀子が検出されている。

石器では、分析資料4の黒曜石片（残核）が床面より5cm浮いて検出されている。

時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IVに位置付けておこう。

(4) H-4号住居址



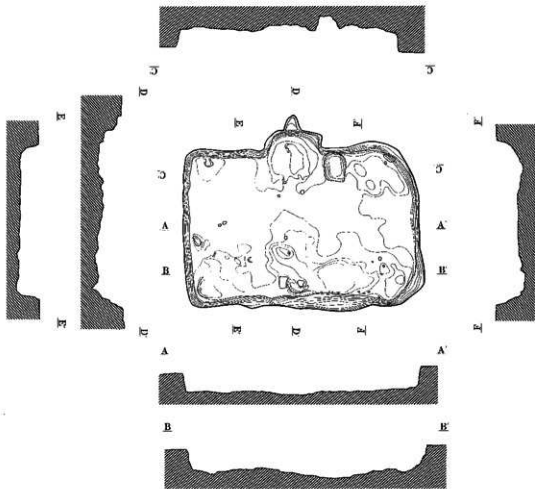
第46図 H-4号住居址実測図 (1:80)

住居址 第46・47図

H-4号住居址は、第I区ミー24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.3m東西5.2mの隅丸長方形を呈し、床面積13.6㎡を測り、南北軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は、30~40cmを測る。壁溝は、西壁中央において長さ約1m幅25cm深さ5cmのものが認められた。床面は、ロームが多量に混じる褐色土V層(10YR 4/6)を用いた貼り床で、全体にきわめて硬質なものである。Cの断面にもみるように、住居址の中央には上面が扁平な礫が埋め込まれていた。

柱穴と考えられるピットは検出されなかったが、カマドの東脇から長方形のピットP₁が検出された。このピットは、長さ50cm幅40cm深さ45cmを測るもので、その中からは1・2の環・7の高台付杯・10の甕の破片が検出された。ピット内の覆土は、カーボンをよく含み、灰を若干含むし



第47図 H-4号住居址掘り方実測図(1:80)

まりのない黒色土層 (10YR 2/1) であった。

覆土は、3層に分層され、人為的な堆積状況を示していた。I層はローム粒子・黒色土粒子をブロック状に含み人為的な埋土と考えられる黒褐色土層 (10YR 2/3)、II層はスコリア・パミスをよく含みローム粒子を含まない黒褐色土層 (10YR 2/2)、III層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 3/4) である。

遺物は、カマドの前部の床面上に8の環が認められた。また、カマドの構材と考えられる安山岩礫等が散布している状況が窺えた。12・13の砥石は覆土I層中からの出土である。

掘り方は、平坦ではなく、細かい凹凸の激しい所謂蜂の巣状をみせていた。ことに南壁際は、ビット状に深く掘り込まれていた。

カマド 第48図

カマドは、住居址の北壁中央に存在している。

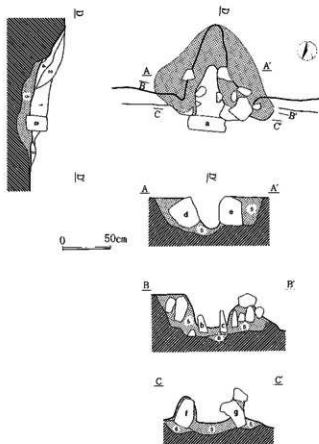
本カマドは、左右両袖の一部・煙道部を比較的良好にとどめていた。また、カマドの火床には、カマド天井部の構材と考えられる直方体状の面取り集塊岩1個(a)が落下していた。

袖は、面取り軽石 (d~g) を主に集塊岩礫も芯にして、黒褐色土層 (5層 7.5YR 3/2) を貼って構築されていた。

火床も黒褐色土層 (5層 7.5YR 3/2) が貼られ構築されていた。火床の下層は焼土・カーボンをまったく含まない褐色土層 (6層 10YR 4/4) であった。

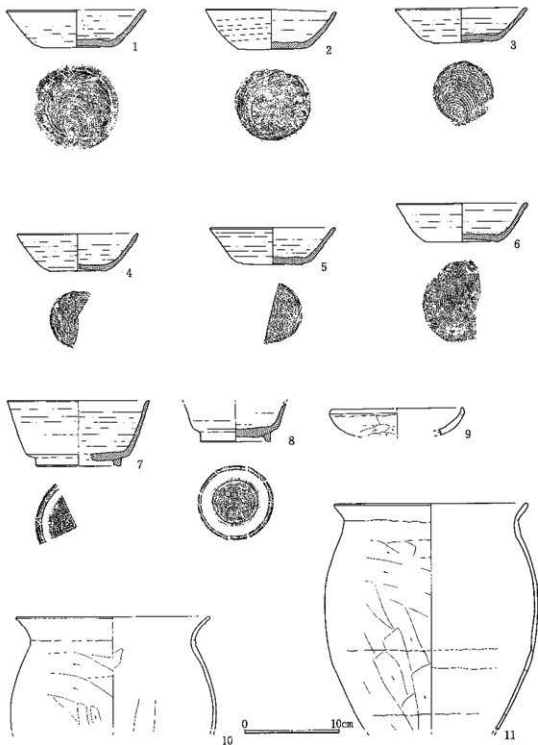
また、Bの断面にみる角錐状の面取り軽石製の支脚2個(c・d)も残置されていた。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層は焼土・カーボンをまったく含まない黒褐色土層 (7.5YR 2/2) で、カマド使用には直接関連しないものと考えられる。



第48図 H-4号住居址カマド実測図 (1:40)

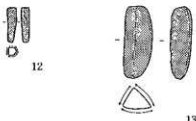
1 型穴住居址



第49图 H-4号住居址出土遗物(1:4)

第12表 H-4号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

種類 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査 数	備 考
1 (完)	環 (須)	14.6 3.9 7.6	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y6/7)
2 (完)	環 (須)	13.7 4.2 7.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色(10Y6/1)
3 (完)	環 (須)	(13.8) 3.5 6.3	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色(7.5Y7/2)
4 (調)	環 (須)	(12.7) 3.9 6.0	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(7.5Y6/1)
5 (調)	環 (須)	(13.2) 3.8 (6.5)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y6/1)
6 (調)	環 (須)	(13.7) 4.0 7.3	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色(5Y7/1)
7 (調)	高台付 (須)	(14.9) 6.9 (8.9)	底部には高台が貼りつけられる。 体部は直線的に外反する。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/1)
8 (調)	高台付 (須)	— — 7.4	底部には高台が貼りつけられる。 体部は直線的に外反する。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(10Y5/2)
9 (調)	環 (土)	(13.8) — —	体部は丸みをおびて外反する。底部は扁平的な丸底を呈するものと考えられる。	外面 ヨコナデの後、手持ちヘラケズリ。 内面 ヨコナデ。	胎土は砂粒を含みにくい褐色(7.5YR7/4)
10 (調)	甕 (土)	(20.4) — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにくい褐色(5YR5/4)
11 (調)	甕 (土)	(20.3) — —	口縁部はコの字状に外反し、球状上半に最大径をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色(5YR6/6)



第50図 H-4号住居址出土遺物(1:4)

2層は多量の焼土と若干の灰・カーボンを含む黒褐色土層(7.5YR 3/2)、3層は橙色の灰層(7.5YR 6/6)、4層は若干の灰を含み焼土を含まない褐色土層(7.5YR 4/3)であった。

遺物 第49・50図

遺物は、須恵器では環・高台付環、土器では環・甕が検出されている。

1～6は回転糸切りの底部をみせる須恵器環、7は須恵器高台付環、8は須恵器高台付環の底

第13表 H-4号住居址出土遺物一覽表

<石器>

探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	砥石	砂岩	3.6	0.9	0.7	3.8	定形
13	砥石	砂岩	7.5	2.9	2.1	49.0	定形

※ 単位はcm, g

部である。

9は扁平な半球状の器形をみせる土師器坏である。

10・11は土師器甕である。このうち11はコの字状口縁の土師器甕である。

石器では、12・13の砥石が検出されている。ともに仕上砥と考えられるものである。このうち12はきわめて小形なもので、四面とも研砥に供されたものである。おそらくは刀子など小形製品の細部の研砥に用いられたものであろう。13も、やはり小形の部類に属する砥石で、細部の研砥に供されたものであろう。

時期

本住居址は、8世紀末～9世紀初頭、根岸遺跡第II期に位置付けられよう。

(5) H-5号住居址

住居址 第51・52図

H-5号住居址は、第I区ミ-25グリッドにおいて検出された。南北5.3m東西5.1mの隅丸方形を呈し、床面積22.8㎡を測り、南北軸方向はN-4°-Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床で、ローム粒子を含まない黒褐色土層(Ⅷ層 10YR 2/2)が貼られていた。

ピットは、基本的には柱穴と考えられるP₁～P₄の四個が対で存在していたが、これに付随するのP₅～P₈の四個のピットも認められた。また、それ以外にP₉と、北東コーナーにはP₁₀が検出された。P₁は30×25cm深さ60cm、P₂は40×40cm深さ50cm、P₃は40×25cm深さ45cm、P₄は50×35cm深さ50cm、P₅は30×25cm深さ25cm、P₆は30×20cm深さ40cm、P₇は25×20cm、P₈は20×20cm、P₉は50×30cm深さ40cm、P₁₀は65×50cm深さ15cmを測る。

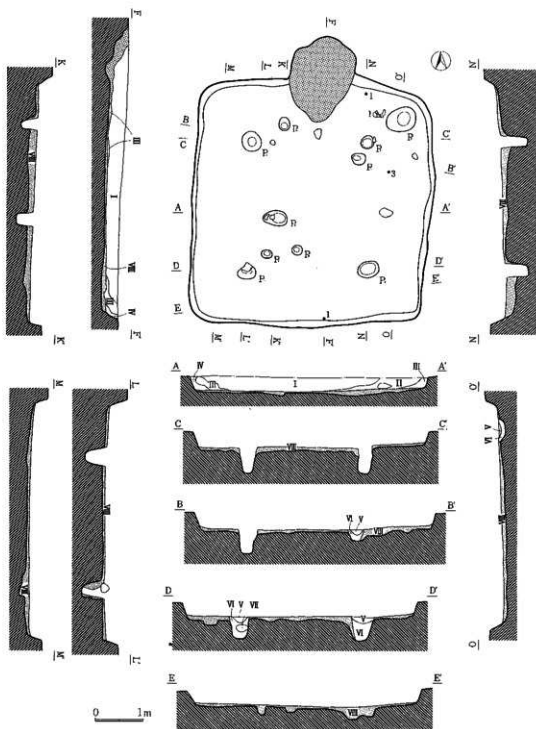
遺物は、良好な状態では出土しなかった。

掘り方は、床面レベルと余り差がなく、凹凸の激しい所謂蜂の巣状を呈していた。

覆土は、5層に分層され、プライマリーな堆積状況を示していた。I層は5～20mmのバミスを多量に含む黒色土層(10YR 2/1)、II層は4mm程度のバミス・3mm程度スコリアをよく含む黒色土層(10YR 1.7/1)、III層はバミスをあまり含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、IV層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 3/2)であった。

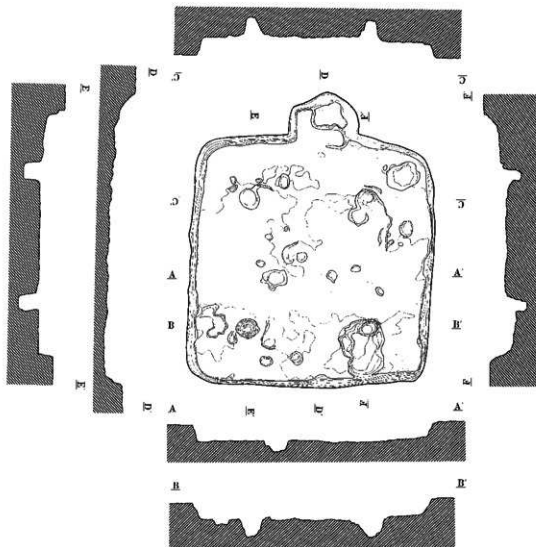
ピット内の覆土は、3層に分層された。V層はローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 3/3)、VI層はローム粒子をよく含む褐色土層(10YR 4/4)、VII層は褐色ロームブロック層(10YR 4/6)であった。

カマド 第53図



第51図 H-5号住居址実測図(1:80)

1 窟穴住居址

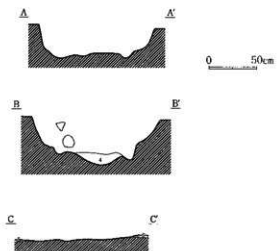
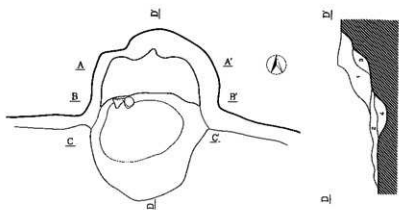


第52図 H-5号住居址掘り方実測図 (1:80)

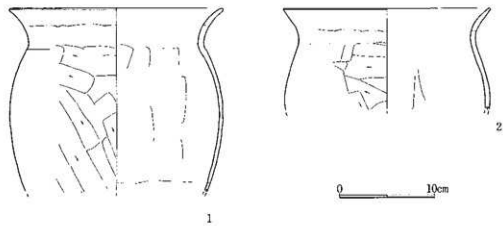
カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、ほぼ全体を破壊された状態にあり、その構材の石材等は認められなかった。

本カマドの土層は、6層に区分された。1層は焼土・粘土を含む黒褐色土層 (5 YR 2/1)、2層は粘土を多量に含むカマドの構築土と考えられる灰褐色土層 (5 YR 4/1)、3層はローム粒子を含むが焼土・灰を含まない黒褐色土層 (10YR 2/3)、4層は焼けたローム層である赤褐色土層 (5 YR 4/8)、5層はカマドの構築土でロームの混入する暗褐色土層 (10YR 3/3)、6層もカマドの構築土でロームの混入する黒褐色土層 (10YR 3/2) であった。

IV 遺構と遺物



第53図 H-5号住居址カマド実測図(1:40)



第54図 H-5号住居址出土遺物(1:4)

第14表 H-5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (四)	甕 (土)	(22.5) —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラケズリ、 内面 口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい橙色 (5YR6/4)
2 (楕)	甕 (土)	(21.8) —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラケズリ、 内面 口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい橙色 (5YR6/4)



第55図 H-5号住居址出土遺物(1:3)

第15表 H-5号住居址出土遺物一覧表
〈鉄器〉

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	鉄 錐	鉄	(3.9)	3.1	(0.3)	(8.0)	基部欠損

※ 単位はcm. 目

遺物 第54・55図

遺物は、きわめて少なく、須恵器では坏・甕の破片、土師器では坏・甕の破片が検出されたのみにとどまった。

このうち図示できたのは、1・2の土師器甕で、僅かコ字状に外反する口縁部をみせるものである。

また、3は五角形を呈する鉄錐の先端部である。

時期

本住居址は、遺物が少ないため時期決定が困難であるが、8世紀末～9世紀初頭、根岸遺跡第II期の所産とみて大過あるまい。

(6) H-6号住居址

住居址 第56・57図

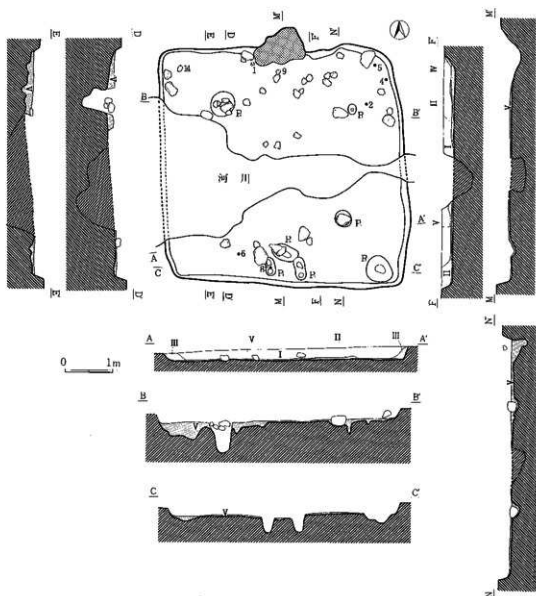
H-6号住居址は、第I区ミ-27グリッドにおいて検出された。

その中央部は、古い河川によって攪乱されている。

本住居址は、南北5.1m東西5.1mの隅丸方形を呈し、床面積23.1㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な薄い貼り床で、ローム粒子をよく含む黒褐色土層(V層 10YR 3/2)であった。

本住居址は、基本的には4本の主柱をもつタイプの住居址と考えられる。それに対応するピツ

IV 遺構と遺物

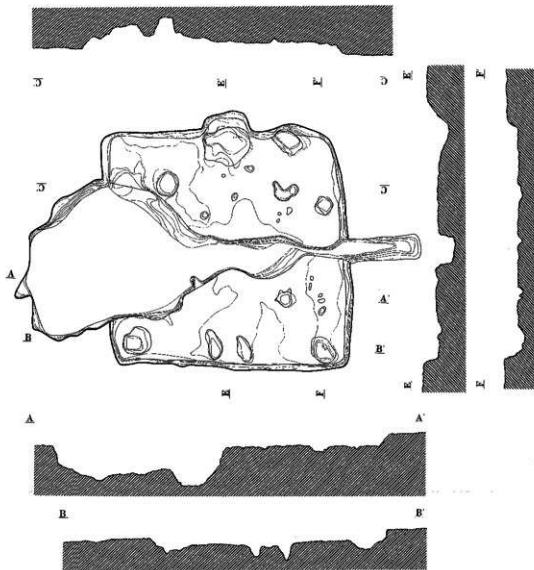


第56図 H-6号住居址実測図(1:80)

トは、 P_2 と、河川攪乱部に存在したと考えられるピットである。この他の2本は、図のa・bの二つの礎石上にあったものと考えられる。なお、 P_1 は主柱に付随するピットであろうか。この他、南壁際には $P_4 \sim P_9$ が、また東南コーナーには P_7 が存在していた。 P_1 は $20 \times 15 \text{cm}$ 深さ 30cm 、 P_2 は $55 \times 50 \text{cm}$ 深さ 60cm 、 P_3 は $35 \times 35 \text{cm}$ 深さ 20cm 、 P_4 は $40 \times 20 \text{cm}$ 深さ 30cm 、 P_5 は $50 \times 25 \text{cm}$ 深さ 35cm 、 P_6 は $60 \times 35 \text{cm}$ 深さ 15cm 、 P_7 は $55 \times 55 \text{cm}$ 深さ 20cm を測る。

遺物は、第I区で環類が集中的に検出されている。床面直上からの出土遺物には、第I区2の

1 竪穴住居址



第57図 H-6号住居址掘り方実測図 (1:80)

環・西北コーナーの14の礎石・南壁際の6の環がある。このほかは良好な出土状態を示すものがなく、いずれも覆土中から出土している。

掘り方は、床面レベルと余り差がなく、凹凸の激しい所謂蜂の巣状を呈していた。

覆土は、4層に分層された。I層は3～5mmの小粒パミスをよく含むスコリアを若干含む黒褐色土層 (10YR 3/2)、II層は3～5mmの小粒パミスをよく含むスコリアを若干含む黒色土層 (10YR 2/1)、III層はローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、IV層はカマドの灰の堆積層で

ある明黄褐色土層 (10YR 7/6) であった。

カマド 第58図

カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、その袖の一部を除いて、破壊された状態にあった。その構材と考えられる安山岩礫と軽石は住居内に散乱していた。住居址の図中aは面取りされた軽石で、支脚石と考えられるものである。

一部残る袖には、安山岩礫と軽石が芯に据えられ、黄褐色土層 (7層 10YR 7/6) ・ 灰褐色土層 (8層 7.5YR 4/2) ・ 黒褐色土層 (9層 10YR 3/2) ・ 黒色土層 (10層 10YR 2/1) が構築土として貼られていた。

本カマドの土層は、6層に

区分された。1層は若干のカーボン・灰を含む暗褐色土層 (10YR 3/3)、2層は灰を多く含む焼土を若干含む褐色土層 (7.5YR 4/3)、3層はふい黄色灰色層 (10YR 6/4)、4層はカーボン・焼土を含まない暗褐色土層 (10YR 3/4) であった。

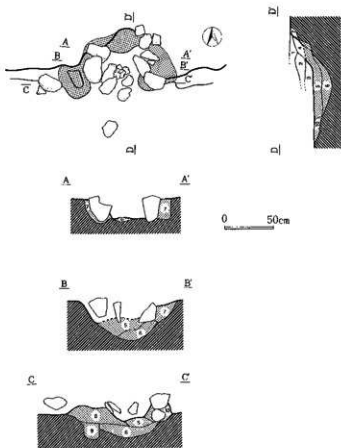
遺物 第59・60図

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では蓋・坏・甕・四耳壺破片、土師器では坏・甕・台付甕が検出されている。

1は、ボタン状のツمامミ部を有する須恵器蓋である。

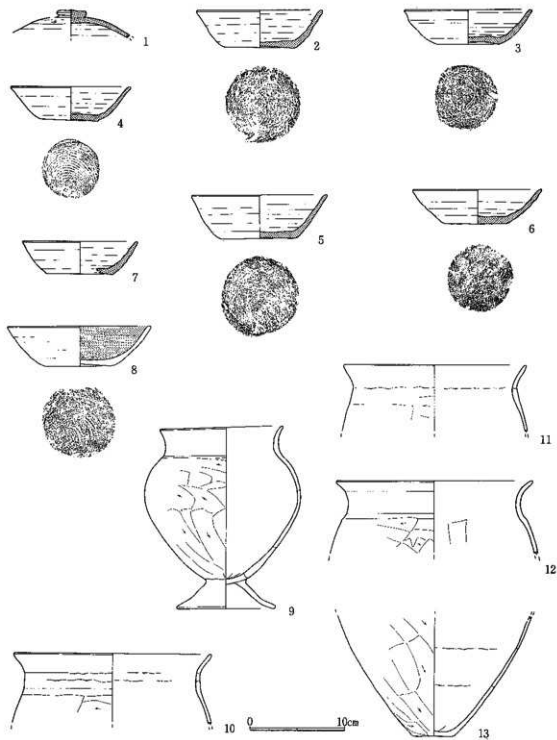
2～5・7は回転糸切りの底部をみせる須恵器坏、8は、回転糸切りの後周囲手持ちヘラケズリの底部をみせる内面黒色研磨のなされた土師器坏である。

9～13は、土師器甕である。このうち9は小形台付甕である。10～12は、僅かコの字状に外反する口縁部をみせる土師器甕である。



第58図 H-6号住居址カマド実測図 (1:80)

1 竖穴住居址

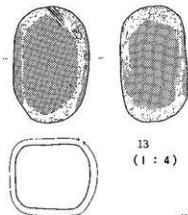


第59图 H-6号住居址出土遗物(1:4)

IV 遺構と遺物

第16表 H-6号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

神田 番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	蓋 (皿)	3.1 —	ツマミ部はボタン状の彫痕を呈する。	外面 内面	ロクロヨコナデ。 大井部回転ヘラケズリ。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
2 (完)	杯 (瓶)	13.3 3.9 7.6	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
3 (完)	杯 (瓶)	13.5 3.6 6.7	体部はやや丸みをおびて外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y7/1)
4 (完)	杯 (瓶)	12.7 3.5 6.0	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元炎焼成とならず褐色の断面(5YR7/6)
5 (完)	杯 (瓶)	14.3 4.6 7.9	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y7/1)
6 (完)	杯 (瓶)	13.7 3.6 7.0	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部調整、切り離し方法不明。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元炎焼成とならず褐色の断面(5YR6/6)
7 (調)	杯 (瓶)	<12.1> 3.4 <7.0>	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y5/1)
8 (完)	杯 (土)	15.1 4.2 7.3	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、周面手持ちヘラケズリ。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む褐色(5YR3/2)
9 (完)	台付鉢 (土)	13.0 19.0 10.4	口縁部は僅かコの字状に外反し、胴上半に菱文をもち、胸内面は八の字状に広がる。	外面 内面	口縁部・胸上部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部・胸下部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含むにじい褐色(7.5YR6/3)
10 (調)	鉢 (土)	<20.9> —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含むにじい褐色(7.5YR6/3)
11 (調)	鉢 (土)	<19.3> —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含むにじい褐色(7.5YR6/3)
12 (調)	鉢 (土)	<20.8> —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含むにじい褐色(7.5YR6/3)
13 (調)	鉢 (土)	— 4.4	底部平底。	外面 内面	胴部・底部ヘラケズリ。 ヘラナデ。	胎土は砂粒を多く含むにじい褐色(7.5YR6/3)

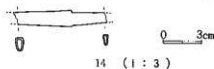


第60図 H-6号住居址出土遺物

第17表 H-6号住居址出土遺物一覽表
〈石器・鉄器〉

神田 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
13	砥石	砂岩	12.2	8.0	7.0	1140	定形
14	刀子	鉄	(7.4)	1.3	(0.7)	(9.0)	先端・基部欠損

単位12cm, g



石器では、13の砂岩の砥石が検出されている。この砥石は、敲打によってパン状に整形されたもので、4面とも研砥に供されており、仕上げ砥と考えられるものである。

14は、張り床中より検出された刀子で、先端を欠損する。

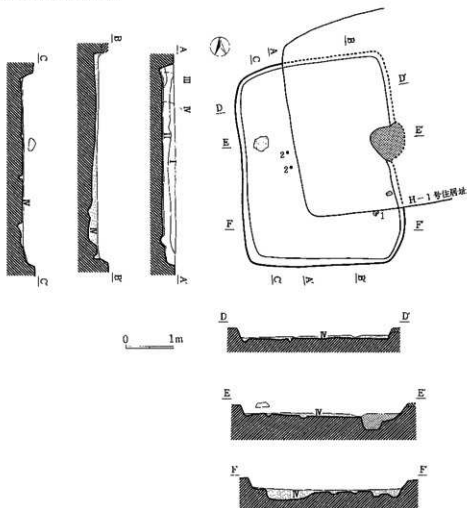
時 期

本住居址は、8世紀中葉、根岸遺跡第II期の所産と考えられる。

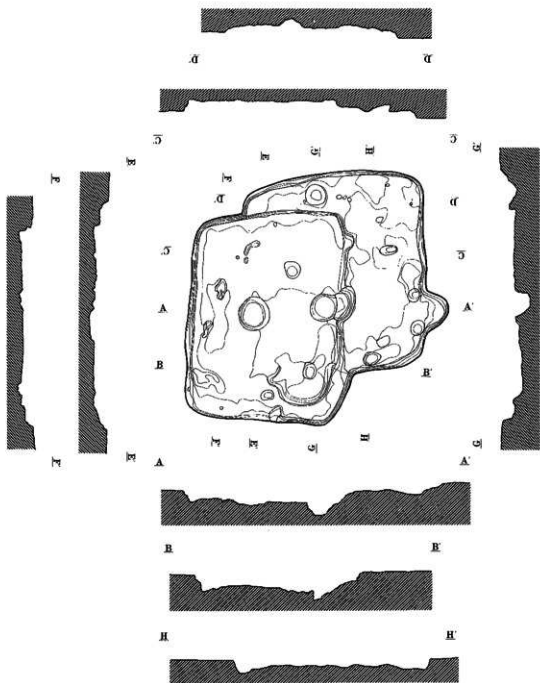
(7) H-7号住居址

住居址 第61・62図

H-7号住居址は、第I区ミー22グリッドにおいて検出された。本住居址は、H-1号住居址にその大半を切られている。



第61図 H-7号住居址実測図 (1:80)



第62図 H-7号住居址掘り方実測図(1:80)

本住居址は、南北4.3m東西3.4mの隅丸長方形を呈し、床面積12.3㎡を測り、南北軸方向はN-8°-Wを指す。壁高は約20cmを測る。壁溝は認められない。ピットはまったく認められなかった。床面は全体に平坦で硬質な貼り床で、ローム粒子をよく含む黒褐色土層（IV層 10YR 3/2）が貼られていた。

遺物は、良好な出土状態を示すものがなかった。1の坏は貼床中から出土している。

覆土は、3層に分層された。I層は細粒パミスをよく含む黒褐色土層（10YR 2/3）、II層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む埋土の暗褐色土層（10YR 3/4）、III層はローム粒子を全く含まない黒色土層（10YR 1/1）であった。

掘り方は、凹凸の激しい所謂蜂の巣状を呈しており、ピット状の落ち込み部分も何か所か認められた。

カマド 第63図

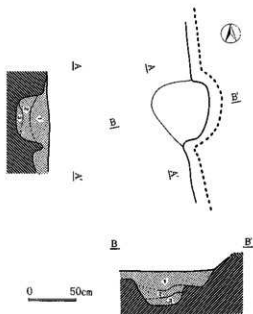
カマドは、住居址の東壁中央に存在しているが、H-1号住居址構築の際に完全に取り壊されていた。

遺物 第64図

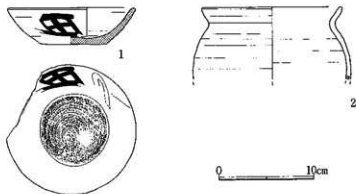
遺物の出土量は、きわめて少なく、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕の破片が検出されたのみにとどまった。

1は、回転糸切りの底部をみせる須恵器坏で判読不明であるが墨書が認められる。

2は、ロクロ整形による土師器小形甕である。



第63図 H-7号住居址カマド実測図（1：40）



第64図 H-7号住居址出土遺物（1：4）

第18表 H-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	流量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕 (項)	13.5 3.3 7.0	体部はやや丸みをおびて外反し、底部平底、比較的均厚、判読不能だが、体部に蓋書あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は精選されず砂粒を多く含む灰黄色(2.5Y7/2)
2 (断)	甕 (土)	(14.8) —	口縁部は別く外反する。	外面 ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。	粘土は砂粒を多く含む よい褐色 (7.5YR6/3)

時 期

本住居址は、1の須恵器環・2の土師器小形甕を手掛かりに、8世紀末～9世紀初頭、根岸遺跡第II期に位置付けられよう。

(8) H-8号住居址

住居址 第65・66図

H-8号住居址は、第I区ミー22グリッドにおいて検出された。

本住居址は、M-1号溝状遺構を破壊して存在していた。

本住居址は、南北6.2m東西5.4mの隅丸長方形を呈し、床面積29.0㎡を測り、南北軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は、25～50cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に平坦で硬質な貼り床で、ローム粒子をよく含む暗褐色土層(VI層 10YR 3/4)が貼られていた。

II区には、住居廃絶後に廃棄されたと考えられる溶岩礫等が散在していた。

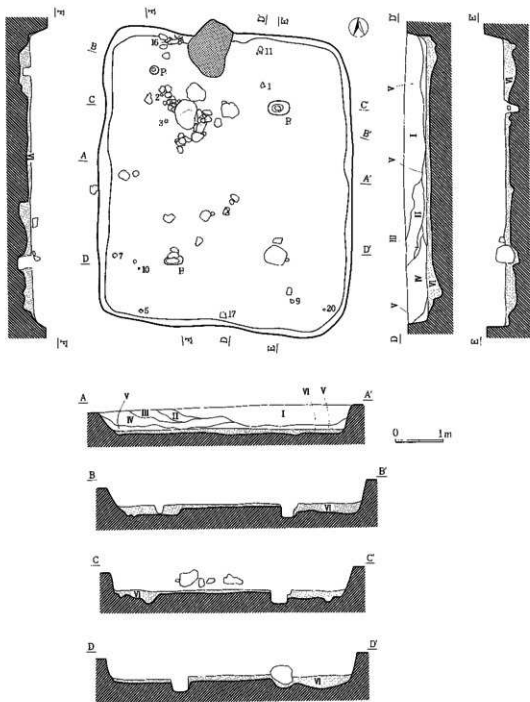
掘り方は、その中央においては床面レベルと余り差がなく、全体に凹凸の激しい所謂蜂の巣状を呈していた。

ピットは、P₁からP₃の三個のピットが認められた。このうちP₁・P₂は主柱穴と考えられる。この二個のピットに対応するのは、IV区では平坦面に上にした礎石aであるが、III区ではピット・礎石等は検出されなかった。P₁は45×30cm深さ30cm、P₂は40×15cm深さ30cm、P₃は20×20cm深さ15cmを測る。

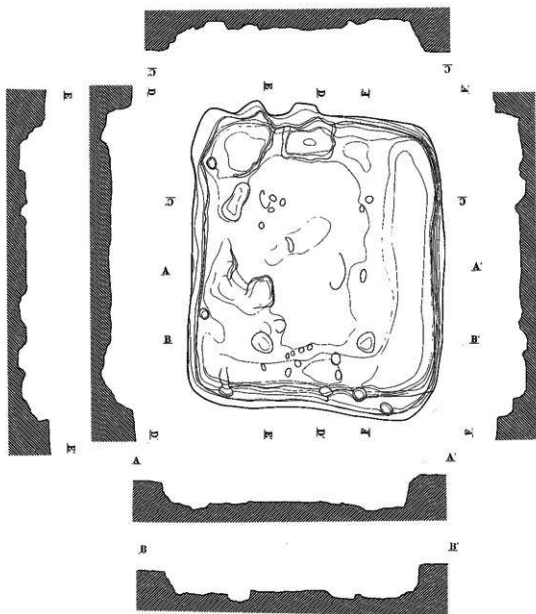
遺物は、1の甕が床面直上から、11の土師器環が貼床中から出土している。このほかはいずれも覆土中から出土している。

覆土は、5層に分層された。I層は2～4mmの小粒バミス・2～7mmのスコリアをよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、II層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)、III層はローム粒子をあまり含まない黒褐色土層(10YR 2/2)、IV層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)、V層はローム粒子をほとんど含まない黒褐色土層(10YR 2/2)で、全体に人為堆積の状況

1 洞穴住居址



第65图 H-8号住居址实测图(1:80)



第66図 H-8号住居址掘り方実測図 (1:80)

を呈していた。

カマド 第67図

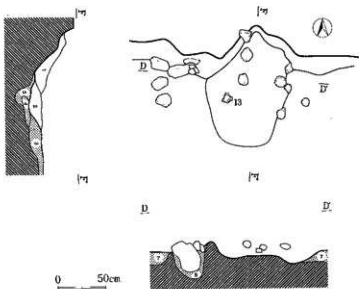
カマドは、住居址の北壁中央に存在しているが、ほぼ全体を破壊された状態にあった。その覆土は2層に分層された。1層はカマドの構材である粘土と焼土・カーボン・灰をよく含む黒褐色土層 (10YR 3/2)、2層はカマドの構材である粘土を多量に含む焼土・カーボン・灰をよく含む

1 竪穴住居址

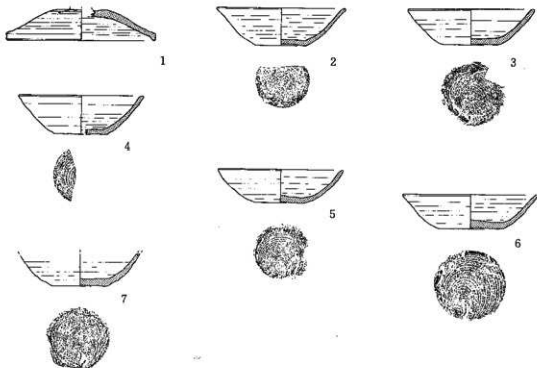
にふい黄褐色土層(10YR 3/2)であった。また、カマドの構築上は4層に分層された。3層は黒色土層(10YR 2/2)、4層は火床に貼られたローム層(赤褐色土層 5YR 4/8)で焼けており、5層も焼土が大量に混入する暗赤褐色土層(5YR 3/4)、6層はローム粒子が多量に混じる黒褐色土層(10YR 2/2)であった。

遺物 第68・69・70図

遺物は、須恵器では蓋・
 坏・甕、土師器では坏・甕

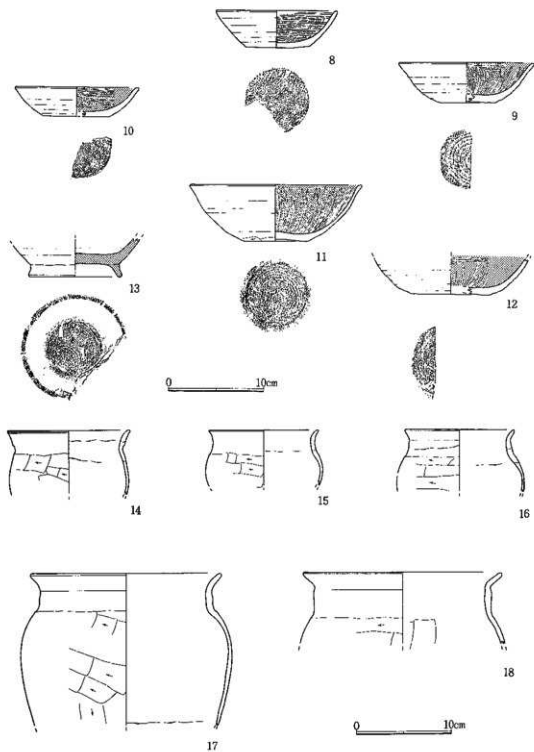


第67図 H-8号住居址カマド実測図(1:80)



第68図 H-8号住居址出土遺物(1:4)

IV 遺構と遺物



第69圖 H-8号住居址出土遺物 (1:4)

第19表 H-8号住居址出土遺物一覧表(土器)

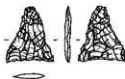
標本 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査 場 所	備 考
1 (圓)	蓋 (甕)	— (15.R)	ツマミ部の形態は不明。	外面 ロクロヨコナデ。 内面 犬井部手持ちヘラケズリ。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
2 (圓)	杯 (甕)	(13.6) 3.9 (5.5)	体部は外反し、口唇部でさらにやや 外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む灰 白色 (10Y8/1)
3 (圓)	杯 (甕)	(13.4) 3.7 5.4	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
4 (圓)	杯 (甕)	(13.2) 4.1 (5.6)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元炭化焼成と ならず灰色の断面 (5YR7/6)
5 (圓)	杯 (甕)	(13.2) 3.5 5.1	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	完全な還元炭化焼成と ならず灰色の断面 (5YR7/6)
6 (圓)	杯 (甕)	(14.3) 3.6 7.1	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y5/1)
7 (圓)	杯 (甕)	— 6.0	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y5/1)
8 (圓)	杯 (土)	(12.8) 3.9 (6.9)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (10YR6/3)
9 (圓)	杯 (土)	(14.2) 4.2 (6.3)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 褐色 (10YR8/3)
10 (圓)	杯 (土)	(13.1) 4.1 (7.0)	体部は丸みをおびて外反する。底部 平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、両面手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (7.5YR6/3)
11 (圓)	杯 (土)	(18.1) 5.9 6.7	体部は丸みをおびて外反する。 底部平底。 内窪。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、両面手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (7.5YR6/3)
12 (圓)	杯 (土)	— (8.5)	体部は丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (7.5YR6/3)
13 (圓)	甕 (甕)	— (9.0)	底部には高台が貼りつけられる。	外面 胴部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され 灰白色 (10Y7/1)
14 (圓)	甕 (土)	(12.9) — —	口縁部はくの字状に外反する。 口唇部は玉縁となる。 小形。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ。	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (5YR6/3)
15 (圓)	甕 (土)	(11.5) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半 に最大径をもつ。 小形。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ。	胎土は砂粒を多く含む 灰褐色 (7.5YR4/2)
16 (圓)	甕 (土)	(11.5) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半 に最大径をもつ。 小形。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ。	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (7.5YR6/3)
17 (圓)	甕 (土)	(17.1) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半 に最大径をもつ。 小形。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ。	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (5YR5/3)
18 (圓)	甕 (土)	(20.8) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ。	胎土は砂粒を多く含む よい褐色 (5YR6/3)

第20表 H-8号住居址出土遺物一覧表

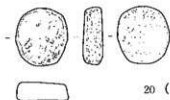
<石器・鉄器>

図号番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
19	石 錐	黒曜石	1.79	1.52	0.17	0.3	
20	不明	軽石	4.50	4.05	1.42	19.8	紡錘車未製品?
21	刀子	鉄	(8.5)	(1.1)	(0.4)	(0.7)	

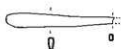
※ 単位12cm, g



19 (4:5)



20 (1:4)



21 (1:3)

第20図 H-8号住居址出土遺物

等が検出された。

1は、須恵器蓋であるが、ツマミ部の形状は不明である。

2～7は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器環である。

8～12は、回転糸切りの底部をみせる土師器環である。

13は、須恵器長頸瓶の底部かと考えられる。

14～16は、土師器小形甕である。14・15はコの字状の口縁部をみせている。

17・18は、コの字状の口縁部をみせる土師器甕である。

19は、黒曜石の両面加工の石錐で、I区覆土中より出土したものである。

20は、円形で扁平に面取りされた軽石製品である。穿孔前の、紡錘車の未成品であろうか。

21は、刀子で、先端と基部を欠損する。

時 期

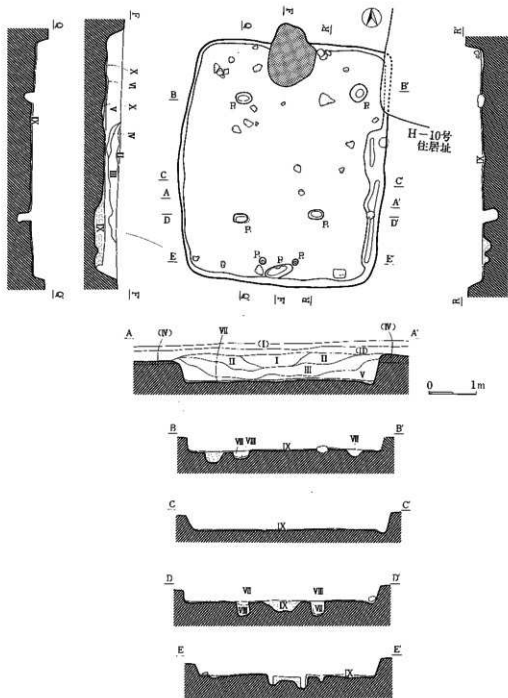
本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第III期の所産と考えられる。

(9) H-9号住居址

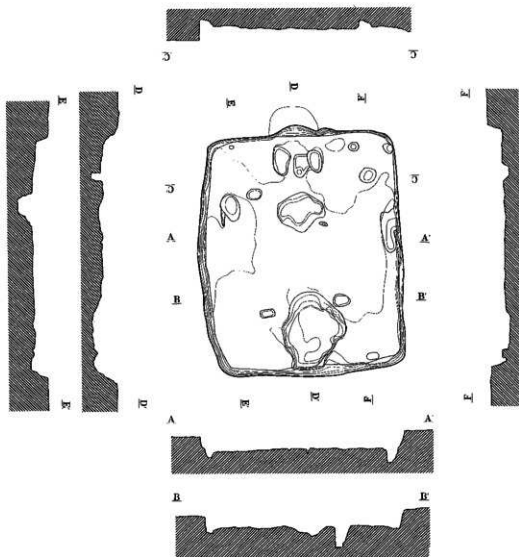
住居址 第71・72図

H-9号住居址は、第I区ム-23グリッドにおいて検出された。その北東コーナーの一部は、H-10号住居址に切られている。

本住居址は、南北5.1m東西4.4mの隅丸長方形を呈し、床面積19.0㎡を測り、南北軸方向はN-0°-Sを指す。壁高は、30～50cmを測る。壁溝は、幅約15～40cm深さ5～10cmを測るものが東壁



第71图 H-9号住居址实测图 (1:80)



第72図 H-9号住居址掘り方実測図(1:80)

際に認められた。床面は、貼り床でローム粒子が多く混入する黑色土層(Ⅱ層 10YR 2/1)であった。なお、住居址の周囲のセクションにおいては、周提等は確認されなかった。

ピットは、支柱穴と考えられる P_1 から P_3 の三個のピットが対で認められ、残りのもう一つの対応部分からは平坦面が上になる礎石aが検出された。 P_1 は 35×25 cm深さ20cm、 P_2 は 30×20 cm深さ30cm、 P_3 は 30×20 cm深さ35cmを測り、いずれも長楕円形のプランを呈していた。また、北東コーナーよりからは、 40×40 cm深さ15cmを測る P_4 が検出された。また、南壁際には $P_5 \cdot P_6 \cdot P_7$ のピットが認められた。 P_5 は 15×15 cm深さ20cm、 P_6 は 15×15 cm深さ30cm、 P_7 は 60×20 cm深さ10cmを

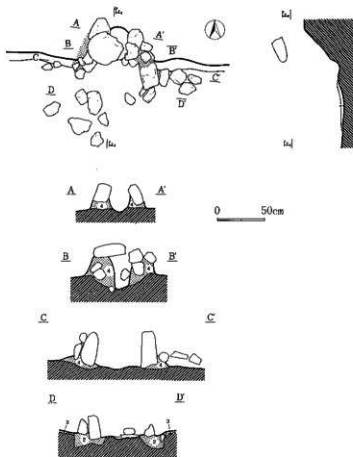
1 野穴住居址

測った。ピット内の覆土は2層に分層された。Ⅶ層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR 2/1)、Ⅷ層は褐色砂層(10YR 4/4)であった。

住居址の掘り方は、ピット部分以外は平坦であるが、全体に激しい細凹凸をみせるものであった。

遺物は、13の銅地金張りの飾り金具が住居址中央の床面直上から検出されている。この他は、いずれも覆土中からの出土である。

住居址覆土は、6層に分層された。Ⅰ層はローム粒子・スコリアをよく含む黒褐色土層(10YR 2/2)、Ⅱ層はローム粒子はほとんど含まずスコリア・パミスをよく含む黒色



第73図 H-9号住居址カマド実測図(1:40)

土層(10YR 2/1)、Ⅲ層はローム粒子をよく含む5~10mmスコリアをよく含む黒褐色土層(10YR 2/2)、Ⅳ層はローム粒子をまったく含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、Ⅴ層はローム粒子はほとんど含まずスコリアをよく含む黒色土層(10YR 2/1)、Ⅵ層はローム粒子をよく含む5~8mmスコリアをよく含む黒色土層(10YR 2/1)であった。

(Ⅰ)~(Ⅳ)は、遺跡の基本層序Ⅰ~Ⅳ層に対応する。

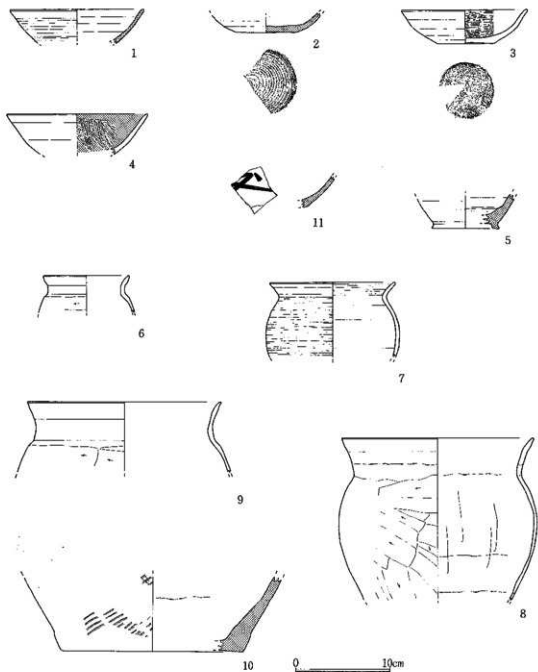
カマド 第73図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、天井部と左右両袖の一部をとどめていた。その袖の芯には面取り軽石が、天井石には扁平な安山岩が用いられていた。

本カマドの火床には、赤褐色焼土層(1層 5YR 4/6)が認められた。また、本カマドの構材にはローム粒子の若干混入する黒褐色土層(2層 10YR 2/3)、ローム粒子が多量に混入する黒褐色土層(3層 10YR 3/2)、暗褐色土層(4層 10YR 3/3)が用いられていた。

遺物 第74・75図

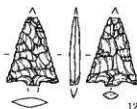
IV 遺構と遺物



第74図 H-9号住居址出土遺物 (1:4)

第21表 H-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	部位	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (陶)	坯 (底)	<14.2> — —	体部は外反し、底部は平底となるものと考えられる。	外面 体部ロクロコナテ。 内面 ロクロコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄色 (2.5Y6/2)
2 (陶)	坯 (側)	— — (6.4)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナテ。 内面 底部細糸切り未調整。 ロクロコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
3 (文)	坯 (土)	13.3 3.6 6.0	体部は丸みをおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナテ。 内面 底部手捻らへラケズリ。切り離し方法不明。 黒色炭層。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
4 (陶)	坯 (土)	<13.2> — —	体部は丸みをおびて外反する。底部は平底となるものと考えられる。	外面 体部ロクロコナテ。 内面 黒色炭層。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (7.5YR7/3)
5 (陶)	坯 (土)	— — (7.1)	底部には高台が貼りつけられる。	外面 ロクロコナテ。 内面 ロクロコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含 みによい赤褐色 (5YR5/3)
6 (陶)	製 (土)	<9.1> — —	口縁部はコの字状に外反する。小形。	外面 口縁部コナテ。 内面 胴部へラケズリ。 口縁部コナテ。胴部へラナテ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/3)
7 (陶)	製 (土)	<13.3> — —	口縁部はくの字状に外反する。小形。	外面 口縁部ロクロコナテ。(ロクロ右回転) 内面 胴部ロクロコナテ。(のみ目状) 口縁部ロクロコナテ。胴部ロクロコナテ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/3)
8 (陶)	製 (土)	<20.2> — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半に最大径をもつ。	外面 口縁部コナテ。 内面 胴部へラケズリ。 口縁部コナテ。胴部へラナテ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
9 (陶)	製 (土)	<20.4> — —	口縁部はコの字状に外反し、胴上半に最大径をもつものと考えられる。	外面 口縁部コナテ。 内面 胴部へラケズリ。 口縁部コナテ。胴部へラナテ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
10 (陶)	製 (土)	— — (19.2)	底部平底。	外面 胴部明き。 内面 胴部へラケズリ。 胴部コナテ。	胎土は砂粒を含み灰 色 (7.5Y6/1)
11 ()	坯 (土)	— — —	坯体部に染着。解説不明。	外面 体部ロクロコナテ。 内面 ロクロコナテ。	胎土は砂粒を含み灰 色 (7.5Y6/1)

12
(4 : 5)

13 (1 : 1)

第75図 H-9号住居址出土遺物(1 : 4)

第22表 H-9号住居址出土遺物一覧表

〈石器・銅製品〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	石 鏃	チャート	(2.28)	1.74	0.38	(1.2)	先端・基部欠損
13	金 兵	銅地金張り	(2.10)	(1.70)	(0.12)	(0.6)	釘穴あり

※ 単位はcm, g

遺物の出土量は、総じて少ないが、須恵器では坏・甕・長頸瓶底部、土師器では坏・甕が検出されている。

1・2は須恵器坏で、2は回転糸切り未調整の底部をみせている。

3・4は土師器坏で、いずれも内面黒色研磨がなされている。このうち3は底部全面に手持ちヘラケズリがなされるものである。

5は、須恵器長頸瓶の底部と考えられる。

7は、ロクロによる所謂カキ目状の調整の認められる土師器小形甕である。

6・7～9は、コの字状口縁の土師器甕である。

また、11は坏の体部破片で、判読不明であるが墨書が認められる。

12は、チャートの両面加工の有基石織で、先端と基部を古く欠損する。Ⅲ区覆土中より出土した。

13は、銅地金張りの飾り金具と考えられ、巧妙な細工の製品である。表面は稜をもつが、裏面は平坦である。中央の1mmほどの穴は釘穴であろうか。

時 期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(10) H-10号住居址

住居址 第76・77図

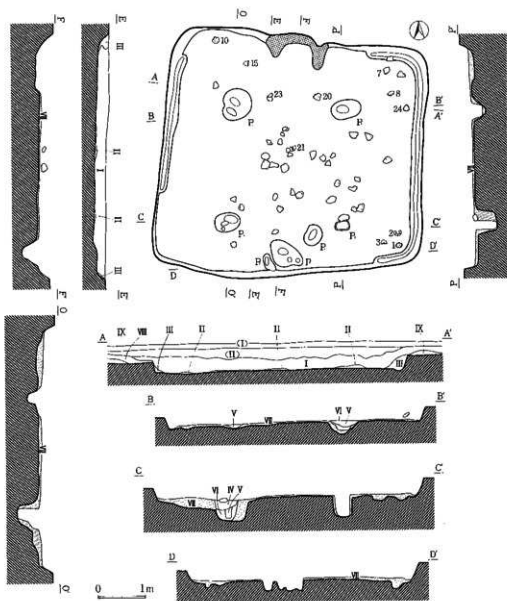
H-10号住居址は、第Ⅰ区ム-22グリッドにおいて検出された。その西南コーナーの一部は、H-9号住居址を切っている。また、F-6号掘立柱建物址のP7も切って存在している。

本住居址は、南北5.2m東西5.7mのいびつな隅丸方形を呈し、床面積24.8㎡を測り、南北軸方向はN-0'-Sを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は、幅約10～20cm深さ5cmを測るものが住居址の東壁と西壁の一部において認められた。床面は、貼り床でローム粒子を多く含む暗褐色土層(VII層 10YR 3/3)が貼られていた。なお、住居址の周囲のセクションにおいては、周堤等は確認されなかった。なお、床面よりやや上において径10～20cmほどの礫20個程度の散布が認められた。

住居址の掘り方は、床面とあまりレベル差はないものの、全体に激しい細門凸をみせるものであった。

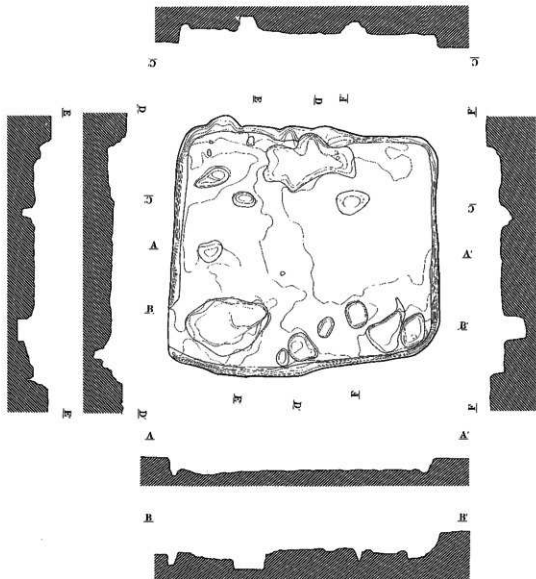
ビットは、P₁からP₄の四個のビットが対で認められた。P₁は60×40cm深さ25cm、P₂は70×60cm深さ30cm、P₃は55×40cm深さ45cm、P₄は30×20cm深さ50cmを測る。また、南壁際にはP₅・P₆・P₇のビットが認められた。P₅は40×15cm深さ20cm、P₆は45×40cm深さ45cm、P₇は80×50cm深

1 洞穴住址



第76图 H-10号住址实测图 (1:80)

IV 遺構と遺物



第77図 H-10号住居址掘り方実測図 (1:80)

さ25cmを測った。ピット内の覆土は3層に分層された。IV層はローム粒子が混入する黒褐色土層(10YR 2/3)、V層は黒色土層(10YR 2/1)、VI層はローム粒子が混入する暗褐色土層(10YR 3/4)であった。なお、P₃においては12cmを測る柱痕が検出された。

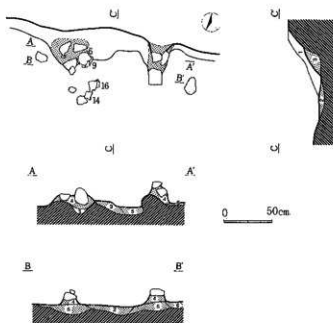
遺物は、10の環が西北コーナーの床面直上より出土している。また、西南コーナーからも1-3の環類がまとめて出土した。2以外は床面より10cmほど浮いた状態で検出されている。また、23の砥石はP₃脇の床面上2cm、24の磨石は東北コーナーの床面上6cmから出土している。

1 竪穴住居址

カマド右袖からは6の環が出土した。この他の遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

(I)・(II)は、遺跡の基本層序I・II層に対応する。

覆土は、2層に分層された。I層は5mm程度スコリア・小粒バミスを含む黒褐色土層(10YR 2/2)、II層はローム粒子をまったく含まない黒色土層(10YR 1.7/1)であった。また、住居址の壁外には人為堆積、VIII・IX層が認められた。周提的なものとしてとらえられようか。VIII層はローム粒子をよく含む5mm程度の小粒バミスを含む黒褐色土層(10YR 2/3)、IX層は多量のローム粒子を含む褐色土層(10YR 4/4)であった。



第78図 H-10号住居址カマド実測図(1:80)

カマド 第78図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや西よりにあり、左右両袖を僅かにとどめていた。両側の袖には、安山岩礫・面取り軽石が埋め込まれていた。

本カマドの土層は、6層に分層された。

1層は焼土・カーボンを若干含む黒褐色土層(10YR 3/2)、2層は暗褐色焼土層(10YR 3/4)、3層は構築土でローム粒子をよく含む褐色土層(7.5YR 4/6)、4層は構築土でローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/3)、5層は構築土でローム粒子をよく含む暗褐色焼土層(10YR 3/3)、6層は構築土でローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 2/3)であった。

遺物 第79・80・81図

遺物は、須恵器では環・甕、土師器では環・高台付環・皿・甕が検出されている。

1～5は、須恵器環で回転糸切りに未調整の底部をみせるものである。

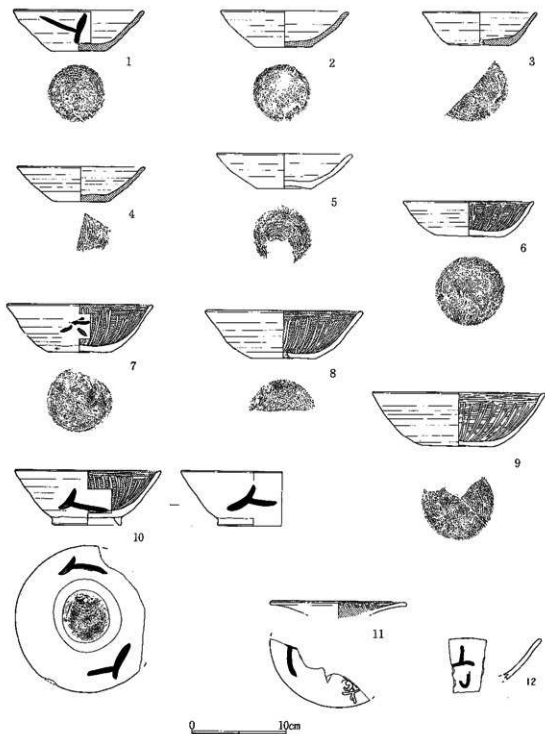
6～9は、回転糸切りによる土師器環である。

10は、内面黒色研磨のなされた土師器高台付環、11も高台のつく皿であろう。

12～14はコの字状口縁の土師器小形甕、15～17はコの字状口縁の土師器甕である。

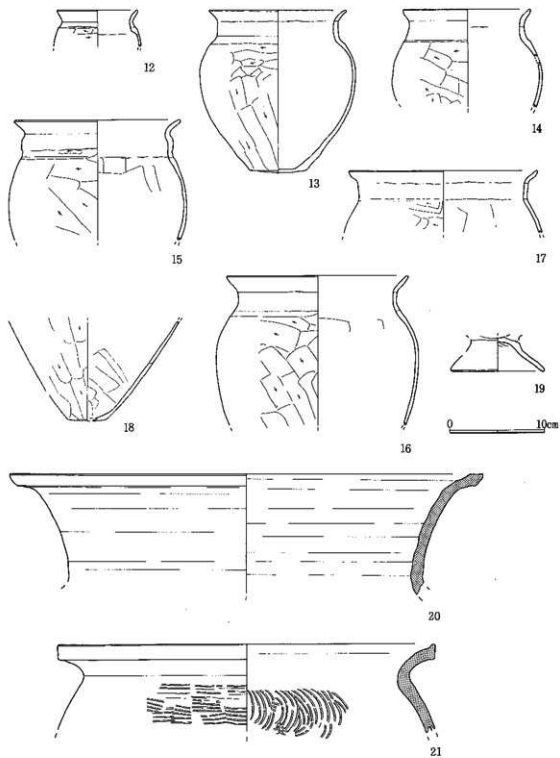
20・21は、須恵器大形甕の口縁部である。

IV 遺構と遺物



第79圖 H-10号住居址出土遺物 (1:4)

I 整穴住居址



第80图 H-10号住居址出土遗物(1:4)

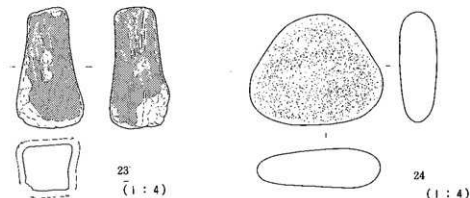
IV 遺構と遺物

第23表 H-10号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

押出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	面	備 考
1 (完)	坏 (須)	13.7 4.3 5.9	体部は外反する。 底部平底。 体部に「人」の黒書あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を多く含み 浅黄褐色 (10YR8/4)
2 (完)	坏 (須)	13.5 3.3 5.9	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は精選されず砂 粒を多く含み灰色 (5Y6/1)
3 (完)	坏 (須)	(12.1) 3.5 (7.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰 白色 (7.5Y8/1)
4 (開)	坏 (須)	(13.5) 3.7 (5.7)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰 色 (7.5Y6/1)
5 (開)	坏 (須)	(14.4) 3.7 5.8	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	粘土は精選されず砂 粒を含み浅黄褐色 (10YR8/4)
6 (完)	坏 (土)	13.8 3.7 7.1	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含みに ふい黄褐色 (10YR6/4)
7 (開)	坏 (土)	(15.4) 5.0 6.7	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。 割線不明であるが、体部に墨書あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、加転ヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み灰 黄褐色 (10YR6/2)
8 (開)	坏 (土)	(15.4) 5.0 (6.7)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、真面手持ちヘラケズリ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含みに ふい黄褐色 (10YR7/3)
9 (完)	坏 (土)	18.2 5.7 7.4	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 (黒色?)ヘラミガキ。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)
10 (完)	高台坏 (土)	15.4 5.7 7.3	体部は外反する。底部には高台が陥 りつけられる。 体部に「人」の墨書、二か所あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含み 褐色 (7.5YR7/6)
11 (開)	皿 (土)	(14.4) — —	底部には高台が付けられるものと思 えられる。割線できないが体部に二 か所墨書あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	粘土は砂粒を含みに ふい黄褐色 (10YR6/3)
12 (開)	皿 (土)	(8.5) — —	口縁部はくの字状に外反する。 小形品。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含み 褐色 (5YR6/6)
13 (開)	皿 (土)	(14.4) 17.0 (5.8)	口縁部はコの字状に外反する。 胴部上半に最大径がある。 底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい黄褐色 (5YR5/4)
14 (完)	皿 (土)	(12.4) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含み 褐色 (5YR6/6)
15 (開)	皿 (土)	(17.6) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)
16 (開)	皿 (土)	(19.1) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)
17 (開)	皿 (土)	(20.0) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)
18 (完)	皿 (土)	— — 4.0	底部平底。	外面 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)
19 (完)	片付皿 (土)	— — (10.0)	胴合部。	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	粘土は砂粒を含みに ふい褐色 (5YR6/4)

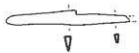
第24表 H-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	数量	器形の特徴	面	装	備考
20 (陶)	甕 (甕)	(50.4) — —	口縁部が逆八の字状に開く、大形の器形。	外面 内面	ロクロヨコナデ。 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (N5/0)
21 (陶)	甕 (甕)	(39.8) — —	口縁部はくの字状に開き、口唇部が帯状に縁どられる、大形の器形。	外面 内面	口縁部ロクロヨコナデ。 胴部印き。(ロクロ右回転) 口縁部ロクロヨコナデ、胴部青海流文。	胎土は砂粒を含み灰色 (N6/0)
22 ()	坏 (土)	— — —	判読できないが体部に墨書あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナデ。 黒色研磨。	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR 7/3)



第25表 H-10号住居址出土遺物一覧表

〈石器・鉄器〉



標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
23	砥石	砂岩	(12.6)	(7.0)	(6.2)	(61.0)	
24	磨石	安山岩	11.5	14.0	4.0	1020	定形
25	刀子	鉄	(9.8)	1.1	0.5	(7.5)	基部欠損

※ 単位はcm. 耳

第81図 H-10号住居址出土遺物

坏類には墨書が認められるものがいくつかある。1には1か所、10には2か所の「人」の墨書がある。『人』の墨書はH-3・H-11、『人』の刻書はH-3・H-11号住居址において認められている。なお、判読不明であるが7・11・22にも墨書が認められる。

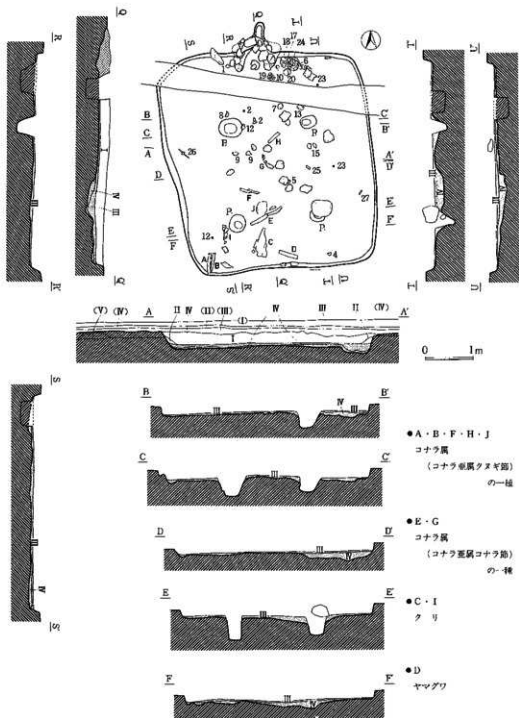
23は四面が研砥に供された砥石、24は磨石である。

25は、刀子で、その先端部と基端部を欠損する。

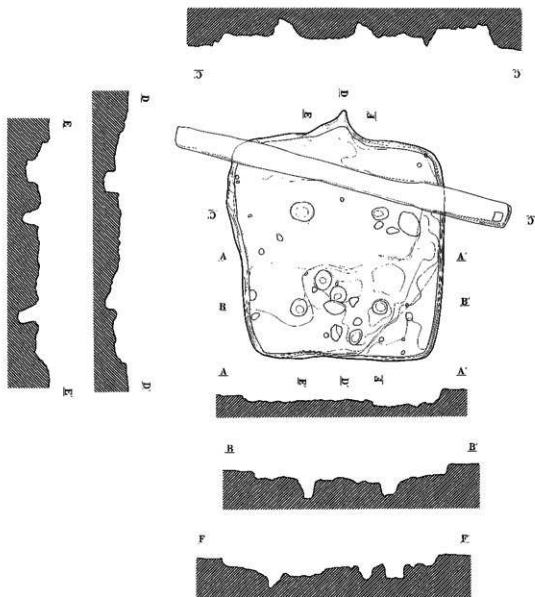
時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

(II) H-11号住居址



第82図 H-11号住居址実測図 (1:80)



第83図 H-11号住居址掘り方実測図 (1:80)

住居址 第82・83図

H-11号住居址は、第I区ム-22グリッドにおいて検出された。その北半分は、現在の暗渠排水によって破壊されていた。

本住居址は、南北4.7m東西4.4mのややいびつな隅丸長方形を呈し、床面積17.7㎡を測り、南北軸方向はN-12'-Wを指す。壁高は、15~20cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床

で、ローム粒子を含まない黒色土層(Ⅲ層 10YR 1.7/1)・黄褐色ローム層(Ⅳ層 10YR 4/6)が貼られていた。Ⅲ層はかなり硬質なものであった。

ピットは、床面精査時においては確認されなかったが、掘り方においてP₁からP₄の四個のピットが検出された。P₁は35×25cm深さ35cm、P₂は50×40cm深さ40cm、P₃は35×35cm深さ50cm、P₄は30×25cm深さ40cmを測る。

住居址の掘り方は、床面とあまりレベル差はないものの、全体に激しい細凹凸をみせるものであった。

覆土は、2層に分層された。Ⅰ層は5～8mm程度のスコリアを多く含む焼土・バミス・ローム粒子を含まない黒褐色土層(10YR 3/2)、Ⅱ層はローム粒子を多く含む焼土・バミスを含まない暗褐色土層(10YR 3/3)であった。

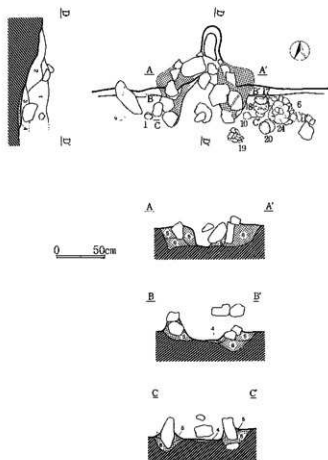
(Ⅰ)～(Ⅴ)は、遺跡の基本層序Ⅰ～Ⅴ層に対応する。

炭化材と遺物の分布

本住居址からは、炭化材の検出が幾つかあり、いわゆる焼失住居址と考えられた。材は南北方向に向くものと、これに直交する方向のもの二者が認められた。家屋の構材と考えられるその炭化材については、樹種同定をおこなってみた。

10のサンプルについて樹種同定をおこなったところ、クリ材が2、ヤマグワ1、コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種が2、コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種が5つ認められた。

一方、遺物分布についてみる。カマド東脇からは、台付甕18・19・20と四耳壺24が押し潰された状態で、カマド西脇からは1の須恵器坏が完形で検出された。このほか坏類は住居址



第84図 H-11号住居址カマド実測図(1:40)

の北半分において出土している。また、26の紡錘車は西壁際の床面直上から出土している。

カマド 第84図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部をとどめており、その袖の芯には、軽石・安山岩礫が埋め込まれていた。

本カマドの土層は、6層に分層された。

1層はカーボンを含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、2層は暗褐色土層 (10YR 3/3)、3層は焼土をよく含みカーボンを若干含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、4層は赤褐色焼土層 (5 YR 4/8)、5層はカマドの構築土の黒褐色土層 (10YR 2/3)、6層もカマドの構築土の暗褐色土層 (10YR 3/3) であった。

遺物 第85・86・87図

遺物の出土量は、比較的多く、須恵器では坏・高台付坏・四耳壺・大形甕、土師器では坏・高台付皿・台付甕・甕が検出されている。

1～5は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器で、1～4が坏、5が高台付坏である。

6～13は土師器坏である。このうち6～8・10～13は、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。また、9～13は内外面ともに黒色処理のなされたもので、所謂黒色土器といわれるものである。

こうした坏類には、『人』の墨書もしくは刻書の認められるものがいくつかある (8・9・10・12等)。また、16の墨書は判読不明である。

15・16は高台付皿で、16は内外面ともに黒色処理のなされた所謂黒色土器である。

18・19・20は、コの字状口縁の台付甕である。

17・21・22は、コの字状口縁の土師器甕である。このうち17は、器高が10cmに満たないきわめて小形なものである。

23は、須恵器大形甕の口縁部～肩部である。

24は、肩部に断面三角の凸帯が巡らされ、穿孔のあるD字形の耳が4か所貼りつけられた凸帯付四耳壺である。口縁部上半を失う。

25は、二面を欠失する砥石である。

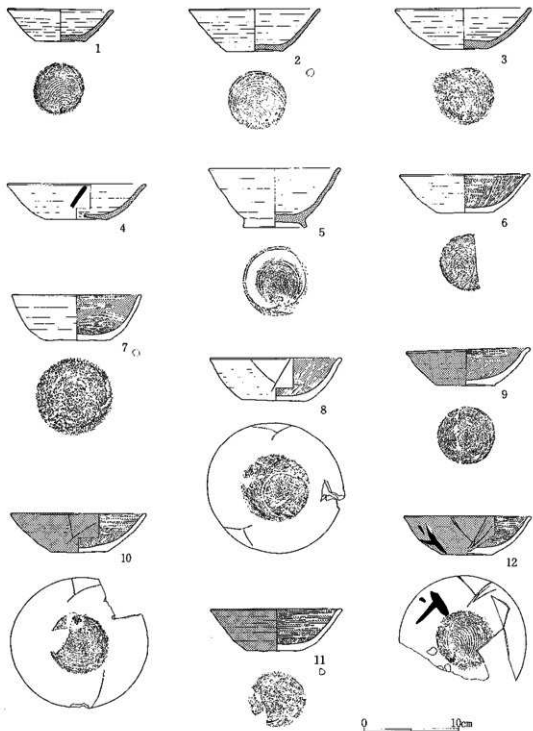
このほか鉄器では、26の紡錘車、27の刀子の基部かと考えられる製品が検出されている。26の紡錘車は、鉄製の軸と円板を比較的良好にとどめており、鉄軸先端の鈎状の曲がりも比較的良好とえられる。

時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

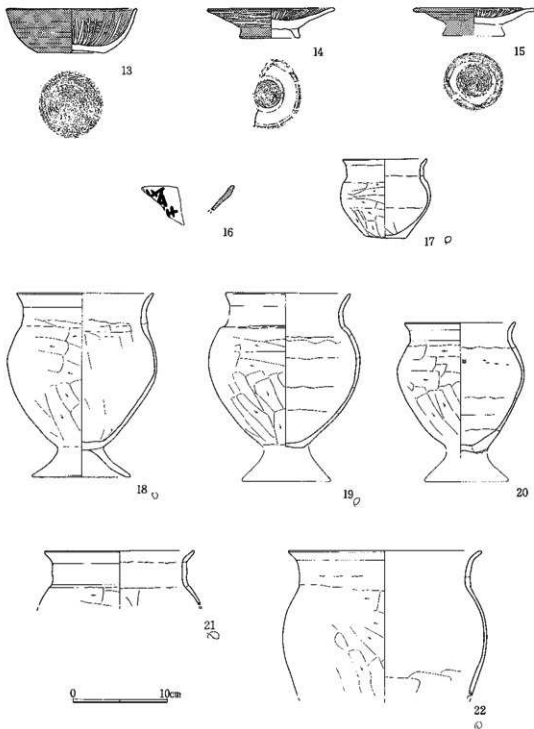
C14年代

IV 遺構と遺物

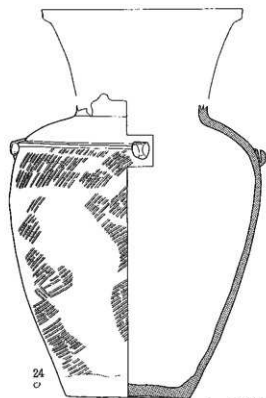
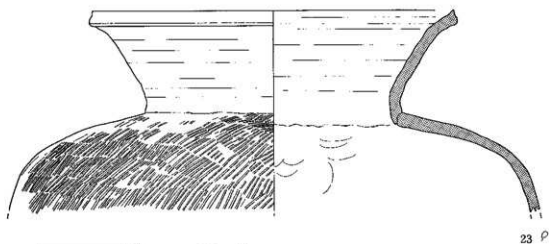


第85図 H-11号住居址出土遺物 (1:4)

1 蟹穴住居址



第86图 H-11号住居址出土遺物(1:4)



0 10cm



25
(1:4)



27 (1:3)

0 3cm



26 (1:3)

第26表 H-11号住居址出土遺物一覽表
<石器・鉄器>

採出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
25	砥石	砂岩	(8.2)	(3.7)	(3.7)	(92.3)	
26	紡錘車	鉄	(28.4)	内径 5.0	外径 (0.5)	(22.0)	
27	刀子?	鉄	(9.3)	(0.8)	(0.4)	(9.5)	先端・基部欠損

* 単位はcm, g

第87図

H-11号住居址出土遺物

第27表 H-11号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	面	装 装	備 考
1 (完)	坏 (瓶)	11.1 3.4 5.1	体部は外反し、底部平底。 小形器。完形。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
2 (完)	坏 (瓶)	13.8 4.5 6.0	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y7/1)
3 (破)	坏 (瓶)	(14.4) 4.3 5.0	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
4 (破)	坏 (瓶)	(14.6) 3.7 (5.5)	体部は外反する。底部平底。 体部一か所に「人」の刻書あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
5 (完)	高台坏 (瓶)	(14.2) 5.2 7.0	底部には高台が貼りつけられる。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
6 (破)	坏 (土)	(13.7) 4.1 (6.0)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR6/2)
7 (完)	坏 (土)	13.7 4.7 7.0	体部は丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR4/2)
8 (完)	坏 (土)	13.9 4.5 7.0	体部は外反し、底部平底。 体部二か所に「人」の刻書あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (2.5Y6/2)
9 (完)	坏 (土)	13.0 3.5 6.1	体部は外反する。底部平底。 体部一か所に「人」の刻書あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
10 (完)	坏 (土)	(13.0) 3.8 5.6	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。 体部二か所に「人」の刻書あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
11 (完)	坏 (土)	13.9 4.4 6.1	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
12 (破)	坏 (土)	13.4 4.1 5.5	体部はやや丸みをおびて外反する。底部 平底。体部一か所に「人」と不明の刻書 あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
13 (破)	坏 (土)	(13.8) 4.6 7.1	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
14 (完)	高台坏 (土)	13.4 3.1 3.1	底部には高台が貼りつけられる。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。切り離し方法不明。 黒色研磨。(ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR7/2)
15 (完)	高台坏 (土)	(17.1) 5.5 7.9	欠失するが、底部には高台が貼りつ けられている。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。(黒色処理) 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (10YR4/1)
16 ()	坏 (瓶)	— —	判読不明であるが、体部内面に刻書 あり。	外面 内面	体部ロクロヨコナテ。 ロクロヨコナテ。	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (2.5Y6/2)
17 (完)	甕 (土)	8.9 8.2 4.3	口縁部は口の字状に外反する。 胴部上半に最大径を得る。底部平底 の小形の器形。	外面 内面	口縁部ヨコナテ。 胴部・底部ヘラナテ。 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (5YR5/4)
18 (完)	付着 (土)	14.5 19.3 10.4	口縁部は口の字状に外反する。 胴部上半に最大径を得る。底部には 胴部が貼りつけられる。	外面 内面	口縁部・胴部ヨコナテ。 胴部ヘラナテ。 口縁部・胴部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (5YR6/4)
19 (破)	付着 (土)	(13.2) — —	口縁部は口の字状に外反する。 胴部上半に最大径を得る。 胴部を欠す。	外面 内面	口縁部ヨコナテ。 胴部ヘラナテ。 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を多く含む 黄褐色 (5YR6/4)

第28表 H-11号住居址出土遺物一覧表

神領 番号	器種	法量	器形の特長	調査 要	備考
20 (圖)	甕 (土)	(20.5)	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい褐色 (5YR7/4)
21 (圖)	甕 (土)	(20.6)	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい褐色 (5YR6/3)
22 (圖)	甕 (土)	(25.7)	口縁部はくの字状に外反し、最大径は口縁部にある。	外面 口縁部クロココナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部クロココナデ、胴部クロココナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/2)
23 (完)	甕 (土)	4.3	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。 内面 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい褐色 (5YR6/3)
24 (完)	甕 (土)	4.2	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。 内面 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)

なお、本住居址については、その炭化材のC14年代測定を実施してみた。その結果については付編に掲載してあるが、1050±20BPという測定値が得られた。C14年代は、そのまま暦年代に換算されるものではないが、わかりやすくするために暦年代に換算するなら、880~920年の間の年代となる。この年代幅は、考古遺物の年代観からみてもほぼ妥当な範囲におさまるものといえる。

(12) H-12号住居址

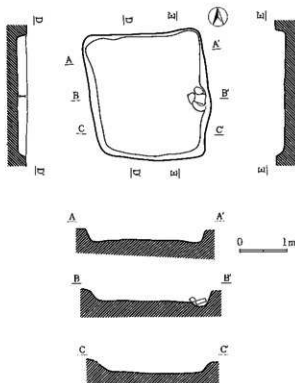
住居址 第88図

H-12号住居址は、第I区ミー26グリッドにおいて検出され、H-26号住居址に大部分を切られて存在している。

本住居址は、南北2.7m東西2.5mの小形隅丸方形を呈し、床面積5.4㎡を測り、南北軸方向はN-13'-Wを指す。壁高は、15~30cmを測る。壁溝は認められない。

ピットは認められない。

遺物はまったく検出されなかった。



第88図 H-12号住居址実測図 (1:80)

覆土は、ロームをブロック状に含む褐色土層(10YR 4/4) I層のみで、人為的な埋土と考えられた。

住居址の東壁中央には、カマドの構材と考えられる面取り軽石2個・安山岩礫1個が残されていたが、その大部分はH-26号住居址構築時に破壊されてしまったものと考えられる。

遺物

遺物はまったく検出されていない。

時期

本住居址は、遺物等がまったく検出されていないため、時期決定しがたいが、9世紀第IV四半期根岸遺跡第IV期に位置付けられるH-26号住居址以前の所産であることはいえよう。

(13) H-13号住居址

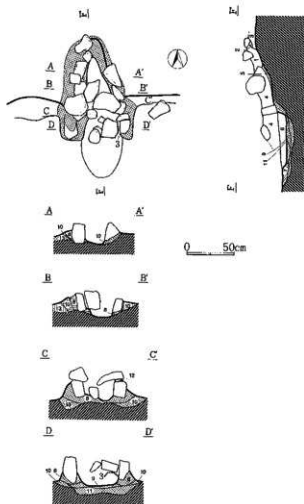
住居址 第90図

H-13号住居址は、第I区マ・ミー23・24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.5m東西4.7mの隅丸方形を呈し、床面積17.4㎡を測り、南北軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、15~20cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

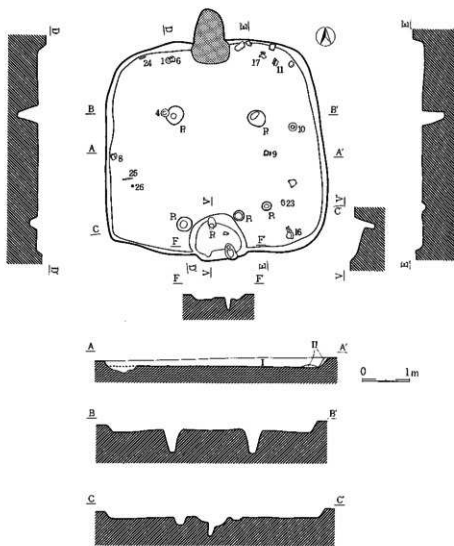
ピットは、 P_1 ・ P_2 の二個のピットが対で認められた。また、南壁際中央には、浅い掘り込みが認められ、そのなかには P_6 が認められた。また、それに接して P_3 ・ P_4 があり、やや離れて P_5 が認められた。 P_1 は40×35cm深さ50cm、 P_2 は40×35cm深さ45cm、 P_3 は30×30cm深さ20cm、 P_4 は25×20cm深さ5cm、 P_5 は20×15cm深さ10cm、 P_6 は40×35cm深さ45cmを測る。

遺物は、床面付近における良好な出



第89図 H-13号住居址カマド実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第90図 H-13号住居址実測図 (1:80)

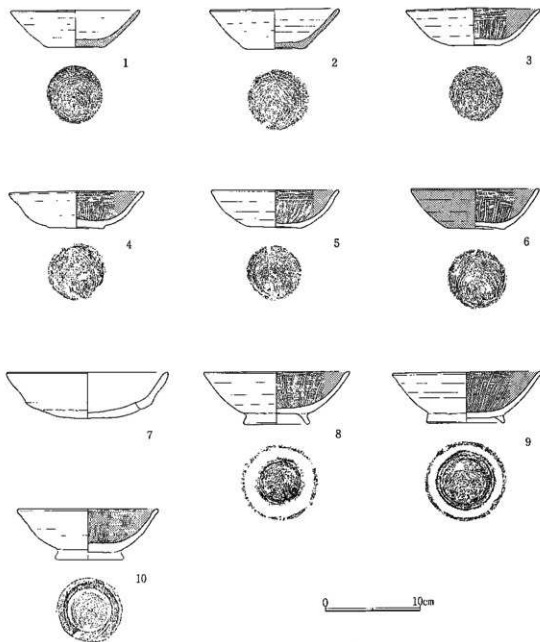
土状態のものは図中に示した。

覆土は、2層に分層された。I層は小粒スコリアを多く含むパミスを若干含む黒色土層(10YR 2/1) II層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層(10YR 2/3)であった。

カマド 第89図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、天井部と左右両袖の一部をとどめていた。また、左右両袖の芯には、面取り軽石と安山岩・集塊岩が埋められていた。また、その各所にカマドの構材である面取り軽石・安山岩・集塊岩が露呈していた。

1 新穴住居址

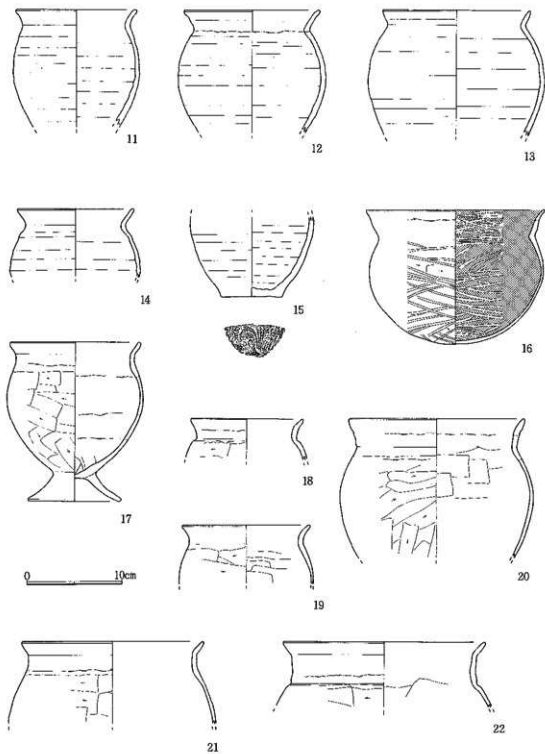


第91図 H-13号住居址出土遺物 (1:4)

カマド本体の上部からは、5・6・7の須恵器環が出土している。また、その前庭部からは3の須恵器環が出土した。

本カマドの覆土は、6層に分層された。1層は若干の焼土が混じる赤褐色土層(5 YR 4/6)、2層は焼土のブロック状堆積である赤褐色土層(5 YR 5/8)、3層は焼土が僅かに混じる暗褐色土

IV 遺構と遺物



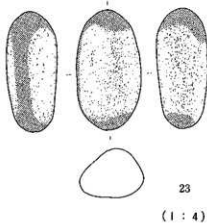
第92図 H-13号住居址出土遺物 (1:4)

第29表 H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

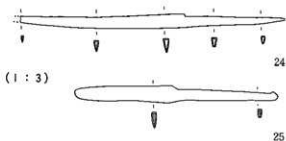
種別 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	面	整	備 考
1 (完)	杯 (灰)	13.6 3.9 6.1	体部は外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
2 (完)	杯 (灰)	13.7 4.1 6.2	体部は外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含む黄褐色 (5Y8/3)
3 (完)	杯 (土)	14.2 4.0 5.8	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。完形品。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)
4 (完)	杯 (土)	14.2 4.2 6.1	体部はやや丸みをおびて外反した後 口縁部でさらにやや外反する。底部 平底。完形品。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)
5 (完)	杯 (土)	13.5 3.9 5.6	体部はやや丸みをおびて外反した後 口縁部でさらにやや外反する。底部 平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)
6 (完)	杯 (土)	13.6 4.2 6.2	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR6/4)
7 (完)	杯 (土)	17.0 4.8	体部はぶい壁をもつて外反する。 底部は覆平先底。 肉耳。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部ヘラケズリ、切り離し方法不明。 体部ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み ぶい黄褐色 (5YR7/6)
8 (開)	高台杯 (土)	(15.4) 5.5 7.0	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部には高台が貼りつけられる。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロコナデ。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み ぶい黄褐色 (7.5YR7/4)
9 (完)	高台杯 (土)	(15.8) 5.3 8.2	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部には高台が貼りつけられる。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切りの後、ロクロコナデ。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み ぶい黄褐色 (7.5YR7/3)
10 (完)	高台杯 (土)	14.8 —	体部は外反する。底部に貼りつけら れる高台部が欠く。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み ぶい黄褐色 (7.5YR7/4)
11 (開)	甕 (土)	(12.7) —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 内面	口縁部・胴部ロクロコナデ。 (ロクロ右回転) 口縁部・胴部ロクロコナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/3)
12 (開)	甕 (土)	<14.3 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 内面	口縁部・胴部ロクロコナデ。 (ロクロ右回転) 口縁部・胴部ロクロコナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (7.5YR6/4)
13 (開)	甕 (土)	<15.5 —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 内面	口縁部・胴部ロクロコナデ。 (ロクロ右回転) 口縁部・胴部ロクロコナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (7.5YR7/3)
14 (開)	甕 (土)	<12.2 — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 (ロクロ右回転) 口縁部・胴部ロクロコナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/3)
15 (開)	甕 (土)	— — (6.5)	底部平底。	外面 内面	胴部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 胴部ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)
16 (開)	甕 (土)	18.7 14.1	口縁部はくの字状に外反する。 胴部は球状を呈し、底部先底。	外面 内面	コナデ。 胴部・底部ヘラミガキ。 黒色研磨。	胎土は金雲母を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)
17 (開)	内付甕 (土)	<13.7 16.7 9.8	口縁部はコの字状に外反する。 脚台部がハの字状に開く。	外面 内面	口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ、脚台部コナデ。 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい黄褐色 (7.5YR6/3)
18 (開)	甕 (土)	<11.8 —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は金雲母を含みに ぶい黄褐色 (10YR6/3)
19 (開)	甕 (土)	(13.5) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 内面	口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は金雲母を含みに ぶい黄褐色 (10YR7/4)

第30表 H-13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標記番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
20 (画)	甕 (土)	(18.4) — —	口縁部はコの字状に外反する。 最大径は、胴部上半。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR6/6)
21 (画)	甕 (土)	(19.1) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR6/6)
22 (画)	甕 (土)	(21.2) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は金雲母を含みに ふい褐色 (7.5YR7/4)



第23図 H-13号住居址出土遺物



第31表 H-13号住居址出土遺物一覧表

〈石器・鉄器・銭〉

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
23	磨石	安山岩	12.6	6.7	5.3	630	亮砂
24	刀子	鉄	(20.8)	1.1	0.5	(17.0)	先端部欠損
25	刀子	鉄	16.0	1.3	0.4	(16.5)	ほぼ完形
26	銅銭	鍍銀神貨	2.0	2.0	0.1	1.0	859年初鋳

※ 単位はcm, g

層(7.5YR 3/4)、4層は焼土・カーボンが僅かに混じる暗赤褐色土層(5 YR 3/3)、5層は焼土・灰が僅かに混じる褐色土層(7.5YR 4/6)、6層は焼土を多量に含み灰・カーボンを若干含む暗赤褐色土層(5 YR 3/6)であった。

カマドの構築土は、7～13層である。7層は焼土が僅かに混じる極暗褐色土層(7.5YR 2/3)、8層は黒褐色土と粘土が混じる暗赤褐色土層(5 YR 3/4)、9層は焼土を多量に含むにふい赤褐色土層(5 YR 4/3)、10層はローム粒子が混じる褐色土層(7.5YR 4/6)、11層はローム粒子が多量に混じる褐色土層(10YR 4/6)、12層は黒褐色粘土層(10YR 3/1)、13層はローム粒子が多量に混じる褐色土層(10YR 4/4)であった。

遺物 第91・92・93図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて多い。須恵器では環、土師器では環・高台付環・甕が検出されている。

1・2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器環である。

3～6は、回転糸切り未調整の底部をみせる土師器環で、3～5は内面黒色研磨、6は内外面黒色研磨なされたものである。

7は、体部に鈍い稜をもつ、土師器環である。銚師原遺跡群の当該期土師器環には認められなかった器形といえる。

8～10は、回転糸切りによる土師器高台付環で、内面黒色研磨のなされたものである。

11～15は、ロクロ整形による土師器小形甕で、このうち15は回転糸切り未調整の底部をみせている。

16は、内面黒色研磨のなされた土師器小形球調整で、きわめて器内の薄いものである。

17は、コの字状口縁の土師器台付甕である。

18～22は、コの字状口縁の土師器甕である。このうち18・19は小形品である。

23は、楕円形の河床礫をもちいた磨石で、磨痕はトーン部において認められる。

24・25は、鉄製の刀子である。このうち24の茎子の部分は約8cmを測り、先端が鋭く尖っている。先端を欠損するが、刃渡り8.5cm前後となるものと考えられるものである。

図版七十九26の古銭は、皇朝十二銭の饒益神寶（859年初鑄）であり、文字がかすかに判読できる。

時期

本住居址は、9世紀第Ⅳ四半期、根岸遺跡第Ⅳ期に位置付けられよう。

(14) H-14号住居址

住居址 第94図

H-14号住居址は、第Ⅰ区マー24グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.6m東西3.1mの隅丸長方形を呈し、床面積9.3㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は、20cm前後を測る。壁溝は認められない。床面は、全体に平坦で硬質な貼り床となっている。住居址中央部には、安山岩礫20個ほどが散布していた。おそらくは住居廃絶時に廃棄されたものと考えられる。

ピットは認められない。

遺物は、1・2の須恵器環、6・7の土師器甕底部が床面近くより出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

覆土は、小粒スコリア・細粒バミスをよく含む黒色土層（I層 10YR 2/1）のみであった。

カマド 第95図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、その大半は破壊されており、僅かに左袖の痕跡をとどめているのみであった。住居址の床面に散布する礫が、その構材であるかどうかは不明である。

本カマドの土層は、4層に分層された。1層は焼土を含む暗赤褐色土層(5 YR 3/4)、2層は焼土を含みカーボンを僅かに含む黒褐色土層(7.5YR 3/1)、3層は暗褐色土層(10YR 3/4)、4層は焼土を含みカーボンを僅かに含む暗赤褐色土層(5 YR 3/6)であった。

遺物 第96図

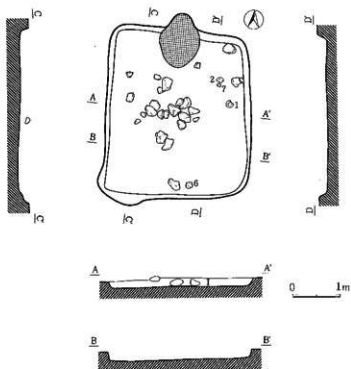
遺物の出土量は、他の住居址とくらべて多くない。須恵器では坏

・甕、土師器では坏・甕が検出されている。1～4は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

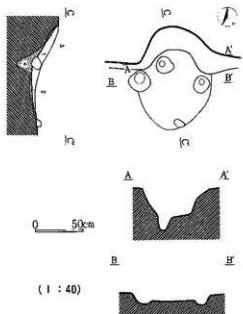
5は土師器小彩球胴甕の胴下半部である。6・7も土師器甕の胴下半部である。

時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

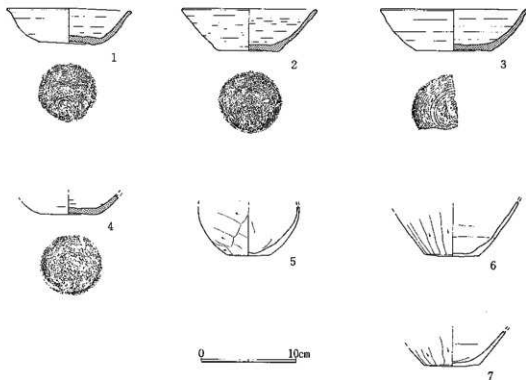


第94図 H-14号住居址実測図(1:80)



第95図 H-14号住居址カマド実測図

1 竪穴住居址



第96図 H-14号住居址出土遺物実測図 (1:4)

第32表 H-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

神図番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	杯 (須)	13.1 3.7 5.0	体部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む褐色 (7.5YR6/2)
2 (破)	杯 (須)	(14.2) 4.4 6.3	体部は外反し、底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む褐色 (10YR4/1)
3 (破)	杯 (須)	(15.4) 4.4 (8.2)	体部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む褐色 (7.5YR7/6)
4 (破)	杯 (須)	- (6.6)	体部は外反する。底部平底。	外面 内面	体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)
5 (破)	甕 (土)	- (4.8)	胴部は線状に彫らむ。底部平底。小形。	外面 内面	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに おい褐色 (7.5YR5/3)
6 (完)	甕 (土)	- 5.6	底部平底。	外面 内面	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに おい赤褐色 (5YR5/4)
7 (完)	甕 (土)	- 5.6	底部平底。	外面 内面	胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに おい赤褐色 (5YR5/4)

(15) H-15号住居址

住居址 第97図

H-15号住居址は、第I区マー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H-16号住居址を切って存在している。

本住居址は、南北4.1m東西4.3mの隅丸方形を呈し、床面積14.6㎡を測り、南北軸方向はN-5°-Wを指す。壁高は、15~20cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。住居内には、軽石と安山岩礫が散布していた。

ピットは、P₁からP₄の四個のピットが対で認められた。P₁は40×35cm深さ50cm、P₂は40×30cm深さ50cm、P₃は40×40cm深さ45cm、P₄は50×40cm深さ50cmを測る。

遺物は良好な状態で出土しているのはカマド中からで、その他遺物はいずれも覆土中からの出土である。

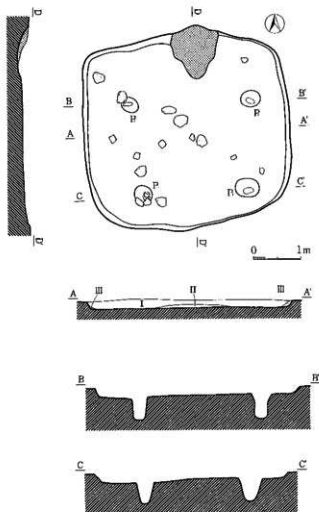
覆土は、3層に分層された。

I層は細粒パミスを多く含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はカーボン・焼土を若干含む黒色土層(10YR 1.7/1)、III層はローム粒子を多く含む暗褐色土層(10YR 3/4)であった。

カマド 第98図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東寄りにあり、その天井部は破壊されていたが、左右両袖の一部と、支脚石(a・b)をとどめていた。カマドの左右両袖には、集塊岩・安山岩・軽石が、支脚には安山岩が据えられていた。

本カマドの覆土は、2層に分層された。1層は、焼土・カーボンをわずかに含む黒褐色土層(10YR 3/2)、2層は褐色焼土層(10YR



第97図 H-15号住居址実測図(1:80)

4/6) であった。

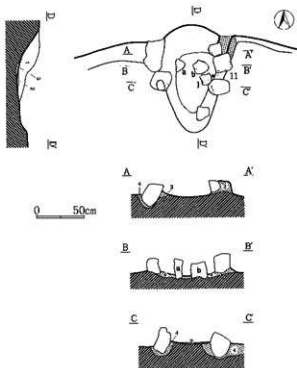
また、カマドの構築土は2層からなり、3層はロームと黒色土が混じる黒褐色土層 (10YR 2/3)、4層は若干のロームの混じる黒色土層 (10YR 2/1) であった。

本カマド中からは、1の灰釉陶器が欠損した状態で検出されている。また、11の台付甕の台脚部が出土している。

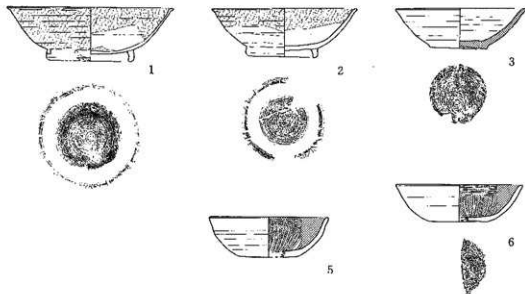
遺物 第99・100図

遺物は、灰釉陶器では壺・長頸瓶、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、土師器では坏・甕が検出されている。

1・2は灰釉陶器壺である。比較的精選された灰白色の胎土をみせ、釉は刷毛掛けによるものである。名古屋大学斎藤孝正氏の鑑定によるならば、双方とも東濃系光ヶ丘1号窯期に位置付

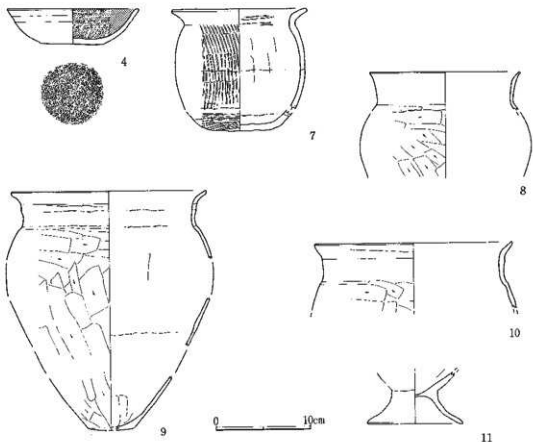


第98図 H-15号住居址カマド実測図 (1:40)



第99図 H-15号住居址出土遺物 (1:4)

IV 遺構と遺物



第10図 H-15号住居址出土遺物 (1:4)

けられるものということであった。このほか、東濃系光ヶ丘1号窯期比定の灰釉陶器塊の破片がいくつか認められた。また、猿投系黒笹九十(K-90)号窯期比定の灰釉陶器長頸瓶頸部の破片も認められた。

3は、須恵器環で、回転糸切り未調整の底部をみせている。4・6も回転糸切り未調整の底部をみせている土師器環である。また、5は切り離し方法不明で底部に手持ちヘラケズリのなされたものである。

7は、土師器小形甕で外面に顕著な刷毛目状調整の認められるものである。当地方にはあまり認められないめずらしい器形で、異なる胎土もみせている。

8～10はコの字状口縁の土師器甕である。

11は、土師器台付甕の台脚部である。

時 期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

第33表 H-15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

神代番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (宗)	埴 (灰)	17.5 5.6 9.3	底部は丸みをおびて外反し、口縁部は玉縁となる。底部には高台が貼りつけられる。(東瀬光ヶ丘1号遺跡北定)	外面 底部ロクロヨコナテ。(輪は刷毛掛け) 底部回転ヘラケズリ。切り廻し方法不明。 内面 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (7.5Y7/1)
2 (完)	埴 (灰)	15.3 5.0 7.6	底部は丸みをおびて外反し、口縁部は玉縁となる。底部には高台が貼りつけられる。(東瀬光ヶ丘1号遺跡北定)	外面 底部ロクロヨコナテ。(輪は刷毛掛け) 底部回転ヘラケズリ。切り廻し方法不明。 内面 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (7.5Y8/1)
3 (完)	埴 (灰)	13.7 4.2 6.0	底部は外反し、底部平底。	外面 底部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (5Y7/2)
4 (完)	埴 (土)	13.8 3.7 6.6	底部はやや丸みをおびて外反し、口縁部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 底部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は精選されずにおい黄褐色 (10YR6/3)
5 (完)	埴 (土)	12.6 4.2 6.5	底部はやや丸みをおびて外反し、口縁部でさらにやや外反する。底部平底。	外面 底部ロクロヨコナテ。 底部ヘラケズリ。切り廻し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は精選されずにおい黄褐色 (10YR7/4)
6 (完)	埴 (土)	13.3 3.9 6.0	底部はやや丸みをおびて外反する。底部平底。	外面 底部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は精選されずにおい黄褐色 (5YR5/4)
7 (完)	埴 (土)	14.3 13.0 6.6	口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈し、底部平底。当地方ではあまり見られない器形。	外面 口縁部ヨコナテ。 胴部刷毛(兼)目状調整、底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は精選されず黄きあまい灰白色 (7.5Y8/2)
8 (完)	埴 (土)	< 6.6 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部は球状を呈し、底部平底。	外面 口縁部ヨコナテ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
9 (完)	埴 (土)	20.5 25.2 4.8	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に拡大径をもち、底部平底。	外面 口縁部ヨコナテ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を含みに おい黄褐色 (5YR6/4)
10 (完)	埴 (土)	(20.8) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナテ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナテ、胴部ヘラナテ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
11 (完)	凸付環 (土)	— 10.0	脚台部は「ハの字」状にひろがる。	外面 脚台部ヨコナテ。 内面 脚台部ヨコナテ。	胎土は砂粒を含みに おい黄褐色 (5YR5/4)

(16) H-16号住居址

住居址 第101図

H-16号住居址は、第I区マー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H-15号住居址に切られて存在している。

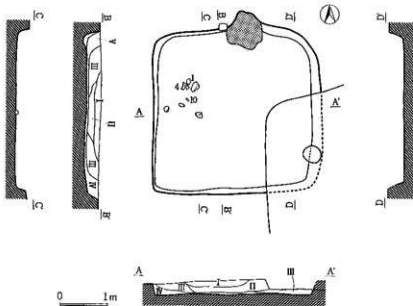
本住居址は、南北3.5m東西3.5mの小形隅丸方形を呈し、床面積10.3㎡を測り、南北軸方向はN-4-Wを指す。壁高は、25-30cmを測る。壁溝は、認められない。床面は、全体に硬質ではあるが貼り床となっていない。

ピットは認められない。

覆土は、5層に分層され、人為的な埋土の様相を呈していた。

I層はローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR 3/2)、II層はローム粒子をよく含む黒色土層

IV 遺構と遺物



第100図 H-16号住居址実測図 (1:80)

(10YR 2/1)、III層はローム粒子をあまり含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、IV層はローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR 3/2)、V層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)であった。

遺物は良好な出土状態を示すものは認められない。また、住居址の床面上よりやや浮いて馬歯が検出された。おそらくは、住居廃絶後に廃棄されたものであろう。

カマド 第102図

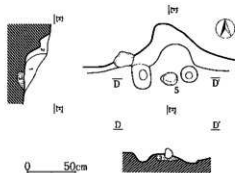
カマドは、住居址の北壁中央にあり、完全に破壊されている状況にあった。その火床には支脚石が残置され、その上には5の須恵器高台付坏が認められた。

本カマドの覆土は、2層に分層された。1層は焼土を多量に含む暗赤褐色土層(5 YR 3/4)、2層は焼土・カーボン等をまったく含まない暗褐色土層(10YR 3/4)であった。

また、3層はカマドの構築土で、焼土をよく含む黒色埋土(10YR 2/1)であった。

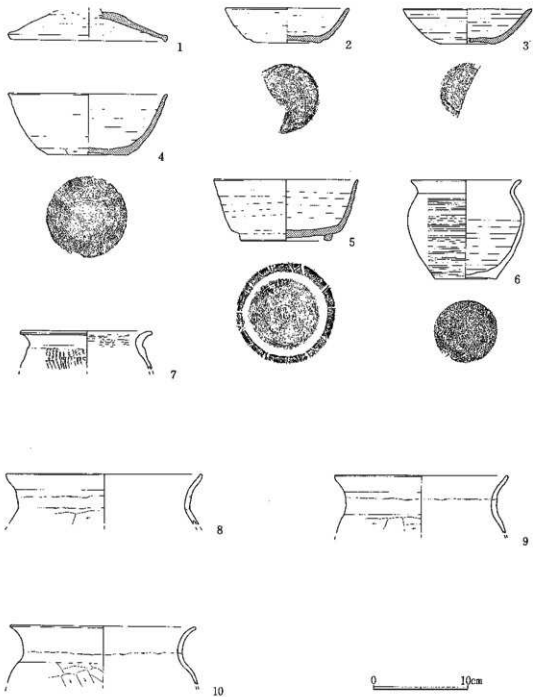
遺物 第103図

遺物は、須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕、



第102図 H-16号住居址カマド実測図 (1:40)

I 第六层遗址



第104图 H-16号住居址出土遗物(1:4)

第34表 H-16号住居址出土遺物一覧表(土器)

標頭 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	甕 (環)	— — (16.8)	ツمام部は、形状不明。	外面 ロクロコナデ。 天井部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(7.5Y5/1)
2 (破)	環 (環)	(13.0) 3.7 (7.0)	底部はやや丸みをおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(7.5Y6/1)
3 (破)	環 (環)	(13.6) 3.7 (5.5)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。(カキ目状) 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(7.5Y4/1)
4 (破)	環 (環)	(15.8) 6.4 8.4	体部は丸みをおびて外反し、口縁部でさらにやや外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切りの後、両手持ちヘラケズリ。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰黄色(2.5Y6/2)
5 (完)	高台環 (環)	15.1 6.4 9.5	体部は直線的に立ち上がり、底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナデ。自然油煙付着。 底部回転ヘラケズリ。切り離し方法不明。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(7.5Y5/1)
6 (破)	甕 (土)	(11.7) 10.4 6.6	口縁部はくの字状に外反し、底部平底。小形。	外面 体部ロクロコナデ。(カキ目状) 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ふい黄色(7.5YR6/4)
7 (破)	甕 (土)	(13.9) — —	口縁部は短く外反し、玉縁となる。小形。	外面 胴部刷毛目状調整。 口縁部コナデ。 内面 胴部ヘラナデ、口縁部コナデ。	胎土は砂粒を多く含みに ふい黄色(10YR7/2)
8 (破)	甕 (土)	(20.7) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい黄色(7.5YR7/2)
9 (破)	甕 (土)	(18.4) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい黄色(7.5YR7/3)
10 (破)	甕 (土)	(19.6) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい黄色(7.5YR7/2)

土師器では甕が検出されている。

1は、須恵器蓋で、ツمام部の形状は不明である。

2～4は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器環である。また、5は須恵器高台付環であるが、その切り離し方法は不明である。

6は、外面にいわゆるカキ目状調整の認められるロクロ土師器小形甕で、底部は回転糸切り未調整である。

また、7は外面に刷毛目状調整の認められるもので、H-15号住居址の7と同様当地方にはあまり認められないめづらしい器形といえる。

8～10は、コの字状口縁の土師器甕である。

時 期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(17) H-17号住居址

住居址 第104図

H-17号住居址は、第I区マー25グリッドにおいて検出された。

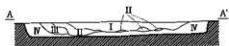
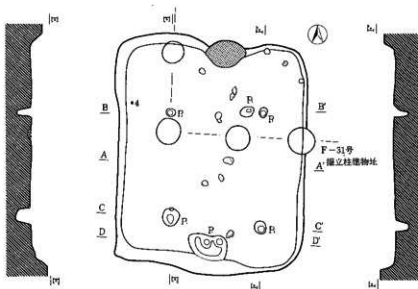
本住居址は、F-31号掘立柱建物址に切られて存在している。

本住居址は、南

北4.8m 東西4.0mの隅丸長方形を呈し、床面積16.0㎡を測り、南北軸方向はN-5-Wを指す。壁高は、25~30cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P₁~P₄の四個のピットが対で認められた。このほかP₁の西脇にはP₅が、西南壁際中央にはP₆が認められた。P₁は22×20cm深さ30cm、P₂は20×18cm深さ30cm、P₃は40×35cm深さ30cm、P₄は30×25cm深さ25cm、P₅は30×20cm深さ12cm、P₆は90×60cm深さ25cmを測る。

覆土は、4層に分層された。I層はバミスをよく含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はバミスよく含む黒色土層(10YR 1.7/1)、III層はバミスをよく含むローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 2/



0 1m



第104図 H-17号住居址実測図(1:80)

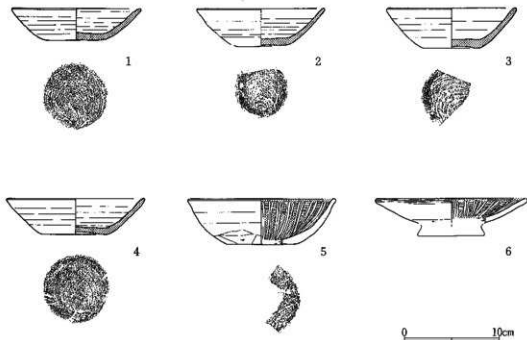
3)、IV層はパミスをよく含むローム粒子を若干含む黒色土層 (10YR 2/1) であった。

カマド 第105図

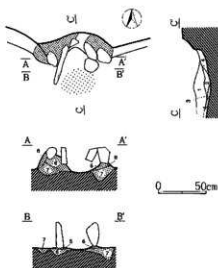
カマドは、住居の北壁中央にあるが、ほぼ大半を破壊された状態にあった。ただし袖石の一部は残っていた。その構材には、軽石・安山岩礫が用いられており、5～7層が構築土として用いられていた。5層は黒色土層 (10YR 2/1)、6層はローム粒子を含む黒褐色土層 (7.5YR 3/4)、7層はローム粒子を含む黒褐色土層 (10YR 3/4) であった。

本カマドの覆土は、4層に分層された。1層はカーボンを若干含む黒褐色土層 (5 YR 3/1)、2層は灰を多量に含む明赤褐色土層 (5 YR 5/6)、3層は赤褐色焼土層 (2.5YR 4/8)、4層は焼土を含まない黒褐色土層 (5 YR 2/1) であった。

遺物 第106図



第106図 H-17号住居址出土遺物 (1 : 4)



第105図

H-17号住居址カマド実測図 (1 : 40)

第35表 H-17号住居址出土遺物一覧表(土器)

種類番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	測 量	備 考
1 (先)	環 (須)	13.6 3.3 6.6	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰褐色(7.5YR6/2)
2 (完)	環 (須)	13.5 4.0 5.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む淡灰色(5YR7/3)
3 (編)	環 (須)	(13.6) 4.2 (6.2)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(5Y6/1)
4 (皿)	環 (須)	(14.5) 3.8 7.1	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色(10Y7/1)
5 (皿)	環 (土)	(15.7) 4.8 (7.5)	体部は丸みをおびて外反し、口唇部でさらに僅か外反する。底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 黒色硬質。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい褐色(7.5YR5/3)
6 (鉢)	皿 (土)	- 5.6	底部には高台が貼りつけられるものと考えられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 切り離し方法不明。 内面 黒色硬質。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい褐色(7.5YR7/3)

遺物の出土量は、他の住居址とくらべると少ない。須恵器では環・甕、土師器では環・甕が検出されている。

1～4は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器環である。

5は、内面黒色の土師器環で、その切り離し方法は不明である。

6は、内面黒色の土師器高台付皿である。

時 期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(18) H-18号住居址

住居址 第107図

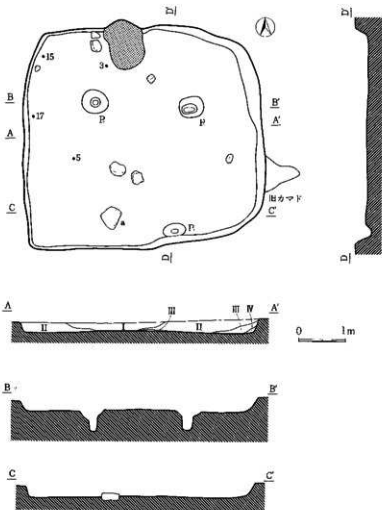
H-18号住居址は、第Ⅰ区マ-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.6m東西5.1mの隅丸方形を呈し、床面積19.8㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められない。床面はかなり硬質な貼り床となっている。また、南壁際には平坦な安山岩礫(a)が設置されていた。

ピットは、P₁・P₂の二個のピットが対で認められた。このほか南壁際にはP₃が認められた。P₁は55×45cm深さ45cm、P₂は55×50cm深さ50cm、P₃は50×25cm深さ15cmを測る。

遺物は、5の須恵器環、15の土師器甕底部、17の須恵器甕口縁部破片が床面直上より出土している。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

IV 遺構と遺物



第109図 H-18号住居址実測図 (1:80)

覆土は、4層に分層された。I層は細粒パミス・スコリアをよく含む黒褐色土層 (10YR 2/2)、II層は細粒パミス・スコリアをよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、III層は細粒パミス・スコリアをよく含む黒褐色土層 (10YR 2/2)、IV層はローム粒子をよく含む暗褐色土層 (10YR 3/4)であった。

カマド 第108・109図

本住居址においてはカマドの作りかえが認められ、その場所に移動があった。その新しいカマドは北壁やや西よりに、その古いカマドは東壁南よりに認められた。

まず、北壁の新しいカマドであるが (第108図)、ほぼ完全に破壊された状態にあり、僅かに左右両袖の痕跡をとどめるのみであった。その構材には面取り軽石と安山岩礫が用いられていた

新しいカマドの土層は、6層に分層された。1層は焼土をよく含む若干のカーボンを含む黒色土層(7.5YR 2/1)、2層は粘性のある黒褐色土層(7.5YR 3/2)、3層は褐色焼土層(7.5YR 4/6)、4層は粘土を僅かに含むにふい黄褐色土層(10YR 4/3)、5層は粘土を僅かに含む灰黄褐色土層(10YR 4/3)、6層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR 4/4)であった。

一方、旧カマドは(第109図)完全に取り壊され、すでにその部分には新しい壁が構築された状態にあった。その土層は、5層に分層された。1層は多量のカーボンを含む黒色土層(5YR 1.7/1)、2層は若干の焼土を含む黒色土層(5YR 2/1)、3層は焼土を多く含む黒褐色土層(5YR 2/2)、4層は赤褐色焼土層(5YR 4/8)、5層は焼土・カーボンをまったく含まない黒褐色土層(5YR 2/2)であった。

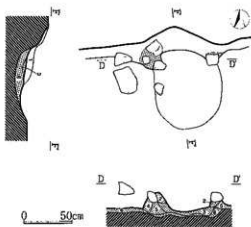
遺物 第110・111図

遺物は、緑釉陶器塊の破片、灰釉陶器塊、須恵器では蓋・坏・高台付皿・甕、土師器では坏・甕が検出されている。そのほか、皇朝十二銭の隆平永寶が検出されている。

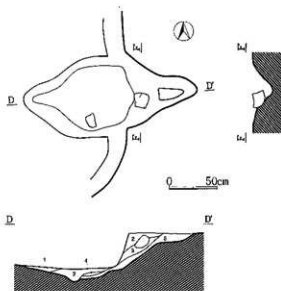
1は、ツمامミ部を持たない須恵器蓋である。

2・3は灰釉陶器塊である。2は釉が刷毛掛けによるもので、東濃系光ヶ丘1号窯期に比定される製品であろう。3は窯址系および窯期を判断し得なかった。

4は回転糸切りの底部をみせる須恵器高台付皿である。また、5・6は回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

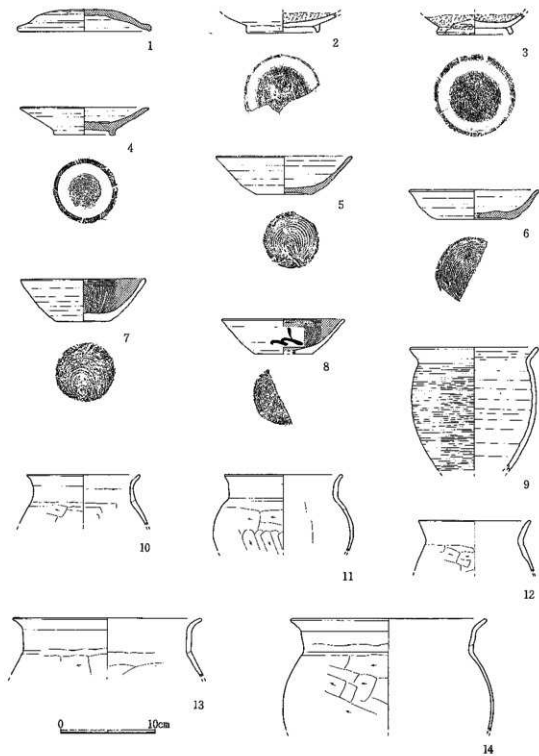


第108図 H-18号住居址カマド実測図(1:40)



第109図 H-18号住居址旧カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物



第110圖 H-18号住居址出土遺物 (1:4)

第36表 H-18号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

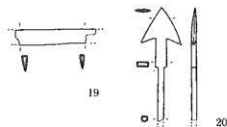
標記 番号	器種	法量	形 容 の 特 徴	調 査	備 考
1 (完)	壺 (灰)	2.3 13.9	ツマミ部を有さない。	外面 体部ロクロコナデ、大井部手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選され、灰白色 (7.5Y6/1)
2 (完)	壺 (灰)	— 7.7	底部には高台が貼りつけられる。 (東渡光ヶ丘1号遺跡比定)	外面 体部ロクロコナデ。(輪は刷毛掛け) 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰白色 (7.5Y7/1)
3 (破)	壺 (灰)	— 8.0	底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナデ。(輪は浪掛掛け) 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選され、灰白色 (7.5Y7/1)
4 (高台割 破)	高台割 (灰)	(13.6) 2.9 6.5	底部にはすその開かない低い高台が 貼りつけられる。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整、ロクロコナデ。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (5Y7/1)
5 (破)	塚 (灰)	(14.3) 4.0 5.8	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み、灰色 (7.5Y6/1)
6 (破)	塚 (灰)	(13.0) 4.3 5.4	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰白色 (7.5Y8/1)
7 (破)	塚 (土)	(13.2) 4.4 5.9	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR6/4)
8 (破)	塚 (土)	(12.9) 3.7 6.0	体部は外反し、底部平底。 体部に「久」の墨書あり。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/3)
9 (破)	甕 (土)	(13.5) —	口縁部は短く外反する。	外面 口縁部ロクロコナデ。 胴部ロクロコナデ。(カネ目状) 内面 口縁・胴部ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
10 (破)	甕 (土)	(11.9) —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
11 (破)	甕 (土)	(12.4) —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
12 (破)	甕 (土)	(11.7) —	口縁部はくの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
13 (破)	甕 (土)	(19.9) —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
14 (破)	甕 (土)	(20.5) —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部コナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部コナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
15 (完)	甕 (土)	— 4.3	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ。 底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
16 (破)	台付甕 (土)	— —		外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (7.5YR7/3)
17 (破)	甕 (灰)	(24.6) —	口縁部はラッパ状に外反し、口唇部 が帯状をなす。	外面 口縁部コナデ。 内面 口縁部コナデ。	胎土は精選されず砂粒を多く含み灰色 (5Y4/1)

第37表 H-18号住居址出土遺物一覧表

< 銭・鉄器 >

探検番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
18	銅銭	隆平永寶	2.5	2.5	0.2	(0.9)	796年初鋳
19	刀子	鉄	(6.4)	(1.2)	(0.4)	(6.5)	先端・基部欠損
20	鉄鏃	鉄	(9.0)	3.1	(0.4)	(9.0)	基部欠損

※ 単位はcm, g



第38図 H-18号住居址出土遺物 (1:3)

7・8は、回転糸切り、内面黒色研磨のなされた土師器坏である。8には「久」?の墨書が認められる。

9は、外面にカキ目状調整の認められる土師器小形甕である。

10～14はコの字状口縁の土師器甕で、このうち10～12は小形品である。

16は、土師器台付甕の胴下半部である。

17は須恵器甕の口縁部である。

なお、緑釉陶器塊の破片は、小破片であるため図示し得なかった。

このほか、図版七十七18の、皇朝十二銭の隆平永寶(796年初鋳)が検出されている。

また、19・20は鉄器で、19が刀子の刃部、20は基部を欠損した鉄鏃である。

時 期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

(19) H-19号住居址

住居址 第112図

H-19号住居址は、第I区マー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.2m東西3.6mの隅丸長方形を呈し、床面積10.0m²を測り、南北軸方向はN-9°-Wを指す。壁高は、10～20cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は貼り床ではないが全体にかなり硬質なものとなっている。なお、その北西コーナー・南西コーナーはゆるくくぼんでいた。

ビットは西壁際に、P₁が認められたのみである。P₁は25×20cm深さ10cmを測る。

遺物は、良好な出土状態を示すものは認められなかった。

覆土は、細粒バミスをよく含む黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

カマド

1 竪穴住居址

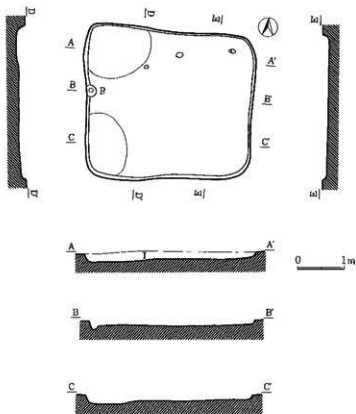
本住居址においてはカマドは認められなかった。本来的にカマドを持たない遺構と考えられよう。

遺物

遺物はきわめて僅かしか検出されておらず、図示できうるものがなかった。須恵器環・甕、土師器甕の破片十数片が検出されたのみにとどまった。

時期

本住居址は時期推定の手掛かりとなる遺物がごく少量のため、正確な位置付けをなし得ない。



第112図 H-19号住居址実測図(1:80)

(20) H-20号住居址

住居址 第113図

H-20号住居址は、第I区マ

ー25グリッドにおいて検出され、F-33号掘立柱建物址に切られて存在している。

本住居址は、南北4.2m東西4.7mの隅丸長方形を呈し、床面積17.5㎡を測り、南北軸方向はN-1'-Wを指す。壁高は、20cmを測る。壁溝は、幅20~30cm深さ5~15cm程度のもので、住居址の北半分を除いてほぼ全周している。また、西側にはいわゆる間仕切り溝が認められた。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

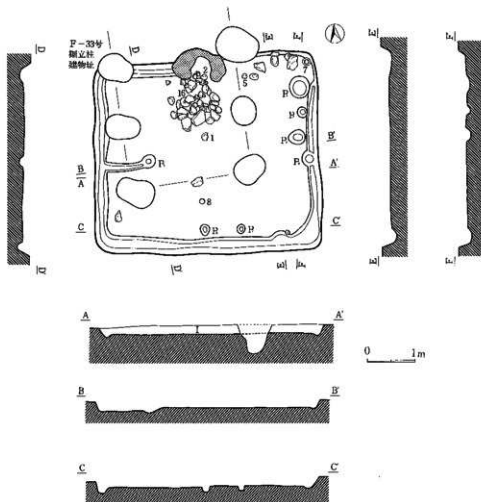
カマドの前方には、カマドの構材であろうか軽石・安山岩礫の集積が認められた。

ビットは、東壁際にP₁~P₄が認められ、また、いわゆる間仕切り溝の末端にP₆が、南壁際にP₆・P₇が対で認められた。

P₁は45×45cm深さ5cm、P₂は25×20cm深さ10cm、P₃は45×30cm深さ10cm、P₄は30×25cm深さ5cm、P₅は30×25cm深さ10cm、P₆は25×20×15cm、P₇は20×15cm深さ10cmを測る。

遺物は、1の須恵器環・5と7須恵器高台付環が床面直上より出土している。このうち、1・5は正上位で、7は倒立して検出された。また、16の石臼はカマド前方の集積中にあった。この他遺物は、いずれも覆土中からの出土である。

IV 遺構と遺物



第113図 H-20号住居址実測図 (1:80)

覆土は、細粒パミス・小粒スコリアをよく含む黒色土層 (10YR 2/1) I層のみであった。

カマド 第114図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、その大部分を破壊されている状態にあった。ただし、僅かにその左右の袖の芯は残っていた。その袖部の芯には軽石・安山岩・集塊岩が用いられ、明褐色土層 (8層 7.5YR 7/1) で固められていた。また、カマドの火床部には、ローム粒子を多く含む褐色土層 (9層 7.5YR 4/4)、焼土を多く含む褐色土層 (10層 7.5YR 4/3) が貼られていた。

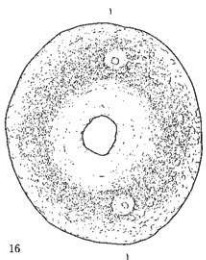
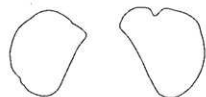
また、カマドの覆土は、7層に分層された。1層はカマドの構材である粘土と焼土を若干含む暗褐色土層 (7.5YR 3/4)、2層は焼土を若干含む黒褐色土層 (5 YR 3/1)、3層は焼土を多量に

含む暗赤褐色土層 (5 YR 3/4)、4層はカーボン・焼土・灰を含む褐色土層 (10YR 4/6)、5層はカーボン・焼土・灰を含むにふい赤褐色土層 (5 YR 4/3)、6層は焼土・灰を含むにふい黄褐色土層 (10YR 4/3)、7層は赤褐色焼土層 (5 YR 4/6)であった。

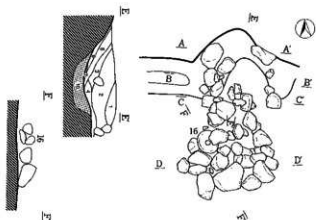
なお、カマドの前方に散乱していた石材は、カマドの構材としてはやや多すぎるので、他のものなのかもしれない。

遺物 第115・116・117図

遺物は、須恵器では坏・高台付坏・長頸瓶・甕、土師器では甕が検出されている。



1 竪穴住居址



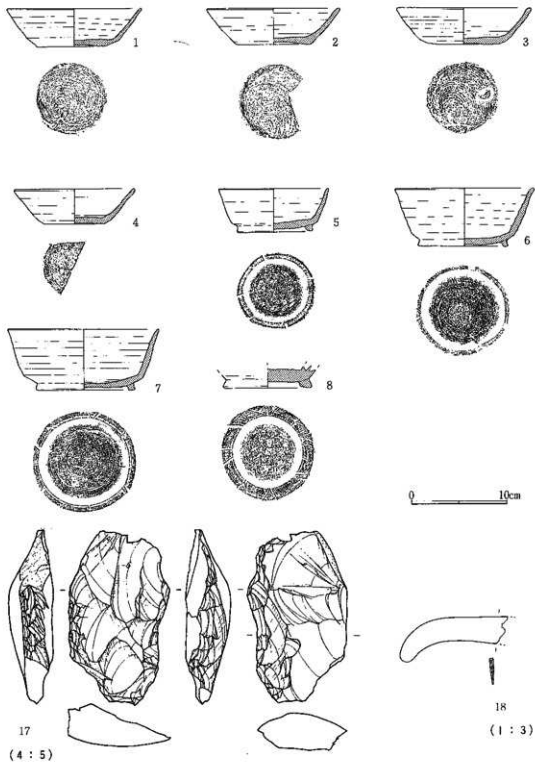
0 50cm



第114図 H-20号住居址カマド実測図 (1:4)

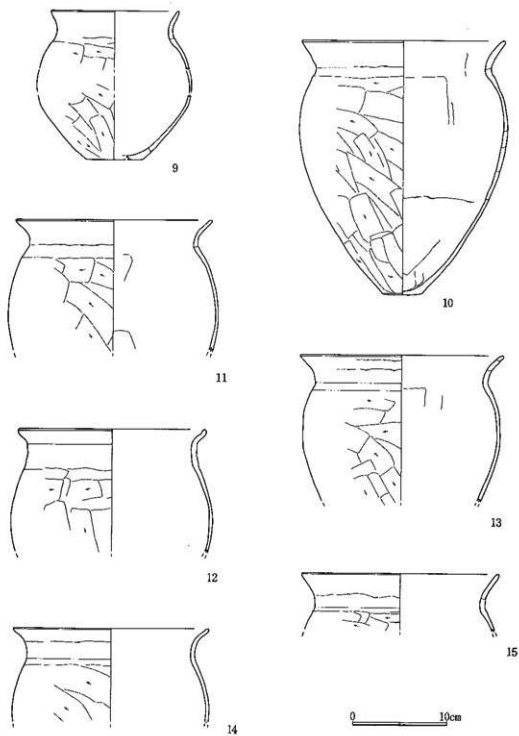
第115図 H-20号住居址出土遺物 (1:4)

IV 遺蹟上遺物



第116图 H-20号住居址出土遺物

1 整穴住居址



第117图 H-20号住居址出土遗物 (1:4)

第38表 H-20号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

種類 番号	器種	法量	器形の特徴	調	整	備考
1 (完)	坏 (環)	14.1 4.0 7.5	体部は外反し、底部平底。 内外面に大きな黒斑あり。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色 (10Y6/1)
2 (調)	坏 (環)	(14.0) 3.8 7.5	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
3 (調)	坏 (環)	(14.1) 3.8 7.5	体部は外反し、底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y6/1)
4 (調)	坏 (環)	(12.7) 3.7 <6.4)	体部は外反した後、口唇部でやや内湾する。底部平底。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y5/1)
5 (完)	高台坏 (環)	11.5 4.5 7.9	底部には高台が貼りつけられる。体部は直線的に外反する。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (10Y5/1)
6 (完)	高台坏 (環)	14.6 6.1 9.4	底部には高台が貼りつけられる。体部は直線的に外反する。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (5Y6/1)
7 (完)	高台坏 (環)	15.9 6.4 10.4	底部には高台が貼りつけられる。体部は直線的に外反する。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (5Y4/1)
8 (完)	坏 (環)	— — 9.3	底部には幅広の高台が貼りつけられる。	外面	体部ロクロヨコナデ。 底部切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ回転方向不明)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色 (5Y5/1)
9 (調)	甕 (圓)	(13.5) (15.6) <6.0)	口縁部はコの字状に外反する。胴部は球状に膨らむ。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)
10 (調)	甕 (土)	(21.5) 26.7 (4.4)	口縁部はくの字状に外反する。口縁と胴部上半の径が同様で、最大径となる。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)
11 (調)	甕 (土)	(20.8) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)
12 (調)	甕 (土)	(19.9) — —	口縁部は強くコの字状に外反し、口唇部で受け口状になる。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)
13 (調)	甕 (土)	(21.4) — —	口縁部はくの字状に外反する。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)
14 (調)	甕 (土)	(20.5) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (7.5YR5/4)
15 (調)	甕 (土)	(20.8) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面	口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ぶい赤褐色 (5YR5/4)

第39表 H-20号住居址出土遺物一覧表

〈石器・鉄器〉

1～4は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器環である。

5～7は、須恵器高台付坏である。いずれも底部に回転ヘラケズリ痕をみせるが、6・7の切り離し方法は回転糸切りであることが

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
16	石臼	安山岩	23.0	20.8	10.3	5200	完形
17	ステレ イペー	黒曜石	5.61	3.35	1.37	24.7	完形
18	鎌	鉄	(8.4)	(2.0)	(0.3)	(10.5)	底部欠損

測 単位はcm, g

とらえられる。

8は、須恵器長頸瓶の底部かと考えられる。

9は、コの字状口縁の土師器小形甕である。

10・13は、くの字状口縁の土師器甕である。

11・12・14・15は、コの字状口縁の土師器甕である。

16は、小児の頭大の礫の両側からすりばち状に穿孔がなされた石臼と考えられるもので、そのa面に2箇所・b面に18箇所と多くのくぼみの認められるものである。おそらくはa面が上にされて製粉がなされ、b面側にその粉が落ちるといふものであろう。

17は、黒曜石の横長剥片を素材にしたスクレイパーで、石器の両縁に刃がつけられたものである。

18は、鉄製の鎌の先端部である。

時 期

本住居址は、8世紀末～9世紀初頭、根岸遺跡第II期に位置付けられよう。

(21) H-21号住居址

住居址 第119図

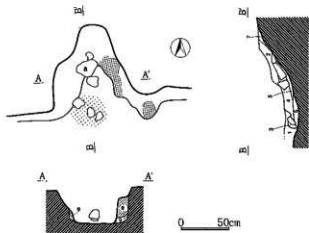
H-21号住居址は、第I区ミ-25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H-22を切って存在している。

本住居址は、南北3.9m東西4.6mの隅丸長方形を呈し、床面積15.3㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は硬質な貼り床となっている。住居址の床面には、集塊岩・安山岩・面取り軽石12個が散乱していた。カマドの構材であろうか。

ピットは、P₁・P₂が東西両壁中央に対で認められた。またカマド東脇にはP₃が認められた。P₁は40×35cm深さ30cm、P₂は35×30cm深さ40cm、P₃は30×25cm深さ10cmを測る。

遺物は、いずれも覆土中からの出



第119図 H-21号住居址カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物

土である。また、馬歯も覆土中から2点出土している。

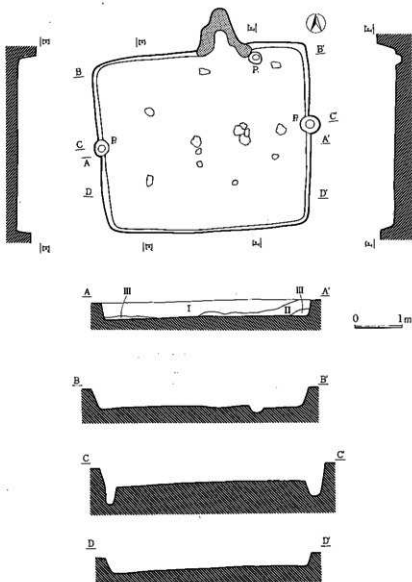
覆土は、3層に分層され、埋土的な堆積状況を呈していた。I層は中粒スコリアを大量に含みローム粒子を若干含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はローム粒子を大量に含む黒褐色土層(10YR 2/3)、III層は中粒スコリアを大量に含み、ローム粒子を若干含む黒色土層(10YR 2/1)であった。

カマド 第118図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東寄りにあり、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その掘り方は、壁外に深く突出する構造であっ

た。その底面には、扁平な面取り軽石が認められた。

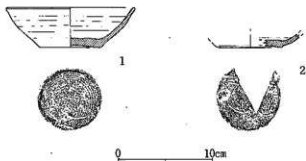
本カマドの土層は、9層に分層された。1層は焼土・カーボンがわずかに混じる黒褐色土層(7.5 YR 3/2)、2層は焼土・灰がわずかに混じるに赤褐色土層(5 YR 4/3)、3層は焼土・灰がわずかに混じる褐色土層(7.5YR 4/6)、4層は灰を多量に含み焼土がわずかに混じるに赤褐色土層(5 YR 4/3)、5層は焼土を含む暗赤褐色土層(5 YR 3/2)、6層は赤褐色焼土層(5 YR 4/8)、7層は焼土等を含まない褐色土層(10YR 4/6)、8層は構築土であるに赤褐色粘土層(5 YR



第118図 H-21号住居址実測図(1:80)

第40表 H-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

探出番号	器種	重量	器形の特徴	調整	備考
1 (破)	坏 (須)	(13.6) 4.1 6.7	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)
2 (完)	坏 (須)	--- --- 6.7	底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)



7/3)、9層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(5 YR 3/1)であった。

遺物 第120図

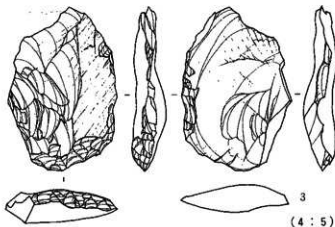
遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器では坏・甕、土師器では甕の破片数十片が検出されているのみである。

このうち図示し得たのは1・2の須恵器坏のみで、いずれも回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

この他、3のチャートの横長剥片を素材としたエンドスクレイパーが検出されている。

時期

本住居址は、遺物が少ないため時期決定が非常に困難であるが、とりあえずは、9世紀中葉、根岸遺跡第III期に位置付けておこう。



第120図 H-21号住居址出土遺物

第41表 H-21号住居址出土遺物一覧表
〈石器〉

探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	エンドスクレイパー	チャート	5.37	3.63	1.02	20.3	完形

※ 単位はcm, g

(22) H-22号住居址

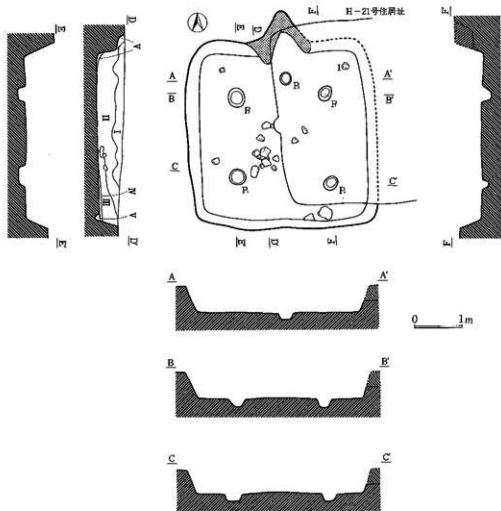
住居址 第121図

H-22号住居址は、第I区ミ-25・26グリッドにおいて検出された。

本住居址は、H-21号住居址にその半分を切られて存在している。

本住居址は、南北3.9m東西4.0mの隅丸長方形を呈し、床面積11.9m²を測り、南北軸方向はN-3°-Wを指す。壁高は、45~60cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。住居址の中央の床面上よりやや浮いて、安山岩礫・軽石が10個ほど認められた。また、南壁際には扁平な河床礫2個が認められた。

ピットは、P₁~P₄の四個のピットが対で認められたほか、カマド前方にP₅が認められた。



第121図 H-22号住居址実測図 (1:80)

1 竪穴住居址

P₁は33×25cm 深さ20cm、P₂は40×35cm 深さ20cm、P₃は33×35cm 深さ15cm、P₄は30×25cm 深さ12cm、P₅は25×23cm 深さ15cmを測る。

遺物は、1の須恵器環が東北コーナーの床面上より出土した。この他はいずれも覆土中からの出土である。

覆土は5層に分層され、埋土的な状況を呈していた。I層は若干のロームを含み小粒スコリアをよく含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はローム粒子を多量に含み小粒スコリアをよく含む黒褐色土層(10YR 3/2)、III層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)、IV層はローム粒子をあまり含まない黒色土層(10YR 2/1)、V層はロームのブロック状堆積である褐色土層(10YR 4/4)であった。

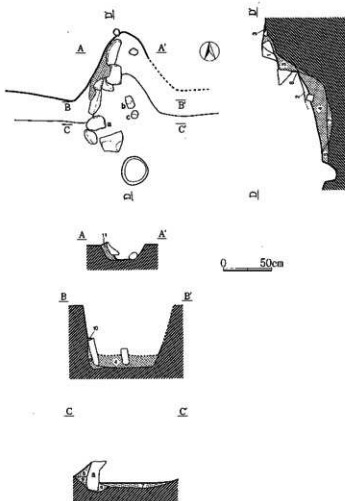
カマド 第122図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、ほぼ破壊された状態にあり、僅かに左袖の一部をとどめるのみであった。

本カマドの左袖には、面取り軽石・集塊岩・安山岩が用いられていた。ことにaは『状』に面取りされたものであった。また、角柱状の面取り軽石の支脚石b cも残置されていた。

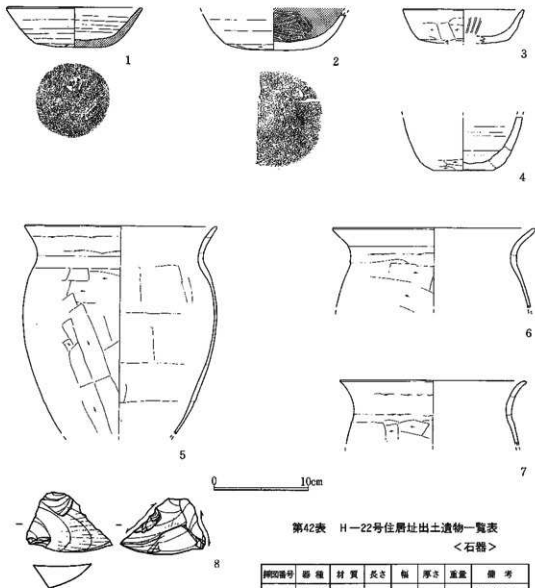
本カマドの覆土は、2層に分層された。1層は焼土を僅かに含む黒褐色土層(7.5YR 2/3)、2層は焼土と灰を含む灰褐色土層(5 YR 5/2)であった。

また、カマドの構築土は、9層に分層された。3層はロームを含む暗褐色土層(7.5YR 3/4)、4層は焼土の多く混入するに赤褐色土層(5 YR 5/4)、5層は焼土・カーボンを僅かに含む黒色土層(7.5YR 2/1)、6層はロームを多く含む褐色土層(10YR 4/6)、7層は赤褐色焼土層(5



第122図 H-22号住居址カマド実測図(1:80)

IV 遺構と遺物



第42表 H-22号住居址出土遺物一覧表
<石器>

調査番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	割片	黒曜石	1.94	2.79	7.5	3.0	微小割痕あり

※ 単位はcm, g

第123図 H-22号住居址出土遺物 (4:5)

YR 4/6、8層はロームを含む褐色土層 (7.5YR 4/6)、9層はロームを多く含む褐色土層 (10YR 4/4)、10層はロームを多く含むよい黄褐色粘土層 (10YR 5/3)、11層はロームを多く含む褐色土層 (10YR 4/3) であった。

遺物 第123図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕が検出されているのみである。

第43表 H-22号住居址出土遺物一覧表(土器)

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (完)	杯 (須)	14.2 4.2 8.0	体部は外反し、底部は丸みをおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)
2 (破)	杯 (土)	— (10.0)	体部は外反し、底部は丸みをおびた平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (7.5YR7/3)
3 (破)	杯 (土)	(12.7) — (9.1)	体部は外反する。 底部は丸みをおびた平底。	外面 口縁部ヨコナデ。 体部・底部ヘラケズリ。 内面 体部ヨコナデの後、放射状暗文を施す。	胎土は精選されず砂 粒を多く含む褐色 (7.5YR7/8)
4 (破)	甕 (土)	— (6.3)	底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ回転方向不明)	胎土は砂粒を含みに よい赤褐色 (5YR5/3)
5 (破)	甕 (土)	(20.3) —	口縁部は、くの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (7.5YR6/4)
6 (破)	甕 (土)	(21.3) —	口縁部は、くの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (7.5YR6/4)
7 (破)	甕 (土)	(19.5) —	口縁部は、くの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (7.5YR6/4)

1は底部全面手持ちヘラケズリのなされる須恵器杯で、その切り離し方法は不明である。

2は内面黒色研磨のなされた土師器杯、3は体部に放射状暗文の認められる畿内系の土師器杯である。

4は、ロクロ整形による土師器小形甕で、その切り離し方法は不明である。

5～7は、くの字状口縁をみせる土師器甕である。

また、8は黒曜石の微小剝離痕を有する剥片である。

時 期

本住居址は、8世紀中葉、根岸遺跡第I期に位置付けられよう。

(23) H-23号住居址

住居址 第124図

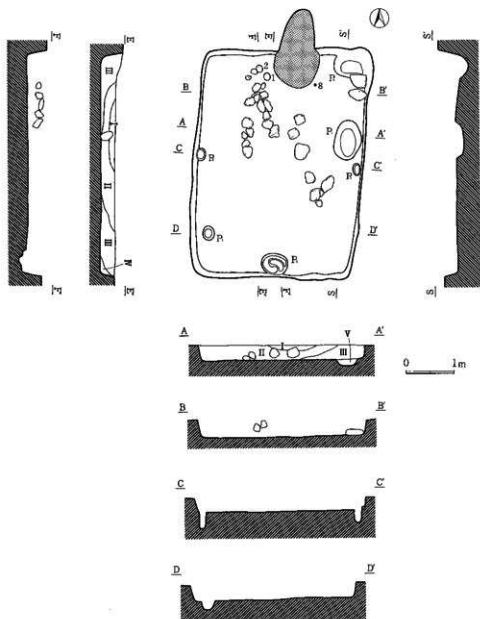
H-23号住居址は、第I区マ・ミー25グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.9m東西3.6mの南北に細長い隅丸長方形を呈し、床面積15.4㎡を測り、南北軸方向はN-2'-Wを指す。壁高は、30～40cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。

なお、住居址I区II区の床面から10～20cm浮いて、面取り軽石・安山岩礫・集塊岩礫が認めら

れた。このような礎は、おそらく住居廃絶後そのくはみに廃棄されたものであろうと考えられよう。また、1の須恵器蓋・2の須恵器環、8の馬歯もこれと一緒に廃棄されたものであろう。

ピットは、 P_1 ・ P_2 の二個のピットが東西両壁際中央に対で認められたほか、 P_4 が南壁際中央に認められた。また、 P_6 は北東コーナーにおいて認められた。このほか P_3 ・ P_5 が認められてい



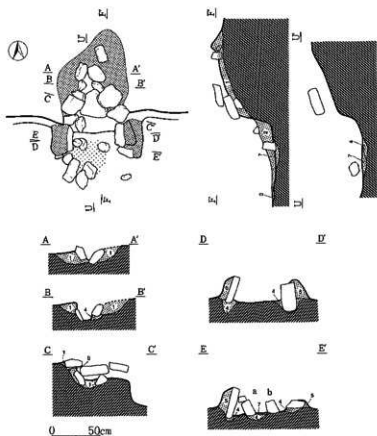
第124図 H-23号住居址実測図 (1:80)

1 壱穴住居址

る。

P₁は25×15cm深さは30cm、P₂は25×20cm深さは35cm、P₃は30×25cm深さは20cm、P₄は55×45cm深さは15cm、P₅は80×55cm深さは20cm、P₆は70×40cm深さは20cmを測った。

覆土は、5層に分層された。I層はローム粒子を僅かに含む黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はロームをブロック状に含む黒色土層(10YR 2/1)、III層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR 2/1)、IV層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 2/2)、V層はローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 2/3)であった。



第125図 H-23号住居址カマド実測図(1:40)

カマド 第125図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、左右両袖と煙道部・煙道部天井の一部をとどめ、その他は破壊された状態にあった。本カマドの構材には、すべて面取り軽石が用いられていた。また、角柱状の面取り軽石の支脚石二個(a b)が残っていた。

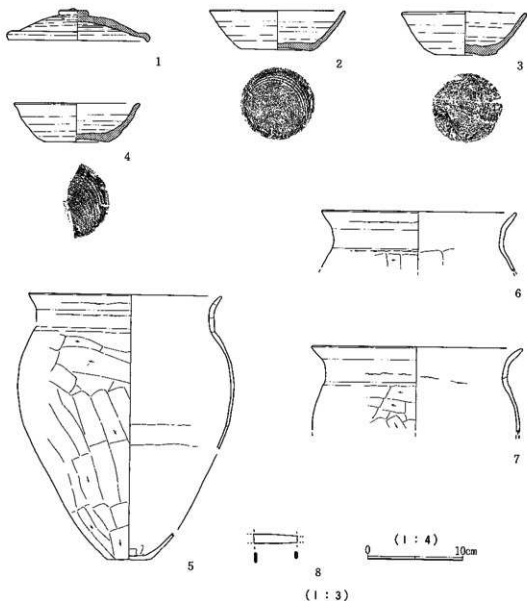
本カマドの構築土層は、8層に分層された。1層はローム粒子が混じる褐色土層(7.5YR 4/3)、2層は暗赤褐色土層(5 YR 3/4)、3層はローム粒子が混じる暗褐色土層(10YR 3/4)、4層はローム粒子が混じる黒褐色土層(10YR 3/2)、5層は粘土の混じる褐灰色土層(5 YR 4/1)、6層は焼土を多く含む明赤褐色土層(5 YR 4/8)、7層は赤褐色焼土層(2.5YR 4/8)であった。

遺物 第126図

遺物は、須恵器では蓋・坏・長頸瓶・甕が、土師器では甕が認められた。

1は、ボタン状ツマミをもつ須恵器蓋である。

IV 遺構と遺物



第126図 H-23号住居址出土遺物

2～4は回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

5～7は、コの字状口縁をみせる土師器甕である。

8は鉄製品で、刀子の基部であろうか。

第44表 H-23号住居址出土遺物一覽表
<鉄器>

図録番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	刀子?	鉄	(3.5)	(0.7)	(0.2)	(2.0)	先端・基部欠損

※ 単位はcm, g

第45表 H-23号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標識 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	蓋 (環)	3.1 3.4 14.8	ツマミ部は、中央のやや突出したボタン状の形態を呈する。	外面 ロクロヨコナデ、 天井部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(10Y6/1)
2 (完)	環 (環)	14.3 4.1 7.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色(7.5Y6/1)
3 (完)	環 (環)	13.2 4.6 6.9	体部は外反し、底部平底。 釜んだ形。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y6/1)
4 (破)	環 (環)	(13.3) 4.1 (5.8)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y6/1)
5 (破)	甕 (土)	(20.2) 27.8 4.7	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもつ。 底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みによい黄褐色(10YR7/4)
6 (破)	甕 (土)	(20.4) — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上半に最大径をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みによい赤褐色(5YR5/3)
7 (破)	甕 (土)	(25.1) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みによい赤褐色(5YR5/3)

時 期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(24) H-24号住居址

住居址 第127図

H-24号住居址は、第Ⅰ区マー-26グリッドにおいて検出された。

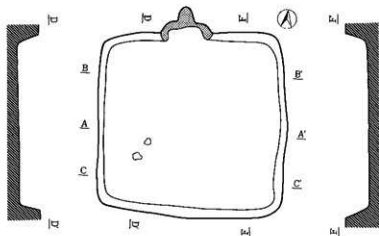
本住居址は、南北3.9m東西4.0mの隅丸方形を呈し、床面積12.5㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。壁高は、40~50cmを測る。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質な床となっている。

ピットは認められなかった。

遺物は、1の環がカマドから検出された。このほかは、いずれも良好な出土状態をみせていない。

覆土は、6層に分層された。ことにIV層までは埋土的な状態をみせていた。I層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、II層はローム粒子を大量に含む褐色土層(10YR 4/6)、III層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/4)、IV層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層(10YR 3/4)、V層はローム粒子をあまり含まない黒褐色土層(10YR 2/2)、VI層はローム粒子を

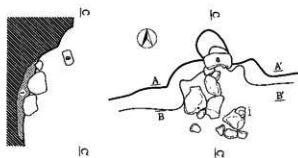
IV 遺構と遺物



0 1m



第127図 H-24号住居址実測図 (1:80)



0 50cm



第128図 H-24号住居址カマド実測図 (1:40)

ほとんど含まない黒色土層(10YR 2/1)であった。

カマド 第128図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、煙道部の天井の面取り軽石aをとどめるのみで、その他は破壊された状態にあった。本カマドの構材には、面取り軽石・安山岩礫が用いられ、その火床には、焼



1



2



0 5cm

第129図 H-24号住居址出土遺物 (1:4)

第46表 H-24号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

出土番号	器種	法量	器形の特徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	13.9 3.2 6.3	体部は外反する。 底部平直。 内外面に大きな黒斑あり。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)
2 (完)	坏 (須)	— 6.9	底部平直。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (5Y6/1)

土を含む黒褐色土層 (7.5YR 2/2) が貼られていた。

遺物 第129図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器片には坏・高台付坏・甕が、土師器片には坏・甕が認められた。図示できたのは1・2のみである。

1・2は須恵器坏で、回転糸切り未調整の底部をみせるものである。

時 期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられるものであろう。

(25) H-25号住居址

住居址 第130図

H-25号住居址は、第Ⅰ区マー26グリッドにおいて検出された。調査時には湧水が激しくその精査には困難をきたした。

本住居址は、南北5.0m東西4.8mの隅丸長方形を呈し、床面積19.4㎡を測り、南北軸方向はN-11'-Wを指す。壁高は、50~60cmを測る。壁溝は認められない。床面は全体に硬質な貼り床となっている。

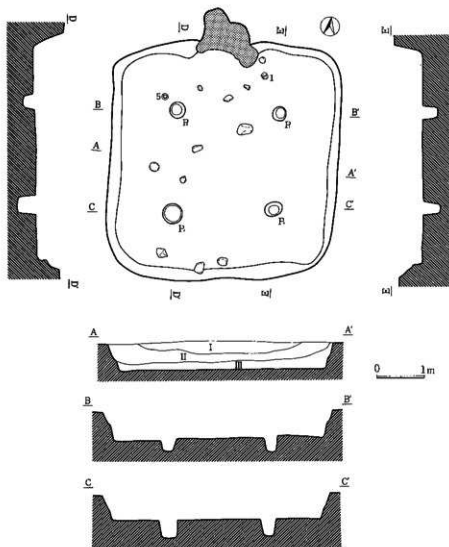
ピットは、P₁~P₄の四個のピットが対で認められた。

P₁は30×30cm深さは推定で30cm、P₂は33×33cm深さは推定で20cm、P₃は40×40cm深さは推定で40cm、P₄は38×28cm深さは推定で35cmを測る。

遺物は、1の須恵器坏・5の土師器小形甕が床面直上から検出されている。これ以外の遺物は、いずれも覆土中からの出土で、良好な状態で出土していない。

覆土は、3層に分層された。Ⅰ層は小粒スコリアを多く含む黒色土層 (10YR 2/1)、Ⅱ層はローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、Ⅲ層は小粒バミスを含む黒色土層 (10YR 2/1) であった。

カマド 第131図



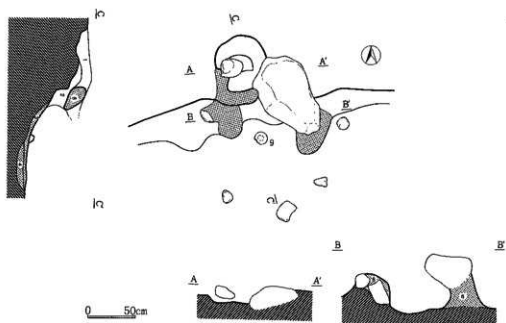
第130図 H-25号住居址実測図 (1 : 80)

カマドは、住居址の北壁中央にあり、その天井部と袖の一部をごく僅かにとどめるのみで、ほぼ全体が破壊されていた。その東の袖部分には大形の集塊岩礫がはまっていたが、これは自然の位置をとどめているもので、カマドはそれを覆ってしまうような状態で構築されていたものと考えられる。その火床には、9の竈底部が支脚として倒置されていた。

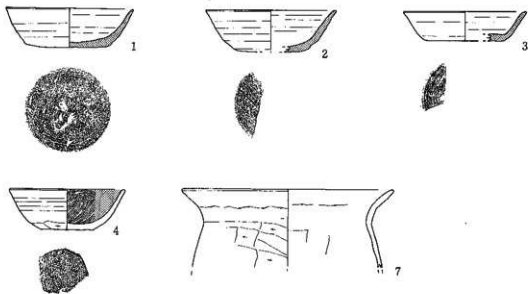
その覆土は、2層に分層された。1層は焼土・カーボンを含み黒褐色土層 (5 YR 2/2)、2層は焼土を多く含む暗赤褐色土層 (5 YR 3/3) であった。

また、その火床には焼土を多く含む暗赤褐色土層 (3層 5 YR 3/3)、赤褐色焼土層 (4層 5

1 竪穴住居址



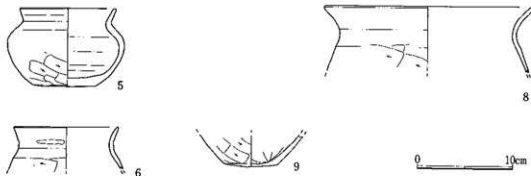
第131図 H-25号住居址カマド実測図 (1:40)



第132図 H-25号住居址出土遺物 (1:4)

第47表 H-25号住居址出土遺物一覽表〈土器〉

図号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	環 (須)	13.4 4.1 8.9	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部回転ヘラケリの後 全面手持ちヘラケズリ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を呑み灰 白色 (7.5Y8/1)
2 (破)	環 (須)	13.7 4.4 (7.8)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケリ未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂 粒を多く含み灰色 (5Y6/1)
3 (破)	環 (須)	13.0 3.1 (8.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラケズリ、切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を呑み灰 白色 (5Y8/2)
4 (破)	環 (土)	12.2 4.3 (5.5)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。底部全面手持ちヘラケ ズリ、切り離し方法不明。 内面 黑色研削。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を呑みに よい黄褐色 (10YR6/4)
5 (完)	甕 (土)	10.1 8.2 6.5	口縁部はくの字状に外反する。 胴部上半に最大径がある。底部平底 小形。内面にカーボン付着。	外面 口縁部・胴部上半(ロクロ)ヨコナデ。 胴部下半・底部ヘラケズリ。 内面 (ロクロ)ヨコナデ、底部ヘラナデ。	胎土は砂粒を呑みに よい赤褐色 (5YR5/4)
6 (破)	甕 (土)	11.0 — —	口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を呑みに よい赤褐色 (5YR5/4)
7 (破)	甕 (土)	22.2 — —	口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を呑みに よい赤褐色 (5YR5/4)
8 (破)	甕 (土)	21.8 — —	口縁部は外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を呑みに よい褐色 (5YR6/4)
9 (完)	甕 (土)	— — 4.0	底部平底。	外面 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を呑みに よい褐色 (5YR6/4)



第133図 H-25号住居址出土遺物(1:4)

YR 4/8) が認められた。天井部を構築しているのは粘土の混じる黒色土層(5層 10YR 2/1)、袖部は粘土の混じる黒褐色土層(6層 10YR 2/2)によって構築されていた。

遺物 第132・133図

遺物は、須恵器では蓋・環・高台付環・甕、土師器では環・甕などが出土している。

1・2は、回転ヘラケリによる底部をみせる須恵器環で、1はその後に全面手持ちヘラケズリ

がなされている。

3は、回転ヘラケズリの底部をみせる須恵器環で、その切り離し方法は不明である。

4は、土師器環で底部には全面手持ちヘラケズリがなされているため、その切り離し方法は不明である。

5は土師器小形甕で、須恵器短頸壺と相似する器形をみせるものである。ロクロ整形によるが、底部には全面手持ちヘラケズリがなされているため、その切り離し方法は不明である。内面には炭化物の付着がはなはだしい。

6は土師器小形甕、7～9は土師器小形甕である。

時 期

本住居址は、8世紀中葉、根岸遺跡第I期に位置付けられよう。

(26) H-26号住居址

住居址 第135図

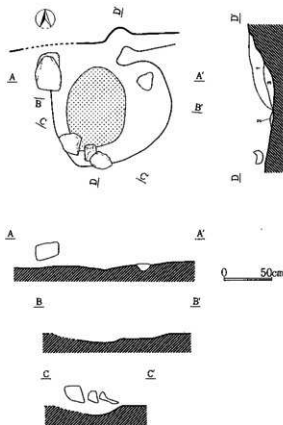
H-26号住居址は、第I区ミ-26グリッドにおいて検出された。調査時には湧水が激しくその精査には困難をきたした。

本住居址は、H-12号住居址大部分を切って存在している。

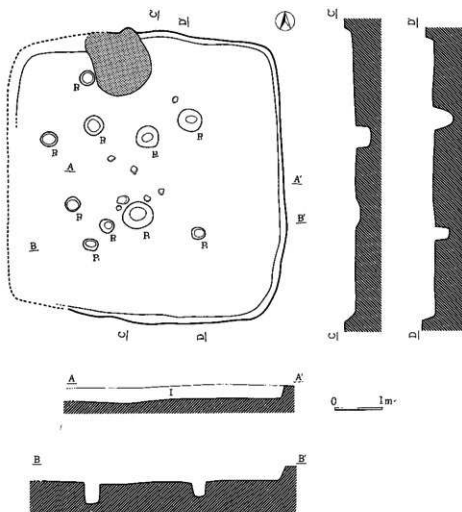
本住居址は、南北6.1m東西推定5.8mの隅丸長方形を呈し、床面積推定30.1㎡を測り、南北軸方向はN-13°-Wを指す。壁高は、20～30cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ビットは、P₁～P₄の四個のビットが対で認められた。このほか、P₅～P₁₀の6個のビットが認められたが、住居址に伴うものかどうかはわからない。

P₁は50×50cm深さは推定で40cm、



第135図 H-26号住居址カマド実測図(1:40)



第135図 H-26号住居址実測図(1:80)

P_2 は 40×40 cm、 P_3 は 30×20 cm深さは推定で45cm、 P_4 は 28×25 cm深さは推定で30cm、 P_5 は 65×50 cm深さ10cm、 P_6 は 30×28 cm、 P_7 は 30×30 cm、 P_8 は 35×30 cm、 P_9 は 30×30 cm、 P_{10} は 50×50 cmを測る。

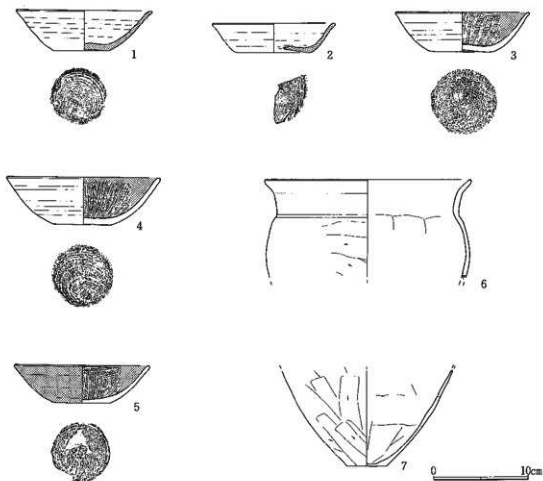
遺物は、良好な出土状態を示すものはなく、いずれも覆土中から出土している。

カマド 第134図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや西寄りにあり、その西袖石(安山岩礫)をとどめるのみで、ほぼ完全に破壊された状態にあった。

カマドに関連する土層堆積は3層に分層された。1層は焼土をよく含みカーボン若干含む黒

1 整穴住居址



第136図 H-26号住居址出土遺物(1:4)

褐色土層(5 YR 4/4)、2層は焼土を多量に含む極暗赤褐色土層(5 YR 2/3)、3層は赤褐色土層(5 YR 4/8)であった。

遺物 第136図

遺物は、須恵器では坏・甕、土師器では坏・甕などが出土している。

1・2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

3～5は、回転糸切り未調整の底部をみせる土師器坏で、3・4は内面黒色研磨、5は内面黒色研磨・外面黒色処理がなされているいわゆる黒色土器である。

6は土師器甕で、コ字状口縁をみせている。

時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

第48表 H-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	決量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	環 (傾)	14.3 4.3 5.9	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰白色 (10YR8/2)
2 (破)	環 (傾)	13.0 3.1 (< 8.0)	体部は外反する。 底部平底。 盤状の器形。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰 白色 (7.5Y8/1)
3 (破)	環 (土)	14.2 4.2 (7.0)	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/3)
4 (破)	環 (土)	13.2 5.0 6.5	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/3)
5 (破)	環 (土)	14.3 4.0 6.3	体部はやや丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。黒色研磨。 底部回転糸切り未調整。 内面 黒色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み黒 褐色 (10YR3/1)
6 (破)	甕 (土)	21.7 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ロクロヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)
7 (破)	甕 (土)	— — (4.0)	底部平底。	外面 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに よい褐色 (5YR6/4)

(27) H-27号住居址

住居址 第137図

H-27号住居址は、第I区マー26グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.75m東西4.25mの隅丸長方形を呈し、床面積16.1㎡を測り、南北軸方向はN-11'-Wを指す。壁高は、35-50cmを測る。壁溝は認められなかった。床面は、貼り床ではなく、全体にかなり軟弱な床となっている。

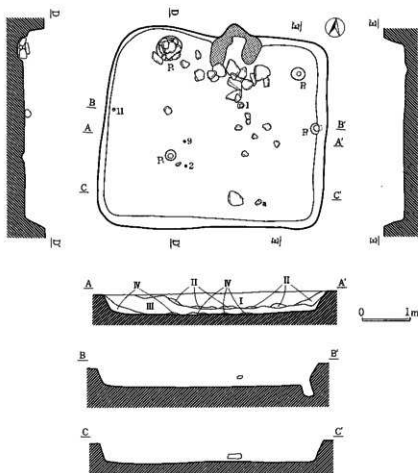
ピットは、P₁~P₄の四個のピットが認められた。このうちP₁は、主柱穴と考えられるものであるが、通常ならこれと対応して対壁中央にピットが認められるはずである。しかし、總密に精査したが、そのようなピットは検出されなかった。また、P₄中にはカマドの構材である面取り軽石・安山岩礫等10個あまりが詰められていた。

P₁は20×23cm深さは25cm、P₂は30×25cm深さは5cm、P₃は22×22cm深さは5cm、P₄は55×45cm深さは20cmを測る。

遺物は、1の須恵器環・須恵器甕底部が床面よりやや浮いて出土した。また、11の紡錘車は西壁際より、2の須恵器環は床面より20cm浮いて出土した。

覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR 3/2)、II層は黒褐色土層(10YR 2/3)、III層はローム粒子を含む暗褐色土層(10YR 3/4)、IV層はローム粒子

1 竪穴住居址



第137図 H-27号住居址実測図 (1:80)

を僅かに含む黒褐色土層 (10YR 2/2) であった。

カマド 第138図

カマドは、住居址の北壁中央にあるが、大半を破壊された状態にあり、カマド前方にはその構材である面取り軽石・安山岩礫が散乱していた。また、P₄中にはカマドの構材である面取り軽石・安山岩礫等10個あまりが詰められていた。住居址南壁際には角柱状に面取りされた軽石の支脚石aが放置されていた。

本カマド内の土層は、5層に分層された。1層は焼土を含む暗褐色土層 (7.5YR 3/4)、2層は焼土を含む褐色土層 (7.5YR 4/4)、3層は焼土を含まない褐色土層 (10YR 4/6)、4層は焼土を含む褐色土層 (7.5YR 4/6)、5層は焼土を含み灰を僅かに含むにふい赤褐色土層 (5 YR 4/3) 層であった。

IV 遺構と遺物

カマドの構築土は、6～14層である。6層は赤褐色土層(5 YR 4/6)、7層はにぶい赤褐色土層(5 YR 4/4)、8層はにぶい赤褐色土層(5 YR 4/4)、9層は極暗赤褐色土層(5 YR 2/3)、10層はにぶい赤褐色土層(5 YR 5/4)であった。この6～10層は、火床を構成する層で、いずれも焼土をよく含む層であった。また、11層は焼土を含む褐色土層(7.5YR 4/6)、12層はローム粒子が多く混入する暗褐色土層(10YR 3/4)、13層はローム粒子を若干含む黒色土層(10 YR 2/1)、14層は暗褐色土層(7.5YR 3/3)で、いずれも袖部を構成する層である。

遺物 第139図

遺物の出土量は総じて少ないが、須恵器では坏・高台付坏・甕・壺、土師器では坏・台付甕・甕などが出土している。

1～5は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。このうち2には、小上(川)とも判読される墨書が認められた。

6は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器高台付坏である。

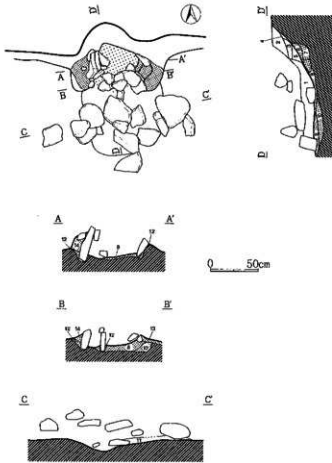
7は頸部のすぼまる須恵器壺、8は高台の付される須恵器で長頸瓶の底部であろうか。

10は、土師器小形甕である。

11は、片麻岩の断面D字形を呈する紡錘車で、鉄製の軸が3cmほど残存していた。

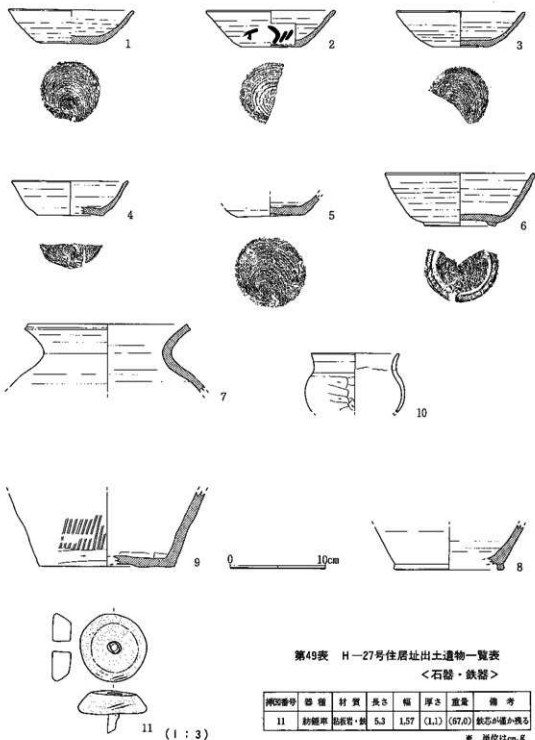
時期

本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第III期に位置付けられよう。



第139図 H-27号住居址カマド実測図(1:40)

1 野穴住居址



第49表 H-27号住居址出土遺物一覽表
<石器・鉄器>

採出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
11	紡錘車	粘板岩・鉄	5.3	1.57	(1.1)	(67.0)	鉄芯が埋め込まれる

※ 単位はcm, g

第139図 H-27号住居址出土遺物

第50表 H-27号住居址出土遺物一覧表(土器)

持回 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 整	備 考
1 (完)	坏 (須)	13.2 3.5 6.5	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰色 (N6/1)
2 (圓)	坏 (須)	(13.6) 3.9 (6.2)	体部は外反する。 底部平底。 体部に『小上(川〇)』?の墨書あり。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含み 灰白色 (5Y7/1)
3 (圓)	坏 (須)	(13.6) 3.8 (5.8)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 褐色 (10YR6/1)
4 (圓)	坏 (須)	(12.2) 3.7 (7.2)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み 褐色 (10YR6/1)
5 (完)	坏 (須)	— — 7.2	— — 底部平底。	外面 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み に 黄褐色 (10YR7/2)
6 (圓)	高台坏 (須)	(15.8) 5.6 (7.6)	体部は外反する。底部には高台が貼りつけられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を多く含み 灰色 (N4/1)
7 (圓)	甗 (須)	(17.4) — —	口縁部はくの字状に外反し、口唇部が縁どられる。	外面 ロクロヨコナデ。 内面 ロクロヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含み 灰色 (N4/1)
8 (圓)	(須)	— — (11.5)	— — 底部には高台が貼りつけられる。	外面 ロクロヨコナデ。 切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。	胎土は砂粒を多く含み 灰色 (N5/1)
9 (圓)	(須)	— — (14.2)	— — 底部平底。	外面 胴下部叩き。 底部ヘラケズリ。 内面 ナデ。	胎土は砂粒を多く含み 灰色 (N5/1)
10 (圓)	甗 (土)	<9.2> — —	口縁部はゆるく外反する。 小形品。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み に 黄褐色 (10YR7/3)

(28) H-28号住居址

住居址 第140図

H-28号住居址は、第I区マ・ミー26グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.2m東西3.7mの隅丸方形を呈し、床面積13.1㎡を測り、南北軸方向はN-17-Wを指す。壁高は、20-25cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体にかなり硬質な貼り床となっている。

ピットは、P₁・P₂の二個のピットが認められた。P₁は50×45cm深さ20m、P₂は35×30cm深さ10cmを測る。

遺物は、1・2の須恵器坏、4の土師器坏、5の須恵器甗、6の土師器甗、10の鉄製品、11の礫石が良好な状態で検出されている。

覆土は3層に分層された。I層は暗褐色土層(10YR 3/4)、II層は小粒スコリア・パミスを多く含む黒褐色土層(10YR 2/2)、III層は小粒スコリア・パミスを若干含む黒色土層(10YR 2/1)

1 竪穴住居址

であった。

カマド 第141図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部を僅かにとどめているのみで、ほぼ完全に破壊された状態にあった。その芯の一部には安山岩礫が用いられ、粘土をよく含む黒褐色土層 (10YR 3/2) で固められていた。

本カマドの火床には、にぶい赤褐色焼土層 (1層 2.5 YR 5/4) が認められた。

遺物 第142・143図

遺物の出土量は総じて少ないが、灰釉陶器片、須恵器では坏・壺・甕、土師器では坏・甕などが出土している。

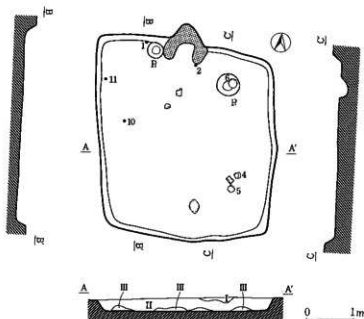
1～4は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

5は、須恵器小形壺で、肩部には焼成前の『木』の刻書が認められる

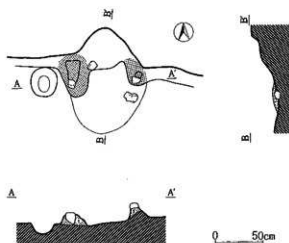
6は、くの字状口縁の土師器小形球胴甕で、底部丸底である。

7・8は、コの字状口縁の土師器甕で、胴部上半に最大径をもつものである。

11は、棒状の鉄製品で、その一部が屈曲してしまっ



第140図 H-28号住居址実測図 (1:80)



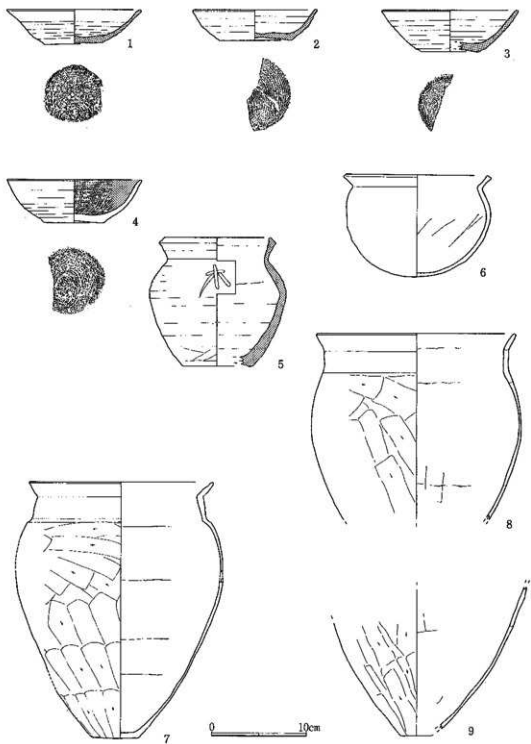
第141図 H-28号住居址カマド実測図 (1:40)

第51表 H-28号住居址出土遺物一覧表
<石器・鉄器>

探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	敲石	安山岩	14.2	4.3	4.4	415	完形
11	不明	鉄	(23.8)		(1.5)	(71)	紡錘車軸?

※ 単位はcm. g

IV 遺構と遺物



第142図 H-28号住居址出土遺物 (1:4)

第52表 H-28号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

標目番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (完)	杯 (灰)	〔14.1〕 3.6 6.2	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (5Y7/1)
2 (破)	杯 (灰)	〔13.1〕 3.3 7.6	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (5Y5/1)
3 (破)	杯 (灰)	〔14.4〕 4.4 (6.2)	体部は外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は比較的精選され灰色 (N5/0)
4 (破)	杯 (土)	〔14.1〕 4.5 (6.5)	体部は丸みをおびて外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 黒色新痕。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに よい黄褐色 (10YR7/3)
5 (破)	盃 (灰)	〔12.7〕 13.5 (7.8)	口縁部はくの字状に外反し、口唇部は縁どられる。底部平底。 胴部に、発成前の「木」の新痕あり。	外面 ロクロヨコナデ。 底部切り離し方法不明。 内面 ロクロヨコナデ。	胎土は砂粒を含み灰白色 (5Y5/1)
6 (完)	碗 (土)	15.4 10.7	口縁部はくの字状に外反し、口唇部は平たく縁どられる。胴部は球状を呈し、底部丸底。	外面 口縁部・胴部ヨコナデ。 底部ナデ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR7/4)
7 (完)	碗 (土)	19.3 26.9 4.9	口縁部は強くコの字状に外反する。胴部上半に最大径を待ち、底部平底。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部・底部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (5YR6/6)
8 (破)	碗 (土)	〔21.0〕 —	口縁部は強くコの字状に外反する。胴部上半に最大径を待つ。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR6/6)
9 (完)	碗 (土)	— — 3.2	底部平底。	外面 胴部ヘラケズリ。 内面 胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR6/6)

のと考えられる。あるいは紡錘車の軸と考えられようか。

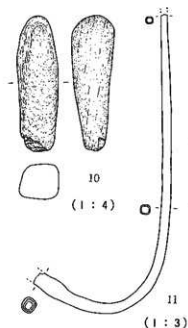
10は、片麻岩の敲石で、その一端には敲打による剥落が顕著である。

なお、灰胎陶器は、破片で、図示し得ず、その窯址系・窯期は不明である。

また、7.4×4.2×2.4cm重さ41gのスラグ1点も出土している。

時期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。



第10図 H-28号住居址出土遺物

(29) H-29号住居址

住居址 第144図

H-29号住居址は、第I区マー27グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.5m東西3.4mの隅丸方形を呈し、床面積10.6㎡を測り、南北軸方向はN-10°-Wを指す。すでにその上面を削平されており、壁高10cmを測る程度しか残っていなかった。壁溝は認められない。床面は、貼り床ではないが、全体に硬質な床となっている。

ピットは、南壁際中央に100×35cm深さ25cmを測る細長いP、が認められた。

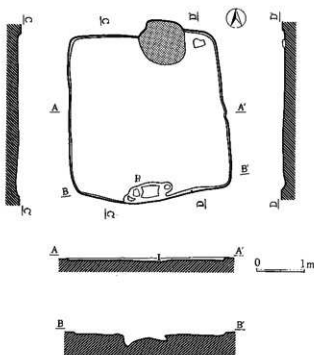
遺物は良好な状態で出土しているものはみられなかった。

覆土は、小粒スコリアを大量に含む黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

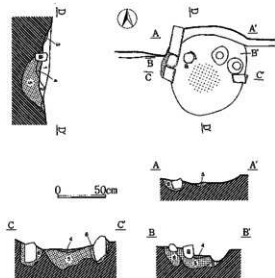
カマド 第145図

カマドは、住居址の北壁中央よりやや東よりにおいて検出された。その左右面袖石の一部と支脚石aをとどめるのみで、その他は破壊された状態であった。本カマドの構材には、いずれも面取り軽石が用いられていた。

本カマドの覆土は3層に分層された。1層は焼土をわずかに含む灰を含む灰褐色土層(7.5YR 4/2)、2層は焼土をわずかに含む灰・カーボンを含む暗赤褐色土層(5 YR 3/2)、3層は褐色土層(10YR 4/4)であった。



第144図 H-29号住居址実測図(1:80)



第145図 H-29号住居址カマド実測図(1:40)

第53表 H-29号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

押図番号	器種	法量	器影の特徴	調査	備考
1 (圓)	蓋 (須)	— (16.6)	ツمام部の形態不明。	外面 ロクロヨコナデ。 天井部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰色 (10Y5/1)
2 (圓)	杯 (須)	(13.3) 3.4 (6.4)	胴部は外反し、底部平直。	外面 胴部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y7/1)

また、火床には、4層の赤褐色焼土層(5 YR 4/6)がみられたほか、ローム粒子が多量に混入する暗褐色土層(5・6層 10YR 3/4)が貼られていた。

遺物 第146図

遺物は、きわめて少なかった。須

恵器では蓋・杯・甕の破片が、土師器片には杯・甕が認められたのみにすぎない。図示し得たのは1・2のみである。

1は須恵器蓋で、ツمام部の形状は不明である。

2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器杯である。

時期

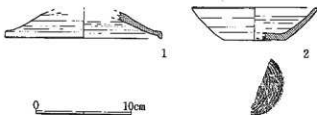
本住居址は、9世紀中葉、根岸遺跡第Ⅲ期に位置付けられよう。

(30) H-30号住居址

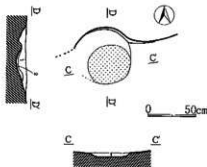
住居址 第148図

H-30号住居址は、第Ⅰ区マ-27・28グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.8m東西は推定で4.4mの隅丸長方形を呈し、推定床面積16.8㎡を測り、南北軸方向はN-11°-Wを指す。すでにその上面を削平されており、壁高5cmを測る程度しか残っていなかった。壁溝は認められない。床面は貼り床ではないが全体に硬質な床となっている。



第146図 H-29号住居址出土遺物(1:4)

第147図 H-30号住居址
カマド実測図(1:40)

IV 遺構と遺物

ピットは、住居の中央線上に P_1 ・ P_2 が対で認められた。 P_1 は 55×55 cm 深さ 5 cm、 P_2 は 50×40 cm 深さ 25 cm を測る。

遺物は、住居址の残存状況からいっても、良好な出土状態を示すものはない。

覆土は、スコリア・バミスを若干含む黒色土層 (10 YR 2/1) I 層のみであった。

カマド 第147図

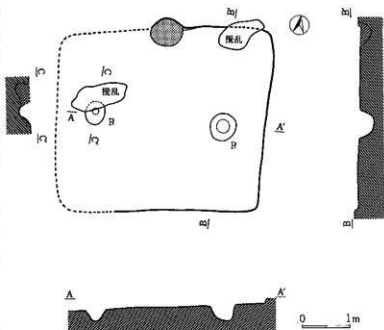
カマドは、住居址の北壁中央にあり、その火床を僅かに留めるのみで、完全に破壊されていた。その土層は、2層に分層された。1層は多量の焼土を含むよい橙色土層 (2.5YR 6/4)、2層は赤褐色焼土層 (2.5YR 4/8) であった。

遺物

遺物は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器では坏・甕の破片が、土師器では坏・甕の破片が認められたにすぎない。図示し得るものはなかった。

時期

本住居址は、遺物が少ないためその位置付けが困難である。



第148図 H-30号住居址実測図 (1:80)

(31) H-31号住居址

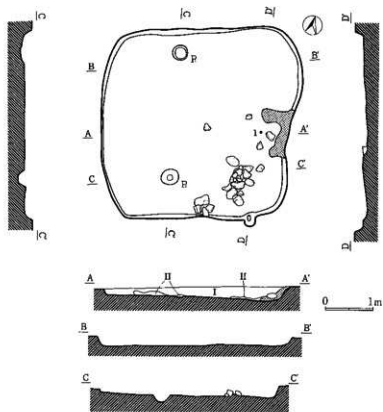
住居址 第149図

H-31号住居址は、第三区ホ-22グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北4.0m東西4.2mの隅丸方形を呈し、床面積14.2㎡を測り、南北軸方向はN-18°-Wを指す。壁高は、10~30cmを測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。なお、住居址南東コーナーの床面は、やや高くなっていた。

ピットは、 P_1 ・ P_2 が対で認められた。 P_1 は 30×30 cm 深さ 5 cm、 P_2 は 40×32 cm 深さ 18 cm を測

1 竪穴住居址



第149図 H-31号住居址実測図 (1:80)

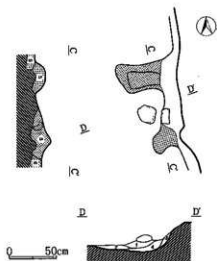
る。また、住居址南東コーナー部分が1か所ピット状に張り出していた。

遺物は、1の須恵器環がカマド部分から出土している。このほかは良好な出土状態を示すものはない。

覆土は、3層に分層された。I層は細粒バミス・小粒スコリアを多量に含む黒色土層 (10YR 2/1)、II層は小粒スコリアを多量に含む黒色土層 (10YR 1.7/1)、III層は若干の焼土を含む黒褐色土層 (10YR 2/2) であった。

カマド 第150図

カマドは、住居址の東壁中央にあり、左右両袖を僅かにとどめていたが、大半は破壊されており、その構



第150図 H-31号住居址
カマド実測図 (1:40)

第54表 H-31号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘 番号	器種	法量	器形の特徴	測 量	備 考
1 (完)	环 (須)	13.6 4.2 5.9	体部は丸みをおびて外反し、底部平直。肉厚。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転未切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ石回転)	胎土は精選されず砂粒を多く含む灰白色(7.5Y7/1)
2 (破)	甕 (土)	(18.3) — —	口縁部は僅かコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色(5YR5/4)
3 (破)	甕 (土)	(20.0) — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みにぶい赤褐色(5YR5/4)

材と考えられる面取り軽石・安山岩・集塊岩礫は、住居南東コーナーに集積されていた状況にあった。その袖の構築土には、ローム混じりの暗褐色土(5層 10YR 3/4)、ローム混じりの黒褐色土(6層 10YR 3/4)が用いられていた。

本カマド内の土層は、4層に分層された。1層は焼土・灰を僅かに含む

ぶい黄褐色土層(10YR 5/3)、2層はカーボンを僅かに含む黒色土層(10YR 2/1)、3層は褐色土層(10YR 4/4)、4層はカーボン・焼土を僅かに含む暗褐色土層(7.5YR 3/4)であった。

遺物 第151図

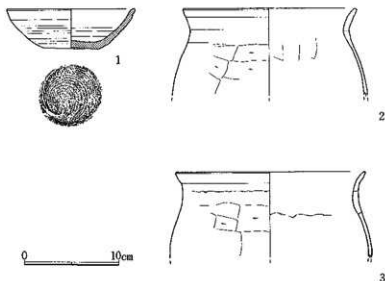
遺物の出土量は、他の住居址とくらべてきわめて少ない。須恵器では環が、土師器では甕・台付甕台脚部が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1は、回転未切り未調整の底部をみせる須恵器環である。

2・3は、コの字状口縁の土師器甕である。

時 期

本住居址は、10世紀第I四半期、根岸遺跡第V期に位置付けられよう。



第151図 H-31号住居址出土遺物(1:4)

(32) H-32号住居址

住居址 第152図

H-32号住居址は、第III区へー22グリッドにおいて検出された。

本住居址は、南北3.7m東西3.6mの隅丸方形のプランを呈し、床面積11.7㎡を測り、南北軸方向はN-15°-Wを指す。壁高は、20~30cm前後を測る。壁溝は認められない。床面は、全体に硬質な貼り床となっている。また、カマドの東脇には、カマドの構材とも考えられる安山岩礫・集塊岩礫が、床面にくい込んで検出された。

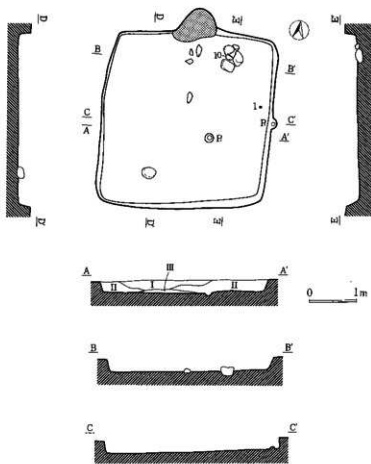
ピットは、 P_1 が住居址の中央部付近から、 P_2 が東壁中央から検出された。 P_1 は10×15cm深さ10cm、 P_2 は18×18cm深さ8cmを測る。

遺物は1の須恵器環が床面よりやや浮いて出土している。また、5の高台付皿がカマド火床部から伏せられた状態で出土している。カマドの東脇の集積からは10の凹石が検出されている。

カマド 第153図

カマドは、住居址の北壁中央にあり、左右両袖の一部を僅かにとどめているのみであった。その袖の芯には面取り軽石と安山岩礫が据えられ、ロームと黒色土を混じた黒褐色土（4層10YR 2/2）で固められていた。なお、カマドの東脇には、カマドの構材とも考えられる安山岩礫・集塊岩礫が、床面にくい込んで検出された。

本カマド内の土層は、3層に分層された。1層はカーボンを多量に含む黒色土層（10YR 1.7/1）、2層はカーボン・焼土を多量に含む黒色土層（10YR 2/1）、3層は極暗赤褐色焼土層（5



第152図 H-32号住居址実測図 (1:80)

YR 2/3) であった。

遺物 第154・155図

遺物の出土量は、他の住居址とくらべて少ない。須恵器では坏が、土師器では坏・高台付皿・甕が認められたのみであった。図示した遺物が主だったものである。

1・2は、回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏である。

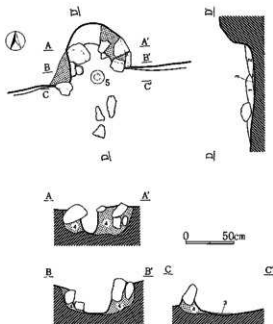
3は、ロクロ未使用の土師器坏である。

4は、内外面黒色処理のなされた大形の土師器坏である。

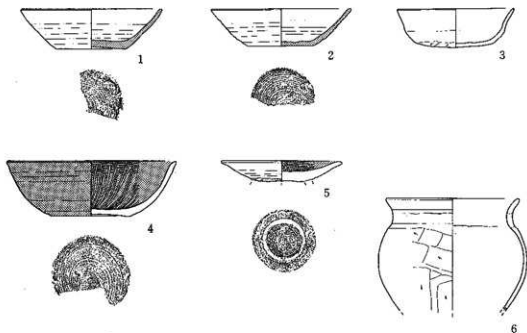
5は、内面黒色研磨のなされた土師器高台付皿である。

6～9は、コの字状口縁の土師器甕で、あるいは6は台付甕となる可能性もある。

10は、安山岩礫の平坦面に、径2cm前後

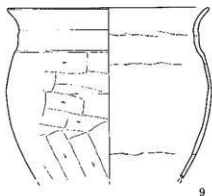
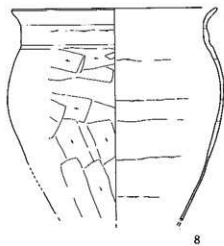
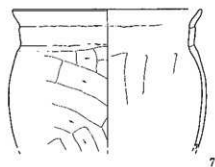


第153図 H-32号住居址カマド実測図(1:40)

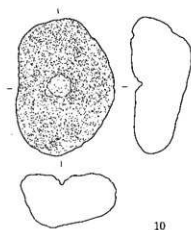


第154図 H-32号住居址出土遺物(1:4)

1 第六住居址



0 10cm



第55表 H-32号住居址出土遺物一覧表
<石器>

標記番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	凹石	安山岩	14.4	10.3	6.4	610	

原 単位12cm, g

第155図 H-32号住居址出土遺物 (1:4)

の凹をもつ凹石である。

時 期

本住居址は、9世紀第IV四半期、根岸遺跡第IV期に位置付けられよう。

IV 遺構と遺物

第56表 H-32号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

種類 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (皿)	平 (傾)	14.9 4.2 (7.2)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調査。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰 色 (7.5Y6/1)
2 (皿)	平 (傾)	14.8 3.9 (7.1)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調査。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰 色 (7.5Y6/1)
3 (完)	平 (土)	13.6 3.7 (5.5)	体部は底部より梗を持たずに変換し、 底部平底。	外面 体部ヨコナデ。 底部ヘラケズリ。 内面 ヨコナデ。(ロクロ未使用)	胎土は比較的精選さ れにふい橙色 (7.5YR6/4)
4 (皿)	平 (土)	17.8 5.8 (8.4)	体部は先みをおびて外反し、口唇部 できらにやや外反する。 底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。(黑色地埋) 底部回転糸切り未調査。 内面 黑色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰 黄色 (2.5Y6/2)
5 (完)	高台皿 (傾)	12.8 — —	底部には高台が貼りつけられたもの と考えられる。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部ロクロヨコナデ。切り差し方法不明。 内面 黑色研磨。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含みに ふい橙色 (7.5YR6/4)
6 (皿)	変 (土)	14.0 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上 半に最大径をもつ。小形。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい橙色 (7.5YR6/4)
7 (皿)	変 (土)	20.0 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上 半に最大径をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい橙色 (7.5YR6/4)
8 (完)	変 (土)	21.6 — —	口縁部はコの字状に外反し、胴部上 半に最大径をもつ。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい橙色 (7.5YR6/4)
9 (皿)	変 (土)	21.2 — —	口縁部はコの字状に外反する。	外面 口縁部ヨコナデ。 胴部ヘラケズリ。 内面 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	胎土は砂粒を含みに ふい橙色 (7.5YR6/4)

2 掘立柱建物址

(1) F-1号掘立柱建物址

第156図

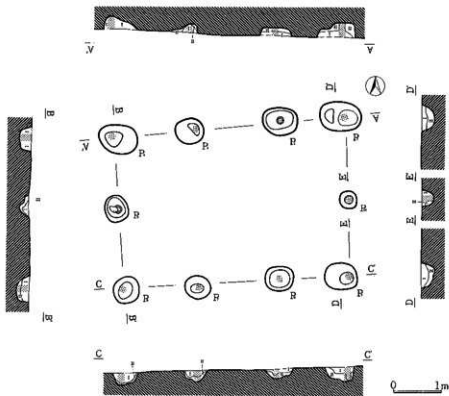
F-1号掘立柱建物址は、第I区ム-22グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.3m東西4.8mの矩形的プランを呈し、床面積15.8㎡を測る。柱間は、南北列では1.5~1.7m、東西列では1.5~1.7mを測る。

本址の南北軸方向は、N-5°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形・隅丸方形を呈していた。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子を若干含むバサバサした黒褐色土層(10YR 2/3)、II層がローム粒子を多量に含むバサバサした褐色土層(10YR 4/4)であった。



第156図 F-1号掘立柱建物址実測図(1:80)

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられたものはP₁・P₉のみで、径11cmを測った。

遺物は、出土していない。

(2) F-2号掘立柱建物址

第157図

F-2号掘立柱建物址は、第I区ミー24グリッドにおいて検出された。本址は、F-3号掘立柱建物址と重複するが、両者は直接的な切り合い関係をもたないため、その新旧は把握できなかった。

本掘立柱建物址は、2間×2間の欄柱式の掘立柱建物址で、南北3.0m東西3.0mの方形のプランを呈し、床面積9.0㎡を測る。柱間は、南北列では1.6m、東西列では1.2~1.6mを測る。

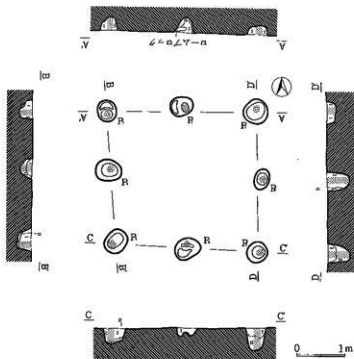
その南北軸方向は、N-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まない黑色土層 (10YR 1.7/1)、II層がローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 3/4) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられなかった。

遺物は、P₉の覆土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片と八世紀第四半期以降の須恵器坏の底部が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す八世紀第四半期かそれ以降であることが少なくともいえる。



第157図 F-2号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(3) F-3号掘立柱建物址

第158図

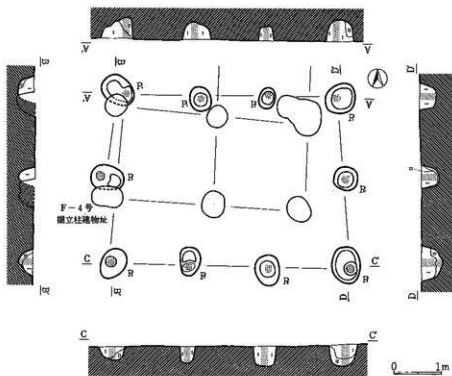
F-3号掘立柱建物址は、第I区ミ-24グリッドにおいて検出された。本址は、F-2号掘立柱建物址と重複するが、両者は直接的な切り合い関係をもたないため、その新旧は把握できなかった。また本址のP₄・P₅は、F-4号掘立柱建物址のP₄・P₅に切られており、したがって本址は、F-4号掘立柱建物址より古い存在としてとらえられる。一方、本址のP₃・P₆は、F-5号掘立柱建物址のP₃・P₇を切っており、本址は、F-5号掘立柱建物址より新しい存在としてとらえられる。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.7m東西4.8mの矩形のプランを呈し、床面積17.8㎡を測る。柱間は、南北列では1.5~1.7m、東西列では1.8mを測る。

本址の南北軸方向は、N-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないしは楕円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まないしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層がローム粒子を多量に含むややしまりのある黒褐色土層(10YR 2/3)であった。



第158図 F-3号掘立柱建物址実測図(1:80)



第159図 F-3号掘立柱建物址
出土遺物(1:4)

第57表 F-3号掘立柱建物址出土遺物一覧表
<石器>

探出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	砥石	砂岩	(8.07)	6.83	2.85	(240)	P8増土出土

※ 単位:1cm, g

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、P₁・P₂・P₃・P₄・P₅・P₆・P₇・P₈・P₁₀の覆土中より、奈良・平安時代の土師器・須恵器の破片数十片が出土している。また、砂岩の砥石(第159図)が出土している。このなかで時期の判明する遺物として九世紀以降の須恵器環と土師器杯の底部が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す九世紀かそれ以降であることが少なくともいえよう。

(4) F-4号掘立柱建物址

第160・161図

F-4号掘立柱建物址は、第I区ミー-24グリッドにおいて検出された。

本址のP₄・P₅は、F-3号掘立柱建物址のP₄・P₅を切って存在している。

本掘立柱建物址は、2間×2間の総柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西3.9mのほぼ方形のプランを呈し、床面積14.8㎡を測る。柱間は、南北列では1.9~2.3m、東西列では1.9~2.0mを測る。

本址の南北軸方向は、N-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形円形・楕円形を呈していた。

その覆土は、3層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まな

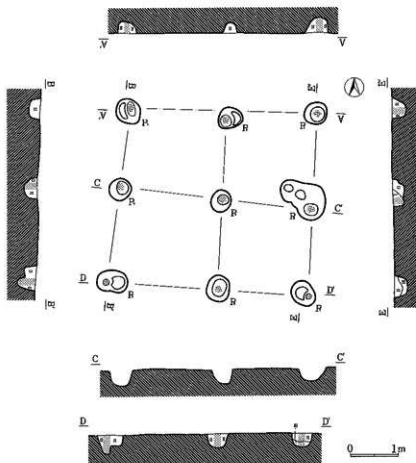


0 5cm

第160図 F-4号
掘立柱建物址
出土遺物(1:4)

第58表 F-4号掘立柱建物址出土遺物一覧表<土器>

探出番号	器種	数量	器形の特徴	調査	型	備考
1 (図)	杯 (環)	(13.4) 3.4 (7.6)	体部は外反し、底部平底。	外面 依羅口クロコナデ、 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)		胎土は精選されず砂粒を多く含む灰色(5Y6/1)



第161図 F-4号掘立柱建物址実測図(1:80)

い黒色土層(10YR 2/1)、II層がローム粒子をまったく含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、III層がローム粒子を若干含む黒褐色土層(10YR 3/2)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、P₁・P₄・P₉の覆土中より、奈良・平安時代の土師器の破片数片が出土している。このなかで時期の判明する遺物として九世紀以降の須恵器坏(第170図・回転糸切りによる底部をみせる)と土師器坏の底部(回転糸切り未調整)が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す九世紀かそれ以降であることが少なくともいえよう。

(5) F-5号掘立柱建物址

第162図

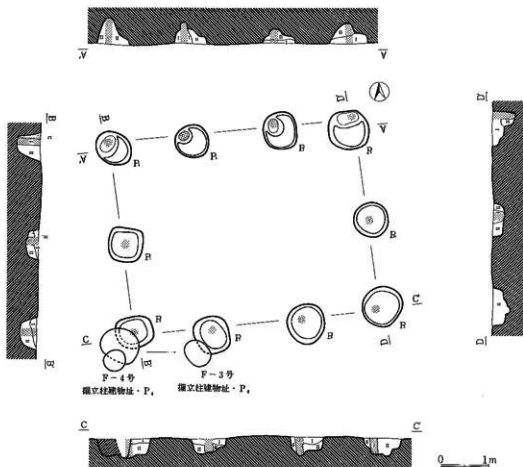
F-5号掘立柱建物址は、第I区ミ-24グリッドにおいて検出された。

本址のP₀・P₁は、F-3号掘立柱建物址のP₂・P₃に切られており、本址は、F-3号掘立柱建物址より古い存在としてとらえられる。ここまでのF-3・F-4・F-5の新旧関係を整理すると、古い順から、(古)F-5 → F-3 → F-4(新)となる。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北4.1m東西5.3mの矩形的プランを呈し、床面積21.7㎡を測る。柱間は、南北列ではおよそ1.4~1.7m、東西列では1.8~1.9mを測る。

本址の南北軸方向は、N-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形円形もしくは楕円形・隅丸方形を呈していた。



第162図 F-5号掘立柱建物址実測図(1:80)

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、II層がローム粒子を大量に含む暗褐色土層（10YR 3/4）であった。

各ピットにおける柱痕部分は、図中にはスクリーントーンで示したが、比較的明確にとらえられたものが多かった。その径は15cm前後を測った。

遺物は、P₁・P₃・P₇・P₈・P₁₀の覆土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片4片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくてもいえよう。

(6) F-6号掘立柱建物址

第163図

F-6号掘立柱建物址は、第I区ム-22・23グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址のP₇は、H-10号住居址に切られている。よって本掘立柱建物址はH-10号住居址より古いものといえる。

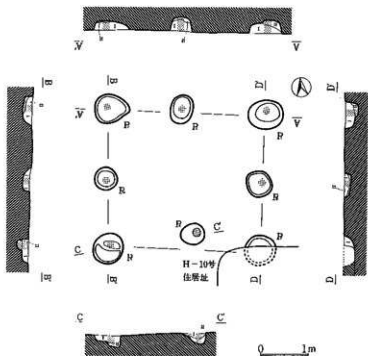
本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、そのP₈はやや軸から外れる。南北2.9m東西3.5mの矩形のプランを呈し、床面積10.2㎡を測る。柱間は、南北列では1.5~1.7m東西列では1.3~1.6mを測る。

本址の南北軸方向は、N-0°-Sを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まない黒色土層（10YR 1.7/1）、II層がローム粒子をよく含む暗褐色土層（10YR 4/3）であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで



第163図 F-6号掘立柱建物址実測図（1:80）

示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、出土していない。

(7) F-7号掘立柱建物址

第164図

F-7号掘立柱建物址は、第I区ム-23グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.8m東西2.5mの矩形のプランを呈し、床面積7.0㎡を測る。柱間は、南北列では2.5m東西列では1.3~1.5mを測る。なお、P₀横にはP₇が付随する。

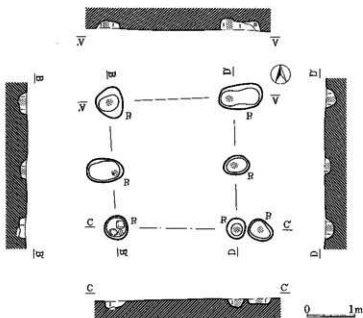
本址の南北軸方向は、N-4°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈している。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まない黒色土層 (10YR 1.7/1)、II層がローム粒子をよく含む暗褐色土層 (10YR 3/3) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物はP₁の覆土中より奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第164図 F-7号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(8) F-8号掘立柱建物址

第165図

F-8号掘立柱建物址は、第I区ム-23グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址のP₈は、F-9号掘立柱建物址P₉に切られて存在しており、両者の新旧関係は、本址がF-9に先行するものととらえられる。

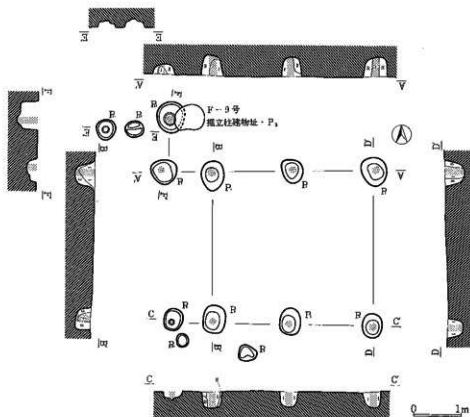
本址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、これにP₇・P₈・P₉が付随する(廂?)ものと考えられる。P₁₀~P₁₃が伴うかどうかは定かではない。

本址は、南北3.3m東西3.4mの方形のプランを呈し、床面積11.2㎡を測る。柱間は、南北列では1.6~1.8m、東西列では3.3mを測る。

本址の南北軸方向は、N-4°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まないしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層がローム粒子を多量に含むややしまりのある黒褐色土層(10YR 2/3)であった。



第165図 F-8号掘立柱建物址実測図(1:80)

各ピットにおける柱痕部分は、図中にはスクリーントーンで示したが、あまり明確にとらえられないものではなかった。ちなみにP₁の柱痕部分の径は17cm前後を測った。

遺物はP₁・P₂の覆土中より奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。

(9) F-9号掘立柱建物址

第166図

F-9号掘立柱建物址は、第I区M-23グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址のP₁は、F-8号掘立柱建物址P₈を切って存在しており、両者の新旧関係は、本址がF-8に後出するものととらえられる。

本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.5m東西2.7mの矩形のプランを呈し、床面積6.8㎡を測る。柱間は、南北列では1.2~1.5m、東西列では2.7mを測る。

本址の南北軸方向は、N-4°-Wを指す。

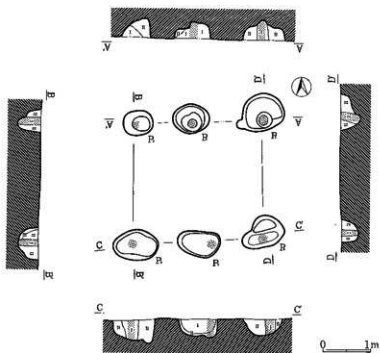
各ピットの掘り方のプランは、不整形円形・楕円形を呈していた。

その覆土は、3層に分

層され、I層がローム粒子をまったく含まない黒色土層(10YR 1.7/1) II層がローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、III層がローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR 3/2)であった。

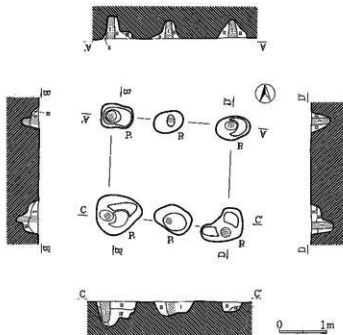
各ピットにおける柱痕部分は、図中にはスクリーントーンで示したが、あまり明確にとらえられるものではなかった。ちなみに柱痕部分の径は、15~20cm前後を測った。

遺物は出土していない。



第166図 F-9号掘立柱建物址実測図(1:80)

2 掘立柱建物址



第167図 F-10号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(10) F-10号掘立柱建物址

第167図

F-10号掘立柱建物址は、第I区M・ミー24グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.2m東西2.6mの矩形のプランを呈し、床面積5.6㎡を測る。柱間は、南北列では1.3m、東西列では2.2mを測る。

本址の南北軸方向は、N-3°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形・楕円形を呈していた。

その覆土は、3層に分層され、I層がローム粒子をまったく含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) II層がローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、III層がローム粒子を多く含む暗褐色土層 (10YR 3/3) であった。

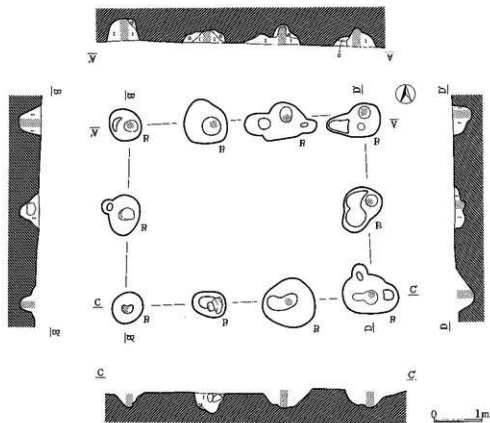
各ピットにおける柱底部分は、図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものであった。ちなみに柱底部分の径は、13~20cm前後を測った。

遺物は出土していない。

(11) F-11号掘立柱建物址

第168図

IV 遺構と遺物



第14図 F-11号掘立柱建物址実測図 (1:80)

F-11号掘立柱建物址は、第I区ミー25グリッドにおいて検出された。

本址は、F-30号掘立柱建物址と重複するが両者の新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西5.0mの矩形的プランを呈し、床面積19.0㎡を測る。柱間は、南北列では1.5~1.8m東西列では1.8~2.0mを測る。

その南北軸方向は、N-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形ないし楕円形もしくは不整形を呈する。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子をほとんど含まない黒褐色土層 (10YR 2/3)、II層はローム粒子を多く含む暗褐色土層 (10YR 3/3) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなく、僅かにP₂のみにおいて径15cmを測るものが認められたにすぎない。

遺物は、ピットの覆土中より、奈良・平安時代の土師器甕・須恵器甕等の破片十数片が出土している。このなかの土師器台付甕は九世紀以降に顕在化するものである。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。

(12) F-12号 掘立柱建物址

第169図

F-12号掘立柱建物址は、
第I区ミ-26グリッドにおい
て検出された。

本掘立柱建物址は、H-26
号住居址の西側に切られて存
在している。

本址は、1間×1間の側柱
式の掘立柱建物址で、南北2.3
m東西2.3mの方形のプラン
を呈し、床面積5.3㎡を測る。

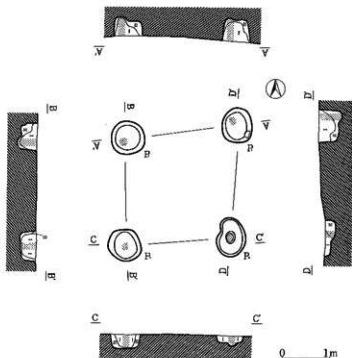
その南北軸方向は、N-4°
-Wを指す。

各ピットの掘り方のプラン
は、いずれも円形ないし楕円
形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子をほとんど含まない黒色土層 (10YR 1.7/1)、II層はローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、全く出土していない。



第169図 F-12号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(13) F-13号掘立柱建物址

第170図

F-13号掘立柱建物址は、第I区ミ-27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西3.3mの矩形のプランを呈し、床面積12.5㎡を測る。柱間は、南北列で1.4~1.7m・東西列共に1.6~2.1mを測る。

本址の南北軸方向は、N-9°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれもほぼ円形を呈しており、他に比べきわめて小形なもの

であった。

その覆土は、ロームをブロック状に含む黒色土層 (10YR 1.7/1) I 層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、全く出土していない。

(14) F-14号 掘立柱建物址

第171図

F-4号掘立柱建物址は、第I区ミー-27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址の南半分は、古い河川によって破壊されている。

本掘立柱建物址は、2間×3間のプランをとるものと考えられる側柱式の掘立柱建物址で、東西5.5mを測る。柱間は、北列では1.8~1.9m、東西列では1.5~1.9mを測る。

本址の南北軸方向は、N-9°-Wを指す。

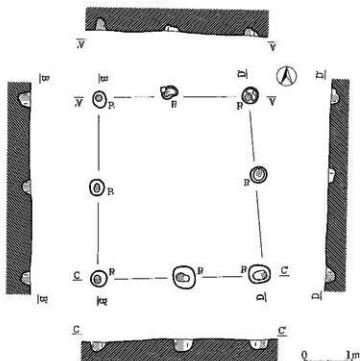
各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形ないしは隅丸方形を呈していた。

その覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子をまったく含まない黒色土層 (10YR 1.7/1)、II層はローム粒子をよく含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、III層はローム粒子を多量に含む暗褐色土層 (10YR 3/3) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりえず図中にはスクリーントーンで示したが、P₂以外は明確にとらえられるものではなかった。ちなみにP₂の柱痕部分は15cmを測った。

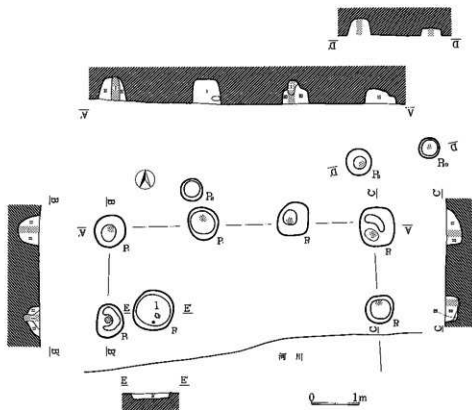
なお、本址に付随するものとしてP₇~P₁₀があるが、P₇はいわばその屋内に位置するピットとしてとらえられよう。P₇の覆土は、焼土・灰・カーボン等をまったく含まない黒褐色土層 (10YR 2/3) であった。

遺物は、P₇中より、第172図1の平安時代の須恵器坏と、P₂の有蓋石鉢の出土がある。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第174図 F-13号掘立柱建物址実測図 (1:80)

2 掘立柱建物址



第171図 F-14号掘立柱建物址実測図 (1:80)



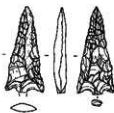
1

0 5cm

(1:4)

第172図

F-14号掘立柱建物址出土遺物



2 (4:5)

第59表 F-14号掘立柱建物址出土遺物一覧表

<石器>

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	石 鏃	黒曜石	(2.81)	1.28	0.39	(1.2)	P2埋土出土

原 単位12cm, g

第60表 F-14号掘立柱建物址出土遺物一覧表 <土器>

発掘番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査	備 考
1 (加)	环 (鉢)	<14.0> 3.5 5.8	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ回転板)	胎土は砂粒を含み灰色 (N6/0)

(15) F-15号掘立柱建物址

第173図

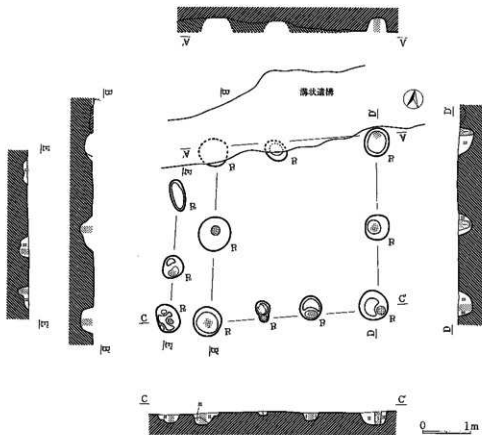
F-15号掘立柱建物址は、第I区ミ-26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、F-34号住居址と重複するが、その新旧関係は、F-34のP₁がF-15P₉を切り、本址がF-34に先行するものとしてとらえられた。また、その北列の一部を浅い溝によって攪乱されている。

本掘立柱建物址は、2間×南列2間・北列3間となる側柱式の掘立柱建物址で、西列ではP₁₀～P₁₂のいわゆる廂のピットをもつ。南北3.7m東西3.7mを測る方形のプランを呈する。柱間は東西列では1.8～2.0m南北列では1.2～2.0mを測る。

本址の南北軸方向は、N-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないし楕円形を呈していた。



第173図 F-15号掘立柱建物址実測図(1:80)

その覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子をまったく含まないしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、III層はローム粒子をまったく含まないしまりのない黒色土層(10YR 1.7/1)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられたものではP₁・P₈・P₉があり、13~18cmを測った。

遺物は、全く出土していない。

(16) F-16号掘立柱建物址

第174図

F-16号掘立柱建物址は、第I区ミ-26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その北側の一部をM-2号溝状遺構によって攪乱されている。

本掘立柱建物址は、東西にそれぞれ一条のいわゆる布掘の掘り方をもつ掘立柱建物址で、1間×2間の側柱式となるものと考えられる。南北3.1m東西3.1mのおおよそ方形のプランを呈し、床面積9.6㎡を測る。柱間は、東列では1.5m西列では1.4m前後を測る。

本址の南北軸方向は、N-7°-Wを指す。

掘り方のプランは、短冊形を呈するいわゆる布掘りである。

その覆土は、3

層に分層された。

I層はローム粒子

をまったく含まない

黒色土層(10

YR 1.7/1)、II層

はローム粒子をよく

含む黒褐色土層

(10YR 2/3)、III層

はローム粒子を

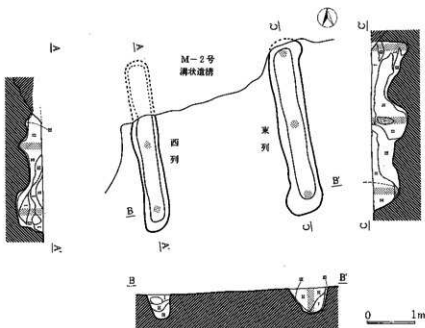
多量に含む褐色土

層(10YR 4/4)

で、これらの層が

入り混じった埋土

的狀況を呈してい



第174図 F-16号掘立柱建物址実測図(1:80)

た。なお、そのなかには礫が二個投げ込まれていた。

柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。幸うじて東列において15cmを測るものが一つ観察された。

遺物は、出土していない。

(17) F-17号掘立柱建物址

第175図

F-17号掘立柱建物址は、第I区ミ-26グリッドにおいて検出された。

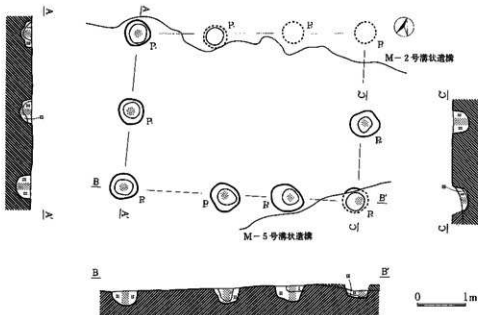
本掘立柱建物址は、その北側の一部をM-2号溝状遺構によって、P₉を浅い溝によって攪乱されている。

本掘立柱建物址は、2間×3間のプランをとるものと考えられる側柱式の掘立柱建物址で、南北3.3m東西4.8mを測る。柱間は北列では1.4~2.1m東西列では1.6m、床面積15.8㎡を測る。

本址の南北軸方向は、N-11'-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈している。

その覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子をまったく含まない黒色土層 (10YR 2/1)、II層はローム粒子を多く含む黒褐色土層 (10YR 2/3)、III層はローム粒子を大量に含む褐色



第175図 F-17号掘立柱建物址 (1:80)

土層 (10YR 4/4) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、出土していない。

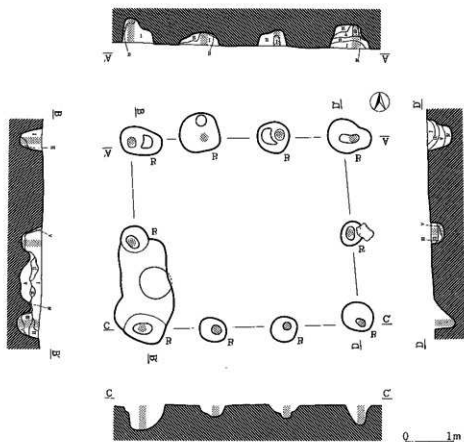
(18) F-18号掘立柱建物址

第176図

F-18号掘立柱建物址は、第I区ミー-25グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、F-19号住居址と重複するが、その新旧関係は、本址のP₃・P₄がF-19のP₈・P₉を切り、本址がF-19に後行するものとしてとらえられた。

本址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.8m東西4.5mの矩形のプランを呈し、床



第176図 F-18号掘立柱建物址実測図 (1:80)

面積17.1㎡を測る。柱間は、南北列では1.4～1.6m、東西列では1.8～2.1mを測る。

本址の南北軸方向は、N-5°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形もしくは楕円形を呈していた。また、P₃・P₄間は溝で連結される、いわゆる溝もちの形態をとっている。

その覆土は、6層に分層された。I層はローム粒子をよく含む黒色土層(10YR 2/1)、II層はローム粒子を多く含む褐色土層(10YR 3/3)、III層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、IV層はローム粒子をよく含む黒褐色土層(10YR 2/3)、V層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR 2/1)、VI層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR 2/1)であった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。このなかで辛うじて観察されたP₁・P₂の柱底部分は13cm前後を測った。

遺物は、ピットの覆土中より、平安時代の土師器甕・坏等の破片数片が出土している。このなかの土師器甕は、コの字状の強い屈曲の口縁部をみせるもので九世紀後半以降に類在化するものである。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す九世紀後半か、それ以降であることが少なくてもいえよう。

(19) F-19号掘立柱建物址

第177図

F-19号掘立柱建物址は、第I区ミ-25グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、F-18号住居址と重複するが、その新旧関係は、本址のP₁・P₂がF-18のP₃・P₄に切られており、本址がF-18に先行するものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.5m東西4.2mの矩形のプランを呈し、床面積14.7㎡を測る。柱間は、南北列では1.1～1.5m、東西列では1.5～2.1mを測る。

本址の南北軸方向は、N-5°-Wを指す。

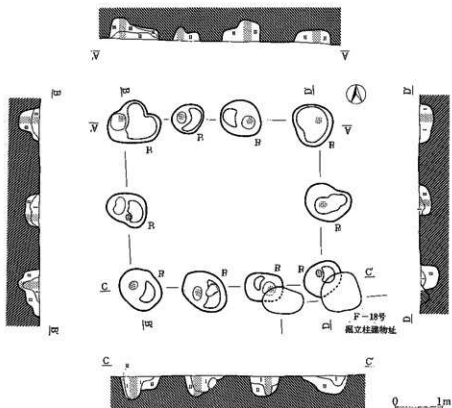
各ピットの掘り方のプランは、不整形もしくは楕円形を呈していた。

その覆土は、4層に分層された。I層はローム粒子を含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多く含む褐色土層(10YR 3/3)、III層はローム粒子をほとんど含まない黒色土層(10YR 2/1)、IV層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR 3/4)である。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、ピット中より弥生土器の破片十数片が出土した。

2 掘立柱建物址



第177図 F-19号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(20) F-20号掘立柱建物址

第178図

F-20号掘立柱建物址は、第I区ミ-24グリッドにおいて検出された。

本址は、F-3・F-4・F-5号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係はとらえられなかった。

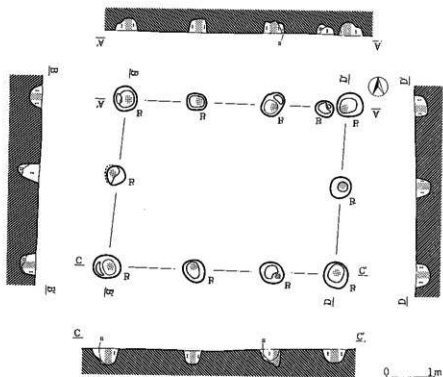
本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.5m東西4.6mの矩形のプランを呈し、床面積16.1㎡を測る。柱間は、南北列では1.3~1.5m、東西列では1.6~2.0mを測る。

本址の南北軸方向は、N-2'-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形・楕円形もしくは方形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子をほとんど含まない黒色土層 (10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を大量に含む黒褐色土層 (10YR 2/3) であった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとら



第178図 F-20号掘立柱建物址実測図 (1 : 80)

えられるものではなかった。

遺物は、ピットの覆土中より、平安時代の土師器甕・坏等の破片数片が出土している。このなかの土師器甕は、コの字状の強い屈曲の口縁部をみせるもので九世紀後半以降に顕在化するものである。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す九世紀後半か、それ以降であることが少なくともいえよう。なお、土師器坏の破片には、判読できないが墨書の認められるものがあった。

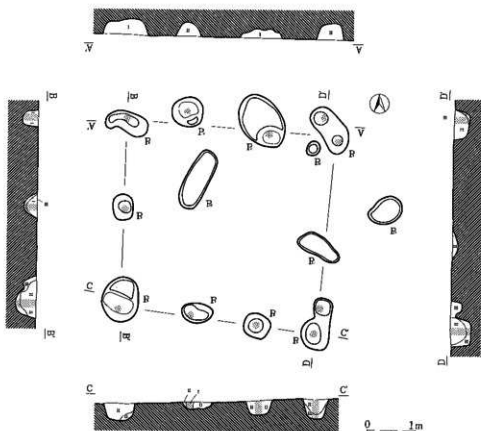
(21) F-21号掘立柱建物址

第179図

F-21号掘立柱建物址は、第I区ミ-24グリッドにおいて検出された。

本址のP₁はF-5号掘立柱建物址P₁と重複するが、本掘立柱建物址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、2間×3間の欄柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西4.3mの矩形のプランを呈し、床面積17.2㎡を測る。柱間は、南北列では1.5m、東西列では1.9～2.3mを測る。



第17図 F-21号掘立柱建物址実測図 (1:80)

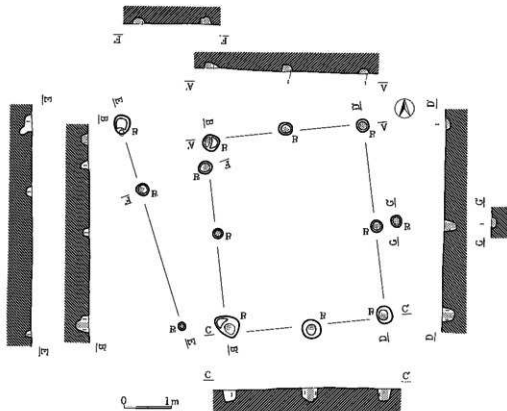
その南北軸方向は、 $N-6^{\circ}-W$ を指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも垂直な円形ないしは楕円形を呈していた。

その覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子を全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子をよく含む暗褐色土層(10YR 3/3)、III層はローム粒子を多量に含む褐色土層(10YR 4/4)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかったが、とりあえず図中にはスクリーントーンで示した。唯一、P₇においては径15cmを測る柱痕部分が確認された。なお、P₁₁~P₁₃は、本址に付随するものかどうかはわからない。

遺物は、覆土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえる。



第180図 F-22号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(22) F-22号掘立柱建物址

第180図

F-22号掘立柱建物址は、第I区ミー-23グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×2間の脚柱式の掘立柱建物址で、南北4.0m東西3.2mの矩形的プランを呈し、床面積12.8㎡を測る。柱間は、南北列では1.5~1.7m、東西列では1.9~2.1mを測る。

その南北軸方向は、N-11°-Wを指す。

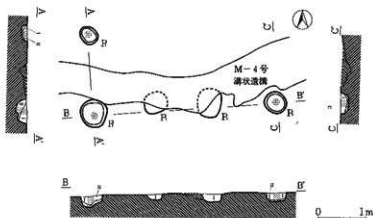
各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形を呈していた。なお、P₀~P₁₁は本址に付随するものと考えられる。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかった。

その覆土は、ローム粒子を全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) 1層のみであった。

遺物は、出土していない。

2 掘立柱建物址



第181図 F-23号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(23) F-23号掘立柱建物址

第181図

F-23号掘立柱建物址は、第I区ミー28グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その北側半分をM-3号溝状遺構に破壊されており全容を知ることができないが、おそらくは2間×3間の側柱式の掘立柱建物址となるものと考えられる。南列は4.0mを測り、柱間は1.4m前後を測る。

本址の南北軸方向は、N-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子を全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を多量に含む黒褐色土層(10YR 2/3)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。

(24) F-24号掘立柱建物址

第182図

F-24号掘立柱建物址は、第I区ミー21グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その中央部をM-4号溝状遺構に破壊されている。

本址は、1間×1間の側柱式の掘立柱建物址で、南北1.9m東西1.9mの方形のプランを呈し、床面積3.6㎡を測る。

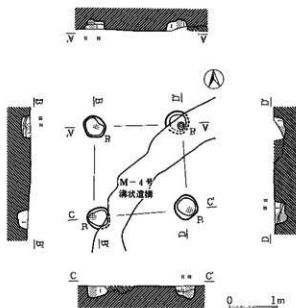
本址の南北軸方向は、N-8'-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整円形を呈していた。

その覆土は、3層に分層された。I層はローム粒子を全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1)、II層はロームが主体をなすにふい黄褐色土層 (10YR 5/4)、III層はローム粒子を若干含む黒色土層 (10YR 1.7/1) であった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、出土していない。



第182図 F-24号掘立柱建物址実測図 (1:80)

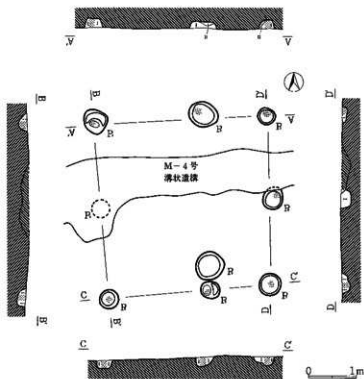
(25) F-25号 掘立柱建物址

第183図

F-25号掘立柱建物址は、第I区ミー-27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その中央部をM-4号溝状遺構に破壊されている。

本掘立柱建物址は、2間×2間の圓柱式の掘立柱建物址で、南北3.5m東西3.5mの方形のプランを呈し、床面積12.3㎡を測る。なお、後述するF-26号掘立柱建物址は本址に伴うも施設かもしれない。柱間は、南北列では1.5~2.3m、



第183図 F-25号掘立柱建物址実測図 (1:80)

東西列では1.7m前後を測る。

本址の南北軸方向は、N-12°-Eを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子を全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はロームが主体をなすにふい黄褐色土層(10YR 5/3)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、出土していない。

(26) F-26号掘立柱建物址

第184図

F-26号掘立柱建物址は、第I区ミー27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その中央部をM-4号溝状遺構に破壊されている。

本掘立柱建物址は、1間×1間の衛柱式の掘立柱建物址で、南北3.7m東西2.1mの矩形のプランを呈し、床面積7.8㎡を測る。なお、本址はF-25号掘立柱建物址に付随する可能性がある。

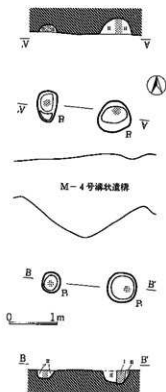
本址の南北軸方向は、N-12°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子を全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はロームが主体をなすにふい黄褐色土層(10YR 5/3)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、ピットの埋土中より、奈良・平安時代の須恵器坏・甕、土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第184図 F-26号掘立柱建物址
実測図(1:80)

(27) F-27号掘立柱建物址

第185図

F-27号掘立柱建物址は、第I区ミー27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、その大部分をM-2号溝状遺構に破壊されており、2間・3.5mを測る北列が残るのみで、その柱間は約1.7mを測る。

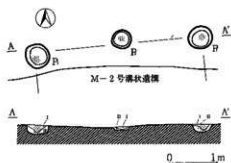
本址の南北軸方向は、N-10°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈している。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子を若干含む黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものはなかった。

遺物は、出土していない。



第185図 F-27号掘立柱建物址実測図(1:80)

(28) F-28号掘立柱建物址

第186図

F-28号掘立柱建物址は、第I区ム-22グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址はH-11号住居址と重複するが、その新旧関係はとらえられなかった。

本址は、おそらく1間×1間の側柱式の掘立柱建物址であると考えられる。北列は2.1mを測る。

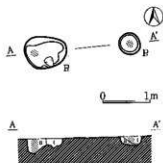
本址の南北軸方向は、N-7°-Wを指す。

ピットの掘り方のプランは、円形ないし楕円形を呈していた。

その覆土は、2層に分層された。I層はローム粒子をほとんど含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層はローム粒子を大量に含む暗褐色土層(10YR 3/3)であった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第186図 F-28号掘立柱建物址実測図(1:80)

(29) F-29号掘立柱建物址

第187図

F-29号掘立柱建物址は、第I区マ-24グリッドにおいて検出された。

本址は、西列6個(P₂~P₇)東列3個(P₈~P₁₀)の不規則なピットの配置をみせる側柱式の掘立柱建物址で、東列4.9m東西3.0mの矩形的プランを呈し、床面積は、P₂・P₆・P₈・P₁₀で囲まれるなかで10.6㎡を測る。柱間は、東列では1.5m前後を測る。

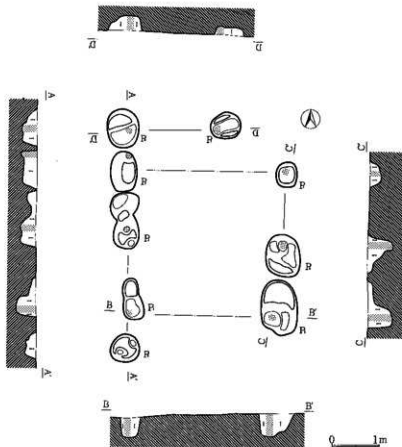
本址の南北軸方向は、N-10°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。

その覆土は、ロームを全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P₁₀の覆土中より、平安時代の須恵器甕・土師器環の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す平安時代かそれ以降であることが少なくともいえよう。



第187図 F-29号掘立柱建物址実測図(1:80)

(30) F-30号掘立柱建物址

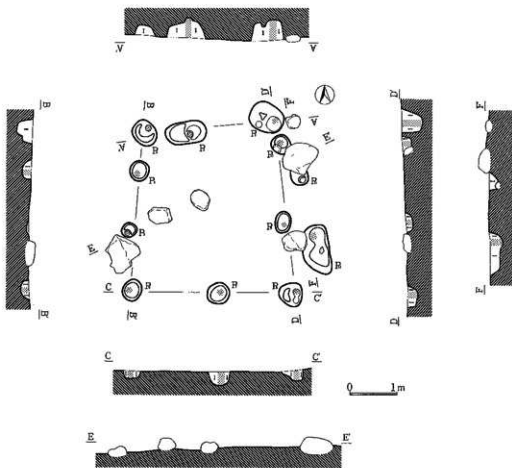
第188図

F-30号掘立柱建物址は、第I区ミ-25グリッドにおいて検出された。

本址は、F-11号掘立柱建物址と重複するが、その新旧関係はとらえられなかった。

本掘立柱建物址は、2間×3間の掘立柱建物址で、南北3.4m東西3.4mの側柱式の矩形のプランを呈し、床面積11.6㎡を測る。柱間は、南北列では1.0~1.8m、東西列では0.5~1.8mを測る。なお、後の写真にもみるように本址の確認面においては溶岩の巨礫が露呈していた。このことから、もし仮に本址が平地式の建物であったなら、この溶岩の巨礫はかなり支障をきたす存在であったといえる。したがってこの溶岩の巨礫を避けるためには本址が高床式の構造物でなければならず、間接的にはあるが、本址が高床式の構造物であったことを示唆する事実であるといえよう。

本址の南北軸方向は、N-0°-Sを指す。



第188図 F-30号掘立柱建物址実測図 (1:80)

各ピットの掘り方のプランは、不整形形・楕円形を呈していた。

その覆土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

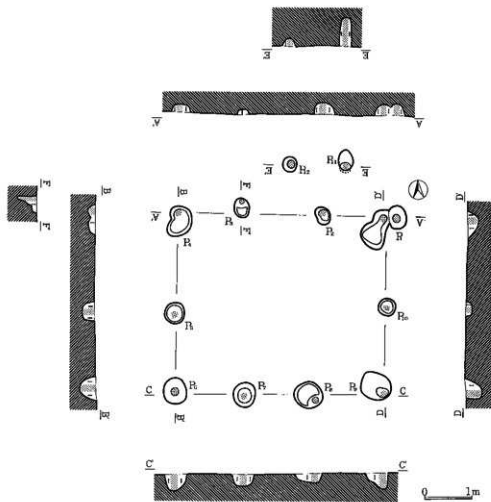
各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーン・トーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は出土していない。

(31) F-31号掘立柱建物址

第189図

F-31号掘立柱建物址は、第I区マ-25グリッドにおいて検出された。



第189図 F-31号掘立柱建物址実測図 (1:80)

本址は、H-17号住居址を切って存在している。

本掘立柱建物址は、2間×3間の掘立柱式で、南北3.7m東西4.3mの方形のプランを呈し、床面積15.9㎡を測る。柱間は、南北列では1.4~1.7m東西列では1.6~2.1mを測る。

その南北軸方向は、N-2°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整の円形・楕円形を呈していた。

その覆土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

(32) F-32号掘立柱建物址

第190図

F-32号掘立柱建物址は、第I区ミ-25グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址については、南列の2間・西列の1間がとらえられたのみでそのプランの全容はつかめなかった。柱間は、南列では1.6~2.1m西列では1.5mを測る。

その南北軸方向は、N-8°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

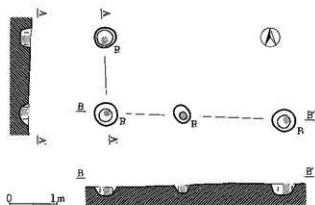
その覆土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかつ

た。

遺物は、出土していな

い。



第190図 F-32号掘立柱建物址 (1:80)

(33) F-33号掘立柱建物址

第191図

F-33号掘立柱建物址は、第I区マー25グリッドにおいて検出された。

本址は、H-20号住居址を切って存在している。

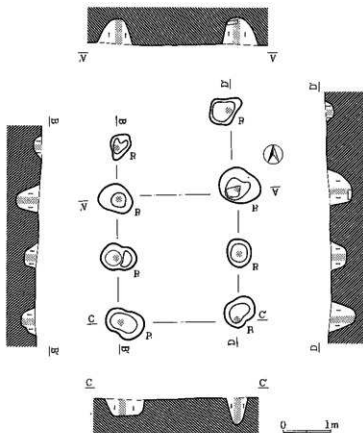
本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、これにP₁・P₂が付随するものと考えられる。南北2.6m東西2.6mの方形のプランを呈し、床面積6.8㎡を測る。柱間は、東西列では1.2~1.4mを測る。

本址の南北軸方向は、N-7°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、いずれも不整形ないし楕円形を呈していた。また、P₁の底面には、扁平は鉄平石が敷かれていた。

その覆土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとら



第191図 F-33号掘立柱建物址実測図(1:80)

えられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

(34) F-34号掘立柱建物址

第192図

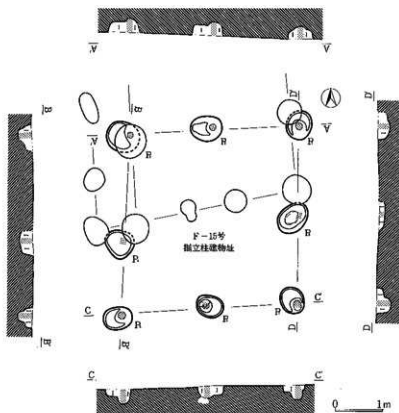
F-34号掘立柱建物址は、第I区ミー26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址P₁は、F-15号掘立柱建物址P₁₀と重複し、本址が新しいものとしてとらえられた。

本掘立柱建物址は、2間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.7m東西3.7mの方形のプランを呈し、床面積13.7㎡を測る。柱間は、南北列では1.8m、東西列では1.6~2.2mを測る。

本址の南北軸方向は、N-8°-Wを指す。

ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。



第192図 F-34号掘立柱建物址実測図(1:80)

その覆土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

(35) F-35号掘立柱建物址

第193図

F-35号掘立柱建物址は、第I区マ-26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×2間の掘立柱式建物址で、南北2.2m東西2.5mの矩形のプランを呈し、床面積5.5㎡を測る。柱間は、南北列では1.1~1.5mを測る。

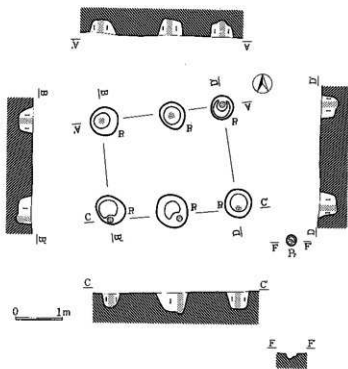
本址の南北軸方向は、N-10°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形を呈していた。

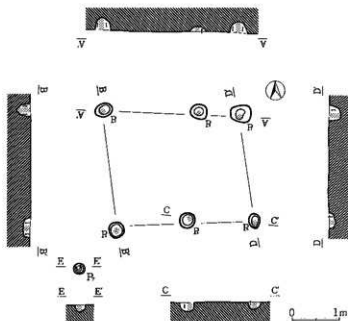
その覆土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P₂の覆土中より、奈良時代（八世紀後半）の土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良時代（八世紀後半）か、それ以降であることが少なくともいえる。



第193図 F-35号掘立柱建物址実測図 (1:80)



第194図 F-36号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(36) F-36号掘立柱建物址

第194図

F-36号掘立柱建物址は、第I区マ-26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×2間の側柱式の掘立柱建物址で、南北2.3m東西2.9mの方形のプランを呈し、床面積6.7㎡を測る。柱間は、南北列では1.1~1.5mを測る。

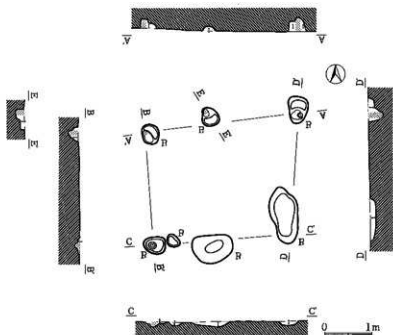
本址の南北軸方向は、N-11'-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形もしくは楕円形を呈していた。なお、P₇は本址に付随するものと考えられる。

その覆土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱底部分は、とりあえず図中にはスクリーン・トーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第196図 F-37号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(37) F-37号掘立柱建物址

第195図

F-37号掘立柱建物址は、第I区マー26グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、1間×2間のやや不規則な柱列をみせる側柱式の掘立柱建物址で、南北2.4m東西3.3mの矩形の歪んだプランを呈し、床面積7.9㎡を測る。柱間は、南北列では1.4~2.0mを測る。

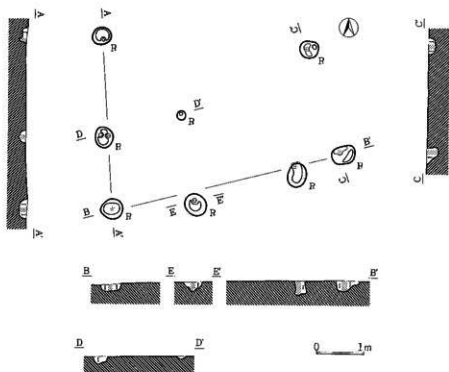
本址の南北軸方向は、N-16°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、不整形ないし楕円形を呈している。

その埋土は、スコリア・バミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。



第196図 F-38号掘立柱建物址実測図 (1:80)

(38) F-38号掘立柱建物址

第196図

F-38号掘立柱建物址は、第I区マ-27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、西列2間×南列4間の側柱式の掘立柱建物址で、南北3.5m東西5.0mの柱列の揃わない歪んだ矩形のプランを呈する。その北列は検出できなかった。

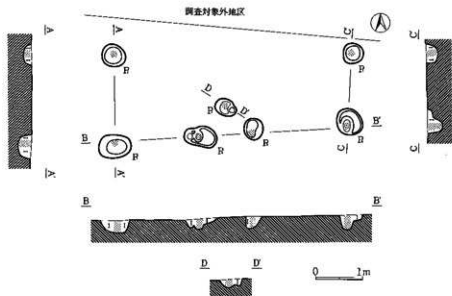
本址の南北軸方向は、N-13°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、歪んだ円形ないし楕円形を呈していた。

その覆土は、スコリア・パミスを全く含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、とりあえず図中にはスクリーントーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P₂の覆土中より、奈良・平安時代の須恵器坏・土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくともいえよう。



第197図 F-39号掘立柱建物址実測図(1:80)

(39) F-39号掘立柱建物址

第197図

F-39号掘立柱建物址は、第I区マー27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、2間×3間の側柱式の掘立柱建物址となるものと考えられるが、その北半分は検出できなかった。南北5.0mを測り、柱間は南列では1.2~1.8mを測る。なお、図のP₁₁は本址に伴うものかどうかわからない。

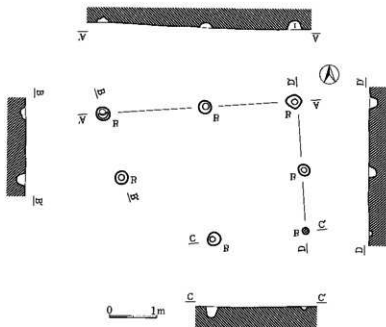
本址の南北軸方向は、N-11°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、円形ないしは楕円形を呈していた。

その覆土は、スコリア・パミスを含まない黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱底部分は、とりえず図中にはスクリーン・トーンで示したが、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、P₇・P₈の覆土中より、奈良・平安時代の須恵器甕・土師器甕の破片が出土している。よって本掘立柱建物址所産期は、遺物の示す奈良・平安時代か、それ以降であることが少なくてもいえよう。



第188図 F-40号掘立柱建物址実測図(1:80)

(40) F-40号掘立柱建物址

第198図

F-40号掘立柱建物址は、第I区マー27グリッドにおいて検出された。

本掘立柱建物址は、そのP₀が旧河川によって削られているが、2間×2間の隅柱式の掘立柱建物址となるものとおもわれ、南北2.8m東西4.0mの歪んだ矩形のプランが推定される。

本址の南北軸方向は、N-10°-Wを指す。

各ピットの掘り方のプランは、小さな円形を呈していた。

その覆土は、スコリア・バミスを含まない黒色土層(10YR 1.7/1) I層のみであった。

各ピットにおける柱痕部分は、明確にとらえられるものではなかった。

遺物は、出土していない。

第61表 掘立柱建物址ピット一覧表 <その1>

	No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ	
F-1	P ₁	85	60	30	F-5	P ₁	90	85	50	F-8	P ₁₃	40	40	15	
	P ₂	70	55	15		P ₂	80	70	30		F-9	P ₁	90	75	40
	P ₃	60	50	20		P ₃	70	65	45			P ₂	75	60	35
	P ₄	80	60	25		P ₄	80	65	55			P ₃	60	50	50
	P ₅	55	45	20		P ₅	80	70	25			P ₄	95	65	50
	P ₆	60	50	25		P ₆	80	65	40			P ₅	85	50	40
	P ₇	55	45	20		P ₇	80	70	30	P ₆		90	65	35	
	P ₈	60	50	20		P ₈	85	75	40	F-10	P ₁	70	50	40	
	P ₉	70	55	30		P ₉	85	80	35		P ₂	60	45	35	
	P ₁₀	40	35	25		P ₁₀	70	70	20		P ₃	70	45	45	
								P ₄	95		80	50			
F-2	P ₁	50	50	20	F-6	P ₁	70	60	25	F-11	P ₁	115	60	40	
	P ₂	50	35	30		P ₂	60	45	30		P ₂	150	75	40	
	P ₃	45	35	25		P ₃	75	60	20		P ₃	90	85	35	
	P ₄	55	45	25		P ₄	45	45	15		P ₄	75	65	45	
	P ₅	50	40	30		P ₅	65	60	25		P ₅	85	65	40	
	P ₆	55	40	15		P ₆	50	40	25		P ₆	70	60	30	
	P ₇	45	40	45		P ₇	(65)	(65)	(25)	P ₇	70	50	40		
	P ₈	45	30	45		P ₈	55	50	15	P ₈	110	100	40		
F-3	P ₁	70	60	45	F-7	P ₁	90	50	25	F-12	P ₁	70	60	50	
	P ₂	45	35	30		P ₂	65	55	15		P ₂	70	70	40	
	P ₃	50	45	35		P ₃	75	50	15		P ₃	70	65	35	
	P ₄	70	55	40		P ₄	50	50	15		P ₄	85	60	20	
	P ₅	70	(50)	35		P ₅	40	35	20	F-13	P ₁	35	35	15	
	P ₆	65	50	30		P ₆	55	40	10		P ₂	30	20	10	
	P ₇	60	40	35		P ₇	50	40	10		P ₃	35	25	25	
	P ₈	65	50	40	F-8	P ₁	60	50	40		P ₄	35	30	20	
	P ₉	75	60	45		P ₂	50	45	40		P ₅	35	35	20	
	P ₁₀	50	50	40		P ₃	60	45	40		P ₆	50	45	25	
				P ₄		60	45	35	P ₇	45	35	20			
				P ₅		55	45	30	P ₈	35	35	15			
F-4	P ₁	50	45	30	F-8	P ₆	50	40	35	F-14	P ₁	80	70	30	
	P ₂	50	40	20		P ₇	55	50	20		P ₂	75	65	50	
	P ₃	55	50	25		P ₈	45	40	20						
	P ₄	45	45	30		P ₉	40	30	-						
	P ₅	65	45	35		P ₁₀	25	25	-						
	P ₆	55	50	30		P ₁₁	65	(55)	45						
	P ₇	55	45	30		P ₁₂	40	35	15						
	P ₈	105	50	25											
	P ₉	45	40	30											

第62表 張立柱遺物址ピット一覧表 <その2>

	No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ		
F-14	P ₃	70	60	50	F-18	P ₆	90	55	50	F-21	P ₁₂	80	50	-		
	P ₄	70	65	50		P ₇	55	45	25		P ₁₃	75	55	-		
	P ₅	70	55	35		P ₈	55	50	25	F-22	P ₁	25	25	10		
	P ₆	65	55	30		P ₉	65	60	40		P ₂	25	25	15		
	P ₇	90	80	10		P ₁₀	55	45	30		P ₃	35	35	15		
	P ₈	45	45	-		F-19	P ₁	85	80		30	P ₄	20	20	10	
	P ₉	55	50	35			P ₂	90	70		45	P ₅	55	40	25	
	P ₁₀	45	45	15			P ₃	65	55		30	P ₆	40	40	30	
	F-15	P ₁	60	50			30	P ₄	110		85	45	P ₇	35	30	25
		P ₂	(50)	(40)			(25)	P ₅	85		65	25	P ₈	25	25	25
P ₃		(60)	(55)	(25)	P ₆		90	75	45		P ₉	40	35	25		
P ₄		70	65	25	P ₇		100	75	45		P ₁₀	25	25	10		
P ₅		60	55	25	P ₈		80	60	40		P ₁₁	15	15	10		
P ₆		45	25	5	P ₉		80	70	40		P ₁₂	30	25	15		
P ₇		50	45	15	P ₁₀		95	70	25		P ₁₃	25	20	10		
P ₈		60	60	30	F-20	P ₁	55	50	25	F-23	P ₁	40	35	10		
P ₉		55	50	30		P ₂	50	40	25		P ₂	60	55	25		
P ₁₀		65	30	10		P ₃	40	35	25		P ₃	(50)	(45)	10		
P ₁₁		50	45	20		P ₄	50	50	25		P ₄	(60)	(50)	15		
P ₁₂		60	45	20		P ₅	40	40	45		P ₅	50	45	15		
F-16	西列	(240)	55	60		P ₆	55	45	30	F-24	P ₁	50	45	20		
	東列	365	65	80		P ₇	50	45	30		P ₂	50	45	20		
F-17	P ₁	-	-	-		P ₈	50	45	35		F-25	P ₃	(50)	45	25	
	P ₂	-	-	-		P ₉	55	50	30			P ₄	50	45	25	
	P ₃	-	-	-		P ₁₀	45	40	30	F-26		P ₁	35	35	20	
	P ₄	55	55	25		P ₁₁	40	30	20			P ₂	60	50	15	
	P ₅	55	50	25	F-21	P ₁	105	50	35		P ₃	55	50	20		
	P ₆	60	50	30		P ₂	125	85	20		P ₄	-	-	-		
	P ₇	60	55	30		P ₃	65	60	25		P ₅	40	40	20		
	P ₈	70	55	30		P ₄	90	40	35		P ₆	40	35	20		
	P ₉	(55)	(55)	(25)		P ₅	55	40	30		P ₇	45	45	20		
	P ₁₀	60	50	30		P ₆	95	75	45		P ₈	45	40	20		
F-18	P ₁	90	65	50		P ₇	65	40	15		P ₉	60	55	-		
	P ₂	65	60	30		P ₈	55	50	30		F-26	P ₁	70	60	30	
	P ₃	85	80	25		P ₉	110	60	45			P ₂	65	40	15	
	P ₄	85	55	50		P ₁₀	95	40	10			P ₃	65	60	30	
	P ₅	60	55	40		P ₁₁	30	25	-			P ₄	40	35	20	

第63表 掘立柱建物址ピット一覧表 <その3>

	No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ		No.	長径	短径	深さ	
F-27	P ₁	50	45	15	F-31	P ₁₂	30	30	15	F-37	P ₃	40	35	20	
	P ₂	40	40	5		F-32	P ₁	45	40		20	P ₄	45	35	10
	P ₃	50	45	20			P ₂	50	45		20	P ₅	80	60	10
F-28	P ₁	45	45	20	P ₃		35	30	15		P ₆	120	55	10	
	P ₂	85	60	30	P ₄		50	45	20		P ₇	30	25	5	
F-29	P ₁	50	45	25	F-33	P ₁	85	70	55		F-38	P ₁	40	35	15
	P ₂	80	55	30		P ₂	70	55	50			P ₂	40	35	15
	P ₃	115	50	30		P ₃	75	50	25	P ₃		45	40	15	
	P ₄	85	40	40		P ₄	80	50	35	P ₄		45	40	15	
	P ₅	115	75	50		P ₅	70	50	55	P ₅		50	40	20	
	P ₆	90	70	50		P ₆	60	50	35	P ₆		50	40	30	
	P ₇	65	55	15		P ₇	75	55	15	P ₇		50	35	25	
	P ₈	80	65	30		P ₈	55	40	15	P ₈		20	20	5	
	P ₉	60	55	20	F-34	P ₁	60	50	30	F-39	P ₁	45	45	25	
F-30	P ₁	70	55	40		P ₂	65	50	30		P ₂	50	45	15	
	P ₂	85	45	40		P ₃	(70) (60) 30				P ₃	70	50	25	
	P ₃	55	45	30		P ₄	60	60	30		P ₄	70	40	20	
	P ₄	40	40	20		P ₅	60	45	30		P ₅	45	40	25	
	P ₅	30	30	5		P ₆	55	45	30		P ₆	60	50	30	
	P ₆	45	40	15		P ₇	60	50	30		P ₇	45	35	15	
	P ₇	45	45	30		P ₈	70	55	10	F-40	P ₁	30	30	20	
	P ₈	50	45	20	F-35	P ₁	50	45	35		P ₂	25	25	10	
	P ₉	45	30	15		P ₂	60	50	35		P ₃	30	25	10	
	P ₁₀	40	40	20		P ₃	60	60	30		P ₄	25	25	20	
	P ₁₁	40	35	20		P ₄	65	55	30		P ₅	25	25	25	
	P ₁₂	105	55	25		P ₅	70	65	45		P ₆	15	15	5	
F-31	P ₁	105	40	25		P ₆	60	55	35		P ₇	25	25	15	
	P ₂	35	25	25		P ₇	20	20	10	F-36	P ₁	40	35	25	
	P ₃	40	30	10	P ₁	40	35	25	P ₂		35	30	10		
	P ₄	60	45	15	P ₂	35	30	10	P ₃		35	25	25		
	P ₅	45	40	25	P ₃	35	25	25	P ₄		35	30	15		
	P ₆	55	45	35	P ₄	35	30	15	P ₅		35	35	20		
	P ₇	50	45	25	P ₅	35	35	20	P ₆		30	20	15		
	P ₈	60	55	20	P ₆	30	20	15	P ₇		25	25	15		
	P ₉	65	55	35	F-37	P ₁	55	35	30						
	P ₁₀	35	35	15		P ₂	40	35	10						
	P ₁₁	45	30	60											

3 土 壙

(1) D-1号土壙

第199図

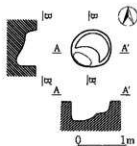
D-1号土壙は、第I区ミー22グリッドにおいて検出された。

本土壙は、径約40cmを測る円形を呈し、深さ20cm程のきわめて浅いもので、テラスをもつものである。

その覆土は、バミス・スコリア・ローム粒子を含まない黒色土層 (10YR 1.7/1) であった。

本土壙は、土壙としてとらえるよりは、H-8号住居址に付随するピットといえるのかもしれない。

なお、本土壙からは遺物が一点も出土していない。



第199図 D-1号土壙実測図
(1:80)

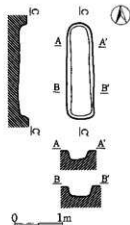
(2) D-2号土壙

第200図

D-2号土壙は、第I区マー23グリッドにおいて検出された。

本土壙は、その上面のプランは長径2.0m短径0.6mを測る長楕円形を呈している。その断面は、逆D字状を呈しており深さ20cmを測った。主軸方向は、N-9°-Wを指し、竪穴住居址や孤立柱建物址と同様な主軸方向をとっている。

本土壙からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの集落のある時期に付随するものとみられようか。



第200図 D-2号土壙
実測図 (1:80)

(3) D-3号土壙

第201図

D-3号土壙は、第I区マー24グリッドにおいて検出された。

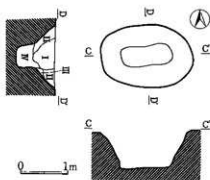
本土壙は、東西1.9m南北1.3mを測る楕円形を呈している。その断面は、逆台形状を呈しており

深さ75cmを測った。

主軸方向は、E-4°-Nを指す。

その覆土は4層に分層された。I層は小粒バミスを含みローム粒子を含まない黒色土層(10YR 1.7/1)、II層は小粒バミスを含みローム粒子を若干含む黒色土層(10YR 2/1)、III層はロームのブロック状堆積である褐色土層(10YR 4/6)、IV層はローム粒子を多く含む黒褐色土層(10YR 2/3)であった。

本土壕からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、この集落のある時期に付随するものとみられようか。



第20図 D-3号土壕実測図(1:80)

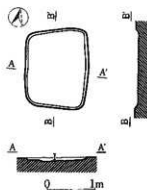
(4) D-4号土壕

第202図

D-4号土壕は、第I区マ-24グリッドにおいて検出された。本土壕は、長径1.7m短径1.3mを測る隅丸方形を呈している。きわめて浅い掘り込みで、深さ10cmを測るにすぎない。主軸方向は、N-11°-Wを指す。

その覆土は、ローム粒子を僅かに含む黒褐色土層(10YR 3/2) I層のみであった。

本土壕からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、この集落のある時期に付随するものとみられようか。



第21図 D-4号土壕実測図(1:80)

(5) D-5号土壕

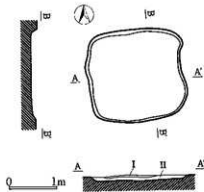
第203図

D-5号土壕は、第I区マ-24グリッドにおいて検出された。

本土壕は、長短2.0mを測る歪んだ隅丸方形を呈している。きわめて浅い掘り込みで、深さ10cmを測るにすぎない。

主軸方向は、N-9°-Wを指す。

IV 遺構と遺物



第200図 D-5号土坑実測図 (1:80)

その覆土は、I層はローム粒子をまったく含まない黒色土層 (10YR 2/1)、II層がローム粒子を多量に含み、バミスを僅かに含む褐色土層 (10YR 3/2) であった。

本土坑からは遺物が一点も出土していない。したがってその時期判定も難しいが、いずれにしてもこの集落のある時期に付随するものとみられようか。

4 溝状遺構

(1) M-1号溝状遺構

遺構 第204図

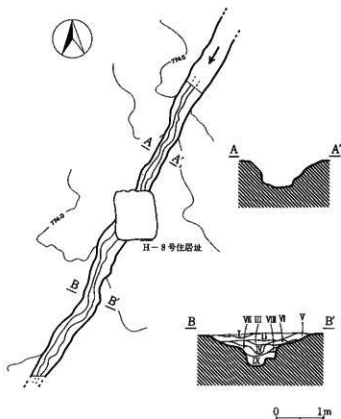
M-1号溝状遺構は、第I区ヌ・ネ・ノ-32・33グリッドにおいて検出された南北に延びる長い溝状遺構である。

本溝状遺構は、発掘調査地区において検出された部分は50m程であるが、さらに南北に延びるものと考えられよう。その幅は1.5～3mを測った。

本溝状遺構は、おおよそ直線的なプランを呈しており、旧河川より引水した人工的な水路である可能性が強いと考えられよう。

なお、その中央部はH-8号住居址に切られている。

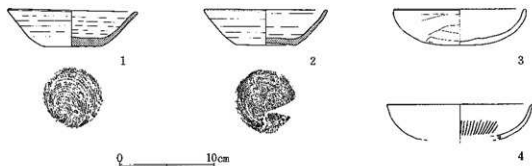
その覆土は、9層に分層された。I層は砂を含まない黒色土層 (10YR 2/1)、II層は砂質の黒褐色土層 (10YR 2/3)、III層はII層よりさらに砂質の黒褐色土層 (10YR 3/2)、IV層は大量の砂と5～10mmの小礫で構成される河川体積物のにぶい黄褐色砂利層 (10YR 4/3)、V層は砂を含まない黒褐色土層 (10YR 2/3)、VI層はやや砂質の黒褐色土層 (10YR 3/2)、VII層は砂を含まない黒色土層 (10YR 2/1)、VIII層は砂をよく含む暗褐色土層 (10YR 3/4)、IX層は大量の砂と10～30mmの小礫・拳の半分程度の礫で構成される河川体積物のにぶい黄褐色砂利層 (10



第204図 M-1号溝状遺構実測図 (1:500)

第64表 M-1号溝状遺構出土遺物一覧表〈土器〉

検出 番号	器種	法量	器 形 の 特 徴	調 査 状 況	備 考
1 (衆)	環 (須)	13.8 3.8 6.5	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰 黄色 (2.5Y6/2)
2 (圓)	環 (須)	(13.1) 3.7 6.2	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み淡 黄色 (2.5Y7/3)
3 (圓)	環 (土)	(14.0) 3.8	体部は丸みおびて外反し、底部丸底。	外面 口唇部ヨコナデ。 体部-底部ヘラケズリ。 内面 ヨコナデ。	胎土は砂粒を含み橙 色 (7.5YR6/6)
4 (圓)	環 (土)	(15.3)	体部は丸みおびて外反し、底部丸底。	外面 体部-底部ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。シャープな放射状暗文あり。	胎土は砂粒を含み橙 色 (5YR6/6)



第205図 M-1号溝状遺構出土遺物(1:4)

YR 4/3)であった。IV層とIX層の存在から、本溝状遺構の機能時には断絶期をもつ二度の水流があったことが認められる。

遺物 第205図

本溝状遺構から検出された遺物を第205図に示した。

1・2は、回転糸切りによる底部をみせる須恵器環である。

3・4は、扁平な半球状の器形をみせる土師器環である。4の内面体部には、シャープな放射状暗文が施されている。この他図示されないが、多量の須恵器・土師器片が出土している。

時期

本溝状遺構から検出された1・2の遺物は、本溝状遺構機能時に混入したものと考えられ、遺物自体は九世紀前葉のものと考えられる。また、その中央部を切るH-8号住居址は九世紀中葉と考えられる。このことから、本溝状遺構が機能していた時期の一点を九世紀前葉とでき、またそれが廃絶されたのは九世紀中葉と推定できる。

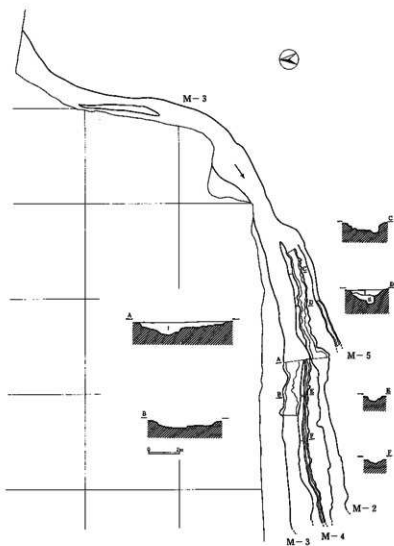
(2) M-2～5号溝状遺構

遺構 第206図

M-2～4号溝状遺構は、第I区北側において検出された東西に延びる一連の溝状遺構である。

これらは、微高地状地形のとぎれる縁に沿って蛇行しながら伸びている。基幹はM-3である。

M-3のA- \bar{A} の土層堆積は、I層は若干の砂利を含む水流断絶後の黒褐色土層 (10YR 2/2)、II層は大量の砂と5～10mmの小礫で構成される河川堆積物の褐色砂利層 (10YR 4/1) であった。また、B- \bar{B} の土層堆積は、大量の砂と5～10mmの小礫で構成される河川堆積物の褐色砂利層 (10YR 4/1) 1層であった。



第206図 M-2・3・4・5号溝状遺構実測図 (1:1000)

第65表 M-3号溝状遺構出土遺物一覧表〈土器〉

発掘番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (副)	坏 (須)	2.8 — —	ツマミ部は、ボタン状を呈する。	外面 天井部回転ヘラケズリ。 内面 ロクロコナデ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み橙 色 (7.5YR 6/6)

第66表 溝状遺構出土遺物一覧表

<石器>

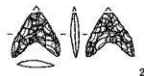
発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	石 鏃	黒燧石	(1.42)	1.6	0.28	(0.5)	M-4西出土
3	石 鏃	黒燧石	2.65	1.92	0.46	2.1	M-4西出土
4	砥石	砂 岩	(6.75)	2.92	2.75	(95)	M-2出土

※ 単位はcm, g

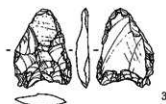
M-3出土



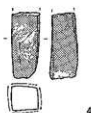
M-4西出土



M-4西出土



M-2出土



第207図 溝状遺構出土遺物実測図

(1・4 = 1 : 4, 2・3 = 4 : 5)

なお、本溝状遺構は、自然地形に沿って蛇行すること、またそのプランに一定の規格性を持たないことを考えあわせると、自然流路である可能性が高いと考えられる。

遺物 第207図

本遺構群の地積層からは 第207図1の須恵器蓋の他、多くの須恵器・土師器片・馬歯が検出されている。また、石器は石鏃(2・3)、砥石(4)が検出されている。

1は、ボタン状のツマミ部をもつ須恵器蓋である。

時期

本遺構群は、平安時代に位置付けられるF-16・17・23-27号掘立柱建物址の一部を破壊している。また本遺構群は、寛文10年(1670)に開田したと検地帳にある現水田下に埋もれていたものである。

したがって本遺構群は、平安～寛文年の間に機能していたものといえる。おおよそは、中世末から近世初頭のものともみてよいだろう。

5 表面採集遺物

遺物 第208図

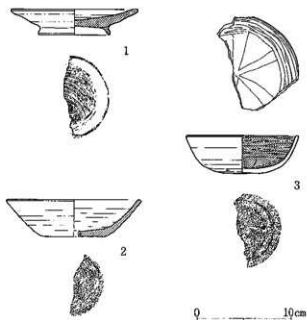
表面採集遺物は数多くあるが、図示し得たのは第218図1・2・3のみであった。

1は、I区H-2～H-4付近で採集された須恵器高台付皿である。

2は、I区H-13付近で採集された須恵器環で、回転糸切りによる底部をみせている。

3は、見込部に放射状暗文の施された土師器環である。回転ヘラケズリによる底部をみせている。

いずれの遺物も、平安時代の遺物といえるが、細かな時期決定するにはいたらなかった。



第208図 表面採集遺物 (1:4)

第67表 表採遺物一覧表〈土器〉

検出番号	器種	法量	器形の特徴	調査	備考
1 (陶)	高台皿 (須)	□13.4) 2.7 (7.6)	底部には高台が貼りつけられる。	外面 ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (7.5Y8/1)
2 (陶)	環 (須)	□14.2) 3.9 (7.0)	体部は外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナテ。 底部回転糸切り未調整。 内面 ロクロヨコナテ。(ロクロ右回転)	胎土は砂粒を含み灰白色 (10Y6/1)
3 (土)	環 (土)	□11.9) 3.9 (5.8)	体部は丸みおびて外反し、底部平底。	外面 体部ロクロヨコナテ。 底部回転ヘラケズリ、切り難し方法不明。 内面 黒色研磨、放射状暗文。	胎土は砂粒を含み褐色 (7.5YR4/3)

V 総 括



陸平水質の X 線写真 (約 1.5 倍)

1 根岸遺跡における土器様相

(1) はじめに

銚師屋遺跡群根岸遺跡から検出された32軒の竪穴住居址は、いずれも奈良時代から平安時代に位置付けられるものである。これらの住居址群は、さきに述べるならば8世紀中葉～10世紀前葉にかけて営まれた集落の集積した姿として考えられよう。

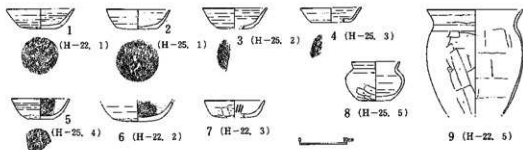
本項では、その土器様相を段階的に把握し、その段階の年代的位置付けを考えてみることにしよう。

なお、銚師屋遺跡群前田遺跡（御代田町教育委員会 1987）・同十二遺跡（御代田町教育委員会 1988）の報文においては、奈良・平安時代の基本的な土器組列を抽出し、当遺跡群の土器編年の大綱を予測してみた（堤 1987a、堤 1988）。また、佐久地方の奈良時代の土器編年については、堤による試案（堤 1987b）がすでにあるので、それを参考としながら本遺跡の土器様相の把握に努めてみた。

結果、抽出された根岸遺跡の土器様相の段階とは、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの5段階である。以下その段階ごとに土器様相を把握してみよう。

(2) 根岸遺跡 第Ⅰ段階 第209図

根岸遺跡第Ⅰ段階に位置付けられる土器群は、H-22およびH-25号住居址から出土したものである。その内容は貧弱で、当該段階の土器組成の一部のみを示しているとしかないもので



第209図 根岸遺跡第Ⅰ段階の土器 (1 : 8)

ある。器種的には、須恵器環、土師器環、土師器甕、土師器小形甕が認められたにすぎない。

須恵器環は、当該期の通常の形態であるA（1～3）と、盤状の形態を示すB（4）がある。1・2の底部には、全面に手持ちへラケズリがなされているが、2は回転へラケリによるものであることが窺える。3も回転へラケリによるものである。回転糸切り技法によるものが存在したかどうかは、資料数が少なく不明であるが、少なくとも主体にはなるまい。

土師器環は、ロクロ整形によるもの（5・6）と、ロクロ整形によらないもの（7）とがある。ロクロ整形によるもの5・6は、底部全面に手持ちへラケズリがなされており、その切り離し方法は不明である。また非ロクロ整形の7は、体部に放射状暗文のなされるもので、いわゆる畿内系暗文を有する土師器環である。

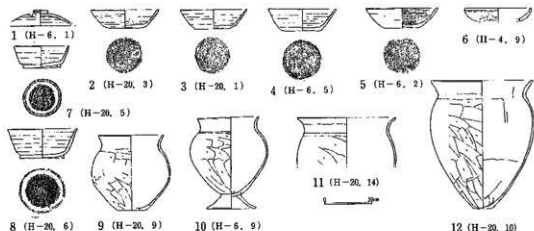
土師器甕では、その切り離し方法は不明であるが、ロクロ整形による小形甕（8）がある。また、土師器長胴甕は、くの字状口縁を呈し、その最大径において口縁部と胴部上半がほぼ等しいものである（9）。

● 当段階該当住居址 H-22、H-25

（3）根岸遺跡 第Ⅱ段階 第210図

根岸遺跡第Ⅱ段階に位置付けられる土器群は、H-4・H-5・H-6・H-20の4軒の住居址から出土したものである。当該段階の完全な土器組成を示しているとはいえないものであるが、器種的には、須恵器蓋・須恵器環・須恵器高台付環・土師器環・土師器甕・土師器小形甕・土師器小形台付甕などが認められた。

須恵器環では、当該期の通常の形態であるA（2～4）は、いずれも回転糸切り未調整の底部



第210図 根岸遺跡第Ⅱ段階の土器（1：8）

をみせる。本段階にはすでに、回転ヘラキリ技法によるものはみられなくなっている。なお、その口径・底径比は、次段階に比べ小さい。

土師器坏は、ロクロ整形によるもの(5)と、ロクロ整形によらないもの(6)とがある。ロクロ整形によるもの5は、内面黒色研磨がなされ、回転糸切り未調整の底部をみせる。なお、前段階に認められたいわゆる畿内系暗文を有する坏も消滅している。

須恵器高台付坏では、小形のもの(7)、大形のもの(8)がみられるが、大形ものは本段階に出現し顕在化する特徴ある形態であり、かつて形態Bとしたもので(堀 1988)、当該期のよいメルクマールとなる。8は、回転糸切りの底部をみせる。

土師器小形甕では、無台のもの(9)と、台付のもの(10)が認められる。双方とも僅かコの字状に屈曲する口縁部をみせている。なお、10などの小形台付甕の初源は、今のところでは本段階におさえられる。

土師器長胴甕(11・12)もまた僅かコの字状に屈曲する口縁部をみせている。その最大径は口縁部から胴部上半に移りつつある。

土師器長胴甕口縁部のコの字化は、本段階から進んでゆくことがとらえられよう。

● 当該階該当住居址 H-4・H-5・H-6・H-20

(4) 根岸遺跡 第三段階 第211区

根岸遺跡第三段階に位置付けられる土器群は、10軒の住居址から出土したものである。器種的には、須恵器蓋・須恵器坏・須恵器高台付坏・土師器坏・土師器高台付皿・土師器甕・土師器小形甕・土師器小形台付甕・須恵器甕・須恵器長頸瓶・須恵器壺などが認められた。

須恵器蓋は、宝珠形つまみの扁平化したものを有している(1)。

坏類では、須恵器坏に対し土師器坏の数的比重が増してくることがとらえられる。例えばH-8では、須恵器坏と土師器坏が同等数存在している。

須恵器坏形態A(2-4)は、その口径・底径比が前段階に比べ大きくなり、体部の外傾度が増してくる。つまり、底径がしだいに小さくなることが窺える。いずれの坏も回転糸切り未調整の底部をみせている。また、前段階に比べその底部から体部にかけての変換点がシャープになることがとらえられる。

須恵器高台付坏形態Bには、6と7があるが、しだいに底部が縮小し体部の外反がきつくなる傾向が窺える。つまり前段階的な6から、7へと形態が変化してくることが予測される。

土師器坏では、須恵器坏形態Aと同等な法量の形態A(9・11)がみられるほか、これよりやや法量の大きなもの(10)、さらに法量の大きなもの(8)がある。切り離し方法は回転糸切り

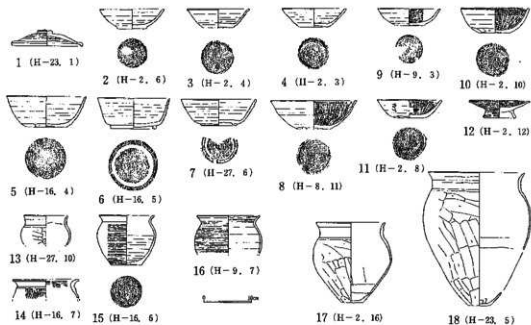
より、その後未調整のもの（8・10）、周囲手持ちへラケズリを施したもの（11）が認められる。
土師器高台付皿は、本時期に登場する器種である。このうち12は、内外面に黒色処理がなされるもので、このような内外面の黒色処理は本段階でも終末に近いころにみられてくるものであろう。

土師器甕では、ロクロ整形による小形変が顕著にあらわれてくる（15・16）。ことに15などは所謂カキ目状の顕著なロクロ目をみせるもので、回転糸切り未調整の底部をみせている。なお、以前においてもロクロ整形による小形変がまったくみられないわけではないが、それはこれらとは系譜を異にするものとみられよう。

そのほか土師器甕では、小形変（17）・長胴変（18）ともに、口縁部のコの字化が強くなっていく。その最大径は口縁部から胴部上半に移っている。

なお、特殊なものでは、櫛歯状工具によって外面を調整された土師器小形変が出土している（14）。これは胎土も在地のものとはまったく異なるもので、おそらくは甲斐系の外米土器であろう。

- 当段階該当住居址 H-2・H-8・H-9・H-16・H-17・H-21・H-23・H-24・
H-27・H-29



第21図 根岸遺跡第Ⅲ段階の土器（1：8）

(5) 根岸遺跡 第Ⅳ段階 第212図

根岸遺跡第Ⅳ段階に位置付けられる土器群は、11軒の住居址から出土したものである。器種は比較的豊富で、灰釉陶器壺・須恵器壺・須恵器杯・須恵器高台付杯・須恵器高台付皿・須恵器壺・土師器杯・土師器高台付皿・土師器壺・土師器甕・土師器小形甕・土師器小形台付甕、須恵器甕・須恵器壺・須恵器四耳壺などが認められた。

灰釉陶器は、H-15・H-18で、刷毛掛けの施釉による東濃楽ヶ丘1号窯式(17・18・19)の境が認められる。このほか、図示できなかったが猿投窯黒管90号窯式の長頸瓶の口縁部破片がH-13で見られる。

須恵器壺は、つまみをもたないのがみられる(22)。

杯類では、須恵器杯が減少し、土師器杯の数的比重が前段階に比べさらに増してくることがとらえられる。例えばH-13では、須恵器杯に対し土師器杯の数が多し。

須恵器杯形態A(1~3)は、前段階に比べさらに底径が小さくなるのが窺える。いずれも回転糸切り未調整の底部をみせる。盤状の形態Bも僅かに認められる(4)。なお、本段階において須恵器杯の質は著しく低下する。いわゆる“くされ須恵器”と呼ばれるものが目立ってきている。また、その須恵器杯の見込部を平坦に撫でつける再調整が顕著に認められる。

段階Ⅱのメルクマールであった須恵器高台付杯形態Bは、段階Ⅲにおいては器形変化をみせるが、本段階においてはすでに消滅してしまっている。

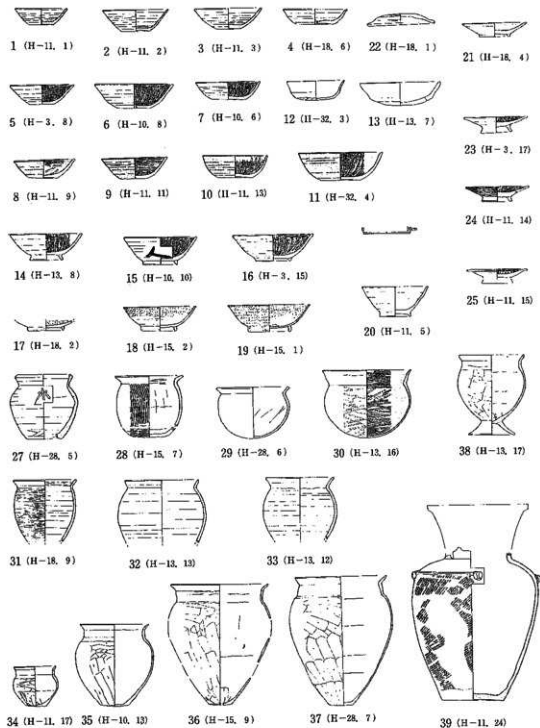
ロクロ土師器杯では、須恵器杯形態Aと同等な法量の形態A(5・8・9)がみられるほか、これによりやや法量の大きく体部の湾曲が強いもの(10)、さらに法量の大きなもの(6・11)がある。ロクロからの切り離し方法は回転糸切りによるものである。これらの土師器杯には、内面のみ黒色研磨を施したものと、内外面ともに黒色処理を施したものがある(9~11)。ことに後者が顕在化してくるのが本段階である。なお、12・13は非ロクロの土師器杯である。

土師器高台付皿にも、内面のみ黒色研磨を施したものと(23)、内外面ともに黒色処理を施したものがある(24・25)。また、この土師器高台付皿と同等な形態をみせる須恵器高台付皿がある(21)。

高台付の壺類が登場するのは、本時期の大きな特徴である。壺類は土師器(14~16)が主体であるが、須恵器の壺もある(20)。20は、比較的深い須恵器壺である。

土師器甕では、前段階からみられたロクロ整形による小形甕がある(31・32・33)。ことに31は所謂カキ目状の顕著なロクロ目をみせるものである。

コの字状口縁の甕では、きわめて小形なもの(34)、小形甕(35)・長胴甕(36・37)、台付甕(38)があるが、さらに口縁部のコの字化が強くなり、その最大径は胴部上半にあり、肩が張った感が強い。



第212図 根岸遺跡第Ⅳ段階の土器 (1:8)

これ以外には、小形丸底甕 (29・30) がある。30は器肉が薄く、内面黒色研磨のなされたものである。また特殊なものは、歯状工具によって外面を調整された土師器小形甕が出土している (28)。これもおそらくは甲斐系の外来土器であろう。

- 当段階該当住居址 H-3・H-7・H-10・H-11・H-13・H-14・H-15・H-18・
H-26・H-28・H-32

(6) 根岸遺跡 第V段階 第213図

根岸遺跡第V段階に位置付けられる土器群は、2軒の住居址から出土したものである。器種は、灰釉陶器壺、須恵器坏・須恵器高台付皿・須恵器壺、土師器坏・土師器高台付皿・土師器壺・土師器甕・土師器小形甕などが認められた。

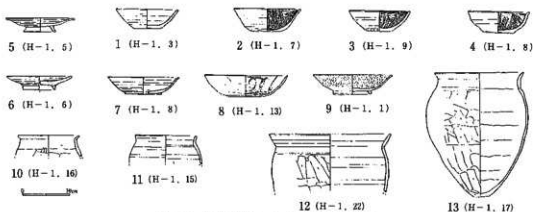
灰釉陶器では、H-1で、漬掛けの施釉による東濃窯大原2号窯式の壺 (9) が認められた。

須恵器では、坏形態A (1)・高台付皿 (5・6)・壺 (7) があるが、土器組成中に占める須恵器坏形態Aの割合はきわめて希薄なものになり、土師器坏が主体を占めている。

土師器坏2~4は、内面黒色研磨がなされている。このなかで4は、やや肉厚で、その胎土も精選されず作りも粗雑で、丸みを帯びた体部とそれに続きさらに屈曲する口唇部をみせている。こうした形態は、この次の段階に顕著となるものである。なお、本資料群中には、内外面黒色の土師器がみられなかったが、本来的には前段階より引き続いて存在しているものとみてよいであろう。

土師器壺8は、その器肉がきわめて薄く、高台も微妙なものが付された特殊な形態で、注意される。

コの字状口縁土師器長胴甕13は、その最大径が胴部上半にある。また、10の小形甕は、受け口



第213図 根岸遺跡第V段階の土器 (1:8)

状のコの字状口縁をみせていることに特徴がある。このほか、ロクロ整形の小形甕がある(11)。また、長胴甕で、ロクロ整形により胴部にヘラケズリの入る所謂北信濃型の甕がある(12)。

東濃窯大原2号窯式の灰釉陶器、4のような粗雑な土師器環、受け口状のコの字状口縁をみせる10の小形甕、12の所謂北信濃型の甕などの存在が、前段階と本段階との相違ともいえる。また、特殊な形態ではあるが7の須恵器壺、8の土師器壺も前段階にはみられないものといえよう。

● 当該階段当該住居址 H-1・H-31

(7) 土器様相の時間的把握

1 時間設定

さきに抽出された、根岸遺跡奈良・平安の土器様相の段階とは、I・II・III・IV・Vの5段階であった。この5段階については、次に述べるような時間的座標を与えることで、改めて時期として捉えなおすことができる。すなわち根岸遺跡I・II・III・IV・V期である。

これらの各時期に該当すると考えられる住居址については、第68表に示してある。無論、住居の所属期については、住居廃絶後の廃棄遺物や流入した遺物と考えられるものを除外したうえで、遺棄遺物と考えられるものの時期をもって推定している。

各時期の前後関係については、幾つかの切り合いをもっても捉えられる(第68表破線)。第I期のH-22と第II期のH-21、第III期のH-9と第IV期のH-10、第III期のH-16と第IV期のH-15、第IV期のH-7と第V期のH-1、第IV期以前のH-12と第IV期のH-26である。

2 実年代の想定

第I期 8世紀中葉(8世紀第II四半期～第III四半期の間)

土器様相(第I段階)としては、佐久地方における8世紀第II四半期の土器様相(堤 1987b)をみせている。すなわち、そのメルクマールとなる底部全面手持ちヘラケズリの須恵器環、畿内系暗文土師器環が当該期のH-22から出土している。

ただし、続く第II期は8世紀第IV四半期以降に位置付けられるので、空白期の存在をも考慮しつつも、幅をもった時期設定を行なっておく。

第II期 8世紀末葉～9世紀初頭(8世紀第IV四半期～9世紀第I四半期の間)

土器様相(第II段階)としては、佐久地方における8世紀第III四半期～9世紀初頭の土器様相(堤 1987b)をみせている。メルクマールとなるのは須恵器高台付環Bや、底径・口径比の小さい回転糸切り未調整の須恵器環、コの子化のはじまった土師器甕などである。

第68表 根岸遺跡 竪穴住居址の所属期

時代	年代	時期	所 属 住 居	所属期不明住居	
奈良	750	I	H-25	H-22	H-12
平	800	II	H-4 H-5 H-6 H-20		H-19
	850	III	H-2 H-8 H-9 H-15 H-17 H-21 H-23 H-24 H-27 H-29		H-30
安	875	IV	H-7 H-3 H-10 H-15 H-11 H-13 H-14 H-18 H-28 H-32 H-26		
			900	V	

第III期 9世紀中葉（9世紀第II四半期～第III四半期の間）

土器様相（第III段階）としては、第II期に後続し第IV期に先行する内容をみせている。K-90や光ヶ丘などの初期の灰釉陶器がまだ認められない時期である。メルクマールとなるのは、増加した土師器環や、ロクロ小形甕などである。

なお、本時期と併行させることができる野火付遺跡H-13号住居址では、765年初鑄の「神功開寶」が出土しており、少なくとも当該期の土器群がその初鑄年代を遡らないことを傍証している。

第IV期 9世紀末葉（9世紀第IV四半期中心）

土器様相（第IV段階）としては、第III期に後続し第V期に先行する内容をみせている。メルクマールとなるのは、K-90や光ヶ丘1などの初期の灰釉陶器、登場した土師器壺や、内外面黒色の土師器環、ロクロ小形甕などである。

なお、本時期のH-13号住居址からは、859年初鑄の「饒益神寶」が出土しており、少なくとも当該期の土器群がその初鑄年代を遡らないことを傍証している。このほか、本時期のH-18号住居址から、796年初鑄の「隆平永寶」が出土している。

また、本時期の焼失住居址H-11については、B.P1050±20 YのC14年代が得られている（付編参照）。これを西暦に換算すると、900年を中央値として、880～920年の幅となる。C14年代と暦年代を同様な性格のものとして扱うことができないが、このC14年代が当該時期設定と矛盾していないことは事実である。

第69表 鋳師屋遺跡群各遺跡の時期の併行関係

時代	年代	野火付	前田	十二	根岸	鋳師師屋	鋳師屋II
奈良	725	I	IV	I		II	前業
			V	II	I	III	中業
	750	VI	III	IV		後業	
	775	VII	IV	II	V		
平安	800	II		V	III		
	825			VI		IV	
	850			VII	V		
	875						
	900						

鋳師師屋は小諸市鋳師師屋遺跡、鋳師屋IIは佐久市分の鋳師屋遺跡II次調査における編年を表す。

灰釉陶器については、その年代的位置付けについて50年前後の見解の相違があるため(斎藤 1987)、ここでは時期設定の根拠としなかった。しかし、結果的には灰釉陶器を古くみることとなった。

第V期 10世紀初頭(10世紀第I四半期中心)

土器様相(第V段階)としては、第IV期に後続する内容をみせている。

メルクマルとなるのは、大原2の灰釉陶器、粗悪化した土師器環や、所謂北信濃型の甕などの存在である。

(8) 鋳師屋遺跡群各遺跡の時期の併行関係

鋳師屋遺跡群における幾つかの遺跡については、すでに土器編年が組み立てられ、時期設定がなされている。野火付遺跡(小山 1985)、前田遺跡(堤 1987a)、十二遺跡(堤 1988)、鋳師師屋遺跡(花岡 1988)、鋳師屋遺跡(羽毛田 1988)などである。しかし、その時期呼称が遺跡ごとに異なり、またその時期も微妙にずれる場合もあるので、ここでは本根岸遺跡の時期も含め、その併行関係を第69表に示しておくことにする。

2 根岸遺跡における遺構および集落の様相

(1) 竪穴住居址の形態

根岸遺跡においては、8世紀中葉～10世紀初頭にかかる奈良・平安時代の竪穴住居址32軒が検出されている。

これら32軒の竪穴住居址の形態を幾つかの分類基準をもってとらえてみよう。

1 火扱のあり方

火扱のあり方を問題にすると次の二者がある。

- I 住居の一隅にカマドを有するもの。1軒を除くすべて(31軒)にある。
- II 住居内にカマドを有さないもの。H-19の1軒のみがある。

また、カマドの位置では、次のものがある。

● 北壁 28軒

中央 H-2、H-3、H-4、H-5、H-6、H-8、H-9、H-10、
H-11、H-13、H-14、H-15、H-16、H-17、H-18、H-19、
H-20、H-21、H-22、H-23、H-24、H-25、H-26、H-27、
H-28、H-29、H-30、H-32。

● 東壁 5軒

中央 H-7、H-12、H-31。
南寄り H-1、H-18。

2 支柱穴のあり方

次に、支柱穴のあり方であるが、基本的には次の5種とその他がある(第214図)。

- A 屋内に4個の支柱穴が規則的に配されるもの。8軒ある。
- B 屋内に3個ないし2個の支柱穴が規則的に配され、それに対応する1か所が礎石であるもの。B1、B2、B3と各1軒ずつあり、計3軒ある。
- C 屋内に2個、その延長上の壁に2個の支柱穴が一列に配されるもの。1軒ある。
- D 屋内に2個の支柱穴が対で配されるもの。5軒ある。
- E 壁中に2個の支柱穴が対で配されるもの。2軒ある。

F 壁中に1個
の支柱穴？
があるもの。

2軒ある。

G 支柱穴の認
められないも
の。10軒ある。

これを見ると主

柱穴の認められないE
がもっとも多く、次
いでAの屋内に4個
の支柱穴が規則的に
配されるものが多い
ことがわかる。また、
これ以外では住居中

A	B ₁	C	D	E	F	G	不明
H-5 H-10 H-11 H-15 H-17 H-22 H-25 H-26	H-9 B₂ H-8 B₃ H-2	H-3	H-1 H-13 H-18 H-30 H-31	H-21 H-23	H-27 H-32	H-4 H-7 H-12 H-14 H-16 H-19 H-20 H-24 H-28 H-29	H-6

○は柱穴 ●は礎石

第214図 竪穴住居の支柱穴のあり方

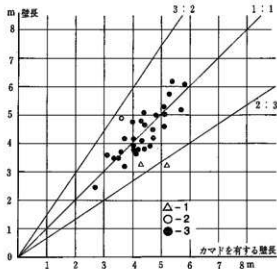
中央線上に支柱穴が一列に配されるもの（C・D・E）が計8軒となる。1か所の礎石をもつもの3軒の存在も注意される。

3 平面形

住居の長幅比については、カマドを有する辺とそうでない辺を考慮し、第215図に示した。そこから捉えられる平面形では次の三者がある。

- 1 カマドを有する壁が長辺となる矩形を呈するもの（△）。2軒のみある。
- 2 カマドを有する壁が短辺となる矩形を呈するもの（○）。1軒のみある。
- 3 ほぼ正方形を呈するもの。29軒ある。

このなかで、3の正方形を呈するものが29軒とほとんどであることが窺えよう。また、矩形を呈するもの1・2の3軒は、その長辺と短辺の比が3：2に近いものであるが、このうちH-4は横長、H-23は縦長の形態を有する特徴的な住居である。



第215図 竪穴住居の長幅比

4 面積

その面積の分布については、支柱穴のあり方とも対応させて第216図に示した。

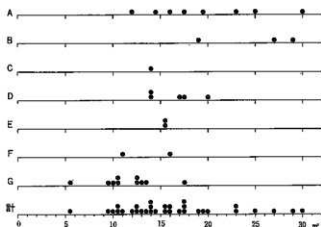
この支柱穴のあり方と面積の分布の関係をみると、そのピークがおおよそ3つに分離されることが理解されよう。これを小形・中形・大形とする。

小形 14㎡以下のもの。12軒あるが、ほぼ無支柱穴のGのみに限られることが特徴的である。

中形 14㎡以上～20㎡以下のもの。13軒ある。住居中央線上に支柱穴が一列に配されるもの(C・D・E)はすべて中形である。このほか4本支柱穴のAも4軒ある。

大形 20㎡以上のもの。6軒ある。4個の支柱穴をもつAと、一か所に礎石をもつBのみに限られる。

このように支柱穴のあり方は、住居の大きさと深く関連していることが窺えよう。つまり、より大きな住居ほど複数(4個まで)の支柱穴をもつものといえる。



第216図 竪穴住居の形態別面積分布

(2) 竪穴住居の構築

本遺跡において検出された11軒の竪穴住居については、貼り床をはがし、その掘り方で調査を進めてみた。そこからは竪穴住居の構築についての幾つかの情報を引き出すことができた。その構築の手順については第217図に示した。

① 竪穴が掘られる。その底面は、この後床が貼られることを考慮してであろう、神経質に平坦ではなく、また掘り具の痕跡を残し蜂の巣状の凹凸も激しい。注意されるのは、すでにこの掘り方の時点で支柱穴部分とカマド部分が深く掘り込んであることである。また、四つのコーナー部分、カマド壁に対する壁の中央部分(おそらくは入り口部)も深く掘り込んである。これに対し、住居の中央部分はあまり深く掘られず、平坦に残されている。

なお、平面プランについてはこの後土が貼られるなどする大きな改変はないので、正確に予定のプランが掘られたことであろう。

- ② 掘り方が埋められ、床が貼られる。床には黒褐色土が貼られるが、大量にロームを含む場合がある。なお、柱穴部分は埋められず円形に残されるが、カマド部分は柱穴部分とは反対に一旦埋められてしまうらしいことが、セクションから窺える。

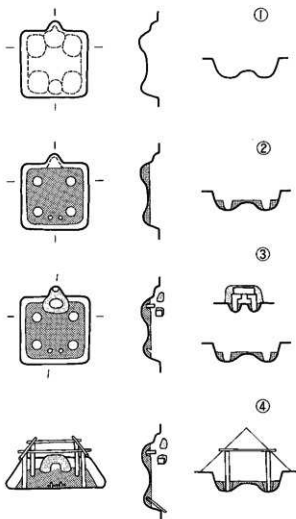
例えば、H-2のように掘り方が深く、20cm以上も床土が埋められる場合もある。一方、H-5・H-6のように掘り方と床面に差がなく、10cm未満床土が埋められるにすぎない場合もある。いずれにせよ、床土は10~30cm内外で貼られているようである。

- ③ 一旦埋めたカマド部分に、芯となる袖石や支脚石を埋め込む。このためにそれらの石材の間に大木さより若干大きめのピットが掘られ、石材が埋め込まれる。この芯となる袖石に粘土が混ざる土が貼られカマドが構築される。

なお、本遺跡のカマドのほとんどには、面取りした軽石がその袖の芯や支脚石に用いられていることが非常に特徴的である。面取り軽石が多用されるのは、本遺跡の基盤でもある第1軽石流層中に軽石が豊富に含まれることに起因しよう。また、軽石は加工し易かったこともその要因であろう。

カマドの前部両袖には「状に面取された軽石が、このほかには直方体状に面取りされた軽石が、支脚石には角錐状に面取りされた軽石が多く用いられている。

- ④ 主柱が立てられ屋が架されるのはカマド構築後と考えられる。



第217図 竪穴住居の構築

(3) 竪穴住居址の形態変遷

各時期における竪穴住居址の主柱穴のあり方については、第70表に示しておいた。

これらから、窺える竪穴住居址の形態変遷を以下にみてみよう。

- ① 4個の主柱穴をもつAは、第I期～第IV期にかけて認められる。
- ② 無柱穴のGタイプは、当初の第I期には認められない。
- ③ 住居中央線上に主柱穴が一列に配されるもの(C・D・E)は、第III期以降に顕在化するが、前田遺跡(堀 1987a)および十二遺跡(堀 1988)における竪穴住居址の形態変遷からすると、この形態は8世紀第IV四半期以降に顕在化するタイプであり、それらの所見と矛盾しない。
- ⑤ カマドの位置をみると、第I期・第II期はすべて北壁中央であるが、第IV期以降には東壁に位置するカマドが顕在化してくる。

第70表 竪穴住居址の時期別形態

	A	B	C	D	E	F	G	不明	計
I	2								2
II	1						2	1	4
III	1	3			2	1	3		10
IV	4		1	2		1	3		11
V				2					2
不明				1			2		3
計	8	3	1	5	2	2	10	1	32

(4) 掘立柱建物址の形態

根岸遺跡において検出された40棟の掘立柱建物址の形態についてみてみよう(第218図)。

まず、掘立柱建物址は次の二式に分類される。

① 総柱式

② 側柱式

また、その平面形も二者がある。

I その平面形がおおよそ正方形を呈するもの。

II その平面形がおおよそ矩形を呈するもの。
















次に柱(穴)の配置による間数には、以下のようなあり方が認められた。

① 総柱式

A 2間×2間で、中央に1本の柱が配されるもの。

② 側柱式

A 1間×1間となるもの。

	I			II		
総柱	A		F-4	A		
側柱	A		F-12 F-24	A		
	B		F-7 F-8 F-9 F-10 F-33	B		F-35 F-36 F-37
	C		F-2 F-6 F-25 F-34	C		F-13 F-22
	D			D		
	E			E		F-1 F-3 F-5 F-11 F-17 F-18 F-19 F-21 F-30 F-31
	G		F-15	F		F-20
	H		F-15			
	その他		F-29	不明		F-14 F-23 F-25 F-27 F-28 F-32 F-38 F-39 F-40

第218図 榎岸遺跡竪立柱建物址形態一覧

- B 2間×1間となるもの。
 C 2間×2間となるもの。
 D 3間・2間×2間となるもの。
 E 3間×2間となるもの。
 F 4間・3間×2間となるもの。
 G 3間・2間×2間で、いわゆる廂をもつもの。
 H 布張りで2間×1間となるもの。
 その他 不規則な柱(穴)の配置をみせるもの。

不明 プランが不明なもの。

以上の分類基準に基づくと、①の総柱式の掘立柱建物址および、②の側柱式の掘立柱建物址は第218図のようにあてはまる。

これとしてみると、総柱式の建物では以下のことがとらえられる。

① 総柱式の建物は、形態ⅠAが1棟認められるのみである。

次に、側柱式の掘立柱建物址についてみてみよう。

① 側柱式の掘立柱建物址は合計で39棟認められている。

② 方形のプランを呈するⅠで、1間×1間となるAは2棟認められている。

③ 2間×1間となるBは、方形のⅠ類5棟・矩形のⅡ類3棟の計8棟が、特徴的に認められる。

④ 2間×2間となるCも、方形のⅠ類4棟・矩形のⅡ類2棟の計7棟が、特徴的に認められる。

⑤ 3間×2間となるEで矩形のⅡ類は、10棟ときわめて特徴的に認められている。

⑥ ②～⑤をふまえてみると、本遺跡の側柱式の掘立柱建物址の基本的形態は、Ⅰ類A、Ⅰ類B・C、Ⅱ類B・C、Ⅱ類Eであるといえよう。

⑦ いわゆる竈をもつものも1棟認められた(G)。

⑧ いわゆる布掘りものも1棟認められた(H)。

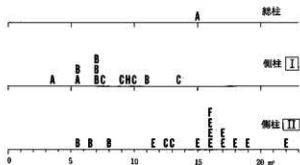
次に、各形態別の面積の分布をみてみると、以下がとらえられよう(第219図)。

① 側柱式の形態Ⅰ類Aの二者は、およそ5㎡以下の面積をみせる小形のものである。

② 側柱式の形態Ⅰ類B・Cは、5～15㎡の面積をみせるいわば中形のものである。

③ 側柱式の形態Ⅱ類B・Cは、5～15㎡の面積をみせるいわば中形のものである。

④ 側柱式の形態Eは、およそ15㎡以上の面積をみせる、全体の中では大形のものである。



第219図 掘立柱建物址形態別面積分布

第71表 根岸遺跡 掘立柱建物址の所属時期

時代	年代	時期	所 属 掘 立	所 属 期 不 明 掘 立
奈良	750	I	F-15	F-39 F-1 F-10 F-40 F-12
				F-13 F-16
平	800	II	F-5 F-2 F-14 F-34	F-17 F-20
				F-22 F-23
	850	III	F-3 F-6 F-8 F-19 F-21	F-24 F-25
安	875	IV	F-4 F-7 F-9 F-18 F-31 F-33	F-26 F-27
				F-28 F-29
	900	V		F-30 F-32 F-37 F-38 F-36

* 破線は切り合い関係を表す

(5) 掘立柱建物址の時期

本遺跡において検出された40棟の掘立柱建物址は、いずれも竪穴住居址の帰属する第I期～第V期に位置付けられるものと想定できる。

これらの掘立柱建物址幾つかは、竪穴住居址との切り合いをもつもの、および柱穴中に時期のわかる出土遺物があるものについては、その細かな時期推定することが可能であり、それらについては帰属の可能性のある時期を第69表に示した。

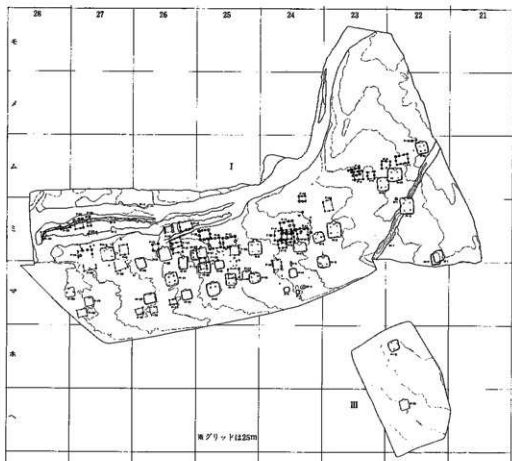
しかしそれ以外については、時期の明確な遺構との配置関係等をもってしか時期を類推する術がなく、その危険性からことさら位置付けをおこなわなかったが、各時期において竪穴住居址と併存する掘立柱建物址の姿については、次項で想定してみることにしよう。

(6) 根岸遺跡における集落様相とその変遷

I 集落の様相

さて、ここまででは竪穴住居址と掘立柱建物址について、それぞれにその形態や時期をみてきたわけである。ここではその両者によって構成される根岸遺跡の集落様相についてみてみることにしよう。そこから、以下が捉えられる。

まず、第220図から両者の配置の全体的な傾向についてみてみると、第一に掘立柱建物址と竪穴



第220図 根岸遺跡遺構全体図 (1:1,500)

住居址は隣接して存在していることが窺える。

第二に、掘立柱建物址のほとんどは、竪穴住居址の北側に立てられていることが注意される。

第三に、竪穴住居址と掘立柱建物址について、やや微視的にミ・ム-22・23グリッド付近をみると、竪穴住居址H-8・H-9・H-10・H-11と、掘立柱建物址F-6・F-7・F-8・F-9の関係は興味深い(第221図)。すなわち土器群の共通性や切り合い関係・配置関係から、根岸遺跡第III期にはH-8・H-9とF-6・F-8がセットをなして存在し、つづく第IV期には、H-10とH-11、F-7とF-9がセットをなして存在していたことがとらえられる。つまりは、掘立柱建物址(2間・方形)2棟と竪穴住居址2軒が隣接して存在するセットが、建て替えなどを経その位置をかえながらも、時期を継続して存在した可能性が窺えるのである。

第四に、第三でみたことから、竪穴住居址1軒に対し掘立柱建物址1棟(2間・中形)という基本的なセット関係がひとつには存在したらしいことが窺えよう。このことを考慮するなら、たと

えばH-24とF-35、H-27とF-37、H-29とF-40などがそうした1軒対1棟の対応関係をみせるものとして想定もできる。

第五に、第四とは反対に、竪穴住居址と掘立柱建物址がセット関係をなさず、竪穴住居址のみが単独で存在している場合もみられる。

たとえば第Ⅲ区H-31・H-32などにみる場合である。

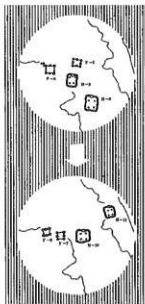
ではつぎに、集落の変遷についてみてみることにしよう。

2 集落の変遷

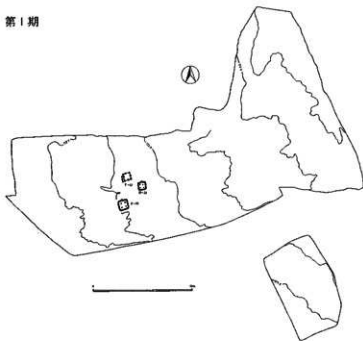
時期別遺構分布図を第222～226図に示した。以下時期ごとに集落の変遷を追ってみよう。

第1期 (8世紀中葉) 第222図

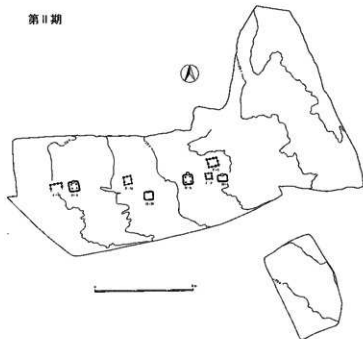
竪穴住居址2軒(H-22・H-25)が登場する。掘立柱建物址はH-15がある。これ以外に掘立柱建物址が伴ったとしてもおそらくは1棟程度であろう。それぞれおよそ5m内外の距離をおいて存在している。



第221図
竪穴住居と掘立柱建物の変遷



第222図 根岸遺跡第1期の集落



第223図 視岸遺跡第Ⅱ期の集落

第Ⅱ期 (8世紀第Ⅳ四半期～9世紀第Ⅰ四半期) 第223図

竪穴住居址4軒(H-4・H-5・H-6・H-20)と掘立柱建物址4棟(F-2・F-5・F-14・F-15)が100m内外の幅の間にほぼ横一列にならんでいる。

竪穴住居址と掘立柱建物址の間は10m未満、竪穴住居址間の距離は10m～30mをおいている。

第Ⅲ期 (9世紀第Ⅱ四半期～9世紀第Ⅲ四半期) 第224図

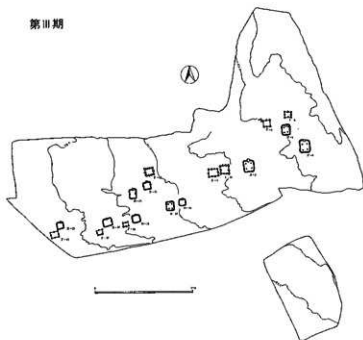
竪穴住居址が10軒と第Ⅱ期から比倍増する時期である。本時期に該当する掘立柱建物址は今のところ5棟が確認されるのみであるが、おそらく時期不明の掘立柱建物址のなかに本時期に所属するものが幾つか含まれていよう。分布図には本時期に帰属する可能性のあるF-35・F-37・F-40も加えておく。

本時期の集落は、帯状微高地上に、150m内外の幅をもって形成されており、遺構の配置も地形に沿って横長の並びとなっている。

第Ⅳ期 (9世紀第Ⅳ四半期中心) 第225図

竪穴住居址は11軒と、その数は前時期からほぼ変りない。本時期に該当する掘立柱建物址は7棟が確認されるのみであるが、おそらくもう数棟の掘立柱建物址が加わるものと考えられる。掘立柱建物址のなかには、総柱のものが1棟(F-4)認められる。

第III期



第224図 根岸遺跡第III期の集落

第IV期



第225図 根岸遺跡第IV期の集落

第Ⅰ区では、遺構の配置が地形に沿って、横長（130m内外の幅）の並びとなっている。蛇足になるがこのうちの竪穴住居址4軒（H-3・H-10・H-11・H-15）から「人」の墨書あるいは刻書ある土器が検出されており、共通性をみせている。

また、第Ⅰ区と低地を挟んだ第Ⅲ区には、単独住居（H-32）が存在していることが注意される。

カマドは、前時期までいずれも北カマドであったが、東カマドも認められている。

第Ⅴ期（10世紀第Ⅰ
四半期中心）

第226図

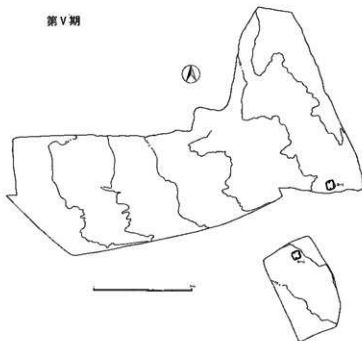
竪穴住居址は2軒で、その数は前時期から比べ激減する。第Ⅰ区と低地を挟んだ第Ⅲ区をそれぞれに単独で竪穴住居址が存在している。いずれも東カマドを有するものである。

また、本時期

に該当する独立柱建物址は認識できなかったが、いずれにしても2軒の住居のまわりにはどの時期の独立柱建物址も存在していない。

以上、根岸遺跡第Ⅰ期から第Ⅴ期までの集落の移り変わりについて言及してみた。おそらくは8世紀中葉に一世帯もしくは二世帯程度の移住によって根岸に集落が最初に形成された後、自然的構成員数の増加によって第Ⅱ期に集落が継続されたものとみられる。第Ⅲ期は、集落が拡大する時期であるが、第Ⅱ期からの自然的構成員数の増加というよりは、さらに別世帯が移住によって加わったものとみておきたい。その集落はほぼ同数で第Ⅳ期に継続される。しかし、第Ⅳ期の集落は、第Ⅴ期には継続されず一・二世帯程度にまで激減（他への移住か？）する。やがて10世紀中葉にはまったく人々の移住がみられなくなってしまう。

以上、おおよそ150年から200年間におよぶ根岸遺跡における集落の変遷を垣間見てみた。



第226図 根岸遺跡第Ⅴ期の集落







3 鋳師屋遺跡群における集落様相

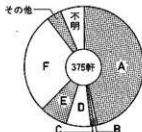
これまで、根岸遺跡における土器様相および集落様相について論じてきた。これ以降では、野火付・鋳師屋・鋳物師屋・前田・十二・根岸の各遺跡から構成される鋳師屋遺跡群全体の集落様相について総括的にふれてみることにしよう。

(1) 鋳師屋遺跡群の竪穴住居址

鋳師屋遺跡群の発掘調査によって検出された竪穴住居址の総数は全時代を通じて、447軒である。本項では、そのうちの古墳時代の竪穴住居址を除いた、奈良・平安時代の357軒に絞ってながめてみることにする。

まず、竪穴住居址の主柱穴のあり方からみた形態についてふれてみると、第227図のような構成となる。本遺跡群においてもっとも多く認められるのが、4本の主柱穴をもつAで全体の5割にあたる166軒(46.5%)が認められる。つづいて無柱穴のFが3割程度にあたる98軒(27.6%)認められる。それ以外はいずれも1割に満たず、Bの一箇所に礎石(●)をもつもの3軒(0.8%)、C 3軒(0.8%)、D 23軒(6.4%)、E 27軒(7.6%)、その他14軒(3.9%)、不明23軒(6.4%)の内訳となっている。四本柱穴のAタイプ、つづいて無柱穴のFタイプが多いことは当該期一般にみるあり方といえる。この他に、住居の中央軸上に2本の柱穴が配されるD・Eタイプがあわせて50軒(14%)程みられるが、これらの形態が一定数認められるのは本遺跡群の特色としてとらえられるのではないだろうか。なお、壁中に二本の柱穴をもつEタイプでは、柱穴が内傾する場合がままあり、第228図のような主柱のあり方をみせる住居の構造を想定できる。

A	B	C	D	E	F	その他	不明
							
166軒 (46.5%)	3軒 (0.8%)	3軒 (0.8%)	23軒 (6.4%)	27軒 (7.6%)	98軒 (27.6%)	14軒 (3.9%)	23軒 (6.4%)



第227図 鋳師屋遺跡群における竪穴住居址の形態

つぎに、A～Fタイプの面積分布および時期別構成比について、前田遺跡(御代田町分)・十二遺跡・根岸遺跡の計173の住居についてみてみよう(第229・230図・第72表)。

まず、本遺跡群においてもっとも顕著に認められるAタイプは15～30㎡に主な面積分布をみせているが、ことに20㎡以上の面積を有するものとなると本タイプにはば限られていることが窺える。一方、無柱穴のFタイプは15㎡以下、ことに8～10㎡に面積分布が集中する。Aタイプに比べ、ほぼ半分程度の面積を有しているものが圧倒的に多いといえよう。また、DとEタイプは15～20㎡の範囲の面積分布をみせている。

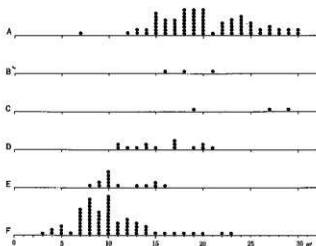
さて、時期別には、竪穴住居地の主柱穴のあり方はどのように変わるのであろうか。第230図の時期別の構成比をみてみよう。それによると、



第228図 形態Eの主柱

8世紀前半では、四本柱穴のAタイプが7割、無柱穴のFタイプ3割という構成比をみせ、Aタイプが主体でそれにFタイプが加わるという状況をみせている。しかし、8世紀後半以降ではAタイプが2割強、Fタイプ5割弱という構成比をみせ、Fタイプが主体となりAタイプが客体化する様相が窺える。また、住居の中央軸上に2本の柱穴が配されるD・Eタイプが1～2割程度の一定数認められるようになるのは8世紀後半以降である。なお、10世紀前半では竪穴住居地が2軒のみしか確認されていないので詳しいことについては論じられない。

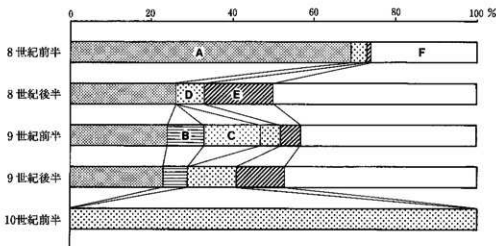
さて、さきに各形態別の面積分布をみたが、無柱穴小形のFタイプが顕在化する8世紀後半以降こそ、従来言われている竪穴住居地の「小形化・無柱穴化」の時期という評価が与えられようか。



第229図 竪穴住居地の形態別面積分布

第72表 竪穴住居地の時期別形態(軒数)

	A	B	C	D	E	F	計
8世紀前半	52	0	0	3	1	19	75
8世紀後半	15	0	0	4	10	29	58
9世紀前半	5	2	3	1	1	9	21
9世紀後半	4	1	0	2	2	8	17
10世紀前半				2			2
計(軒数)	76	3	3	12	14	65	173



第230図 時期別住居形態構成比

(2) 鋳師屋遺跡群の掘立柱建物址

鋳師屋遺跡群において検出された掘立柱建物址は、御代田町・佐久市・小諸市分の総計434棟である。この434棟の、形態・分布・機能等についての考察を加えてみる。

1 掘立柱建物址の形態























鋳師屋遺跡群を構成する野火付・鋳師屋・鋳物師屋・前田・十二・根岸の各遺跡で検出された掘立柱建物址の内訳は第231図のとおりである。また、付図3を参照していただくと全体の配置や形態等がわかる。これらを参考にとられられた、本遺跡群の掘立柱建物址の形態的な諸特徴を以下に列記しよう。

1 柱穴の掘り方

- ① 掘立柱建物址の柱穴の掘り方をみると、いわゆる「布堀り」例は7例（全体の2%弱）にすぎず、それ以外の427例（全体の98%強）はいわゆる「坪堀り」例である。なお、「坪堀り」例のなかには、柱穴間が溝で連結されるいわゆる「溝持ち」例が8例（全体の2%弱）認められるが、それは全体からするときわめて少数例で、また、その溝で連結される部分も一部である。
- ② 掘立柱建物址の「坪堀り」の柱穴プランは、基本的には円形である。ただし、その掘り込みが大形なものになると楕円形を呈する場合も見受けられ、隅丸方形を呈する場合もある。

2 側柱の方形を呈するIの建物のプラン









1 側柱

I				II							
A		39	F		3	A		13	H		1
B		11	G		10	B		2	I		20
C		29	H		1	C		30	J		5
D		9	I		3	D		7	K		2
E		4	J		1	E		100	L		2
						F		1			
計	115棟					G		3	計	186棟	




2 廂付

廂付 14棟	 前田 F-127	 前田 F-85	その他・不明 86棟
--------	--	---	------------

3 総柱

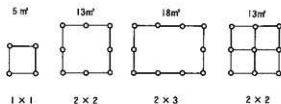
I				II							
A		17	C		1	A		5			
B		1	D		1	B		2			
E		1				C		1			

4 特殊

 ST-12	 前田 F-32	 前田 F-10
---	---	---

第20図 鎗師屋遺跡群における掘立柱建物址の形態（棟数）

- ① 側柱建物の方形を呈するものⅠは、矩形を呈するものⅡの186棟（62%）に対し、115棟（38%）ある。



第2次図 鎗師屋遺跡群における掘立柱建物址の基本形態

- ② 方形を呈するⅠの115棟のうち、1間×1間のAは39棟（34%）と特徴的にみられる。このうち前田遺跡（御代田町分）と十二遺跡の1間×1間

のA21棟の平均面積は 4.9m^2 である。5m前後が、この建物の平均的な面積ということになる。

- ③ 方形を呈するⅠの115棟のうち、2間×2間のCも29棟（25%）と目立っている。このうち前田遺跡（御代田町分）と十二遺跡の2間×2間のC9棟の平均面積は 12.6m^2 である。13m前後が、この建物の平均的な面積ということになる。
- ④ 方形を呈するⅠの115棟のうち、「布堀り」は4例認められるが、2本の溝が並行して並ぶⅠが3例ある。

3 側柱の矩形を呈するⅡの建物のプラン

- ① 側柱建物の矩形を呈するものⅡは、方形を呈するものⅠの115棟（38%）に対し、186棟（62%）ある。
- ② 矩形を呈するⅡの186棟のうち、2間×3間のEは100棟（54%）と半数以上を占める。このうち前田遺跡（御代田町分）と十二遺跡の2間×3間のE31棟の平均面積は 18.4m^2 である。18m前後が、この建物の平均的な面積ということになる。
- ③ 矩形を呈するⅡの186棟のうち、2間×2間のCは30棟（16%）ある。このうち前田遺跡（御代田町分）と十二遺跡の2間×2間のC13棟の平均面積は 11.5m^2 である。12m前後が、この建物の平均的な面積ということになる。
- ④ 矩形を呈するⅡの186棟のうち、1間×2間のIは20棟（11%）である。
- ⑤ 1間×1間のAは13棟（7%）あるが、これは極端な矩形を呈するというよりは、方形に近いプランを呈しており、あるいは方形の範疇でとらえたほうがよいのかもしれない。

4 廂付の掘立柱建物址

- ① 廂付の掘立柱建物址は、14棟のみであり、全体の434棟の内の3%強にすぎない。
- ② その廂のあり方としては、長辺あるいは短辺に同間数の廂が付くもの、あるいはそれより少ない間数の廂が付くものいずれかである。
- ③ 廂付の掘立柱建物址の大きさのみが、廂のないものと比べ際立っているということはない。

5 総柱の掘立柱建物址

- ① 総柱の掘立柱建物址は、全体の434棟の内、29棟（7%）である。
- ② 総柱の掘立柱建物址29棟のうち、方形を呈するIは21棟（73%）、矩形を呈するIIは8棟（27%）であった。
- ③ 総柱方形のI・矩形IIとも、2間×2間のAが顕著に認められた。Iでは17棟（全体の57%）、IIでは5棟（全体の16%）認められ、双方をあわせると全体の7割近くを占める。

この形態が総柱建物の最も普遍的な形態ということになろう。

- ④ 総柱方形のIでは、「布堀り」の3本の溝からなるEが2例認められた。
- ⑤ 総柱方形のIでは、3間×3間のDが1棟認められている。
- ⑥ 総柱矩形のIIでは、2間×3間のBが2棟認められている。

6 特殊な形態の掘立柱建物址

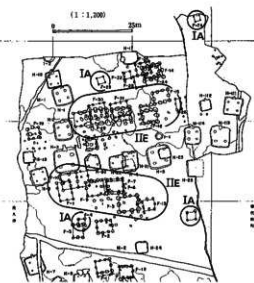
- ① 特殊な形態の掘立柱建物址としては、佐久市前田遺跡のF-10やF-32がある。これらは、間数の多い大形の建物で、間仕切りもしくは、高床をささえる支柱をプラン内にもつものである。
- ② このほか小諸市鋤師屋遺跡では、竪穴状遺構をコーナー一部にともなう掘立柱建物址が認められている（ST-12）。

2 掘立柱建物址の分布

ここでは、掘立柱建物址の主なる形態の分布を、他の遺構（殊に竪穴住居址）との関連においてみてみることにしよう。

- ① まず、鋤師屋遺跡群でみられる掘立柱建物址のうち、最も普遍的な形態といえる矩形2間×3間のIIについてみよう。

この2間×3間のEと、竪穴住居址の関係は、「隣接型」の分布をみせる場合がきわめて特徴的である。すなわち、第233図の佐久市分の前田遺跡（第1次）、第235図の十二遺跡、第234図の御代田町分の前田遺跡の遺構配置図にもみるように、両者の分布はきわめて激しい重複をみせる訳でもないが、きわめて隔離的でもなく、つまりは隣り合わせた分布をみせているのである。このことから、2間×3間の掘立柱建物址Eと竪



第233図 前田遺跡（佐久市分第一次）遺構分布図

穴住居址の隣接した存在が、その両者のおりなす集落景観であったということができよう。

- ② 方形2間×2間のCタイプは、2間×3間のEや竪穴住居址とやや離れて存在する場合がみうけられる。(第234図御代田町分の前田遺跡、十二遺跡)。
- ③ 方形1間×1間のAは、2間×3間のEや竪穴住居址と隔たる場合が多く、「隔離的」な分布をみせることが特徴的である(第233図佐久市分の前田遺跡、十二遺跡)。

このことから、2間×3間の掘立柱建物址群や竪穴住居址とやや距離をおいて、方形1間×1間のAがある集落景観を想定できよう。

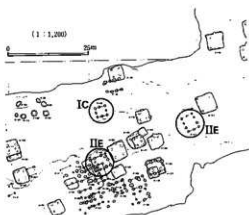
- ④ 鉤師屋遺跡群でごく一般的にみられる矩形2間×3間のEや、方形2間×2間のE、方形1間×1間のAなどタイプの掘立柱建物址のあり方に比べ、溝で区画された範囲内に、総柱建物が連立する小諸市鉤師屋遺跡の掘立柱建物址のあり方はきわめて異質といえよう。

掘立柱建物址を区画する溝は、東西約27m南北約35mを測り、その幅は1.2~1.9m、深さ45cmを測り逆台形状の断面を呈するものである(花岡 1989)。

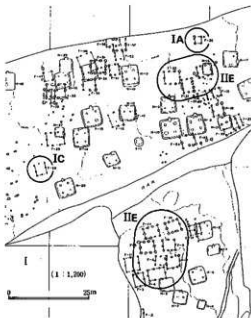
この中に、溝と方向をほぼ同一にする総柱の掘立柱建物址が8棟存在している(第236図)。その内訳は、方形2間×2間のAが4棟、方形2間×3間のCが1棟、矩形2間×3間のBが1棟、方形「布堀り」の3条の溝からなる2間×3間のEが1棟、不明が1棟である。

おそらくその配置から、このうちの幾つかの総柱の掘立柱建物址は、溝の区画のある時期に併存していた蓋然性が高いものと考えられる。

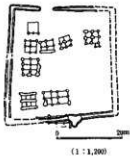
これらの総柱の掘立柱建物址と掘立柱建物址を区画する溝は、



第234図 前田遺跡(御代田町分)遺構分布図



第235図 十二遺跡遺構分布図



第236図 小諸市鉤師屋遺跡

一般的な掘立柱建物址群や竪穴住居址群とは隔絶的であり、鋳師屋のムラにおいてきわめて特殊な場であったと想定されよう。

3 掘立柱建物址の機能

これまで東国の掘立柱建物址の機能については、漠然と「倉庫」というイメージが与えられ続けてきた。それというも、遺跡から検出される竪穴式住居址のみが偏重して研究され、掘立柱建物址自体の保有する情報量の少なさもあいまって、集落的な観点からの掘立柱建物址の研究が不足していたからにはほかならない。しかし、本鋳師屋遺跡群にもみるように、東国における近年来の掘立柱建物址検出状況には目をみはるものがあり、集落における掘立柱建物址の担う機能について無関心ではいられなくなったのが現状といえよう。

すでに本鋳師屋遺跡群の前田遺跡においては、掘立柱建物址の機能について推定してみた（堤1987）。そこにおいては、総柱方形の2間×2間の形態Aを高床式の稲倉、側柱1間×1間の形態Aも前者とは性格の異なる稲を収納した高床式の稲倉、また、10㎡以上の側柱建物については平地式住居推定してみた訳である。

ここでもういちどその主なものの機能について考えてみよう。

まず、総柱方形の2間×2間の形態Aは、やはり高床式の稲倉とみておくことが妥当かと考えられる。この総柱方形の2間×2間の形態は、前田遺跡の竪穴住居10軒程度から構成される集落に1棟程度伴うことが想定されており、竪穴住居個々が所有するものではなく、集落で共有される倉であったものと想定されよう。

一方、側柱1間×1間の形態も、高床式の穀倉（稲倉）と考えておきたいが、前者とは性格の異なる穀を収納したもの、おそらくは世帯共同体単位の私的所有の穀が保管されたものとみておきたい。民俗事例として現在に残る私有というかたちをとる高床式の穀倉「高倉」では、アイヌの住宅に1棟ずつ付属する高倉（ブー）、あるいは奄美大島にみる高倉等幾つかがあげられるが、各地の高倉のいずれも4本柱（1間×1間）のものがほとんどであることは注意される。これについては、本例と安直に結び付けることはいささか危険であるが、側柱1間×1間の掘立柱建物址のひとつの特徴的なあり方として参考にしておきたい。

さて、小諸市鋳師屋遺跡の溝で囲まれた総柱の掘立柱建物址については、本遺跡群を包括する郷の郷倉もしくは里倉クラスの倉庫群、あるいは官衙（ここでは本遺跡群にかかわるともされる駅もしくは御牧等）に付設される公的な倉庫群であったと推定しておこう。ところで養老令のうち倉庫令第廿二をみると「凡そ倉は、皆高く燥ける処に置け。側に池渠を開け。倉を去ること五十丈（現在の150cm）の内に、官倉置くことを得ず。」とある。側に池渠を開けとある点においては、鋳師屋にみる掘立柱建物址を区画する溝がこうした条件のひとつをみせているものと

解釈される。ただし、本例と同様に、溝で囲まれた当該期の掘立柱建物址が千葉県萩生遺跡・同芳賀輪遺跡（千葉県教育委員会 1980）などにおいても検出されているが、こちらは獨柱の建物で、豪族の居館という見方がなされている。（小笠原 1985）。

ところで、本遺跡群で、100棟と、もっとも普遍的に認められる側柱建物の矩形2間×3間タイプについては、『前田遺跡』では平地式住居^と推定してみたわけであるが、住居であるかどうかの確証はあるとはいえない。しかしこれらが平地式の建物であったろうことは、高床である場合束柱がないことには床が保てなかったであろうことを考慮すると容易に理解されよう。ただし、その棟数の多さから集落における主体的な施設であること、また、竪穴住居とセットでしかも隣接して存在することを考えあわせると、日常的な施設であると捉えることに異論はなかろう。住居か、あるいは本遺跡群の性格にも関与する馬小屋等厩舎か、あるいはそのほかの施設であったのだろうか。

なお、本遺跡群で、矩形2間×3間について、50棟近くみられる方形2間×2間の基本とするタイプについても、平地式の建物であったと考えることに相違なかろう。

（3） 鋳師屋遺跡群における集落の変遷

1 集落の立地

鋳師屋遺跡群は、浅間山裾野の最末端部に位置し、その両側を北東から西南に延びるいわゆる“田切り”地形に画されている。さらにその地形上には、北東から西南に延びる低地（第237図網点部）があり、その低地によって画された微高地上に集落が形成されている。遺跡調査範囲対象区の微高地は、I・II・III・IV区の四者に画される。III・IV区は帯状、I・II区は島状の微高地である。低地は、図の矢印の方向に傾斜し、その内部には小河川が存在していたものと考えられる。

なお、鋳師屋遺跡群は、野火付・鋳師屋・鋳物師屋・前田・十二・根岸の6遺跡に区分されてきたが、これは調査前の便宜的な区分であり、必ずしも集落上のまとまりを反映した名称とはいえない。よってここではその個々の遺跡名は用いず、自然地形である微高地I・II・III・IV区毎に論じることとする。

ちなみに鋳師屋遺跡群全体の調査面積は、総面積524,000㎡におよんでいる。

それでは、まず、古墳時代中期→古墳時代後期→8世紀前半→8世紀後半→9世紀前半→9世紀後半→10世紀前半と時期を追って、鋳師屋遺跡群における竪穴住居址の分布の変遷についてみてみることにしよう。それを踏まえたうえで鋳師屋集落の形成・発展・衰退・消滅等について、垣間見てみよう。

2 古墳時代中期の住居址群

第237図2

銚師屋遺跡群において、はじめに集落が形成されるのは古墳時代中期である。島状微高地I区において、まず5世紀第IV半期中心の住居址5軒(a群)が登場する。a群は約50m程度の範囲に弧状分布を形成している。

つづいて、a群は、6世紀初頭の住居址5軒(b群)からなる集落へと継続する。b群は約70m程度の範囲に分布している。a群においては炉であった火処が、b群においてはカマドの採用と、大きな変化が認められる。

a・b群ともに掘立柱建物址は伴っていない。

なお、これ以外の地区では、古墳時代中期の集落は認められない。

3 古墳時代後期の住居址群

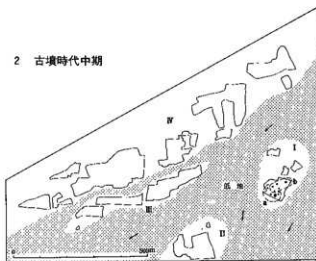
第237図3

古墳時代後期には、I・IV区において住居址の分布が認められる。

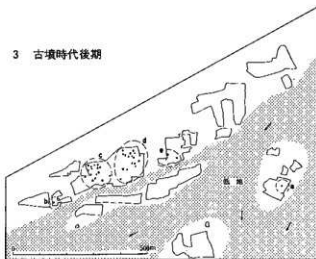
この時期に位置付けられるのは、総計37軒の住居址である。

I区において認められる単独住居址aは、前者古墳時代中期b群から継続される住居址ではなく、それとは時期の隔たつものである。同様な時期の住居址を含むIV区d群から500m以上の距離をおいて存在するaは、いわば「離れ国分」ならぬ「離れ鬼高」とでも呼称されるような存在といえる。

離れているといえば、IV区bも離れて単独で存在する。これに対しc群d群はまとまりをみせている。c群は約100m程度の範囲で15軒、d群は約150m程度の範囲で17軒の住居からなる。た



2 古墳時代中期



3 古墳時代後期

第237図 銚師屋遺跡群における竪穴住居址の分布

だし、c群・d群は古墳時代後期全期間を通じての分布であるので、細かな時期別の同時存在の住居の軒数はこれより少なく見積もらなければならない。

IV区e群は、約50m程度の範囲内ではほぼ同時に存在したと考えられる住居址3軒が存在している。

4 8世紀前半の住居址群 第238図4

8世紀前半には、住居址群はI・II・III・IV区全体に急増する。この時期に位置付けられるのは、総計133軒の住居址である。古墳時代後期を通した住居址の軒数の3倍以上にその数が膨れ上がっている。また、古墳時代後期

の住居址の軒数は2世紀を通したものであるもので、半世紀のみの本時期の住居軒数の増加はきわめて著しいものとみななければならぬ。

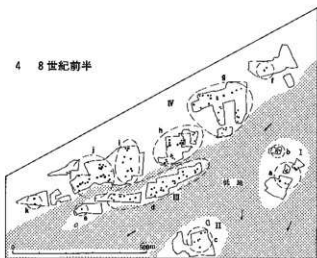
本時期において、まず、I区ではa群(8軒・100m程度の範囲) b群(5軒・30m程度の範囲)が出現する。なお、古墳時代後期のa群と本期の住居址群とは時間的な隔りがあり、継続的に営まれるものではない。

II区では、c群(6軒・100m程度の範囲)が新たに出現する。

III区では、d群(28軒・400m程度の範囲) e(1軒)が出現する。d群は帯状微高地にそって形成された細長い分布をみせる住居址群である。一方eは、d群から100m程度の距離をおいた単独住居である。

IV区では、帯状微高地上約1km範囲にわたって、f群(2軒) g群(27軒・200m程度の範囲) h群(20軒・200m程度の範囲) i群(10軒・150m程度の範囲) j群(24軒・200m程度の範囲) k群(2軒)が出現する。このうち、i群・j群は、古墳時代のc群・d群より一部継続される住居址群と考えられ、それ以外は新しく出現する住居址群といえよう。

なお、i群・j群は、遺跡に残る南北に一直線に走る溝によって画される可能性がある。また、j群とk群に挟まれて、溝に区画された範囲に数棟の礎柱の掘立柱建物址が存在するのはこの時期である。



第238図 鎗師屋遺跡群における竪穴住居址の分布

5 8世紀後半の住居址群

第239図5

8世紀後半の住居址は、総計118軒である。8世紀前半に比べ僅かにその数が減少するが、大方は変わりなく、ほぼ前時期の集落が継続されるものとみなしてよいだろう。ただし、地区によっては住居址の分布に若干の変化がある。例えば、I区旧b群・II区旧c群は消滅し、また、a群はほぼ倍近くなっている。IV区では旧g群がe・f・g群の三者の小さなまとまりとなっている。これ以外はほぼ変化がなさそうである。

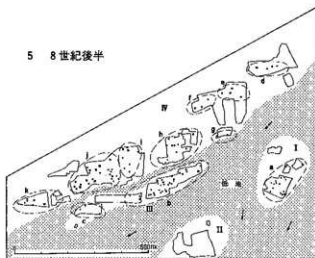
その数と範囲は、I区a群(16軒・150m程度の範囲)、III区b群(32軒・300m程度の範囲)c群(3軒・100m程度の範囲)、IV区d群(4軒・100m程度の範囲)e群(4軒・100m程度の範囲)f群(3軒・100m程度の範囲)g群(2軒)h群(11軒・200m程度の範囲)i群(8軒・100m程度の範囲)j群(25軒・200m程度の範囲)k群(10軒・200m程度の範囲)となっている。

なお、前時期の旧j群と旧k群に挟まれて存在した、溝に区画された範囲に数棟の総柱の掘立柱建物址は、この時期にはすでに消滅していたものと考えられる。

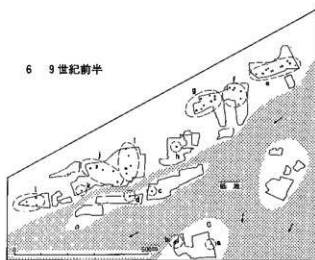
6 9世紀前半の住居址群 第239図6

9世紀前半の住居址は、総数55軒である。8世紀後半に比べほぼ半数近くに減少する。

まず、I区では前時期旧a群は消滅し、II区では単独のaと、7軒の住居址からなるb群が30



5 8世紀後半



6 9世紀前半

第239図 銅器屋遺跡群における竪穴住居址の分布

m程度の範囲で認められる。

また、III区では32軒からなる前時期旧b群は消滅し、単独住居のc・dのみとなる。また単独といった意味においては、I区a、IV区h・kも同様で、いずれも他の住居址群から100m以上の距離をおいて存在している。

上記以外、e(10軒・150m程度の範囲) f(7軒・100m程度の範囲) g(8軒・150m程度の範囲) i(5軒100m程度の範囲) j(6軒・150m程度の範囲) l(5軒・100m程度の範囲)は、いずれも前時期の集落が継続されるものとみなしてよいだろう。ただし、その数の増減には差があり、e・f・g群が倍増しているのに対し、i・j・l群は減少している。

7 9世紀後半の住居址群

第240図7

9世紀後半の住居址は、総数16軒である。9世紀前半に比べほぼ

三分の一強に減少する。かつては遺跡群全体に及んでいた住居址の分布も、“田切り”を臨んだその北東部の縁片のみに限られるようになり、IV区a群(8軒・150m程度の範囲) b群(5軒・100m程度の範囲) c(1軒) d(1軒) e(1軒)から構成される。このなかでc・d・eは単独住居である。

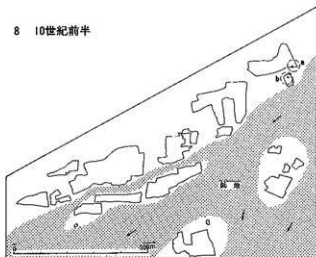
8 10世紀前半の住居址群 第240図8

10世紀前半の住居址は、総数2軒のみである。9世紀後半に比べその数が激減する。IV区a(1軒) b(1軒)から構成され、いずれも単独住居である。

7 9世紀後半



8 10世紀前半



第240図 鋳師屋遺跡群における竪穴住居址の分布

なお、本銚師屋遺跡群においては、10世紀前半をすぎると、まったく集落の形成が認められていない。

9 銚師屋遺跡群における集落の変遷

ここまで、銚師屋遺跡群における古墳時代中期から10世紀前半にかけての住居址群の分布の移り変わりをとらえてみた。ただし、住居址群の分布の変遷＝集落の変遷と、直接的な図式が書けないことは明白といえよう。集落は、住居址の分布に加え様々な施設や場所から構成されるからである。しかし遺跡に残された集落の情報はあまりにも少ない。例えば本遺跡群に残された集落の構成要素は住居址と掘立柱建物址にほぼ限られているといえる。その掘立柱建物址といってもなかなか時期決定が困難なもののばかりである。よって集落把握の要素がほぼ住居址のみにかたまってしまわざるを得ない状況にあるのである。しかし一方では、住居址と掘立柱建物址の分布が近接し、双方の増減がほぼ軌を一にするのもまた事実であり、主に住居址分布のみから最小限導き出せることから、集落の変遷をとらえることが、さほど無理のある作業ではない。ここでは、主に住居址分布から導き出されたことを、その変遷の様相として列記しよう。

- ① まず、銚師屋遺跡群において、はじめて集落が形成されるのは古墳時代中期である。鳥状微高地Ⅰ区において、5世紀第Ⅳ四半期中心の住居址5軒(a群)が他地域からの移住によって形成される。その炊事施設としては住居内に炉が設けられ、カマドを持たない。また、集落内には掘立柱建物址はみられない。
- ② 前者a群は、同様に住居址5軒からなるb群へと継続される。a群においては炉であった火処が、b群においてはカマドの採用と、大きな変化が認められる。本時期のb群が佐久地方におけるカマド出現期の集落としても位置付けられ重要である。
- ③ 古墳時代中期の集落b群は、古墳時代後期に継続されることなく消滅してしまう。
- ④ 集落の存在しない空白期間を置いた後、古墳時代後期に再び集落が形成される。

この時期に位置付けられる住居址は、総計37軒あるが、このうちⅠ区a・Ⅳ区bは単独存在住居である。また、Ⅳ区c・d群においても、おそらくは同時間に存在した集落を形成する住居軒数としては、5軒程度のものであったのだろう。

- ⑤ 8世紀前半には、住居址群はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区全体に急増し、総計133軒の住居址が認められる。住居址建て替えのサイクルをおおよそ四半世紀前後と仮定すると、同時間に存在した住居址は全体で50軒以上ということになる。古墳時代後期の集落全体の構成軒数の10倍近くにその数が膨れ上がっている。

この現象は、古墳時代後期の集落の進展的增加とは考えられず、短期間か長期間かは別にしても、きわめて大幅な移住が銚師屋にあったことを否めない。

- ⑥ この8世紀前半のj群とk群に挟まれて、溝に区画された範囲に6棟の椽柱の掘立柱建物址が併存しているものと考えられるが、その性格については集落全体において管理がなされた公的な倉庫群と解釈できよう。
- ⑦ 8世紀後半の集落は、基本的には8世紀前半の集落が継続されているとみなすことができよう。同時間的には前時期と同様50軒以上の住居址が遺跡群全体に展開していたと予測されよう。なお、前述した倉庫と考えられる特殊な建物群はこの時期には消滅してしまっていることが予測される。
- ⑧ 9世紀前半の住居址は、8世紀後半に比べほぼ半減し、55軒となっている。同時間の集落を構成するのは30軒前後の住居址だったのであろうか。また、a・c・d・h・kにみるような、いわゆる「離れ園分」といわれるような単独住居の存在が注意される。
- なお、野火付遺跡で検出された埋葬馬5頭は、本時期のもので、II区の住居址b群に隣接して検出されたものである。b群の居住者たちが葬ったものであったのだろうか。
- ⑨ 9世紀後半の住居址は、9世紀前半に比べ三分の一以下に減少し、16軒となっている。かつては遺跡群全体に及んでいた住居址の分布も、「田切り」を臨んだその北東部の緑片のみに限られるようになる。
- ⑩ 10世紀前半の住居址は、僅か2軒のみの、いずれも単独住居である。
- この時期以降は、鋳師屋遺跡群から集落がまったく姿を消してしまう。

(4) 集落人口等の推定

集落復原にとって、その集落に居住していたであろう人々の数や、その家族あるいは集団構成等の把握は重要な関心事であろう。しかし、そうした推定を妨げている要因として、同時併存住居の抽出の困難さと、住居における推定居住員数と、実態との間にいったいどれほどの誤差が生じているのかの検証をし難いという問題が残っているからである。

しかしここでは、あえてそうした危険を承知のうえで、集落復原のためのアプローチとして、鋳師屋遺跡群における集落を構成したであろう人数等を推定してみたい。

さて、一軒のカマド(炉)を有する竪穴住居は、「人々の消費(食)生活のまとまりの最小単位」を示しているものとみることができる。この「人々の消費(食)のまとまりの最小単位」を、「家族」と呼び得るかどうかは認識論の範疇に立ち入ってしまうので後で述べるが、実態としての最小単位の集団構成をよみとれるものとしてきわめて重要視すべきである。いずれにしても、竪穴住居から「消費(食)生活を共にした人」の数を導き出し、同時併存住居址数で集計するなら、集落の構成員数をとりあえず把握することが可能である。

第73表 竪穴住居の面積と推定利用人数

竪穴住居	H-2	H-8	H-9	H-16	H-17	H-21	H-23	H-24	H-27	H-29	計
面積	26.8	29.0	19.0	10.3	16.0	15.3	15.4	12.5	16.1	10.6	171.0 m^2
人数($\frac{3.7m^2}{1人}$)	7.2	7.8	5.1	2.8	4.3	4.1	4.2	3.4	4.4	2.9	46.2人
人数($\frac{2.44m^2}{1人}$)	10.9	11.9	7.8	4.2	6.6	6.3	6.3	5.1	6.6	4.3	70.0人

ところで、「前田遺跡」においては、住居址内に遺棄された食膳具の数から、「消費（食）生活を共にした人」の人数を推定し、1名につき3.7 m^2 という占有面積を算定してみた（堀 1987）。この他、従来いわれている竪穴住居における一人あたりの居住必要面積には、関野克の3 m^2 につき一人（関野 1938）、山田水呑遺跡の2.7 m^2 につき一人（松村 1977）、姥山貝塚例の2.44 m^2 につき一人という目安がある。ここで、竪穴住居の面積が利用（居住）人数に比例するという前提の基づくならば、竪穴住居の面積を一人あたりの必要占有面積で割れば、一軒の居住人数が算定されることになる。ただし、一人あたりの必要占有面積の捉え方にはこのように相違があるので、このなかでの最大見積りである前田の3.7 m^2 (A)と、最小見積りである姥山貝塚例の2.44 m^2 (B)の双方をもって、集落構成員数を算出し幅をみる。

一方、竪穴住居の大ききの相違を、居住人数の相違としてみず、例えば貧富の差のあらわれなどとして理解した場合には、このような計算は成り立たない。よって、このようなことも考慮し機械的に一軒につき5人（例えば夫婦一組に子供等といった構成から想定される平均人数）を代入した集落構成員数（C）も算出しておく。

なお、ここでは獨立柱建物址は人口算出の対象外とした。それは、仮に獨立柱建物址の中に居住施設が含まれていたとしても、それは獨立してではなく炊事施設をもつ竪穴住居とあくまでセットとなって機能したと考えるからである。ただし、もし獨立柱建物址の中に獨立した居住施設が含まれていたなら、ここで算出した人口の何割増しかの人口を見積もらなければならない。

それでは実際に、銅師屋遺跡群における推定人口を算出してみるわけであるが、ここでそのひとつのモデルとして、根岸遺跡第III期の集落の10軒の竪穴住居を取り上げてみると、第73表のとおりとなる。10軒あたりの構成員数は、A（3.7 m^2 /1人）で約46名、B（2.44 m^2 /1人）で70名、C（1軒/5人）50名となるのである。

さきには、銅師屋遺跡群における各時期の住居軒数にふれてみたが、半世紀の間にみいだせる住居の半数を同時併存の住居軒数と仮定し、根岸をモデルとした10軒あたりの構成員数を代入し銅師屋遺跡群における各時期の構成員数を導き出すと、第74表のようになる。

これをみると、A（3.7 m^2 /1人）で構成員数を導き出すのと、B（2.44 m^2 /1人）で構成員数を導き出すのとでは住居の数が増すほどばらつきが大きくなるという弊害はあるが、古墳時代中

期にはおおよそ20~30人前後であったのが、
 鋤師屋遺跡群の集落の最盛期である8世紀前半には322~490人の範囲に人口が膨れ上がり、
 8世紀後半にやや減少をみせるも横這いの傾向をみせるが、それが9世紀前半には138~210人程度に半減し、10世紀前半以降には無人化していることが窺えよう。(なお、7世紀の状況については、佐久市分の前田遺跡が未報告であるため詳しいことがわからず表に示さなかったが、最大に見積もっても同時併存の住居軒数は20軒前後とおもわれ、Aで約92名、Bで140名、Cで100名と算出される。)

第74表 鋤師屋遺跡群の推定人口

時 期	併存竪穴 推定概数	推定人口 A(3.7人/1人)	推定人口 B(2.44人/1人)	推定人口 C(1.4人/1人)
5世紀末	5軒	23人	35人	25人
6世紀初頭	5軒	23人	35人	25人
8世紀前半	70軒	322人	490人	350人
8世紀後半	60軒	276人	420人	300人
9世紀前半	30軒	138人	210人	150人
9世紀後半	10軒	46人	70人	50人
10世紀前半	2軒	9人	14人	10人

ところで、鋤師屋集落の最盛期である8世紀前半の322~490人という人口とは、郷里制施行下におけるどのような編戸単位と照らし合わせることができるのだろうか。第75表には、当該期の籍帳として現存し、当該期の戸の実態研究のためによく取り上げられる下総国葛飾郡大嶋郷戸籍(721年)の戸の概要を掲げておいた。これをみると鋤師屋集落の322~490人という人口とはおおよそは大嶋郷の「里」に相当する程度の人口であるとみることができよう。むろん改めて述べるまでもないが、「郷戸実態説」・「郷戸擬制説」の論争の延長上にあるともいえる「里」の実態・擬制については、いまだ解決をみていないのであるから、安直に鋤師屋最盛期の集落を「里」にあてはめようというのではない。あくまで「里」に相当する程度の人口がこの集落に認められたことを確認しておきたいのである。そしてその「里」に相当する程度の人口を有する集落のひろがりはおおよそ1.5kmほどの範囲においてであった。なお、「里」が自然村落にはば対応するものであるという考えは清水三男によって提出されているが(清水 1941)、これに対し「里」は「郷」を機械的に分割(おおよそ三分割)したもので自然村落とは即応しないという岸俊男の反論がある(岸 1951)。ちなみに岸によれば、郷里制下の「里」は、霊龜元年(715)~天平11・12年(739・740)のおおよそ四半世紀の間しか施行されなかったという。

さてここで、集落からその構成要素である「人々の消費(食)生活のまとまりの最小単位」を表すカマドを有する一軒の竪穴住居に話を戻し、考えを巡らせてみよう。まず、一般に言う「竪穴住居」とは必ずしもその言葉が表わすとおりの「居住施設」ではないことは注意しておかなければなるまい。なぜなら居住の基

第75表 大嶋郷の戸の概要

大嶋郷	郷戸数	房戸数	戸口数
甲和里	17	44	454人
仲村里	16	44	367人
嶋保里	17	17	370人
計	50	130	1191人

本要素である就寝が不可能であるほど狭いものも散見されるからである。そうしたものはいわゆる寢屋として考えることが自然であり、就寝等のための機能を有する建物が別棟として存在していたことを想定せざるを得ないのである。そのようなこともあって、人々の居住施設を一堅穴住居に限定できない場合もあるという点が留意されてくるのである。とはいつても、消費（食）生活の基本である炊事場をもつ施設は、ひとつの生活の単位を示していることには相違はないのである。

では、カマドを有する一軒の堅穴住居に表象される「人々の消費（食）生活のまとまりの最小単位」を、人間集団における有意なまとまりである「家族」との関係においてどのように規定できるのだろうか。

「古代家族と婚姻形態」を考察した関口裕子は、「家族」について、エンゲルスの規定に基づく「所有、経営」をなす本質としての家族と、社会人類学の成果による「血縁で結ばれた共住共食の単位」をなす具体的形態としての家族、この双方をもって「家族」を認識する（関口 1984）。そのような認識にあわせて考えるなら、堅穴住居はその具体的形態の要素のひとつである共食の単位を満たしているものということができ、ここにおいて堅穴住居もしくはそれを含む居住施設の一単位をもって、「血縁で結ばれた共住共食の単位」をなす具体的形態としての家族の生活の場と規定できよう。

さて、第73表にもみたように一軒の堅穴住居の収容人数はせいぜい12人から4人である。これに対し、現存する古代籍帳にみる郷戸は20～25人程度からなるもので、この人数を一軒の堅穴住居は到底収容できない。少なくとも1戸（715～740年施行）相当の7～9人程度の収容がせいぜいであったことだろう。古代籍帳の郷戸にみる大家族が実態か擬制かは別にしても、すくなくともそれを割る単位の「具体的家族」が存在していたことを十分にふまえておく必要があるだろう。ただし、その「具体的家族」を、戸に相当させることができるかどうかはさらなる検討を待つ点である。ちなみにここで古代家族の実態に関する学説を関口の紹介にも基づいてみておきたい（第76表）。鑄師屋遺跡群にみる堅穴住居もしくはそれを含む居住施設の一単位における「具体的家族」とは、この表にみるどのような形態を取る家族であったのだろうか。これについては文献史学の側からのゆるぎないアプローチが期待される場所である。ちなみにここにみる双系家族説をとる吉田孝の興味深い指摘を紹介しておく、一つのカマドを二組以上の夫婦が共有することは（カマドの火のタブーから）原則的にはありえなかったという。したがって吉田説にしたがうなら、カマドを有する一軒の堅穴住居には夫婦一組とその子供からなる小家族しか住みえなかったということが導き出されよう。

最後になるが、さきの「鑄師屋遺跡群の集落変遷」において抽出したような堅穴住居がまとめて構成するグループについては、かつて「単位集団」として、例えば水田経営といった経営単

第76表 古代家族に関する学説

家 族	父系家族説		母系家族説	双系家族説
	郷戸実地説	郷戸假制説		
本 質	家父長制家族		非家父長制家族	非家父長制家族
具体的 形 態	義夫婦と複数の息子夫婦 からなる父系合同家族	父系小家族	母系直系（血縁）家族を 経た夫婦家族と、初孫から の次婚家族の併存	夫婦と子供から構成され る双系小家族。父母と息 子夫婦の同居は無し
居住制	夫方居住婚	夫方居住婚	妻方居住を経た新処居住婚 新処居住婚。夫方居住婚	訪婚を経た新処居住婚 (妻方・夫方の双方)
学 説	(藤間生大 1946) (石母田正 1942)	(岸使男 1951)	(高群逸枝 1963) (関口裕子 1984)	(吉田孝 1976、1988) (明石一紀 1979)

位をなす集団（世帯共同体）としての把握がなされた（和島・金井塚 1966）。しかしこうしたグループが共同体の経営の単位とイコールであったかどうかについては、まだまだ論及が必要であることを痛感する。

（5）住居廃絶時におけるカマド破壊をめぐる

鎗師屋遺跡群における奈良・平安時代の竪穴住居に付設されたカマドは、住居廃絶時に故意に破壊された可能性があることを以前に指摘しておいた（堤 1987）。そしてそれは住居を去る際の一種の祭祀行為ではないかと考えられることもあわせて指摘しておいた。本稿では、再びそのカマド破壊について取り上げてみたいとおもう。

1 カマドの基本構造

それでは、まず、住居廃絶時におけるカマド破壊を検討する前に、鎗師屋遺跡群における奈良・平安時代のカマドの基本構造についてみておくことにしよう。

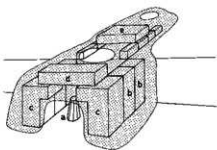
鎗師屋遺跡群における奈良・平安時代のカマドは、きわめて斉一性をもった特色ある構造をみせている。第241図にはその構造を示してあるが、まず在地の軽石をその構材としてふんだんに用いていることがもっとも大きな特色としてあげられよう。

その軽石は、浅間山起源のもので、遺跡の基盤層でもある浅間第一軽石流中にも顕著に含まれており、遺跡付近の河川などのカッティング面等からきわめて採取が容易なものである。採取された軽石は、面取り加工がなされ、カマドの袖部の芯・支脚・天井石などに用いられている。軽石が多用されるのはなんとといっても加工が容易であり、しかも身近に求められたからに他ならな

い。なお、軽石以外にも安山岩・集塊岩が用いられることがあるが、このいずれも浅間山起源の石材である。

カマドの構築の順序としては、まず一旦は埋められた床に、袖部芯や支脚石を埋め込むのに見合う大きさのピットが掘られ、袖部芯や支脚石などが据えられる。支脚石(a)は角柱(錐)状に面取りされた軽石が用いられることが多いが、細長い河原石が用いられている場合がある。袖部芯

(b)には直方体に面取りされた軽石が用いられているが、ここにその最前列(c)には「⌈」状に面取りされた軽石が据えられている場合が多い。その上には直方体の天井石(d)が渡される。煙道部にも天井石(e)が伏せられている場合がある。また、煙道部の煙筒として、長胴甕が埋められている場合も数例ある。こうした軽石等の芯上に、粘土もしくは粘土の混じられた灰褐色土(網点)が貼られてカマド本体となっている。



第20図 カマドの基本構造

2 住居に残されたカマド

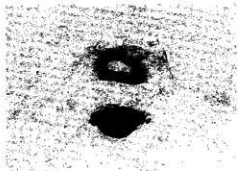
それでは、実際の竪穴住居址にみるカマドのあり方とはどのようなであろう。そのあり方とは、破壊を被っていないと思われるもの(自然崩壊はこちらに含める)と、破壊を受け原形を失ってしまっているものの二様が看取されよう。カマドの破壊は、その構築土や構築石材の移動・散乱状況などから判断される。

破壊を被っていないと思われるカマド

この様ななかの前者、すなわち破壊を被っていないと思われるもので、ほぼ旧状を保っている可能性もあるものは、鐫師屋遺跡群の奈良・平安時代の集落からはきわめて少数例しか見出す



◀▶
正面より
上面より



第21図 破壊を被っていないと思われるカマド(十二遺跡・H-7)

ことができない。例えば、前田遺跡（御代田町分）では106軒中の2%に満たない僅か2軒（H-33・H-59）、十二遺跡では71軒中の一割にあたる7軒（H-7・H-25・H-42・H-50・H-58・H-59・H-68）をあげることができるが、根岸遺跡では32軒の中にそうしたものは見出すことができない。しかしこの少数例とて一部を破壊された可能性を完全に拭き切れるものではない。なお、遺存状態の良い例として、十二遺跡H-7のカマドを第242図にあげておく。

破壊を被っていると思われるカマド

破壊を被っていないと思われるカマドを除いたすべては、何らかの破壊を被っているものということができる。無論、住居使用中にカマドが破壊されそのままにされていたとは考えられない。住居廃絶時にカマドが破壊されたか、その後の攪乱等で破壊されたかのいずれかとみることができよう。

破壊後の状況としては、①住居内にその構材である軽石等が散乱している場合（第243図）と、②その構材である軽石等が一箇所にまとめ置かれている場合（第243図）、③カマドの構材が住居址内には顕著に残存しない、という三者が基本的には認められる。

カマドが住居廃絶時に破壊されたか、その後の攪乱等で破壊されたかについては、俄に判断が付き難い場合があるが、少なくとも②の場合は住居廃絶時にカマドが破壊され、その構材が積み置かれていると考えることができる。また、前者①③の場合にも（破壊が住居址外も含めた広範囲に及んでいない限りは）住居址のエリアが残っている段階ではカマドが破壊されているものとみられよう。②のような事例はあまり多とはいえないが、前田遺跡（御代田町分）で6例、十二遺跡で1例、根岸遺跡で3例が認められる。それ以外の多くの事例は①の場合といえる。

ここにおいて、銚師屋遺跡群における奈良・平安時代の竪穴住居に付設されたカマドは、全期間を通じて、住居廃絶時に故意に破壊されたものとみておきたい。



第243図 破壊を被ったと思われるカマド

3 カマド破壊の持つ意味

では、住居廃絶時におけるカマド破壊の持つ意味とはどこにあったのだろうか。新しい生活空間においては邪魔物として取り壊されたのであろうか。しかし、住居の上屋等地上に突出するものならともかく、とりあえずは生活空間を侵すほど苦になるものとは思われない。一方、新しい住居に付設するカマドの構材として、破壊したカマドの石材を再利用したというのであろうか。それにしては住居内に残置されている良好な石材があまりにも多すぎる。やはり、住居廃絶時におけるカマド破壊の持つ意味が祭祀的なものであるという見解に到達せざるを得ないのである。

ところで、こうした例と同様な住居廃絶時のカマド破壊の存在については、群馬県利根郡月夜野町村主遺跡の報文中の中沢悟の指摘がある（中沢 1986）。すなわち、「竈はこわれるだけでなく、こわされている」との理解がなされ、「竈に使用された多くの石は、次の住居に持ち込まれることなく放置され、新たな竈は新たな石を大部分もちいて構築されている」という。また、支脚石を抜き去り、新しい竈に移すこと、これが古い竈より火を移して引越れるのと同じような竈の引越しと考えられないだろうか」とも指摘している。

一方、桐原健は、明月記にみる記載「今夜家神件竈神来坊門…」や神祇令の「即如庶人宅神祭也」を引き、竈神はとりもなおさず宅神でありその信仰が庶民にもわたっていたものと推測している。その上で、カマドにおける支脚石については、「支脚は、…常時竈の火中に竝立もので、竈神の憑代としては最適のものである」と認識し、新居を起す際には竈神もしくは家神の憑代としての支脚石を新居に移したのではないだろうかとも指摘している（桐原 1977・1981）。たしかに、一般的にみて桐原の指摘するようにカマドの支脚石を残す住居址は少ない。ちなみに本遺跡群では支脚石を残す住居址例として、前田遺跡（御代田町分）で106例中4例、十二遺跡で71例中10例、根岸遺跡で32例中5例となっている。

また、寺沢知子は「カマド祭祀はそれ独自の新しい祭具と祭祀形態を備えていたというより、住居廃棄と一体化した祭祀として機能していた場合が多い…カマド祭祀は各住居の個別祭祀のように考えられがちであるが、集落全体の意図をうけて実施されていた可能性が高い」と指摘している（寺沢 1986）。

さて、翻って銚師屋遺跡群をみた場合、住居廃絶時におけるカマド破壊の持つ意味が祭祀的なものであるとすると、それは古い家を去る際、古い家から竈神を送り出すような意味をもつものであったのだろうか。また、新しい家への支脚石の移動があったかどうかはわからないが、支脚石の遺存率が少ないことは確かである。なお、さきに破壊を被っていないと思われるカマドとして捉えた数例は、焼失住居や、何らかの理由で生活の中断を余儀なくされた（生活用具である使用可能な完形土器などがそのまま残されている場合）住居に伴っている場合が多い。こうした特

殊な例を除いたかぎりでは、集落において普遍的に住居廃絶時にカマド破壊が行われていたとみることができよう。まさに、寺沢が指摘するように「住居廃棄と一体化した祭祀として、集落全体の意図をうけて実施されていた」といえる。

(6) 集落における耕地の問題

ひとまず、集落の性格付けはいずれであったにせよ、集落経営のためのあるひとつの基本ともなる水田耕作等が、なされていたかどうかを考えてみることは重要であろう。この集落の人々はいったい耕作をなし、また集落に隣接して耕地は存在していたのだろうか。

本遺跡群野火付遺跡のH-14号住居址からは、「大田」という墨書土器の検出をみている。その解釈としては、この住居の住人の所有が「大田」であったとは直に読み取れまいが、ここにその住人と「大田」との関与、すなわち水田耕作等との関わり合いを傍証するひとつの資料といえる。

本遺跡群の周囲には、第238図網点部に示したような低地が帯状にのびており、この低地は遺跡の周囲において780,000㎡ほどを測っている。このような墨書もふまえたうえで、まずはこの低地において水田耕作の可能性を考えてみる必要があるであろう。

ところで、一般に律令政府が人民に与えた口分田は、6歳以上の男子が2反(2,400㎡)・女子が1反120歩(1,200㎡)であった。仮に鋤師屋のムラの住人にも一般に口分田が与えられていたと考え、またその口分田を受けるべき6歳以上の男女が一軒に四人いたと仮定してみよう。とすると、計算上では、鋤師屋ムラの最盛期、8世紀前半の70戸の住人に与えられた口分田の総面積は、504,000㎡となる。

また、かつて滝川政次郎が算出した、標準戸10名の年間食料となる稲627.8束(滝川 1944)を取獲するための水田とは、(当時の一町の平均収穫高を稲314束とすると)約二町(現在の23,762㎡)である。8世紀前半の最盛期の鋤師屋ムラの人口を最低で322人と見積もって、この人口の年間食料を満たし得る水田面積は、64.4反=765,136㎡となる。

一方、この集落の性格として、「御牧」あるいは「駅」の経営にあたったという可能性もこれまでに指摘しているわけである。信濃国の16の「御牧」の経営に充てられた「牧田」は百八十四町五段二百五十三歩(『類聚三代格』大同三年(808)十月十三日の太政官符)であったことが窺えるので、一牧平均11町(130,691㎡)程度の「牧田」を保有していたという計算にはなろう。他方、中路である「東山道」のひとつの「駅」の経営に充てられた「駅田」は三町(35,643㎡)であった(『田令』)。

「牧田」や「駅田」は別としても、8世紀前半の、計算された504,000~765,136㎡という面積の水田が集落に隣接してあったとすると、遺跡群周囲の780,000㎡の低地がほぼ水田でうめ尽くされ

ている景観を想定しなければなるまい。

さて、この低地については遺構確認調査を綿密に行なっているが、肝心な水田遺構らしきものは確認できなかった。また、このほか水田存在の可能性を探ってみるため、水田土壌観察・花粉分析・プラントオパール分析を実施してみた(御代田町教育委員会 1988)。まず、ペドロジストの梅村弘氏による水田土壌観察の結果では、この低地の奈良・平安時代相当の土層中には水田土壌特有の鉄・マンガンの溶脱・集積層が認められず、水田耕作の可能性は考え難いということであった。一方、プラントオパール分析の結果においては、イネ起源のイチョウ形珪酸体は低地の奈良・平安時代相当の土層中に1%未満認められた(近藤 1988)が、水田耕作の可能性について説くには微妙ともいえるデータであった。また、花粉分析では水田雑草とみられる水性植物の花粉がまったく検出されていないことから、水田耕作の可能性は考え難いという(パリーノ・サーヴェイ 1988)。なお、現在においてこの地域は、佐久平よりやや標高が上がって冷涼な気候をみせ、とすれば農作物も冷害を受けやすい地域で、到底稲作に適した地域ということではできない。以上を総合するなら、遺跡に隣接した低地で水田耕作がなされていた可能性はきわめて薄いとみなければなるまい。いずれにしてもそうした場合、集落から離れた場所に耕地が存在していたことが予想されよう。

ところで、田令をみると「凡そ狭き郷の田足らずは、寛なる郷に遙かに受くることを聴せ」とある。また、統日本紀では、志摩国の百姓に伊勢・尾張の二国の口分田が与えられているという記載もみられる。こうした遠隔地の口分田の班給が必ずしも稀でなかったことを、岸俊男は指摘している(岸 1954)。また岸は、国を異にし郡を隔てるほどにも至る遠隔の口分田の耕営には、仮座や田居を造り、そこで農繁期を過ごすという状態があったであろうことも指摘している。このような例を知るかぎりにおいても、鎗師屋遺跡群に接して耕地がなくともいっように差し支えないものといえよう。

一方、集落における耕作という点に関して、水田耕作以外の可能性を考えられないであろうか。ちなみに、本遺跡群より3kmほど距離をおいた佐久市栗毛坂遺跡より、古墳時代末から奈良時代初頭に位置付けられる畑が検出されている(長野県埋蔵文化財センター 1987)。この畑は、長さ40mほどの畝が7~8条(幅11m)にわたっているもので、440㎡ほどの面積を有するものである。長野県埋蔵文化財センター寺島俊郎氏のご教示によれば、残念ながら作られていた作物の内容は不明ということであるが、本遺跡群近隣における当該期の畑作の実例として重要視するべきである。あるいは、鎗師屋のムラにおいても畑作はなされていたのであろうか。

(7) 鑄師屋遺跡群における古代集落の性格

これまで鑄師屋遺跡群に関する語相を論じてきた。しかし、到底ゆきとどいた論及を為し得たとは思われないが、ここではそれらの収束として鑄師屋遺跡群の古代集落の性格について考えてみたいとおもう。

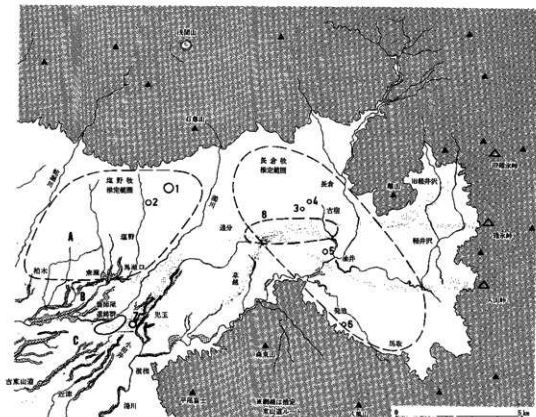
1 鑄師屋遺跡群の歴史的環境

律令制下における行政単位として、当地方は信濃国佐久郡に所属する。『和名抄』をみると佐久郡は、美理・大村・大井・餘戸・青沼・刑部・茂理・小沼の八郷からなっていることが窺えるが、鑄師屋遺跡群が属するのはこのうちの「小沼郷」であった可能性がまずは考えられる。本遺跡群と接する馬瀬口・塩野地籍は、合併前は「小沼村」と称したように、「小沼」の地籍名も残っている。一方、本遺跡群の南、佐久市岩村田付近を中心としては「大井郷」であったといわれている。岩村田の西部近津からは「大井」と刻書された平安時代の土器も検出されている。なお、中世には本遺跡群の南隣に八条院領大井庄の佃が存在しており、あるいは鑄師屋遺跡群付近が「大井郷」である可能性も無きにしもあらずといえる。

さて、『延喜式』をみると、信濃国には16の御牧が置かれたとあるが、そのうちの3牧、すなわち「望月牧」・「塩野牧」・「長倉牧」は佐久地方に置かれたものである。「望月牧」は北佐久郡望月町と北御牧村の御牧ヶ原台地にまたがるもので、まさにその町村名にも由来しているものである。一方、「塩野牧」・「長倉牧」は、当御代田町と軽井沢町にかけて展開していたことは疑いがないものと考えられる。

ここで問題となるのは、双方の牧のエリアということにもなる。

第244図には、鑄師屋遺跡群付近の歴史地図を示してあるが、まず「塩野牧」については、その中心は現在の御代田町塩野地籍とみて相違あるまい。その西限は蛇堀川のなす深い谷、東限は濁川で、北限は浅間山麓を上り、俗に「駒飼の土堤」ともいわれる土堤状遺構(第244図 1)が残る標高1,200m付近がせいぜいだったとみられる。また、その南限は、現在の「馬瀬口」がかつては「橋口」、すなわち牧場の入口の橋にも由来する地名であったといわれるところからも、馬瀬口の南の線矢川の深い「田切り」が牧界であったことだろう。その馬瀬口は鑄師屋遺跡群からおよそ1kmほど南の位置にある。なお、このエリア内には1の標高1,200m付近の土堤状遺構のほか、標高1,050m付近にも土堤状遺構(第244図 2)が存在しており、双方とも「塩野牧」に関連する遺構とみられている。また、塩野地籍には「古牧」・「駒込」・「駒形」等の牧にゆかりの深いと考えられる地名も残っている。



第244図 信濃国佐久郡北部の歴史地図 (1 : 150,000)

「長倉牧」は「塩野牧」とは湯川を挟んで東、現在の軽井沢町長倉・発地地籍を含めて展開していたことが想定されよう。長倉地籍の字横吹・柳宿・太郎山・碓水には、その名残といわれる土塊状遺構(3・4)が残っており(土屋 1970)、また、長倉よりやや距離を隔てた油井地区中屋敷遺跡で土塊遺構(5)が、発地地籍木中でもL字状の土塊状遺構(6)が検出されている(土屋 1970)。このほか牧にゆかりが深いと考えられる地名として、「馬込」・「馬取」等も残っている。

一方、令制「東山道」は、互理駅、信濃国分寺と通過し、小諸市諸地籍に存在していたといわれている「清水駅」を過ぎると、この御代田町へと向かった。御代田町もしくは軽井沢町に設置されたのが、駅馬15頭を保有する「長倉駅」である。なお、「東山道」が御代田町においてどのようなルートをとるかが大きな問題点としてクローズアップされる。おおよそは第244図に網点で示した3ルート、A塩野ルート・B馬瀬ルート・C小田井ルートのいずれかをとるものと想定できる。しかしこの三者のルートのいずれであったかについては、多くの議論をよび、いまだ解決をみていない状況にあるといえよう。このうちCの小田井ルートを取る場合、本遺跡群中を「東

山道」が通過していた可能性がきわめて高くなり、本遺跡群の性格を考えるうえで重要である。

小田井ルート説を提唱した一志茂樹氏は、小田井に長倉の字名が残ることなどを重要視し、また気候条件などから、駅田がこのさきの軽井沢などでは作りえないことなども考慮し、この小田井地籍に「長倉駅」が存在（7）したのではないかと推測している（一志 1957）。また、ここには実際に「上の駅」・「中の駅」・「下の駅」といった字名も残っている。近年の菊池説（菊池 1980・1989）などもほぼ一志氏の考えを追認しているものといえる。なお、この小田井ルート説による「長倉駅」の所在に関しては、駅制の三十里（現在の16km）に一駅の原則からすると、「清水駅」比定地から10km程しか隔たらない小田井地籍では近すぎ、また、碓氷という難所をひかえてこの位置ではあまりに峠から遠すぎて往生ではなかったかとの反論を耳にする。また、小田井地籍の字長倉がはたして古代にまでさかのぼりうる古い地名かどうか疑問視するむきもあろうし、「上の駅」・「中の駅」・「下の駅」といった字名は、中仙道小田井宿との関連をまず考えなければならぬだろう。また、この小田井を「東山道」が通過したのでは道が大きく迂回してしまうことになり、行程的にも距離が伸び、「直路」の原則からしても不都合である。「清水駅」から塩野ルートを通ることが一番の近道であり、「直路」としてはふさわしいことになる。もっとも、塩野ルートでは、「塩野牧」を横断することになり、牧場内を「東山道」が横切っていることは不自然であるという考え方もあるようだ。なお、「長倉駅」の所在についての小田井地籍以外の比定地としては、軽井沢町追分や古宿付近なども挙げられている（8）。

このように、「東山道」ルートやその「長倉駅」の所在については諸説紛々としている。「東山道」遺構や「長倉駅址」そのものの発見がなければ、その場所については決着をみないといえよう。

それでは、この鑄師屋遺跡群からそのような歴史的環境を暗示するような資料を見出すことができるだろうか。そうした具体的資料について次に検討を加えてみることにしよう。

2 集落の性格付けにかかわる資料

1 文字資料

鑄師屋遺跡群の集落の性格付けにかかわる資料で、御代田町分から検出されている文字資料としては、土器にみられる墨書・刻書がある。そのなかで判読可能なものは第245図に示した限りで、きわめて少ない。1から順に、1「八科〇」・2「大工」・3「大田」・4「上？」・5「倉」・6「+」・7「大」・8「〇井」・9「小〇？」・10「久」・11「大十」・12「王」・13「？」・14「木」・15～20「人」である。1～3が野火付、4・5が前田、6～8が十二、9～20が根岸遺跡のもので、14・18～20は刻書、それ以外は墨書である。このうち「八科〇」・「大工」・「大田」・「倉」・「王」・「木」・「人」などは意味を成す名詞といえようが、この中には郷

や
名は集落の性格を表わすような意味をもつものは含まれていない。

なお、これ以外に未報告ではあるが、注目すべき墨書が佐久市前田遺跡H-149号住居址で検出された。それは「長〇〇」の墨書二点である。二点ともその最初には「長」の文字があり、二文字目の〇の部分はおぼろげながら「倉」とも読めそうなのである。また、一点の三文字目の〇部分は、馬と読み得る可能性もある。残念ながら赤外線照射によっても「〇〇」の部分は明確に判読できなかったが、もし仮にこの文字が「長倉〇」であったなら、集落と「長倉駅」あるいは「長倉牧」との関連性を暗示する、唯一・第一級の資料

ということに成りえよう。かなり奥わせ振りだが、完読しえないところが皮肉ではある。

2 特殊遺物

鑄師屋遺跡群における特殊遺物で重要視すべきものには、円面硯3点、袴帯2点（巡方1・鉸具1）、飾り金具1点、皇朝十二銭5点、軽石製の馬頭1点の検出事例がある（第246図）。

円面硯は、御代田町前田遺跡H-20号住居址（8世紀末～9世紀初頭）で1点、小諸市鑄師屋遺跡SB-13号住居址（8世紀末～9世紀初頭）で1点、佐久市前田遺跡H-153号住居址（8世紀末）で1点の内訳となっている。いずれも、集落の最盛期かそれをやや下る時期のものとして位置付けられよう。

袴帯2点は、銅製の巡方が佐久市前田遺跡H-1号住居址（8世紀初頭）で1点、それと20mほどの距離をおいたF-17号掘立柱建物址付近から鉄製の鉸具1点が検出されている。

これらの円面硯や袴帯は、最近では各地の集落遺跡からもまま検出されるようになってきたが、佐久地方では初見のものである。袴帯については阿部義平の指摘するような官位（阿部 1976）に直接的に対応させられるかどうかはわからないが、いずれにしてもこれらが、有力者層の所持品であったことは推察に難くあるまい。

このほか、金銅製飾り金具1点（根岸遺跡H-9）、皇朝十二銭5点=和銅開珎（佐久市前田遺跡H-152）・萬年通寶？（十二遺跡H-28）・神功開寶（野火付遺跡H-13）・隆平永寶（根岸遺跡H-18）・鏡益神寶（根岸遺跡H-13）が検出されている。また佐久市前田遺跡では、軽石製の馬頭1点の検出事例があるが、これについては時代を決め難いようである。



第246図 鑄師屋遺跡群（御代田町分）の文字資料

3 馬 骨

銚師屋遺跡群と馬との関わり合いを考えるのに肝心な馬骨の出土事例をみてみよう。

まず、住居址では、29軒で馬骨が検出されており、奈良・平安時代の住居址357軒のうちの8%にあたっている。その内訳は、御代田町では前田遺跡2軒・十二遺跡5軒・根岸遺跡7軒、佐久市では前田遺跡12軒・銚師屋遺跡1軒、小諸市銚師屋遺跡では2軒からの出土をみている。これらは、廃絶後の住居の窪地に廃棄されたか、混入したものとみることができよう。その埋没過程において入り込んでいるものならば、住居廃絶からそう遠くない時期のもの、つまり大方は奈良・平安時代の馬骨とみることが許されようか。

土壌からの出土事例では、第II章の歴史的環境においても紹介したように、野火付遺跡の埋葬馬がまず最も注目されよう。この詳細については野火付遺跡の報告書（御代田町教育委員会 1985）と「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐる」（堀 1986）に譲るとして、そこから検出された埋葬馬は、個々の土壌に埋葬されていた5頭（第24・25図）で、共葬されていた坏類から9世紀前半のものとして推定された。体高は130cm程度の中型馬で、年齢は4・5・10・11・20歳と推定された（宮崎 1985）。このほか時代は決定しえないが、野火付で1基、佐久市前田遺跡で1基の土壌から良好な状態で馬の骨格が検出されている。

また、奈良・平安時代と考えられる遺構中からの出土事例として、御代田町前田遺跡の掘立柱建物址の埋土中から馬歯が検出されている。



第26図 銚師屋遺跡群における特殊遺物の分布

このほか時代の決定しえない溝状遺構の出土事例では、御代田町分で6例、小諸市分で2例、佐久市分では50例以上が認められるという（佐久市教委羽毛田卓也氏のご教示による）。

以上をまとめるなら、おおよそ奈良・平安時代に位置付けられる可能性のある馬骨は35例、また、時代の決定できない馬骨が58例以上認められるということになろう。この時代の各地の遺跡においても馬骨の出土事例についてはしばしば耳にするところではあるが、その比較においてはやはり鋤師屋遺跡群の出土事例が多いとみなすことができ、留意されよう。

3 鋤師屋遺跡群における古代集落の性格

これまでみてきた限りにおいては、文字資料の点からは「長倉」の「牧」あるいは「駅」に関連のある可能性が、円面硯や袴帯という特殊遺物の存在からは一部に有力者層の存在が予測された。また、本遺跡群からの馬骨の出土事例は多いとはいえ、集落と馬とのかわりあいも彷彿させられた。

では、遺構の構造や配置等からは、「牧」あるいは「駅」との関連施設の存在を窺い得ることができようか。

「牧」である場合、厩舎や、放牧による駒留めのための牧柵・土堤・溝などの施設があったことを予測できようが、牧柵を想定させる柵列状遺構や土堤は本遺跡群からは検出されていない。また、溝状遺構は多数検出されているが、時代の新しいものや時代不祥なものばかりであり、駒留めのための溝とするには無理があろう。

一方、「駅」は「東山道」に面して設けられ、駅門・駅舎・厩舎・駅稻の倉庫・堤井（馬の水飲み場）が設けられていたことが想定されるという（田名網 1985）。また、山陽道で調査されたある駅では、駅舎に葺かれていたと考えられる瓦が検出されている。しかし、本遺跡群においては、無論「東山道」の可能性を指摘し得る古い道状の遺構は確認されておらず、駅門・駅舎・堤井等に比定しうる特別な遺構は認識できない。

なお、この両者に共通する厩舎については、本遺跡群で多数検出されている掘立柱建物址を充てることができないわけではない。そうした場合、厩舎のみが連立してある景観ではなく、居住施設である個々の竪穴住居址と隣接して個々の厩舎が存在するといった景観、つまりは居住と飼育との一体化した状況が想定されることになる。それにしてもなお、掘立柱建物址は、我々の性格推定を頑強に拒んでいる。

一方、牧稻あるいは駅稻を保管する倉庫には、小諸市鋤師屋遺跡の溝で囲まれた倉庫群を充ててみることもできよう。

しかしいずれにしても、結論的には、遺構の構造や配置からは、「牧」あるいは「駅」における直接的な施設の存在を窺いようがない。したがって、「牧」あるいは「駅」との関わりを求めると

するなら、その経営・飼育等にたった集団の居住を想定しておくことが妥当となろうか。そしてその住人とは、「牧長」・「牧楨」・「牧子」あるいは「駅長」・「駅子」などの人々ということになろうか。

最後に、その集落の成立と消滅について、幾分の想定がゆるされようか。

鑄師屋遺跡群において、古墳時代中期あるいは古墳時代後期に展開していた集落は、いわば自然村落で、20軒未満の小規模なまとまりをみせるものであった。

それが奈良時代に入ると、70軒と、急激に集落が拡大をみせる。すなわち、令制にともなって整備された官道「東山道」の「長舎駅」が設置され、一方、御牧「長倉牧」・「塩野牧」が経営され始めた頃である。そのいずれかの経営にあたったのがこの集落の人々で、あるいは政府の指示に従ってここに移住してきた人々なのかもしれない。そうした意味においてこの村落は、自然村落にたいして計画的な村落であったとい^うこともできるであろう。この鑄師屋のムラも、奈良時代の一世紀間は、郷下の「一里」程にもあたる300人以上の人工の賑わみをみせている。

その隆盛をみせた鑄師屋の集落も9世紀を過ぎたころから縮小をみせ、9世紀後半には最盛期の6分の1以下、50人程度の人口にしぼんでしまう。それは、律令体制の動揺してくる時期でもあり、人民の逃亡・浮浪人の続出、群盗の頻発などがみられ、不安な社会情勢を呈していた頃でもあった。一方、坂東諸国で駄馬によって運送業を営む富豪層は、「倣馬之党」を組んで馬の略奪を繰り返していた。その「倣馬之党」の取り締まりのために昌泰二年（899）には、『碓氷関』も置かれたほどである（『類聚三代格』）。官牧においても、このような徒党による官馬の略奪が相次ぐ一方、牧司の怠慢による貢馬の遅延などが深刻化し、官牧経営自体もいわば行き詰まりの状況をみせていた。

まさにそのような時期に鑄師屋の集落は衰退し、そして10世紀のはじめには完全に消滅してしまうのである。

奈良時代より2世紀間続いた鑄師屋のムラの廃絶である。

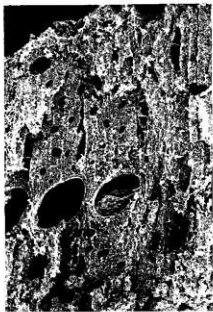
引用・参考文献

- 【ア】阿部義平 1971 「ロクロ技術の復元」(『考古学研究』18—2)
 阿部義平 1976 「銅帯と官位制について」(『東北考古学の諸問題』)
 天野 繁・他 1974 「八千代市村上遺跡群」
 荒牧重雄 1968 「浅間火山の地質」 地研研専報14
 荒牧重雄 1987 「第4章 浅間山の噴火活動」(『軽井沢町誌 自然編』)
- 【イ】伊丹 徹 1985 「奈良、平安時代相模國の掘立柱建物」(『神奈川考古』20)
 伊丹 徹 1986 「奈良平安時代相模國の集落遺跡における大形住居址と掘立柱建物」(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
 石井克己 1986 「古墳時代後期の集落跡」(『季刊 考古学』16)
 石井克己 1987 「火山災害と人間生活」(『子持村誌』上巻)
 一志茂樹 1957 「御代田の古史を探る」
 井上尚明 1985 「古代集落における掘立柱建物址について」(『土曜考古』10)
 井上光貞・他 1976 『律令』 日本思想大系3
 岩崎卓也 1982 「城の内遺跡・灰塚遺跡・生仁遺跡・馬口遺跡」(『長野県史』考古資料編1—2)
 岩崎卓也 1986 「古墳時代の社会」追求の視角(『季刊 考古学』)
- 【オ】大川 清 1955 「カマド小考」(『落合』)
 小笠原好彦 1982 「東日本における掘立柱建物集落の展開」(『考古学論叢』)
 小川貴司 1976 「回転糸切り技法の展開」(『考古学研究』26—1)
- 【カ】柏市教育委員会 1976 『中馬場遺跡第三次発掘調査報告書』
 神奈川考古同人会 1983 『奈良・平安時代の諸問題』
- 【キ】齋池清人 1985 『佐久の交通史』
 鬼頭清明 1977 「八世紀における社会構成史的特質」(『日本史研究』187)
 鬼頭清明 1985 『古代の村』 岩波書店
 岸 俊男 1951 「古代村落と郷里制」(『古代社会と宗教』)
 岸 俊男 1954 「東大寺領域前庄園の復原と口分田耕営の実態」(『南都仏教』創刊号)
 桐原 健 1977 「古代の東国における電信仰の一面」(『国学院雑誌』78—9)
 桐原 健 1981 「かまとというり」(『月刊百科』)
 桐原 健 1982 「神巫としての麻呂」(『伊那路』)
- 【ク】工藤善通 1977 「竪穴住居と高床住居」(『日本の建築』1 古代1)
 黒坂勝美 1985 『延喜式』 吉川弘文館
- 【コ】河野喜映 1983 「3. 奈良・平安時代の鶴見川流域」(『奈良・平安時代の諸問題』)
 見玉幸多 1982 「古代の官位について」(『論集 房総史研究』)
 古墳時代土器研究会 1984 「古墳時代土器の研究」
 駒見和夫 1984 「古代における炉とカマド」(『信濃』36—4)
 小諸市教育委員会 1983 『曾根城遺跡』
 小諸市教育委員会 1983 『野火付古墳』
 小諸市教育委員会 1984 『久保田遺跡』
 小諸市教育委員会 1987 『宮ノ反遺跡』
 小諸市教育委員会 1988 『鍔物師屋遺跡』

- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」(『考古学研究』6-1)
- 近藤練三・佐瀬隆 1986 「植物珪酸体、その特性と応用」(『第四紀研究』25-1)
- 近藤練三 1988 「十二遺跡土壌の植物珪酸体分析」(『十二遺跡』)
- 【ク】 齋藤孝正 1987 「施釉陶器年代論」(『論争・学説 日本の考古学』6)
- 酒井清治 1981 「房総における須恵器生産の予察」(『史館』13)
- 坂詰秀一 1982 「八重原遺跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
- 佐久市教育委員会 1972 『下前田原古墳群発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1976 『市道』
- 佐久市教育委員会 1984 『若宮遺跡』
- 佐久市教育委員会 1985 『鑄師屋遺跡』
- 佐久市教育委員会 1988 『鑄師屋遺跡II』
- 佐久市教育委員会 1988 『前田遺跡』—第I・II・III次発掘調査概報—
- 佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田墓』
- 笹沢 浩 1976 「ウ 奈良・平安時代の土器について」(『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市その4)
- 笹森健一・他 1978 『埼玉県上福岡市川崎遺跡(第3次)、長宮遺跡発掘調査報告書』
- 【ク】 高島忠平 1971 「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」(『考古学研究』57-1)
- 高橋一夫 1971 「石製模造品出土の住居址とその性格」(『考古学研究』18-3)
- 高橋一夫 1979 「報告1 計画村落について」(『古代を考える』20)
- 高橋一夫 1986 「生活遺構・遺物の変化の意味するもの」(『季刊 考古学』)
- 滝川政次郎 1944 『律令時代の農民生活』
- 滝沢 亮 1985 「古代東国における鉄製紡錘車の研究」(『物質文化』44)
- 竹中工務店仮設道路用地内遺跡調査会 1985 『すぐじ山下遺跡』
- 田名綱宏 1985 「東山遺」(『信濃路』47)
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』
- 丹野雅人 1985 「No769遺跡」(『多摩ニュータウン遺跡』—昭和57年度)
- 【ツ】 土原長久 1970 「信濃長倉牧場にある上代牧場遺構」(『長野県考古学会誌』9)
- 堤 隆 1985 「平安時代の埋葬馬について」(『野火付遺跡』)
- 堤 隆 1986 「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」(『信濃』38-4)
- 堤 隆 1987a 「V 総括」(『前田遺跡』)
- 堤 隆 1987b 「佐久地方の様相」(『長野県考古学会誌』55・56)
- 鶴岡正昭 1985 「武蔵国における鉄鑿の型式分類とその編年学的予察」(『法政考古』10)
- 【テ】 寺沢知子 1986 「祭祀の変化と民衆」(『季刊 考古学』16)
- 【ト】 東洋大学未来考古学研究会 1982 『シンポジウム 盤状坏』
- 栃木県教育委員会 1975 『井頭』
- 富山 博 1974 「正倉建築の構造と変遷」(『日本建築学会論文報告書』216)
- 【ナ】 直木孝次郎 1965 「古代国家と村落」(『ヒストリア』42)
- 永井規男 1985 「秋田の経役家屋」(『家』日本古代文化の探求)
- 長岡史起 1986 「遺物の出土位置からみた竪穴住居の居住空間について」(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
- 中田 英 1981 「古代東国集落における獨立柱建物の一考察」(『神奈川考古』12)

- 中田 英 1986 「古代東国の一集落における一軒の住居址の性格について」(『神奈川考古同人会10周年記念論集』)
- 中田 英・伊丹 徹・他 1983 『向原遺跡』
- 中沢 悟ほか 1976 『大原II遺跡・村主遺跡』
- 中村 浩 1980 『5. 須惠跡』
- 中山吉秀 1976 『離れ園分考』(『古代』61)
- 【ニ】西 弘海 1971 「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』)
- 西山克己 1984 「東国出土の暗文を有する土器(上)」(『史館』17)
- 西山克己 1985 「東国出土の暗文を有する土器(下)」(『史館』18)
- 【ハ】花岡 弘 1976 「第2号住居址・第3号整穴状遺構」(『市道』)
- 林部 均 1986 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土器器」(『考古学雑誌』72-1)
- 林 幸彦 1982 「石臼製炭窯跡」(『長野県史』考古資料編1-2)
- 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器具」(『信濃』39-4)
- 原島礼二 1965 「七世紀における農民経営の実質」(『歴史評論』117・179・181)
- パリオ・サーヴェイ株式会社 1988 「十二遺跡の花粉分析」(『十二遺跡』)
- 【ヒ】樋口和雄 1988 「御代田町の自然環境と地質」(『十二遺跡』)
- 比田井克仁 1985 「7世紀における多摩地方の土器様相」(『研究論集』3)
- 比田井克仁・他 1982 「多摩ニュータウン地域の古代(1)」(『研究論集I』)東京都埋蔵文化財センター
- 平野 修ほか 1988 『宮間田遺跡』 武川村教育委員会
- 【フ】福島邦男 1986 「御牧ヶ原・八重原における古窯址研究の推移」(『長野県考古学会誌』No53)
- 福田健司 1983 「II 南武蔵地域」(『シンポジウム 奈良・平安時代の諸問題』)
- 【マ】松村恵司 1977 「土師製須恵器形土器の分類」(『山田水谷遺跡』)
- 松村恵司 1983 「古代稻倉をめぐる諸問題」(『文化財論叢』)
- 【ミ】宮崎重雄 1985 「野火付遺跡出土の馬歯・馬骨について」(『野火付遺跡』)
- 宮本長二郎 1986 「5 住居」(『日本考古学』4)
- 御代田町教育委員会 1975 『馬瀬口下原古墳』
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 御代田町教育委員会 1985 『大沼遺跡』
- 御代田町教育委員会 1985 『宮平遺跡』
- 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』
- 御代田町教育委員会 1988 『十二遺跡』
- 【ヤ】山口重樹 1977 「III. 出土鉄製の集成と考察」(『山田水谷遺跡』)
- 山口英男 1986 「八・九世紀の牧について」(『史学雑誌』95-1)
- 山田水谷遺跡調査団 1977 『山田水谷遺跡』
- 山梨文化財研究所 1987 「宮間田遺跡出土の墨書土器について」(『山梨文化財研究所報』1)
- 【ヨ】義江明子 1986 「古墳時代の社会構造」(『季刊 考古学』)
- 吉岡康暢 1983 「第二章 奈良平安時代の土器編年」(『東大寺横江庄遺跡』)
- 吉田 晶 1980 『日本古代村落史序説』 筑書房
- 吉田 孝 1976 「律令制と村落」(『日本歴史』3)
- 吉田 孝 1988 『日本の歴史 3 古代国家の歩み』
- 【ワ】和島誠一・金井兼良一 1966 「2 集落と共同体」(『日本の考古学』V)

VI 付 編



コナラ節材の顕微鏡写真 (× 140)

自然科学分析にあたって

(1) はじめに

根岸遺跡を含む鑄師屋遺跡群では、より総合的な見地からの遺跡・遺構・遺物の性格解明にあたり、自然科学分析を実施し、1～5の付編として以下に掲載した。

その付編掲載にあたっては、分析資料の性格および分析の目的について、予めふれておく必要があると考えられるため、ここで若干の補足説明を加えておくこととする。

(2) 付編1 液体シンチレーション¹⁴C年代測定にあたって

ここでは、鑄師屋遺跡群における幾つかの遺構の年代を、焼失住居址の炭化材の¹⁴C年代測定によって推定してみることを目的とした。測定を行なったのは、第1表にみる住居址の炭化材4点である。

第1表 ¹⁴C年代測定炭化材試料一覧表

番号	測定番号	出土遺跡	出土遺構	時代・時期	遺構の考古推定年代
1	KSU-1756	前田遺跡	H-67号住居址	古墳時代中期	6世紀第I四半期
2	KSU-1757	十二遺跡	H-58号住居址	奈良時代前期	8世紀第II四半期
3	KSU-1758	根岸遺跡	H-13号住居址	平安時代前期	9世紀第IV四半期
4	KSU-1759	根岸遺跡	H-11号住居址	平安時代前期	9世紀第IV四半期

(3) 付編3 鑄師屋遺跡群の黒曜石の分析にあたって

ここでは、鑄師屋遺跡群出土の黒曜石について、熱中性子放射化分析法によるその原産地推定と、水和層年代測定を試みた。分析試料は以下のものである。

- 前田遺跡H-11号住居址出土黒曜石
- 前田遺跡H-55号住居址出土黒曜石
- 十二遺跡H-18号住居址出土黒曜石
- 根岸遺跡H-3号住居址出土黒曜石
- 根岸遺跡H-8号住居址出土黒曜石

(4) 付編4 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定にあたって

根岸遺跡第I区H-11号住居址は焼失家屋であり、その上屋と推定される炭化材が多数検出された。その炭化材の樹種同定をおこない、上屋に用いられた材の種類を知ることが目的である。

(5) 付編5 鑄師屋遺跡群の馬歯・馬骨と獣骨類の鑑定にあたって

鑄師屋遺跡群では、数多くの馬歯・馬骨等が検出されているが、それらはとりわけ古代の「御牧」や「東山道」の「駅」に関連する馬である可能性も考えられ重要である。その馬歯・馬骨等を鑑定していただき、生物学的な所見を得ることが目的である。

本遺跡群の御代田町分出土の61資料すべての馬歯・馬骨と獣骨類について鑑定していただいた。

液体シンチレーション¹⁴C年代測定

京都産業大学 理学部
山田 治

先般来、ご依頼の¹⁴C年代測定の結果を下記のとおりご報告申し上げます。

番号	測定番号	試料名・採取地	測定結果
1	KSU-1756	御代田町 No.1 H-67号住居址 炭化材 (前田遺跡)	1830 ± 30 BP
2	KSU-1757	御代田町 No.2 H-58号住居址 炭化材 (十二遺跡)	1200 ± 20 BP
3	KSU-1758	御代田町 No.3 H-13号住居址 炭化材 (根岸遺跡)	270 ± 60 BP
4	KSU-1759	御代田町 No.4 H-11号住居址 炭化材 (根岸遺跡)	1050 ± 20 BP

(註) ¹⁴C年代測定値の表現法は、次のごとき国際的約束に基づいています。

- (1) ¹⁴Cの半減期は5568年として計算します。
- (2) BPはBefore Presentの略です。ただし、PresentはAD1950年に固定し、それから何年前かを示します。
- (3) 測定誤差は、1標準偏差を用います。(真の値が1標準偏差の中にはいる確立は約68%です。)
- (4) 測定値は必ず測定関係記号と測定番号をつけます。索引やアークの確認に必要ですから、引用の際には必ずこの記号と番号をつけておいて下さい。
- (5) ¹⁴C年代測定値は世界共通です。そのために、¹⁴C濃度の基準には、アメリカ国立標準局から販売されているシュウ酸(通称NBSシュウ酸)を使用しています。

¹⁴C年代と考古代との照合

御代田町教育委員会

堤 隆

さきにご報告いただいた¹⁴C年代については、土器編年などの考古学的方法に基づく年代観との照合作業にも必要にならうかと思われるので、それについて若干ふれておくことにする。

1 KSU-1756 前田遺跡H-67号住居址 炭化材〈測定結果 1830±30BP〉

前田遺跡H-67号住居址は、出土土器から古墳時代中期最終末、6世紀第I四半期に位置付けられる。

測定年代1830±30BPは、1950年よりADになおすと、AD120±30（AD90～150）年となり、考古代とは大幅なひらきをみせている。

2 KSU-1757 十二遺跡H-58住居址 炭化材〈測定結果 1200±20BP〉

根岸遺跡H-58号住居址は、出土土器から奈良時代前期8世紀第II四半期に位置付けられる。

測定年代1200±20BPは、1950年よりADになおすと、AD750±20（AD730～770）年となり、考古代とはほぼ整合している。

3 KSU-1758 根岸遺跡H-13号住居址 炭化材〈測定結果 270±60BP〉

根岸遺跡H-13号住居址は、出土土器から平安時代前期9世紀第IV四半期に位置付けられる。なお、本住居址は饒益神寶（859年初鑄）を伴っており、少なくとも859年を遡り得ないことが確認される。

測定年代270±60BPは、1950年よりADになおすと、AD1680±60（AD1620～1740）年となり、考古代とは大幅なひらきをみせている。

4 KSU-1759 根岸遺跡H-11号住居址 炭化材〈測定結果 1050±20BP〉

根岸遺跡H-11号住居址は、出土土器から奈良時代前期9世紀第IV四半期に位置付けられる。

測定年代1050±20BPは、1950年よりADになおすと、AD900±20（AD880～920）年となり、考古代とはほぼ整合している。

なお、このなかで、¹⁴C年代と考古代とのひらきが大きい1と2については、測定に用いた試料の量が他の二者に比べ著しく少ない状況であった。測定炭素の量と年代測定精度は正比例するとコメントを報告者の山田先生よりいただいている。

鑄師屋遺跡群の黒曜石の分析

立教大学一般教養部

鈴木 正男

(1) はじめに

前田(2点)、十二(1点)、根岸(2点)の各遺跡から出土した総計5点の黒曜石について、その産地を熱中性子放射化分析と判別分析によって推定し、その年代を黒曜石水和層年代測定法によって測定した。

(2) 黒曜石分析

先史時代に石器製作のための石材として運搬・交易された黒曜石は、溶岩が急冷して生じた SiO_2 に富む天然ガラスであり、その産地は限られている。

黒曜石分析は、黒曜石の産地同定と水和層年代測定からなり、運搬・交易による黒曜石の空間的移動とそれが行なわれた時代の、時空にわたる分析を行なう。

遺跡出土黒曜石の産地同定は熱中性子放射化分析法による微量元素の測定と、その結果に基づいた判別分析によって行なわれる。

(3) 熱中性子放射化分析

種々の核種に熱中性子を照射するとそれぞれの核種は放射化され固有のエネルギーの γ 線を放出する。放射化された核種はそれぞれ固有の半減期で壊変するから、冷却期間を調節することによって期待される核種の γ 線を検出することができる。

ここでは約10日間冷却した後、 γ 線スペクトルを3,000秒計数し、標準試料(NBS278)と比較して、サマリウム(Sm)、ウラン(U)、トリウム(Th)、ハフニウム(Hf)、スカンジウム(Sc)、鉄(Fe)、ランタン(La)の7元素の定量を行なった。その結果を第1表に示した。

(4) 判別関数

関東・中部地方遺跡出土の黒曜石の産地同定のための判別関数については、すでに Suzuki & Tomura (1983) に報告した。この判別関数を日本全国34ヶ所の産地の黒曜石について適用できるようにするため、のべ512点の原産地黒曜石の熱中性子による放射化分析のデータを追加し、新た

な判別関数の設定を行なった。この判別関数は近い将来公表される。

ここではその判別関数による産地同定を行ない、その結果を第1表に示した。その結果によれば、ここで扱った遺跡では、前田（2点）一和田峠産・星ヶ塔産各1点、十二（1点）一和田峠産1点、根岸（2点）星ヶ塔産2点であった。

(5) 黒曜石水和層による年代測定

黒曜石の水和層の厚さ（THL： μm ）と、経過した年代（A： a ）との間には、次の関係がある。

$$A = 1000 \cdot (\text{THL}^2 / k)$$

ここに、 k は効果水和温度（EHT）が一樣であると見做される地域で設定され、かつ適用される水和速度（ $\mu\text{m}^2/1000\text{a}$ ）である。

この値についてはすでに野川遺跡などを基準にして、次のように設定されている（Suzuki, 1973）。すなわち和和田峠産7.89、星ヶ塔・八ヶ岳・男女倉産5.13、神津島産2.69、上多賀・鍛冶屋産0.98、畑宿産0.28である。

そして効果水和温度が異なる地域に適用する場合には、その地域の年平均気温などから推定される補正值（Suzuki, 1973）を用いて補正する。この方法の成功した事例として八丈島湯浜遺跡の例がある（Suzuki et al., 1984）。 K の補正值 K_r は、前田・十二・根岸遺跡—0.69である（Suzuki, 1973）。

試料の調整は、黒曜石の剝離面に直交して切り出した小片、平均約10片を、エゴフォームの試料枠に入れて、エポキシ樹脂エポフィックスと硬化剤（いずれもDenmarkのStruers社製）を容積比8：1で混合する。硬化完了後、通常の手順にしたがって、 $30\mu\text{m}$ 程度の厚さの薄片に仕上げた。これを1,000倍の顕微鏡で観察し、顕微鏡テレビカメラで録画し、ビデオプリンターでプリントしたものをスケールルーペで測定した。

前田遺跡の黒曜石水和層年代は以下のとおりである。

1	1点	5.39 μm	5,300年前
2	1点	2.70 μm	2,100年前

十二遺跡の黒曜石水和層年代は以下のとおりである。

3	1点	7.53 μm	10,400年前
---	----	--------------------	----------

根岸遺跡の黒曜石水和層年代は以下のとおりである。

4	1点	3.57	μm	3,600年前
5	1点	5.87	μm	9,700年前

第1表 黒曜石の分析結果

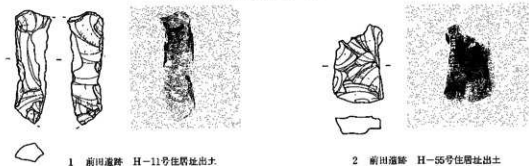
	S m	U	T h	H f	S c	F e	L a	産地	水和層厚
前田 (時代不明)									
1	8.08	8.95	28.9	3.93	5.52	0.507	24.5	W 0	6.8
2	5.88	3.87	10.8	3.30	3.06	0.475	18.3	H 2	3.4
十二 (時代不明)									
3	8.31	9.02	30.0	4.68	5.92	0.520	25.6	W 0	9.5
根岸 (時代不明)									
4	5.73	3.39	10.7	3.05	3.04	0.468	17.3	H 2	4.5
5	5.97	3.01	11.2	3.60	3.25	0.440	17.5	H 2	7.4

各元素の含有量は、鉄 (Fe, %) を除いて ppm である。産地記号 Y 0 は八ヶ岳産、W 0 は和田峠産、H 2 は星ヶ塔産、K 3 は神津島産を示す。水和層厚は任意単位、1 任意単位は 0.794 μm である。

引用文献

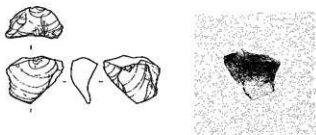
- Suzuki, M., 1973: Chronology of prehistoric human activity in Kanto Japan—Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol. IV, 241—318.
- Suzuki, M. and Tomura, K., 1983: Basic data for identifying the geologic source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99—110.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K., 1984: Obsidian analysis: 1974—1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131—140.

銚師屋遺跡群の黒曜石の分析

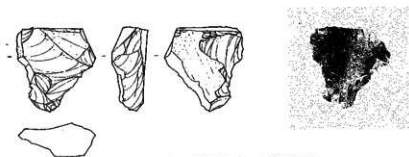


1 前田遺跡 H-11号住居址出土

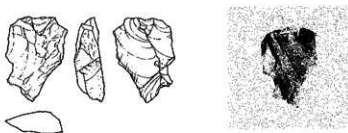
2 前田遺跡 H-55号住居址出土



3 十二遺跡 H-18号住居址出土



4 根岸遺跡 H-3号住居址出土



5 根岸遺跡 H-8号住居址出土

根岸遺跡出土炭化材の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) 試 料

試料は10点で、平安時代（9世紀）のものとされるH-11号住居址から検出されたものである（第1図）。試料はおそらく建築材として用いられたものであろう。

(2) 方 法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目三段面を作成、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1，2）も作成した。

(3) 結 果

試料は以下の4種類（Taxa）に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などはつぎのようなものである。

1) コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp.]
ブナ科 No. E. G.

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独、単穿孔を有する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうちコナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・稗材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもあ

る。

2) コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種 [*Quercus* (Subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.]

ブナ科 No. A, B, F, H, J.

環孔材で孔部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ (*Q. var. iabilis*) の2種がある。クヌギは本州 (岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州 (山形・静岡県以西)・四国・九州 (北部) に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材、楳木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

3) クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. C, I.

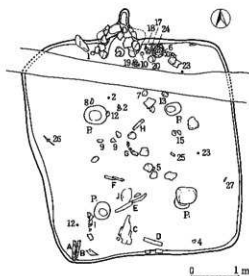
環孔材で孔部は1~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~楕円形、小道管は単独および2~3個が斜 (放射) 方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道西南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楳木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。

4) ヤマグワ (*Morus bombycis*) クワ科 No. D.

環孔材で孔部は1~3列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2~3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~6細胞幅、1~50細胞高。柔組織は周囲状~翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園



試料番号	種名
A	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
B	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
C	クリ
D	ヤマグワ
E	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
F	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
G	コナラ属 (コナラ亜属コナラ節) の一種
H	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種
I	クリ
J	コナラ属 (コナラ亜属クヌギ節) の一種

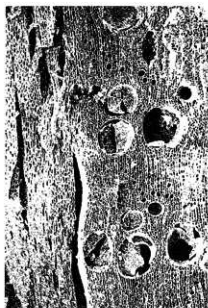
第1図 根岸遺跡H-11号住居址出土炭化材の樹種

炭品種があり養蚕に利用されている。材はやや重硬で強靱、加工やや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

以上の同定結果を第1図・図版1, 2に示す。

(4) 考 察

試料では、クヌギ節 (5点)、コナラ節・クリ (各2点)、ヤマグワ (1点) が認められた。資料によると、残存試料数が少ないにもかかわらず、同定対照とした試料は比較的大型のものが多く、このことは、これらが焼失前から柱など大型の部材であったために残存しやすかったことを示しているように思う。また、これらの樹種はいずれも強度や耐朽性に優れていることから、主要構造材として用いていた可能性は高いものと考えられる。



木口 ×25

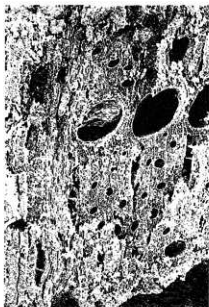


胚目 ×140

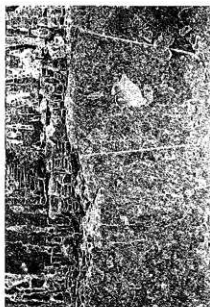


板目 ×140

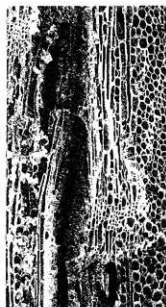
Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. E



木口 ×25



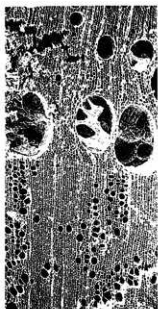
胚目 ×140



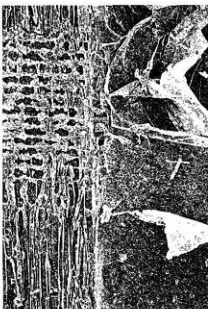
板目 ×140

Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. B

図版1 材の顕微鏡写真 (H-11号住居址出土)



本口 $\times 35$

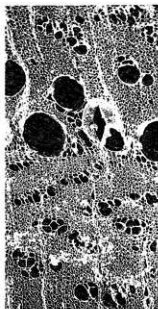


径目 $\times 140$



板目 $\times 140$

Castanea crenata I



本口 $\times 70$



径目 $\times 140$



板目 $\times 140$

Morus bombycis D

鑄師屋遺跡群出土の馬歯・馬骨と獣骨類について

前橋第二高校

宮崎重雄

(1) はじめに

鑄師屋遺跡群は長野県北佐久郡御代田町大字御代田にあり、野火付、前田、十二、根岸の各遺跡からなる。このあたりは、浅間山 (2,560m) の裾野平地面 (760~770m土) に位置し、水田地帯の中心部にある。御代田町には平安時代に新東山道が通過し、長倉駅が設置されていたという見解もある。

昭和59年5月から昭和61年8月にかけて御代田町教育委員会を主体とする発掘調査が行われ、これらの遺跡から平安時代およびそれ以降の多数の馬歯・馬骨と数片の獣骨が出土した。このうち、野火付遺跡からは環類の共獣された5頭の埋葬馬が土壌基から検出され、長倉駅に関係する駅馬・伝馬の可能性が指摘されている⁽¹⁾。また最近では塩野牧との関連も考えられるようになってきた。本遺跡群のこの他の馬歯・馬骨にも長倉駅あるいは塩野牧に何らかの関連をもつものがあると予想され、本遺跡の馬歯・馬骨の研究の意義は大きい。

本稿では鑄師屋遺跡群から出土したこれらの歯や骨を記載し考古学的考察の基礎資料としたい。調査にあたっては次の基準にしたがった。

- 1、計測器具は主に1/20mmノギスを使用した。
- 2、歯冠長・歯冠幅はエナメルを計測し、計測法は仲谷⁽²⁾にしたがった。
- 3、馬の臼歯の咬合面の名称はSIMPSON (長谷川、原田)⁽³⁾によった。
- 4、小形、中形の在米馬の分類は林田⁽⁴⁾にしたがった。
- 5、解剖学用語は主に日本獣医学会の家畜解剖学分会の「家畜解剖学用語」⁽⁵⁾を用いた。
- 6、馬の年齢は基本的にGOUBAUX⁽⁶⁾にしたがい切歯の咬合面の模様から推定した。切歯を欠くものはあらかじめ年齢推定のすんでいる個体との歯冠高の比較で行った。
- 7、注は引用文献を意味し、その番号は本文、表とも共通して使用した。
- 8、計測値の単位は特にことわりのない限りmmである。

(2) 本 文

(1) 野火付遺跡

1 種名：ウマ (*Equus caballus*)

1号馬 (時代：平安、年齢：10才) 第1・2・4表

出土遺構：D-20 部位：下顎骨、同臼歯、同切歯、上顎臼歯、大腿骨、脛骨、中足骨等

本馬は下顎全臼歯列長が161.0mmで、小さめの中形在来馬に相当する体高が予想される。骨は腐蝕と破損がひどく、有効な計測値が得られない。

2号馬 (時代：平安、年齢：4才、性別：メス) 第1・2・3・4表

出土遺構：D-19 部位：下顎骨、同臼歯、上顎臼歯、頸椎、肋骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、座骨、左右大腿骨、左右脛骨等

下顎全臼歯列長が165.5mmで、中形在来馬相当の体高が予想される。第四乳臼歯が生え変わるころで、萌出途上の第四前臼歯が歯槽内に見えている。このような歯の交換状況から4才馬と判断した。骨は腐蝕と破損がひどく、有効な計測値が得られない。

3号馬 (時代：平安、年齢：20才以上、性別：メス) 第1・2・4表

出土遺構：D-18 部位：下顎骨、同臼歯、同切歯、右肩甲骨、右上腕骨、右橈骨、右中手骨、肋骨、右大腿骨、左右脛骨、左右中手骨等

下顎全臼歯列長が163.0mmで中形在来馬相当の体高が予想される。歯の咬耗が極端に進んでいる20才以上の老齢馬である。骨は腐蝕と破損がひどく有効な計測値が得られない。

4号馬 (時代：平安、年齢：10才、性別：メス) 第1・2・3・4表

出土遺構：D-16 部位：下顎骨、同臼歯、同切歯、上顎臼歯、同切歯、肋骨、有頭骨、左中手骨、右上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右中足骨等 年齢：10才 計測値…第2・4表

上顎全臼歯列長が166.2mmで、中足骨全長が263.0mmであり、後者を林田・山内の体高推定式に代入してみると130.5cmの値を得た。やや小さめの中形在来馬に相当する体高の馬である。

5号馬 (時代：平安、年齢：?)

出土遺構：D-17 部位：臼歯

臼歯4点を残すのみで他の骨は腐蝕してしまったようである。

6号馬 (時代：中世?、年齢：9才、性別：メス) 第1・2・4表

出土遺構：D-21 部位：下顎骨、左肩甲骨、左上腕骨、左中手骨、右橈骨、坐骨、右大腿骨、右脛骨等 年齢：9才

下顎全臼歯列長が165.9mmあり、中形在来馬相当の体高が予想される。骨は腐蝕と破損がひ

どく有効な計測値が得られない。推定年齢を野火遺跡の報告書(8)では12才としたが精査の結果9才前後であることが判明したので、ここで訂正する。

7号馬(時代:中世?、年齢:3才)

(1) 資料番号1 遺構:M-9 部位:右上顎臼歯 計測値…歯冠長:30.6(咬合面)、25.0(中間)、22.9(歯頸部) 歯冠幅:22.3(咬合面) 24.5(中間) 歯冠高:78.2 原錘幅:12.0(最大12.4)

咬耗が始まったばかりである。歯冠長は咬合面に近くなるにつれて大きくなるが、歯冠幅はほとんど変わらない。頰側の咬頭のほうが咬耗がやや進み前錘、後錘の象牙質はつながっているが、原小錘、後小錘、原錘ではわずかに象牙質の露出が見られるだけである。

(2) 資料番号2 遺構:M-9 部位:左下顎第三前臼歯 計測値…歯冠長:32.0(咬合面)、25.8(中間)、25.4(歯頸部) 歯冠幅:22.3(咬合面)、24.5(中間) 歯冠高:12.0

歯冠長は咬合面近くで下次小錘が遠心側へ発達しているため、咬合面に近くで急に大きくなっている。咬耗がはじまったばかりであるが、咬頭の象牙質は相互につながっている。

2 種名:家牛(*Bos taurus*) (平安時代、年齢:老齢期に近い成獣) 第7表

資料番号3 遺構:M-127 部位:左上顎第二臼歯

頰側の2根が欠損する。咬耗面には後錘のなかに径2mmほどの円形エナメル褶皺がある。歯冠長がその割りに小さいのは咬耗が進んでいるためであろう。

咬耗度あまり影響されない歯冠幅で、東京都伊皿子貝塚遺跡の弥生時代牛や、佐久市池畑遺跡の奈良~平安時代牛と比較すると、本資料はこれらの中とほぼ同じ大きさである。現生在来牛との比較では、見島牛の雄よりはだいぶ小さいが、見島牛の雌のNO2、黒毛和牛の雌(5個体の平均)とほぼ同じ大きさである。しかし、口之島牛の雌雄のいずれよりも明らかに大きい。見島牛とは山口県萩市見島に飼養されているわが国の和牛の元祖とされているもので、口之島牛は鹿児島県十島村の口之島に大正7~8年に放牧され野生状態で今日に至っている牛である。

3 種名:ニホンシカ(*Cervus nippon*) (奈良・平安時代、年齢:成獣)

資料番号?

遺構:ID-1 部位:左上腕骨 計測値…保存全長:52.0 遠位最大幅:40.0+ 滑車近位端最大幅:25.2(現生23.0)

骨体遠位端に解体痕らしきものがある。現生の雄のニホンシカとほぼ同じかいくぶん大きめである。井戸からの出土で、井戸の神霊にたいする供物として投入されたものか、湯水時

に湧水を祈る祭祀に用いたものである可能性も考えられる。

〈Ⅱ〉 前田遺跡

1 種名：馬 (*Equus caballus*)

1号馬 (時代：不明、年齢：6～7才) 第1・3表

(1) 資料番号1 遺構：H-48 部位：右下顎臼歯2本 計測値…歯冠高：64.4、61.0
いずれ歯もばらばらになっているが、下後歯、下後附歯等が残存している。

(2) 資料番号3 遺構：H-48 部位：上顎第二後臼歯 — 年代不明 No.7
いずれもほぼ完存している歯である。

(3) 資料番号4 遺構：H-48 部位：左上顎第四前臼歯と第一後臼歯 計測値…第3表
第四前臼歯は頰側のエナメル壁が剝離している。第一後臼歯の方はほぼ完存している。

2号馬 (時代：古墳後期以降、年齢：4才 性別：♂) 第1・2・6・表

(1) 資料番号6 遺構：H-16 部位：左下顎臼歯6本

第二前臼歯から第三後臼歯までの6本の歯で、いくつかの歯で一部欠損はあるもののほぼ完存している。歯根が分岐しているのは第二前臼歯、第三後臼歯のみで他の歯はまだこの歯根分岐の段階に至っていない。第三後臼歯では咬耗が始まったばかりで、前葉、中葉の象牙質はつながっているが後葉ではまだ象牙質は露出してない。下顎全臼歯列長は168mmで中形在来馬相当の体高が予想される。

(2) 資料番号7 遺構：H-66 部位：左上顎臼歯2本以上と右下顎切歯、右下顎臼歯
計測値…下顎臼歯 歯冠高：65.3 上顎臼歯 歯冠高：75.5 歯冠高：66.8

4本以上の歯からなるばらばらの破片である。

(3) 資料番号8 遺構：H-66 部位：右上顎臼歯3本と、右下顎臼歯、左下顎第一切歯
計測値…上顎臼歯歯冠長：31.1 歯冠高：60.6 歯冠長：21.6+ 歯冠高：60.9+ 歯冠長：19.0+ 歯冠高：56.4 下顎臼歯 歯冠長：22.9 歯冠高：9.0+ 歯冠高：69.8

どの歯もばらばらの破片になっている。未咬耗の犬歯の破片があり、この個体が雄であることを示している。切歯の咬耗度から4才程度の年齢が予想される。右下顎臼歯は舌側の半分が残存しているもので、咬合面から48mmのところ付近近心方向に走る明瞭な括れがあり、近心方向から見るとこの括れのところでは舌側へ2mmほど屈曲している。

(4) 資料番号9 遺構：H-66 部位：左上顎臼歯2本 計測値…上顎臼歯 歯冠長：
24.5+ 歯冠高：64.2 歯冠高67.5

2本ともばらばらの破片になっている。

(5) 資料番号? 遺構:H-66 部位:左上顎臼歯 3本 計測値…上顎臼歯 齒冠高:54.6+ 齒冠高:61.0 齒冠高64.0+

3本ともばらばらの破片になっている。

(6) 資料番号? 遺構:H-66 部位:上顎臼歯、右下顎第一切歯、左下顎第二切歯、左下顎第三切歯 計測値…上顎臼歯 齒冠高:69.6 モ、
のり、
のり

上顎臼歯はばらばらの破片になり、第一切歯は舌側の遠心側半分の齒冠部を欠損する。第二切歯は遠心側面を欠損する。咬耗がわずかに始まったばかりである。第三切歯は齒根側の齒冠部の約半分を欠損し、未咬耗である。各切歯とも中央エナメルがとれている。

3号馬 (時代:奈良・平安、年齢:6~10才)

資料番号? 遺構:H-36 部位:左上顎臼歯 計測値…齒冠高:51.6

ばらばらの破片になっている。

<III> 十二遺跡

I 種名:ウマ (*Equus caballus*)

1号馬 (時代:奈良、年齢:老齡馬)

資料番号2 遺構:H-23 部位:左下顎臼歯 計測値…齒冠高:29.0

ばらばらの破片になっている。

2号馬 (時代:奈良~平安前期、年齢:6~10才)

資料番号1 遺構:H-51 部位:上顎臼歯 計測値…齒冠高:47.1 原錘幅:10.0

ばらばらの破片になっている。

3号馬 (時代:平安前期、年齢:若い壯齡馬)

資料番号1 遺構:H-52 部位:左上顎臼歯 計測値…齒冠長:26.8 齒冠幅:20.1 齒冠高:43.5

原錘、次錘などに欠損がある。

4号馬 (時代:奈良、年齢:7~8才) 第1・2・3・4表

(1) 資料番号A 遺構:H-57 部位:右下顎臼歯、左下顎臼歯

右下顎臼歯はほぼ完存する6本の歯からなる。左下顎臼歯は第二前臼歯がばらばらに壊れ、第三前臼歯、第四前臼歯にも前葉部に破損があるが、後臼歯はほぼ完存する。下顎全臼歯列長は168.3mmが計測でき、中形在來馬相当の体高が予想される。

(2) 資料番号B 遺構:H-57 部位:左下顎第三後臼歯 -- 年代測定、40%
ほぼ完全に残存する。

(3) 資料番号C 遺構：H-57 部位：右上顎臼歯3本以上、左上顎臼歯4本以上 計測値…第4表-2

左上顎第二後臼歯が最も保存がよく、原錐の舌側壁のエナメルを欠損するのみである。その他の歯は、いずれもばらばらになっているが、頬側壁のエナメルが残存し歯冠長、歯冠高が計測できる歯は6本である。

(4) 資料番号D 遺構：H-57 部位：右上顎第一後臼歯、右上顎第二切歯 計測値…第一後臼歯 歯冠高：41.6

いずれの歯もばらばらの破片になっている。

〈IV〉根岸遺跡

1 種名：ウマ (*Equus caballus*)

1号馬 (時代：平安前期、年齢：5才) 第1・2・3・5表

(1) 資料番号9-① 遺構：H-16 部位：右上顎第三後臼歯
歯根側に欠損がわずかにあるもののほぼ完存する歯である。

(2) 資料番号9-② 遺構：H-16 部位：右上顎第二後臼歯
保存は良好である。

(3) 資料番号9-③ 遺構：H-16 部位：右上顎第一後臼歯
歯根側に欠損がある他はほぼ完存する。

(4) 資料番号9-④ 遺構：H-16 部位：右上顎第四前臼歯
前葉の歯根側に欠損がある他はほぼ完存する歯である。

(5) 資料番号9-⑤ 遺構：H-16 部位：右上顎第三前臼歯
歯根側にやや欠損はあるが、ほぼ完存する歯である。

(6) 資料番号9-⑥ 遺構：H-16 部位：右上顎第二前臼歯 資料遺跡 No.10
近心側端に欠損はあるが、ほぼ完存する歯である。

上顎全臼歯列長は咬合面で159.2mm、歯頸部で162.4mmを計測でき、この値から1号馬はやや小さめの中形在来馬相当の体高が予想される。

(7) 資料番号10-① 遺構：H-16 部位：左上顎第三前臼歯
ほぼ完存する歯である。

(8) 資料番号10-② 遺構：H-16 部位：左上顎第四三前臼歯
歯根側端にやや欠損があるものの、ほぼ完存する歯である。

(9) 資料番号10-③ 遺構：H-16 部位：左上顎第二前臼歯

ほぼ完存する歯である。

- (10) 資料番号11-① 遺構：H-16 部位：左上顎第二切歯？

本標本は資料番号11-③の中央エナメルである。

- (11) 資料番号11-② 遺構：H-16 部位：左上顎第三切歯
歯根側端に欠損はある他はほぼ完存する歯で、未咬耗である。

- (12) 資料番号11-③ 遺構：H-16 部位：右上顎第二切歯
歯根側端にわずかの欠損がある。

- (13) 資料番号11-④ 遺構：H-16 部位：右上顎第一切歯
歯根側端に欠損があるほかはほぼ完存する。

- (14) 資料番号11-⑤ 遺構：H-16 部位：右上顎第一切歯
歯根側端に欠損があるほかはほぼ完存する。

- (15) 資料番号11-⑥ 遺構：H-16 部位：右上顎第二切歯
歯根側の半分を欠損する。

- (16) 資料番号11-⑦ 遺構：H-16 部位：右上顎第三切歯
歯根側の約半分を欠損する。

2号馬（時代：平安前期、年齢：9～11才） 第1・4表

- (1) 資料番号1 遺構：H-23 部位：右下顎第二前臼歯、右下顎第三前臼歯、右下顎第四前臼歯

第二前臼歯が歯根側端に欠損するものの、他の2本の歯は完存する。

- (2) 資料番号3 遺構：H-23 部位：右下顎臼歯

ばらばらの破片となっている。

以上の資料番号1と3の歯は出土位置、咬耗度、大きさ、色調などから同一個体と判断される。

その他の馬

- (1) 資料番号1 遺構：H-16 部位：右上顎臼歯 年齢：牡馬 計測値…歯冠高：32.5

かなり細かい破片になっている。

- (2) 資料番号7 遺構：H-16 部位：歯 年齢：牡馬？

かなり細かい破片になっている。

- (3) 資料番号8 遺構：H-16 部位：右上顎臼歯 年齢：牡馬 計測値…歯冠高：27.6+ 歯冠高：24.4

以上の資料番号1、7、8の歯は出土位置、咬耗度、色調などから同一個体のものである可

能性が考えられる。その場合これを「3号馬」と呼ぶ。

(4) 資料番号1 遺構：H-21 a. 右下顎臼歯 年齢：幼令または若い牡馬 計測値…歯冠高：52.4 b. 部位：上顎臼歯 年齢：老馬 歯冠高：18.0

両方ともばらばらの破片となっている。前者を「4号馬」、後者を「5号馬」と呼ぶ。

(5) 資料番号2-① 遺構：H-21 部位：上顎臼歯 年齢：老馬 計測値…歯冠高：46.2

ばらばらの破片となっている。この馬は「5号馬」と同一個体である可能性がある。

(6) 資料番号2-② 遺構：H-17 部位：左上顎臼歯 年齢：若い牡馬 計測値…歯冠長：21.0+ 歯冠幅：18.7 歯冠高：48.6+

ばらばらの破片となっている。この馬を「6号馬」と呼ぶ。

(7) 資料番号9 遺構：H-13 部位：臼歯

(8) 資料番号12 遺構：H-3 部位：上顎臼歯 年齢：若い牡馬 計測値…歯冠高：38.4

ばらばらの破片になっている。

以上の資料番号9、12は出土位置、色調などから同一個体である可能性が考えられる。その場合、この馬を「7号馬」と呼ぶ。

(9) 資料番号30 遺構：H-10 部位：上顎臼歯 年齢：？ 計測値…歯冠高：42.7

ばらばらの破片になっている。

(10) 資料番号32 遺構：H-10 部位：上顎臼歯 年齢：牡馬 計測値…歯冠高：34.4

ばらばらの破片になっている。

(11) 資料番号IV 遺構：H-10 部位：上顎臼歯 年齢：牡馬 計測値…歯冠高：35.0

ばらばらの破片である。

以上の資料番号9、10、11は出土位置、咬耗度、色調などから同一個体である可能性が考えられる。この場合、この馬を「8号馬」と呼ぶ。

上記の(1)から(11)までのその他の馬の時代はすべて平安前期である。

(12) 資料番号？ 遺構：M-2 部位：右上顎第二切歯 年齢：8才土 計測値…歯冠長：16.0 歯冠幅：8.8 歯冠高：40.4 この馬を「9号馬」と呼ぶ。

(13) 資料番号？ 遺構：M-5 部位：左上顎第三切歯 年齢：6才土 計測値…歯冠長：18.0 歯冠幅：9.7 歯冠高：54.0+ 歯根側の歯冠部を少欠する他は完存する。この馬を「10号馬」と呼ぶ。

資料番号(12)と(13)の時代は不明である。

(3) 銅師屋遺跡群の馬について

本遺跡群（御代町町分）からは古墳時代後期から中世までの21頭の馬と時代不明の馬3頭、計24頭以上が出土している。古代（古墳・奈良・平安時代）の馬はそのうち19頭で、これ年齢別にみると幼令馬（0～5才）が3頭、壮令馬（6～15才）14頭、老令馬（16才以上）が3頭である。壮令馬でも、若いほうに属すると思われるものが10頭も含まれている。また中世？の馬でも野火付遺跡で2頭出土しているが、9才、3才と若い。このように当遺跡群の馬は主として若い個体からなっていて、江戸時代の馬頭観世音の祀られる墓墳から出土する馬が老令馬を主体としているのとは大きな違いがある。住居址、掘立柱建物址、溝状遺構から出土する馬歯には1個体分にはるかに満たない小数の歯しか存在しないものがある。腐蝕して消失してしまった場合もあるだろうが、祭祀用に小数の歯を持ち込んだ可能性も考えられる。

24頭のうち、犬歯が確認され雄であることが判明したのは1頭だけで、他の個体では犬歯を欠く。このうち、野火付遺跡の2・3・4・6号馬、根岸遺跡の1号馬、前田遺跡の2号馬は切歯・臼歯の保存が良好であるのに犬歯だけを欠く。このためこれらの馬は雌であろうと推定される。この他の馬は犬歯が腐蝕してなくなってしまったのか、雌であるためにもともと無いのか、あるいは始めから持ち込まれてなかったかのいずれであろうが、保存不良のためその判断は不可能に近い。

林田によれば、現存する日本の在来馬には、中形馬(体高125～135cm、平均132cm)と小型馬(体高108～121cm、平均121cm)とがあり、前者には長野県木曾馬、北海道の土産馬、宮崎県の御崎馬が含まれ、後者には南西諸島のトカラ馬などが含まれる。本遺跡群で体高推定の基本となる四肢骨の全長が推定できたのは野火付遺跡の4号馬1個体だけで、これを林田・山内の体高推定式に代入すると130.5cmの値を得た。この値はいくぶん小さめながら中形在来馬に相当する大きさである。また体高推定を行う場合にある程度の目安になる全臼歯列長が推定できたのは8個体であり、これを体高推定の予めできている野火付遺跡の4号馬のそれと比較してみると、8個体のいずれも中形在来馬相当の体高であることがわかる。いくぶん時代の古いものになるが、平城京出土の4個体の奈良時代馬の下顎全臼歯列長が平均で167.3mmであり、佐久市池畑遺跡出土の奈良～平安時代馬のそれは167.2mmである。本遺跡群の古代馬5個体の平均は165.2mmで、平城京、池畑よりわずかに小さい。しかし、平城京には優良馬が楽まりやすいことを考えれば、この差はむしろ小さく、本遺跡群および池畑遺跡の馬も当時としては良馬といえるものが多かったであろう。

歯や骨で見たかぎり、病気をもった個体は確認されず、著しい異状咬耗、不正咬合をした個体も見当たらない。人工的な損傷を受けた痕跡もない。

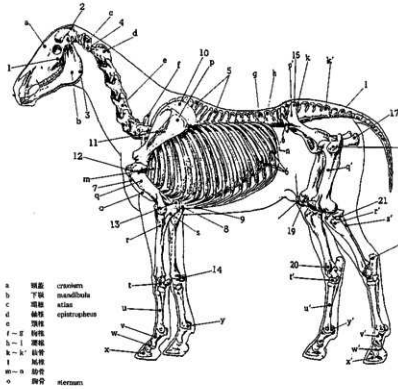
(4) おわりに

古代牧に飼養されていた馬、あるいは駅馬、伝馬の可能性のある興味深い馬骨の研究の機会を与えて下さった長野県御代田町教育委員会の堤 隆氏に心からお礼申し上げます。

引用文献

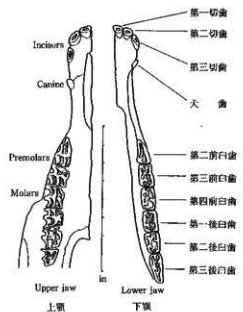
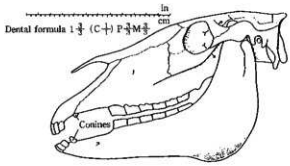
- (1) 堤 隆 (1986) 野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって「信濃」第38巻4号、PP267~261
- (2) 仲谷夫夫 (1979) ウマ科動物骨格計測法—頭蓋骨および歯牙の計測法—「化石研究会誌」第12巻、PP15~19
- (3) SIMPSON G.G (長谷川善和監修、原田俊治訳) (1979) 「Horse (馬と進化)」どうぶつ社
- (4) 林田重幸 (1978) 「日本在来馬の系統に関する研究」日本中央競馬会
- (5) 日本獣医学会 (1978) 「家畜解剖学用語」日本中央競馬会
- (6) GOUBAUX & BARRIÈRE (1892) 「The Exterior of the Horse」Lippincott CO. Philadelphia
- (7) 林田重幸・山内忠平 (1957) 馬における骨長より体高の推定法「鹿児島大学農学部学術報告」6号、PP146~156
- (8) 宮崎重雄 (1985) 野火付遺跡出土の馬骨について「野火付遺跡」、御代田町教育委員会
- (9) 中川俊助・松元光春 (1981) 第2号方形周溝墓西溝出土の家牛 (Bos taurus) 頭骨「伊皿子貝塚遺跡」日本電信電話公社、港区伊皿子貝塚遺跡調査会
- (10) 宮崎重雄 (1986) 長野県佐久市池畑遺跡出土の馬と牛の骨について「池畑」佐久市教育委員会、佐久埋蔵文化財調査センター
- (11) 松井 章 (1988) 西方A遺跡出土の動物遺存体の概要「下寺尾西方A遺跡」
- (12) 斎藤勇夫・黒木正雄・村上隆之 (1972) 御崎馬の死亡と遺骨の測定第3報、宮崎大学農学部研究報告、19、1、295~304
- (13) 岡部利雄 (1953) 木曾馬について「日本在来馬に関する研究」文部省科学試験研究、9、73~160
- (14) 林田重幸 (1956) 日本古代馬の研究、人類学雑誌、64、4、197~211

馬蹄趾道蹄群出土の馬骨・馬骨と肢骨類について



- a 頭蓋 cranium
- b 下頷 mandibula
- c 項椎 atlas
- d 軸椎 epistropheus
- e 頸椎
- f-g 胸椎
- h-i 腰椎
- k-k' 趾骨
- l 腕骨
- m-n 跗骨
- o 胸骨 sternum

- p 肩甲骨 scapula
- q 寛骨 os coxae
- r 上肢骨 humerus
- r' 大腿骨 os femoris
- s 脛骨 radius
- s' 脛骨 tibia
- x 尺骨 ulna
- x' 腓骨 fibula
- t 手肢骨 os carpi
- t' 足肢骨 os tarii
- u 中手骨 os metacarpii
- u' 中足骨 os metatarsi
- v-v' 第一指(趾)骨 phalanx prima
- w-w' 第二指(趾)骨 phalanx secunda
- x-x' 第三指(趾)骨 phalanx tertia
- y-y' 趾骨 ossa sesamoidea
- z 鎖肛骨 patella
- 1 額骨 cribra facii alis
- 2 上頷骨 linea nuchalis superior
- 3 下頷内角 angulus mandibulae
- 4 咬肌齒 ata atlastis
- 5 膝突起 proc. apicalis
- 6 肘骨凹 areae costae
- 7 胸骨柄 manubrium sterni
- 8 胸骨體 corpus sterni
- 9 肩胛軟骨 cartilago scapulae
- 10 肩平軟骨 spina scapulae
- 11 肩平軟骨 tuberculum majus
- 12 尺骨凹 olecranon
- 13 肘骨凹 os carpi accessorium
- 14 肘骨凹 tuber calcanei
- 15 腕骨 tuber coxae
- 16 跗骨 tuber ischiadicum
- 17 跗骨 tuber calcanei
- 18 大趾骨 os metatarsi
- 19 趾骨 os metatarsi
- 20 趾骨 os metatarsi
- 21 趾骨 os metatarsi
- 22 趾骨 os metatarsi



第1図 馬の骨格とその名称

第1表 鎗師屋遺跡群の馬の年齢

遺跡名	野 火 付							前 用	
号 馬	1	2	3	4	5	6	7	1	2
時 代	平 安	平 安	平 安	平 安	平 安	中 世	中 世	不 明	古墳後期以降
年 齢	10	4	20+	10	?	9	3?	6~7	4

遺跡名	前 田		十			二		根 岸		
号 馬	3	1	2	3	4	1	2	3	4	
時 代	奈良~平安	奈 良	奈良平安前期	平安前期	平安前期	平安前期	平安前期	平安前期	平安前期	
年 齢	若い壯齡馬	老齡馬	若い壯齡馬	若い壯齡馬	7-8	5	9-11	壯齡馬	若い壯齡馬	

遺跡名	根 岸					
号 馬	5	6	7	8	9	10
時 代	平安前期	平安前期	平安前期	平安前期	不 明	不 明
年 齢	老齡馬	若い壯齡馬	若い壯齡馬	壯齡馬	8	6

第2表 鎗師屋遺跡群の馬歯・馬骨

I、全臼齒列長

	野 火 付 ⁽⁸⁾					前 田	十 二	根 岸
	1号馬	2号馬	3号馬	4号馬	6号馬	2号馬	4号馬	1号馬
	平 安	平 安	平 安	平 安	中世?	古墳後期	平安前期	平安前期
上顎臼齒		163.4		166.2			159.2 (162.4)	
下顎臼齒	161.0	166.5	162.0	165.4	165.9	168.2	168.3	

() は最大

単位mm

	平城京 ⁽¹¹⁾	池 畑 ⁽¹⁰⁾	御崎馬 ⁽¹²⁾	本曾馬 ⁽¹³⁾	トカラ馬 ⁽¹⁴⁾	淡州島馬 ⁽¹⁵⁾	
	奈 良	奈良~平安	現 生	現 生	現 生	現 生	
	4	2	1	8	6	1	1
上顎臼齒		159.5		163.8	173.2		151.0
下顎臼齒	167.3		167.2	167.2	179.9	157.0	154.0

単位mm

第3表 馬の上顎臼歯計測値・比較表

			第二 前臼歯	第三 前臼歯	第四 前臼歯	第一 後臼歯	第二 後臼歯	第三 後臼歯	
野 火 付	2 号 馬	左	歯冠長	36.4	28.2	26.6	24.0	23.8	25.6
		歯冠幅	24.6	25.0	25.0	24.6	22.8	22.4	
		歯冠高	49.6	70.0	75.7	66.7	77.2	66.3	
	4 号 馬	右	歯冠長	37.0	28.6	27.3	23.8	23.7	27.0
		歯冠幅	24.2	25.7	26.2	24.3	23.6	21.4	
		歯冠高	35.3	50.5	53.3	48.9	56.6	53.6	
野 田	1 号 馬	右	歯冠長			27.7	25.2	24.8	
		歯冠幅			22.6+	26.1	24.9		
		歯冠高			60.3	49.9	66.4		
十 二	4 号 馬	右	歯冠長		25.7	27.1	25.3		
		歯冠幅		50.0	57.7	(29.1)		57.5	
		歯冠高							
	左	歯冠長		23.6	28.7	21.5	24.6		
		歯冠幅		45.5	58.0	38.8	57.0		
		歯冠高							
根 岸	1 号 馬	右	歯冠長	30.3+	28.6	26.9	24.9	24.4	23.0
			歯冠幅	22.9	24.9	24.3	25.0	23.3	(25.6)
			歯冠高	43.9	54.7	65.0	56.5	68.0	53.5
		左	歯冠長	34.1	28.6	26.0			19.4
			歯冠幅	21.3	24.0	24.1			(22.3)
			歯冠高	42.5	54.6	64.2			

() は最大

単位mm

第4表 馬の下顎臼歯計測値・比較表 <その1>

			第二 前臼歯	第三 前臼歯	第四 前臼歯	第一 後臼歯	第二 後臼歯	第三 後臼歯		
野 火 付	1 号 馬	右	歯冠長	31.4	26.0	24.0	21.7	22.2	31.7	
		歯冠幅					16.6			
	2 号 馬	右	歯冠長	33.7	28.8	26.2	26.0	26.2	28.6	
		歯冠幅	15.0	17.7	16.5	15.7	13.5	12.5		
	3 号 馬	右	歯冠長	31.0	25.7	25.0	22.0	23.6	36.6	
		歯冠幅	14.4	16.4	16.3	16.3	14.0	12.7		
	4 号 馬	右	歯冠長	32.4	27.6	25.6	26.3	24.4	29.7	
		歯冠幅	14.3	16.1	15.2	13.8	14.4	13.1		
	5 号 馬	右	歯冠長	33.6	28.6	27.5	24.4	23.1	31.0	
		歯冠幅	17.9	19.3	19.2	17.2	17.0	15.1		
	野 田	2 号 馬	左	歯冠長	31.4	30.4	28.6	27.2	26.0	30.5
			歯冠幅	11.5+	14.7	14.1	14.0	12.8	13.3	
歯冠高			48.3	62.4	66.0	65.2	72.5	61.2		

単位mm

第4表 馬の下顎臼歯計測値・比較表 <その2>

種別	年齢	歯	計測項目						
			第二 前臼歯	第三 前臼歯	第四 前臼歯	第一 後臼歯	第二 後臼歯	第三 後臼歯	
十 二	4 号馬	右	歯冠長	33.5	28.1	27.6	24.0	25.5	29.6
		歯冠幅	13.6	14.6	13.9	12.3	12.1	11.2	
		歯冠高	39.4	50.9	58.5	44.8	55.8	58.3	
	左	歯冠長		26.3+	26.5	26.4	24.1	29.2+	
		歯冠幅		14.5	14.1	12.8	12.0	11.6	
		歯冠高	39.5	51.4	58.0	47.5	55.3	55.8+	
根 岸	2 号馬	右	歯冠長	30.7	27.2	26.1			
		歯冠幅	13.7	14.6	15.0				
		歯冠高	26.5+	39.2	50.7				

単位mm

第5表 上顎切歯計測値

種別	年齢	歯	右			左		
			第三 切歯	第二 切歯	第一 切歯	第一 切歯	第二 切歯	第三 切歯
十 二	4 号馬	歯冠長		17.2				
		歯冠高		48.9				
		歯冠長	17.9	17.4	17.0	16.9	17.2	16.6
根 岸	1 号馬	歯冠幅	9.7	10.1	9.8	10.2	9.7	9.1
		歯冠高	40.0+	31.7+	51.5	51.4	48.8	40.5

単位mm

第6表 下顎切歯計測値

種別	年齢	歯	右			左		
			第三 切歯	第二 切歯	第一 切歯	第一 切歯	第二 切歯	第三 切歯
前 目	2 号馬	歯冠長		18.3	17.0	17.4		17.2
		歯冠幅		10.3				10.3
		歯冠高	46.3+	55.0	51.4	53.0	30.6+	

単位mm

第7表 家牛上顎第二後臼歯計測値・比較表

種別	野大付		伊里子		池畑		見島牛			口之島牛			黒毛和牛		
	平安		弥生		奈良平安		現生			現生			現生		
	?		?		?		雄			雄			雌 n=5		
	No.1				No.1		No.2		No.1		No.2		No.1		No.1
歯冠長	22.3	31.4	29.6	26.7	28.7	24.6	26.9	28.0	33.0	26.6	27.0				
歯冠幅	25.0	22.5	22.6	21.7	23.7	31.0	20.3	17.5	20.0	23.3	23.2				
歯冠高	17.0	26.9	38.4	20.9	28.4	18.7	27.0	36.0	26.8	24.7	22.2				

単位mm



遺物写真撮影

図版一 根岸遺跡付近の航空写真

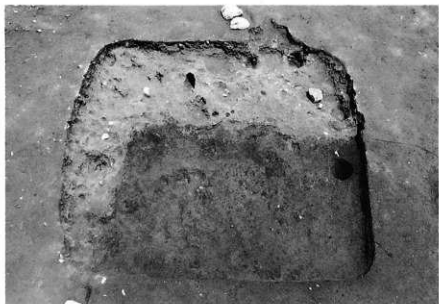




根岸遺跡航空写真 I・Ⅲ区



H-1号住居址



H-1号住居址
掘り方



H-1号住居址
カマド

図版四

H-1号住居址・H-2号住居址

H-1号住居址
遺物出土状態



H-2号住居址



H-2号住居址
掘り方

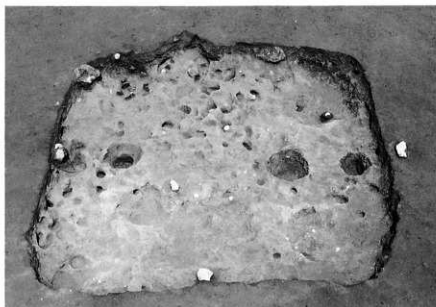




H-2号住居址
カマド



H-3号住居址



H-3号住居址
掘り方

図版六

H-3号住居址・H-4号住居址

H-3号住居址
カマド



H-4号住居址



H-4号住居址
掘り方





H-4号住居址
カマド



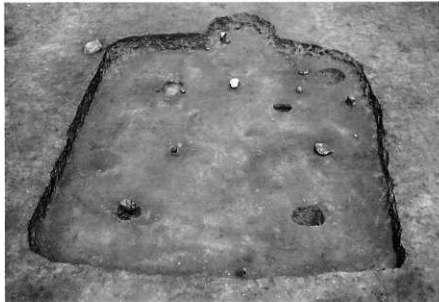
H-4号住居址
遺物出土状態



H-3号・H-4号
住居址付近

図版八
H-5号住居址

H-5号住居址



H-5号住居址
掘り方



H-5号住居址
カマド





H-6号住居址

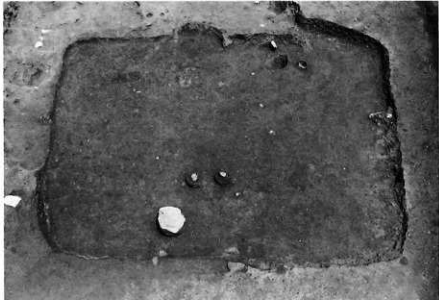


H-6号住居址
掘り方



H-6号住居址
カマド

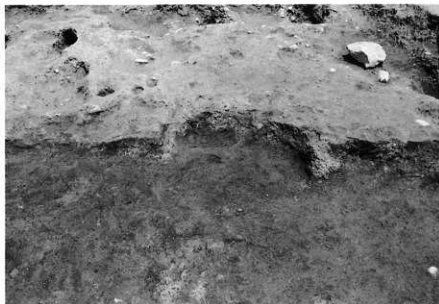
H-7号住居址



H-7号住居址
掘り方



H-7号住居址
カマド





H-8号住居址



H-8号住居址
掘り方



H-8号住居址
カマド

H-9号住居址



H-9号住居址
掘り方



H-9号住居址
カマド





H-9号住居址
カマド



H-10号住居址



H-10号住居址
掘り方

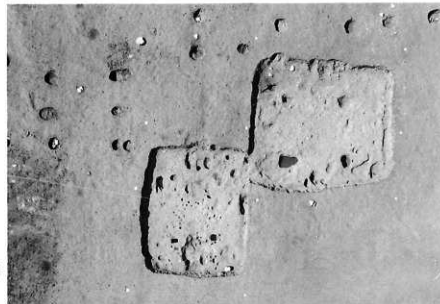
H-10号住居址
カマド



H-10号住居址
遺物出土状態



H-9号・H-10号
住居址付近





H-11号住居址



H-11号住居址
掘り方



H-11号住居址
カマド



H-11号住居址遺物出土状態



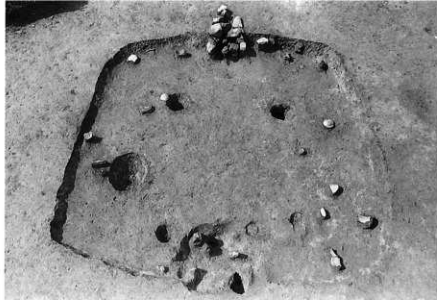
H-11号住居址炭化材出土状態



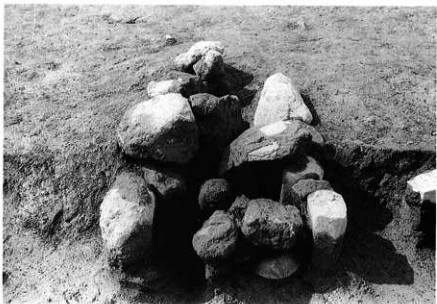
H-12号住居址



H-12号住居址
カマド



H-13号住居址



H-13号住居址
カマド



H-14号住居址



H-14号住居址カマド



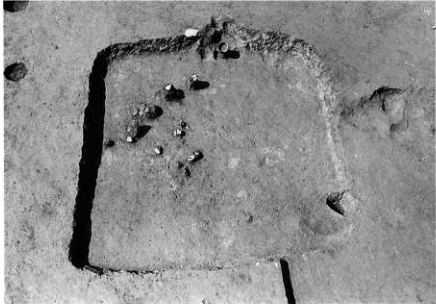
H-14号住居址遺物出土状態



H-15号住居址



H-15号住居址
カマド



H-16号住居址



H-16号住居址カマド



H-16号住居址馬歯出土状態



H-17号住居址

H-17号住居址
カマド



H-18号住居址



H-18号住居址カマド



H-18号住居址旧カマド



H-19号住居址



H-20号住居址



H-20号住居址
カマド



H-20号住居址カマド



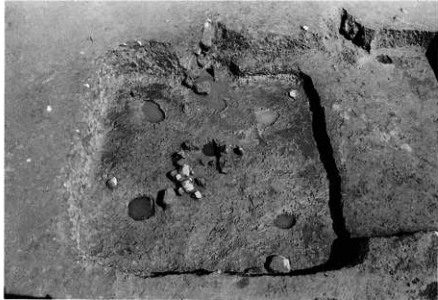
H-20号住居址遺物出土状態



H-21号住居址



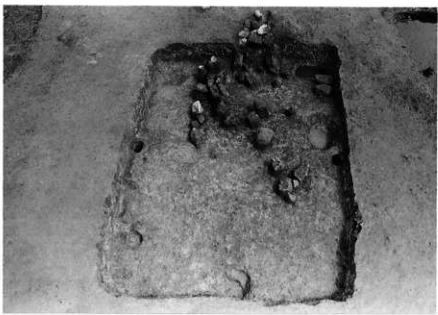
H-21号住居址
カマド



H-22号住居址



H-22号住居址
カマド



H-23号住居址

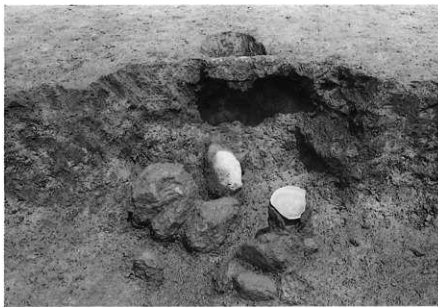
H-23号住居址
カマド

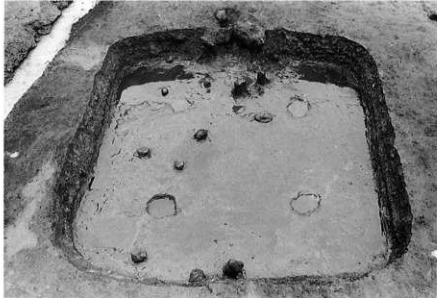


H-24号住居址

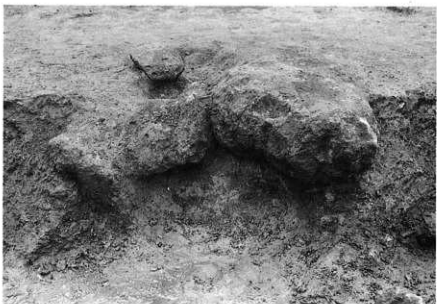


H-24号住居址
カマド

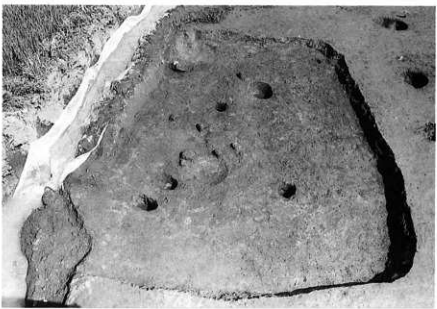




H-25号住居址



H-25号住居址
カマド



H-26号住居址

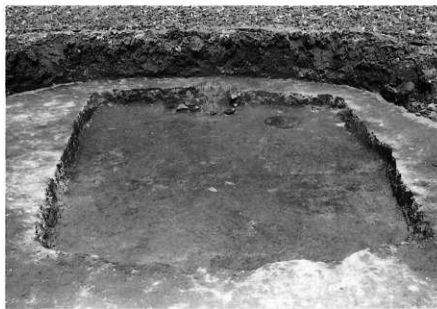
H-27号住居址



H-27号住居址
カマド



H-28号住居址





H-28号住居址
カマド



H-28号住居址遺物出土状態

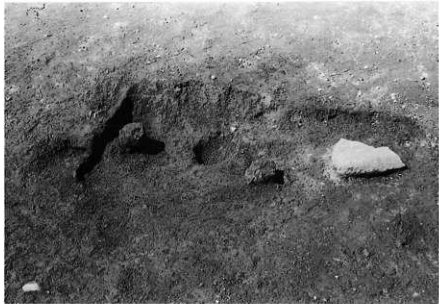


H-28号住居址遺物出土状態



H-29号住居址

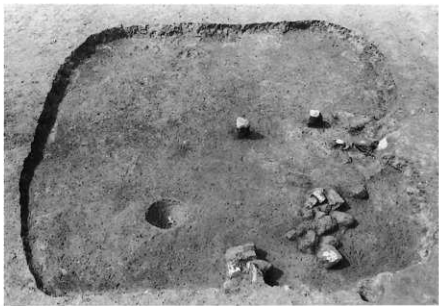
H-29号住居址
カマド



H-30号住居址



H-31号住居址





H-31号住居址
カマド

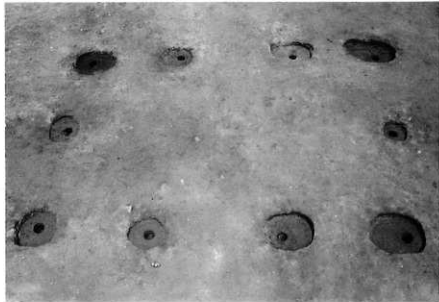


H-32号住居址



H-32号住居址
カマド

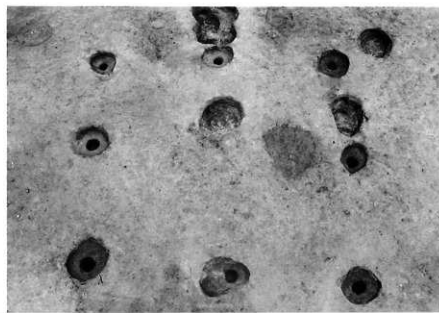
F-1号掘立柱
建物址

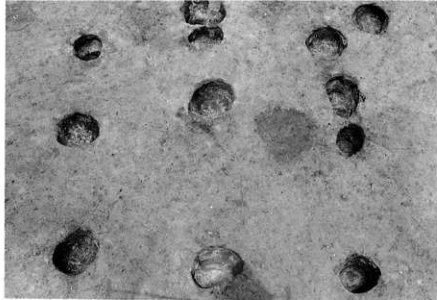


F-1号掘立柱
建物址掘り方



F-2号掘立柱
建物址





F-2号掘立柱
建物址掘り方

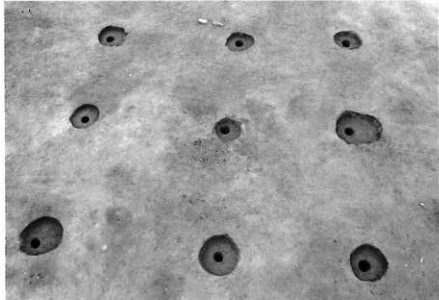


F-3号掘立柱
建物址

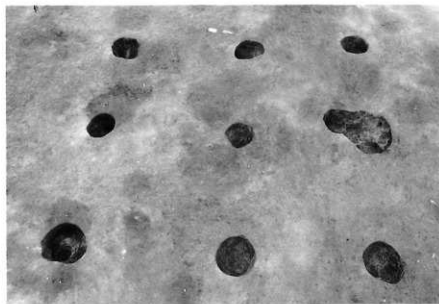


F-3号掘立柱
建物址掘り方

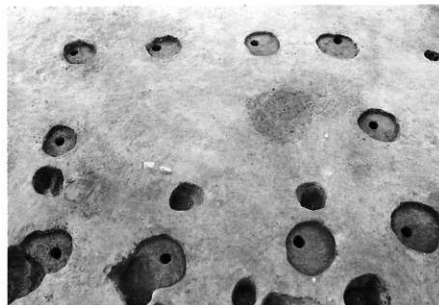
F-4号掘立柱
建物址

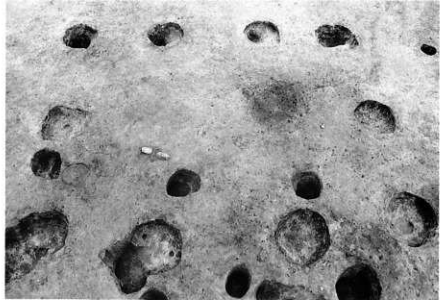


F-4号掘立柱
建物址掘り方



F-5号掘立柱
建物址

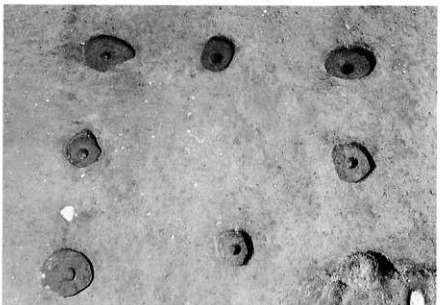




F-5号掘立柱
建物址掘り方



F-2・3・4・5・
20・21号掘立柱
建物址付近

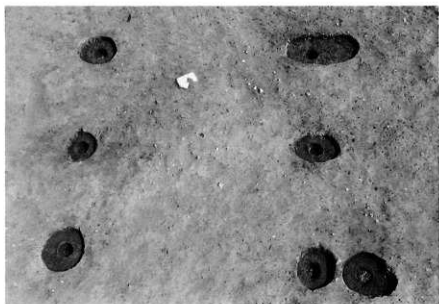


F-6号掘立柱
建物址

F-6号掘立柱
建物址掘り方

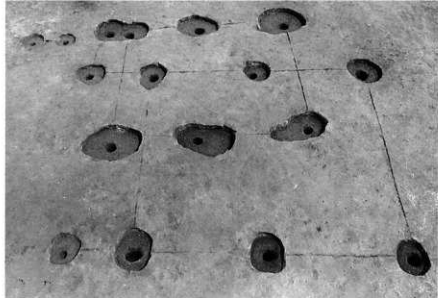


F-7号掘立柱
建物址



F-7号掘立柱
建物址掘り方

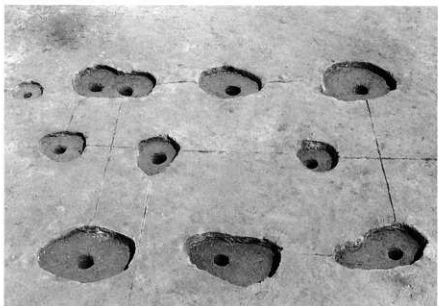




F-8号掘立柱
建物址



F-8号掘立柱
建物址掘り方

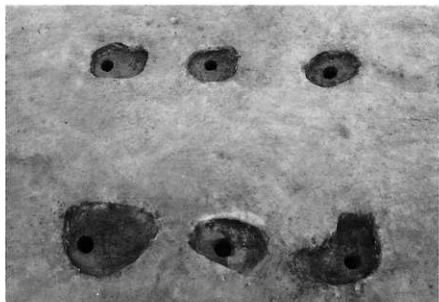


F-9号掘立柱
建物址

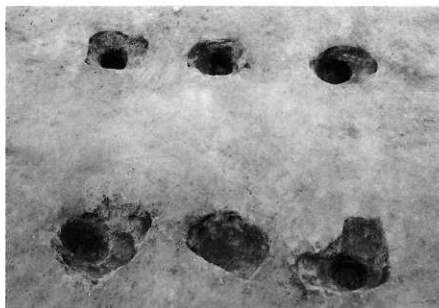
F-9号掘立柱
建物址掘り方

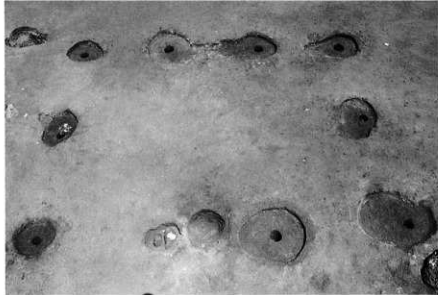


F-10号掘立柱
建物址



F-10号掘立柱
建物址掘り方

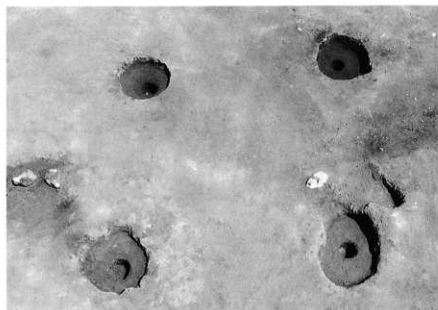




F-11号掘立柱
建物址

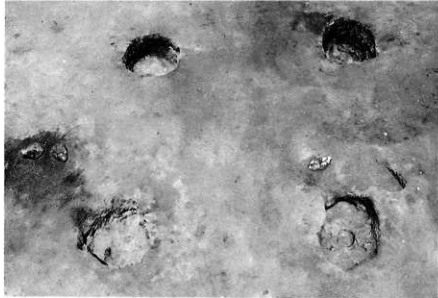


F-11号掘立柱
建物址掘り方

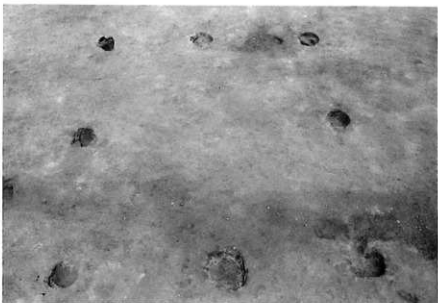


F-12号掘立柱
建物址

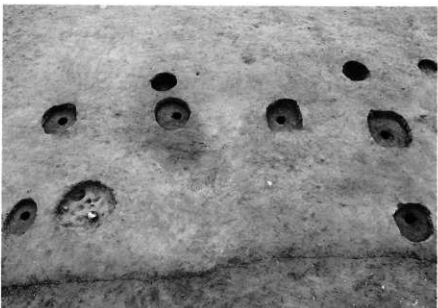
F-12号掘立柱
建物址掘り方

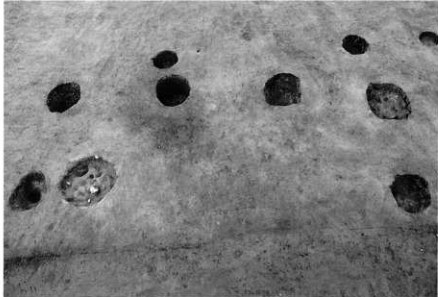


F-13号掘立柱
建物址掘り方



F-14号掘立柱
建物址





F-14号掘立柱
建物址掘り方

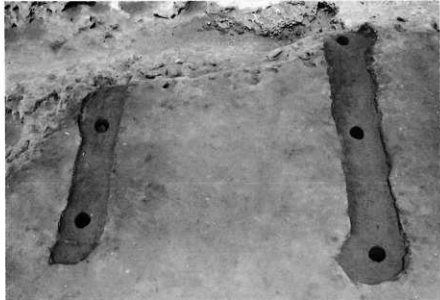


F-15号掘立柱
建物址



F-15号掘立柱
建物址掘り方

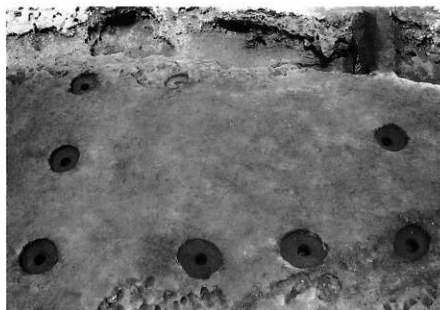
F-16号掘立柱
建物址



F-16号掘立柱
建物址掘り方

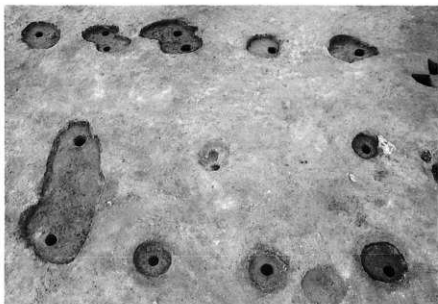


F-17号掘立柱
建物址





F-17号掘立柱
建物址掘り方

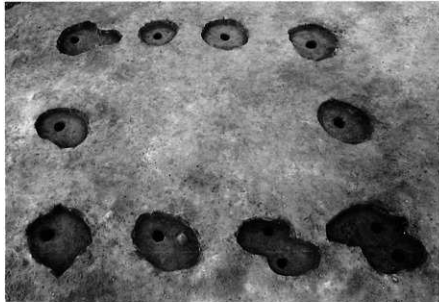


F-18号掘立柱
建物址



F-18号掘立柱
建物址掘り方

F-19号掘立柱
建物址



F-19号掘立柱
建物址掘り方

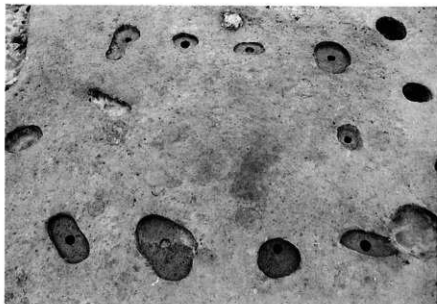


F-20号掘立柱
建物址





F-20号掘立柱
建物址掘り方



F-21号掘立柱
建物址

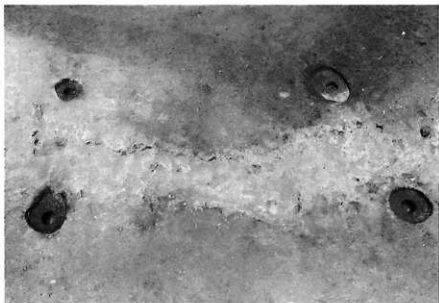


F-21号掘立柱
建物址掘り方

F-22号掘立柱
建物址掘り方



F-23号掘立柱
建物址



F-23号掘立柱
建物址掘り方

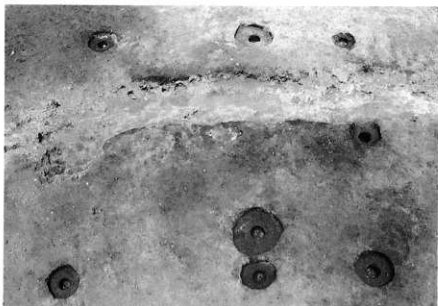




F-24号掘立柱
建物址



F-24号掘立柱
建物址掘り方



F-25号掘立柱
建物址

F-25号掘立柱
建物址掘り方

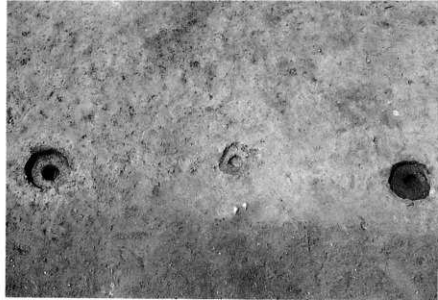


F-26号掘立柱
建物址



F-26号掘立柱
建物址掘り方





F-27号掘立柱
建物址



F-27号掘立柱
建物址掘り方



F-28号掘立柱
建物址掘り方

F-29号掘立柱
建物址掘り方

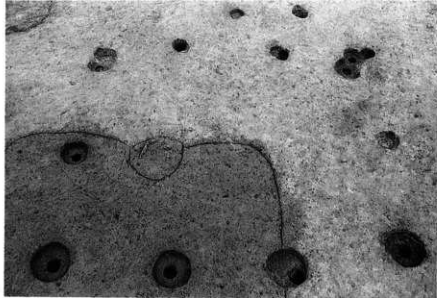


F-30号掘立柱
建物址

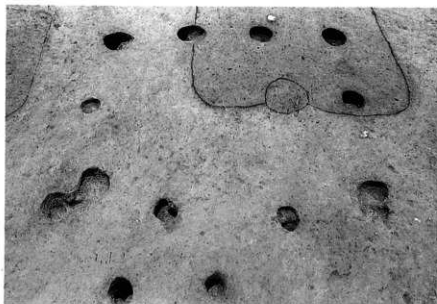


F-30号掘立柱
建物址掘り方





F-31号掘立柱
建物址

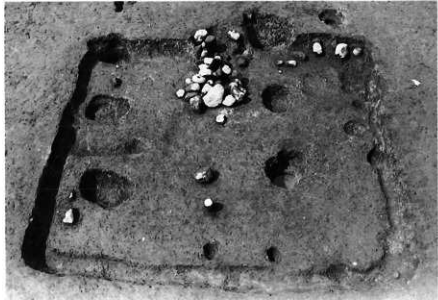


F-31号掘立柱
建物址掘り方

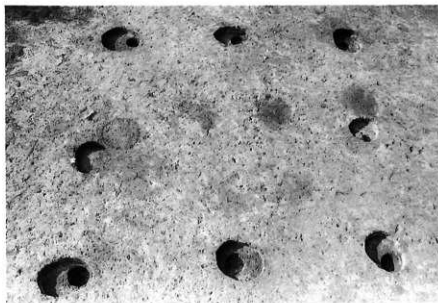


F-32号掘立柱
建物址

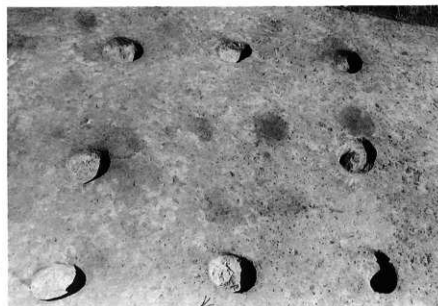
F-33号掘立柱
建物址掘り方

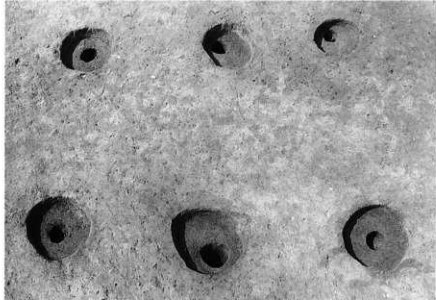


F-34号掘立柱
建物址



F-34号掘立柱
建物址掘り方

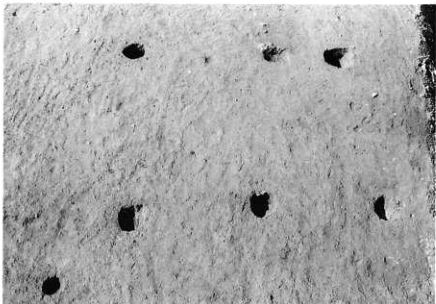




F-35号掘立柱
建物址

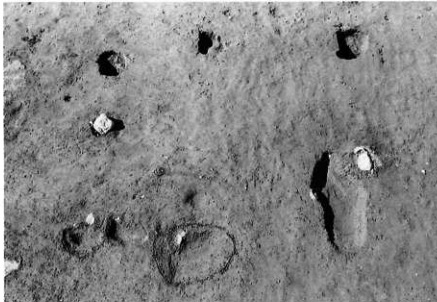


F-35号掘立柱
建物址掘り方

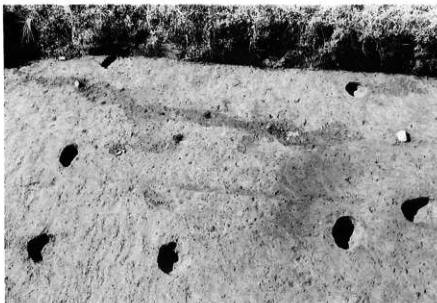


F-36号掘立柱
建物址掘り方

F-37号掘立柱
建物址掘り方



F-38号掘立柱
建物址掘り方

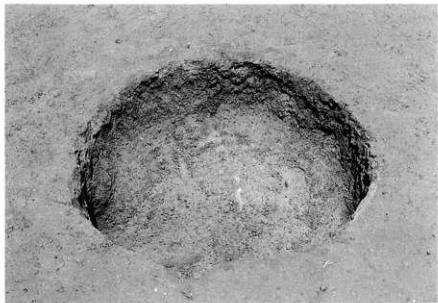


F-39号掘立柱
建物址掘り方





F-40号掘立柱
建物址掘り方



D-1号土壇



D-2号土壇

D-3号土壇



M-1号溝状
遺構



M-1号溝状
遺構セクション





M-2号溝状遺構



M-3号溝状遺構



M-4号溝状遺構



H-1.1



H-1.9



H-1.3



H-1.12



H-1.5



H-1.13



H-1.6



H-1.22



H-1.7



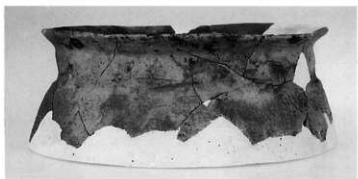
H-1.8



H-1・17



H-1・18



H-1·20



H-2·1



H-2·8



H-2·2



H-2·9



H-2·4



H-2·10



H-2·7



H-2·11



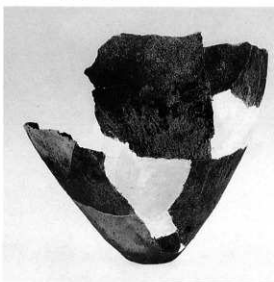
H-2 · 12



H-2 · 15



H-2 · 16



H-2 · 20



H-3 · 1



H-3 · 4



H-3 · 2



H-3 · 8



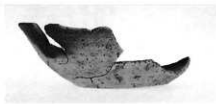
H-3 · 3



H-3 · 9



H-3·11



H-3·12



H-3·14



H-3·15



H-3·17



H-3·23



H-3·19



H-3·24



H-4・1



H-4・8



H-4・2



H-4・10



H-4・3



H-4・4



H-4・5



H-4・7



H-4・11



H-5・1



H-6・1



H-6・5



H-6・2



H-6・6



H-6・3



H-6・7



H-6・4



H-6・8



H-6·9



H-7·1



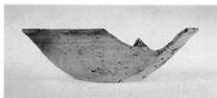
H-7·2



H-8·1



H-8·4



H-8·2



H-8·5



H-8·3



H-8·8



H-8·9



H-8·11



H-8·13



H-8·14



H-8·16



H-9·3



H-10·1



H-10·2



H-10·3



H-10·6



H-10 · 7



H-10 · 12



H-10 · 8



H-10 · 14



H-10 · 9



H-10 · 16



H-10 · 10



H-11 · 1



H-11 · 2



H-11·5



H-11·7



H-11·8



H-11·9



H-11·10



H-11·11



H-11·12



H-11·13



H-11·14



H-11·15



H-11·19



H-11·17



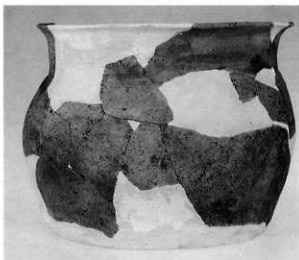
H-11·20



H-11·24



H-11·18



H-11·22



H-13·1



H-13·4



H-13·2



-13·5



H-13·3



H-13·6



H-13・7



H-13・8



H-13・9



H-13・10



H-13・16



H-13・11



H-13・14



H-13・17



H-13・19



H-14 · 1



H-14 · 2



H-15 · 1



H-15 · 2



H-15 · 3



H-15 · 4



H-15 · 7



H-15 · 9



H-15 · 11



H-16・1



H-16・2



H-16・4



H-16・5



H-16・6



H-17・1



H-17・2



H-17・3



H-17・4



H-17・5



H-18・1



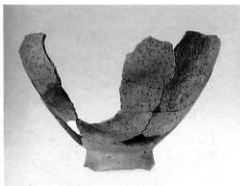
H-18・2



H-18・3



H-18・4



H-18・16



H-18・5



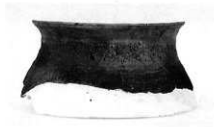
H-18・6



H-18・7



H-18・9



H-18・10



H-20 · 1



H-20 · 2



H-20 · 3



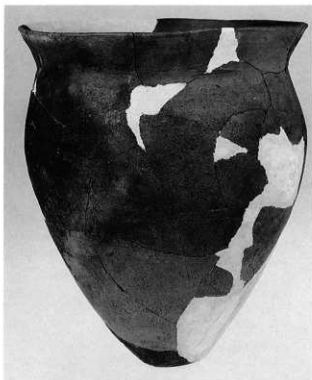
H-20 · 5



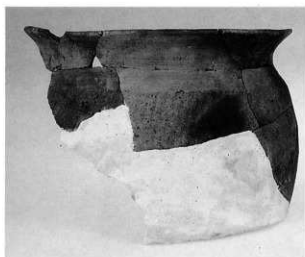
H-20 · 6



H-20 · 7



H-20 · 10



H-20 · 11



H-21 · 1



H-22 · 1



H-22 · 5



H-23 · 1



H-23 · 2



H-23 · 3



H-23 · 5



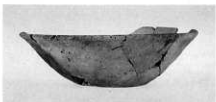
H-24 · 1



H-25 · 1



H-25 · 2



H-26 · 1



H-26 · 3



H-27 · 1



H-25 · 5



H-26 · 4



H-26 · 5



H-27 · 2



H-27·3



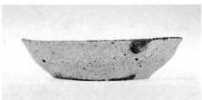
H-27·6



H-28·1



H-28·6



H-28·2



H-28·4



H-28·5



H-28·7



H-29・2



H-31・1



H-32・1



H-32・3



H-32・5



H-32・6



H-32・7



H-32・9



H-32・8



F-4・1



F-14・1



M-1・1



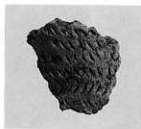
M-1・2



M-1・3



M-3・1



爪形文土器 F-14 (1:2)



H-9・3



(1:1)



H-2・21 (1:3)



鏡益神寶 H-13・26



(1:1)



隆平永寶 H-18・18



(1:1)



鏡益神寶 (X線写真)



隆平永寶 (X線写真)



H-8・19



H-9・12



F-14・2



M-4・2



M-4・3 (4:5)



H-20・17 (4:5)



H-21・3 (4:5)



H-22・8 (4:5)



H-1-27



H-4-13·12



H-6-13



H-10-23



H-11-25



H-1-28



F-3-1



M-2-4



H-8-20 (1:3)



H-27-11 (1:3)



H-32-10



H-20-16



H-28 · 10



H-1 · 25



H-13 · 23



H-10 · 24



H-1 · 26



H-5 · 3



H-18 · 20



H-1 · 29



H-20 · 18



H-3 · 27



H-11 · 27



H-6 · 14



H-13 · 24



H-8 · 21



H-13 · 25



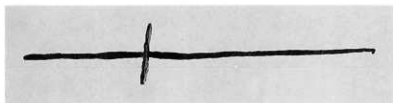
H-10 · 25



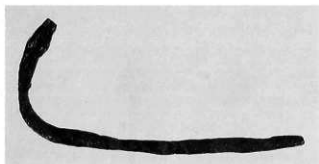
H-18 · 19



H-23 · 8



H-11・26



H-28・11



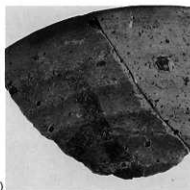
H-28 スラグ



M-1



墨書土器
「王」
(H-2・8)



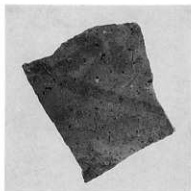
墨書土器「？」
(H-3・13)



墨書土器
「本」
(H-3・14)



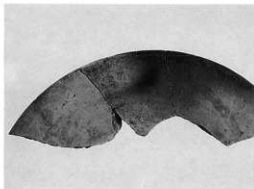
墨書土器「？」
(H-7・1)



墨書土器「？」
(H-9・11)



墨書土器
「人」
(H-10・1)



墨書土器「？」
(H-10・11)



刻書土器
「人」「人」
(H-11・8)



刻書土器
「人」
(H-11・10)



墨書「人」・刻書「人」土器 (H-11・12)



墨書土器
「久」?
(H-18・8)



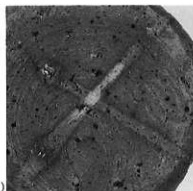
墨書土器
「小上(川O)」
(H-27・2)



刻書土器「木」
(H-28・5)



火 押
(H-4・2)



火押の基痕
(H-3・6)



回転糸切り
(H-6・4)



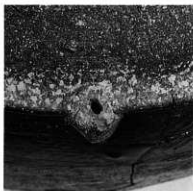
回転糸切り
+
周囲回転
ヘラケズリ
(H-16・4)



外面
平行叩き
(H-11・23)



外面刷毛目
状調整
(H-15・7)



外面
ヘラケズリ
(H-1・17)



凸帯付四耳壺「耳」(H-11・24)

後 記

昭和59年から平成元年まで、5年度に及んだ鑄師屋遺跡群の調査は、ひとまず本書の刊行をもって終結する。

調査は初年度の野火付遺跡から、前田遺跡・十二遺跡、そして根岸遺跡へと6.5万㎡にも及んでなされてきたが、それは実に多くの方々の熱意と努力、そしてご理解によって支えられてきたものであることはいうまでもあるまい。ここで、そうした多くの方々のお名前を挙げて連ねることは不可能ではあるが、まずもってそれらの方々に厚く御礼を申し上げる次第である。

鑄師屋遺跡群の調査は、その集落の全体像の把握をひとつの大きな目標にすえてきた。それは、これまでの県内の当該期研究の多くが土器論のみに偏り、遺跡が個々の遺構の集合体程度の評価しかなされず、集落論的な視点での究明が欠如していたからにはほかならない。お寄せいただいた自然科学的なアプローチも、集落の総合的な解明に向けての重要な足掛りとなった。とはいえ、「古代のムラ」をふたたび呼び戻す作業がきわめて困難であることを、いまさらながらに痛感させられた次第である。

本遺跡群がすでにこの地上から姿を消し去ってしまったことは無念に尽きないが、反面、多くの究明すべき課題を残してくれている。本調査が、ことに「馬」との関わりあいの深いこの浅間山麓の歴史的地域性の中での、集落の再構成のささやかな種となり、集落研究の低迷の中であってひとつの問題提起を為し得たならば、5年度に及んだ長い調査の一応の成果として、多くの方々とともに喜びを共有しよう。

発掘調査担当

堤 隆

鑄師屋遺跡群

根 岸 遺 跡

—長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書—

平成元年3月31日発行

編 集 御代田町教育委員会
発 行 御代田町教育委員会
印 刷 ほおずき書籍株式会社
